

# 栗 鹿 遺 跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書－II

第2分冊（E・F・G地区、一品野田遺跡）

2007年3月

兵庫県教育委員会

# 粟 鹿 遺 跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 - II

## 第2分冊（E・F・G地区、一品野田遺跡）



2007年3月

兵庫県教育委員会



E ~ G 地区空中写真遠景 遠阪峠を望む（西から）



E 地区 E-SX01  
方形貼石墓全景  
(南西から)



E 地区 E-SX01  
方形貼石墓の貼  
石 (北西から)



E 地区  
道路遺構全景  
(北東から)



E 地区  
道路遺構  
石積み部分  
(北西から)



F 地区主要建物群（北から）



F 地区  
F-SB02 全景  
(北から)



F 地区  
F-SB01 全景  
(東から)



左 : F 地区  
F-SH06 全景  
(西から)  
右 : F 地区出土  
須恵器墨書き土器  
「神マ」カ





F・G 地区空中写真遠景（北から）



G地区全景（西から）



G地区 G-SX01 瓦出土状況



G地区 G-SB03 全景（北から）



一品野田遺跡第1面全景（西から）



一品野田遺跡第2面全景（西から）

## 例　　言

1. 本書は兵庫県朝来市山東町栗鹿ほかに所在する栗鹿遺跡（あわがいせき）一品野田遺跡（いっぽうのだいせき）の発掘調査報告書である。発掘当時、一品野田遺跡は栗鹿遺跡の一つの地区として取り扱った関係で本報告では栗鹿遺跡の一部として扱った。現在は一品野田遺跡として栗鹿遺跡とは別個に埋蔵文化財包蔵地として周知化された。
2. 本書は3分冊で構成され、本分冊は栗鹿遺跡E・F・Gおよび一品野田（いっぽうのだ）遺跡分の報告であるが、E地区にはE2・E3地区、F地区にはF2地区を含んでいる。なお、第1分冊はA・B・C・D地区分の報告、第3分冊は写真図版編である。
3. 発掘調査は国土交通省（2001年以前は建設省）の依頼を受け一般国道483号北近畿自動車道春日和田山道路Ⅱ建設工事に伴って兵庫県教育委員会が発掘調査を実施したものである。調査は平成9年度（1998年）に第1次調査として確認調査を、平成11年度（2000年）に第2次調査の全面調査を実施したものである。
- （分布調査） 平成5年度（1993） 遺跡調査番号930013
- （分布調査） 平成10年度（1998） 遺跡調査番号980072
- |   |                 |
|---|-----------------|
| （確認調査） 平成10年度（1998） 遺跡調査番号980147～980150 | 古誠雅仁・佐々木俊彦・仁尾一人 |
| （全面調査） 平成11年度（1999） 一品野田 遺跡調査番号990004   | 西口圭介・佐々木俊彦      |
| （全面調査） 平成12年度（2000） 遺跡調査番号2000196 F地区   | 深井明比古・尾野幸雄・高木芳史 |
| （全面調査） 平成12年度（2000） 遺跡調査番号2000197 G地区   | 深井明比古・尾野幸雄・高木芳史 |
| （全面調査） 平成13年度（2001） 遺跡調査番号2001196 E地区   | 深井明比古・尾野幸雄・服部 寛 |
| （全面調査） 平成14年度（2002） 遺跡調査番号2002165 E2地区  | 吉田 昇・渡辺 昇       |
| （全面調査） 平成14年度（2002） 遺跡調査番号2002165 E3地区  | 吉田 昇・渡辺 昇       |
| （全面調査） 平成15年度（2003） 遺跡調査番号2003097 F2地区  | 渡辺 昇            |

4. 出土品整理事業は平成15年度（2003～18年度（2006）に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。工程管理は整理保存班担当職員が行い、作業は調査担当職員の指示のもと、嘱託員等が実施した。また木製品および金属器保存処理は本事務所職員の指導のもとに当事務所で行った。

4年にわたる出土品整理事業の担当者は下記のとおりである。なお刊行時点で当事務所以外に所属するものは（ ）で記した。

工程管理担当職員 村上泰樹（現：兵庫県教育委員会考古博物館開設準備室）・岸本一宏・  
菱田淳子・仁尾一人（現：兵庫陶芸美術館）

作業指示担当職員 深井明比古（現：兵庫県教育委員会文化財室）・森内秀造・渡辺 昇・  
岸本一宏・西口圭介・藤田 淳・尾野幸雄（現：兵庫県立姫路養護学校）・  
高木芳史（現：兵庫県立須磨友が丘高等学校）・仁尾一人・  
服部 寛（現：兵庫県教育委員会文化財室）

保存処理担当職員 間本一秀

作業担当嘱託員等 池田悦子・古谷章子・栗山美奈・八木和子・吉田優子・眞子ふさ恵・西口由紀・松本嘉子・大前篤子・島田留里・島村順子・村上京子・垣本明美・長川加奈子・石野照代・木村淑子・中田明美・西野淳子・藏 純子・小野潤子・宮野正子・河上智晴・前川悦子・高瀬敬子・大仁克子・加藤裕美・三好綾子・奥野政子・川村山紀・藤井光代・岡田祥子・又江立子・早川山紀・溝上くみ・西村美緒・高橋朋子・荒木由美子・荻野麻衣・岡田陽子・久保昭夫・清水幸子・藤池かづき・西谷美穂・長谷川洋子・早川亜紀子・伊藤ミネ子・家光和子

5. 発掘調査にあたっては、E地区：鈴川井組、F・G地区：佛山本組が発掘調査工事を請負った。調査補助員は足立裕布・岡田憲一・小東憲朗・田中景子・事務員は奥 和美、室内作業員として梯部忠理・北村百合子・福岩智子があたった。

6. 発掘調査時の遺構実測および空中写真撮影は空中写真測量委託事業として、E地区：㈱ジエクト神戸支店、E2地区：㈱ジエクト神戸支店、E3地区：㈱ジエクト神戸支店、F・G地区：国際航業㈱、F2地区：㈱サンヨーに委託した。その他の実測は補助員が補佐し、調査員が実施した。また、出土品整理時の遺物実測および遺構・遺物図の浄写は嘱託員が行った。

7. 本書に使用した写真的うち、遺構については調査員が撮影したものであり、発掘時の空中写真撮影は各測量会社が担当した。遺物写真是㈱タニグチ・フォト、㈱アコードに委託した。

8. 出土試料の自然科学分析のうち、<sup>14</sup>C年代測定は㈱加速器分析研究所に委託し、樹種同定はパリノ・サーヴェイ㈱に委託した。

9. 本書の構成・編集は、深井の立案のもと、第1・3分冊および全体調整を岸本が担当し、第2分冊は深井が行った。第2分冊の執筆は、各地区担当者である深井・渡辺・岡田・西口・藤田・仁尾・尾野・高木・服部が行った。なお執筆分担は本文目次に示した。

10. 本報告で使用した図面・写真および遺物は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。

11. 発掘調査および報告書作成にあたっては、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所・兵庫県土整備部道路建設課・旧朝来郡広域行政事務組合・旧山東町・栗鹿神社・伊能忠敬記念館・NHK青木哲哉・足立 勝・足立 豊・大杉和子・岡崎正雄・岡田章一・加賀見省一、(故)垣尾修一郎・加藤晴彦・北垣聰一郎・潮崎 誠、(故)高橋美久二・館野和巳・谷田 勝・田畠 基・戸沢冬樹・中島雄二・平川 南・福島賢治・松村恵司・宮本 博・三好唯義・村上裕道・森内秀造・山尾幸久・山根寅生子・渡辺晃宏はじめ関係各方面から多大なる協力を得た。記して感謝の意を表します。

(順不同、敬称略)

## 凡　　例

1. 本書に使用した方位は、第V系国土座標（日本測地系）を基準とし、標高の数値は国土地理院1等水準点を利用した標高（T.P.）を使用した。また、方位は座標北をさす。
2. 本書で使用した遺構および遺物番号は、地区名を冠し、地区毎で呼称した。また遺構略号は次のように（SA→塙・樹跡、SB→掘立柱建物跡、SD→溝、SE→井戸、SH→住居跡、SK→土坑、P→柱穴、SX→墓・不明遺構）呼称を用いている。
3. 遺構等の土層色調名および土器の色調名は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修）によるものである。
4. 遺物番号は本文・挿図・写真とも同一とし、地区毎、遺物毎に通し番号としている。例えば遺物番号については、石製品→S、金属器→M、ガラス製品→Jとし、地区名と番号の間に略号を記している。ただし、土器類には略号は付していない。
5. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、陶磁器は網掛け、金属器は斜線、その他は白抜きとしている。
6. 本書に掲載した挿図のうち、第476図は旧山東町提供による。また図版272・273は米軍撮影の昭和22年空中写真を使用した。なおこれらは国土地理院長の承認を得て掲載している。

## 本文目次

(第2分冊)

### 第4章 各地区的調査

第7節 E地区の遺構と遺物	373 (深井・服部)
第8節 E2・E3地区の遺構と遺物	392 (渡辺)
第9節 F地区の遺構と遺物	402 (深井・高木)
第10節 F2地区の遺構と遺物	434 (渡辺)
第11節 G地区の遺構と遺物	446 (深井・尾野・高木)
第12節 品野田遺跡の遺構と遺物	497 (西口・岡田)

### 第5章 自然科学分析結果

第1節 D地区火山灰分析および種実同定	513 (パリノ・サーヴェイ株式会社)
第2節 A3地区火山灰分析およびF・G地区樹種同定	518 (パリノ・サーヴェイ株式会社)
第3節 A・C・D地区炭化材樹種同定	524 (株式会社 古環境研究所)
第4節 A・C・D地区炭化材等の放射性炭素年代測定	527 (パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ)
第5節 A3・E・F地区土壤の放射性炭素年代測定	531 (株式会社 加速器分析研究所)

### 第6章 まとめと考察

第1節 栗鹿遺跡の変遷	539 (岸本)
第2節 E地区検出の方形貼石墓について	544 (深井)
第3節 栗鹿遺跡出土の古墳時代土師器について	546 (岸本)
第4節 古代・中世の栗鹿遺跡と栗鹿神社について	549 (深井)

## カラー図版目次

カラー図版17	E～G地区空中写真遠景 遠阪峠 を望む（西から）	カラー図版21 上	F地区F-SB02全景（北から）
カラー図版18 上	E地区E-SX01方形貼石墓全景 (南西から)	中	F地区F-SB01全景（東から）
下	E地区E-SX01方形貼石墓の貼石 (北西から)	下左	F地区F-SH06全景（西から）
カラー図版19 上	E地区道路遺構全景 (北東から)	下右	F地区出土須恵器墨書き土器 「神マ」カ
下	E地区道路遺構石積み部分 (北西から)	カラー図版22	F・G地区空中写真遠景（北から）
カラー図版20	F地区主要建物群（北から）	カラー図版23 上	G地区全景（西から）
		下左	G地区G-SX01瓦出土状況
		下右	G地区G-SB03全景（北から）
		カラー図版24 上	一品野田遺跡第1面全景（西から）
		下	一品野田遺跡第2面全景（西から）

## 挿 図 目 次

### 第4章 第7節 E地区の遺構と遺物

第322図	E地区全体図	373
第323図	調査区北壁標準土層断面図	374
第324図	E-SX01遺構平面図	376
第325図	E-SX01出土遺物	377
第326図	E-SX01出土石器	378
第327図	E-ST01遺構図	378
第328図	E-ST01出土土器	378
第329図	E-SH02遺構平面図	379
第330図	E-SH02出土石器	380
第331図	E-SH03出土七器	380
第332図	E-SH03遺構平面図	380
第333図	土器滲り1・2出土土器	382
第334図	土器滲り2出土金属器	382
第335図	E-SB01遺構平面図	383
第336図	E-SB02遺構平面図	384
第337図	道路遺構石積裏込め出土石器	385
第338図	道路遺構-1	386
第339図	道路遺構-2	387
第340図	道路遺構石積裏込め出土陶磁器・ ガラス	388
第341図	包含層出土繩文土器	388
第342図	包含層出土弥生土器・須恵器等	389
第343図	包含層出土石製品	390
第344図	包含層出土金属器	390
第345図	確認トレンチ出土金属器	391

### 第8節 E2・E3地区の遺構と遺物

第346図	E2・E3地区全体図	393
第347図	E2地区遺構土層断面図	395
第348図	E3-SB01・E2-SX01出土土器	396
第349図	E2地区包含層出土土器	397
第350図	E3地区南壁東半土層断面図	398
第351図	E3地区遺構図(1)E3-SB01・SB02	399
第352図	E3地区遺構図(2)	400
第9節 F地区的遺構と遺物		
第353図	F地区全体図	403
第354図	南壁上層断面図	404
第355図	F-SH01平面図	404
第356図	F-SH02平面図	405
第357図	F-SH03平面図	406
第358図	F-SH03出土土器	406
第359図	F-SH04平面図	407
第360図	F-SH04出土土器	407
第361図	F-SH05平面図	408
第362図	F-SH05出土遺物	409
第363図	F-SH06平面図	410
第364図	F-SH06出土土器	411
第365図	F-SB01平面図	411
第366図	F地区主要遺構配置図	412
第367図	F-SB01出土土器	413
第368図	F-SB02平面図	413
第369図	F-SB02出土土器	414

第370図 F-SB03平面図	414	第413図 G-SH10出土土器-1 弥生土器等	461
第371図 F-SB04・SB05平面図	415	第414図 G-SH10出土土器-2 土師器	462
第372図 F-SD01出土土器	417	第415図 G-SH11平面図	463
第373図 F-SA01平面図	417	第416図 G-SH11出土土師器	464
第374図 主要造構配置図およびF-SA02	418	第417図 G-SH12平面図	465
第375図 F-SA02出土土器	419	第418図 G-SH12出土土師器	465
第376図 F-SK02・SK11出土土器	419	第419図 G-SX01平面図	466
第377図 F-SX04出土土器	419	第420図 G-SX01出土瓦 1	467
第378図 流路出土弥生土器 1	421	第421図 G-SX01出土瓦 2	468
第379図 流路出土弥生土器 2	423	第422図 G-SX01出土瓦 3・須恵器等	469
第380図 流路出土須恵器	426	第423図 G-SB01平面図	470
第381図 包含層出土縄文土器・弥生土器	428	第424図 G-SB02平面図	471
第382図 包含層出土弥生土器	430	第425図 G-SB01・SB02出土土器	471
第383図 包含層出土土師器・須恵器	431	第426図 G-SB03平面図	472
第384図 包含層出土金属器	432	第427図 G-SB04平面図	473
第385図 包含層出土石器	432	第428図 G-SB05平面図	474
第386図 確認調査出土弥生土器	432	第429図 G-SB06平面図	474
<b>第10節 F2地区の遺構と遺物</b>		第430図 G-SA01平面図	475
第387図 F2地区全体図	435	第431図 G-SA02平面図	475
第388図 F2北壁土層断面図、F2-SH01・SK01	437	第432図 G-ST01平面図	476
第389図 F2-SH02・SH04	438	第433図 G-ST01出土弥生土器	476
第390図 F2-SH03	439	第434図 G-SK01平面図	476
第391図 F2-SH02・SH03出土土器	440	第435図 G-SK02・SK05平面図	476
第392図 F2-SH03下層・F2-SH04出土土器	441	第436図 G-SK03平面図	477
第393図 F2-SX01・SX02・SK04・SK05	442	第437図 G-SK06平面図	477
第394図 F2-SA01・SA02	443	第438図 G-SK01~03・05・06出土土器	478
第395図 F2-SB01・河道・SX 出土土器	444	第439図 G-SD01・SD02断面図	478
第396図 F2地区包含層出土土器	445	第440図 G-SD01・SD02出土須恵器等	479
<b>第11節 G地区の遺構と遺物</b>		第441図 流路状落ち込み出土土器	480
第397図 G地区遺構配置図	447	第442図 G-SP出土土器	481
第398図 G地区北壁上層断面図	448	第443図 北西溝落ち込み・流路出土弥生土器 1	483
第399図 G-SH01平面図	449	第444図 流路出土弥生土器 2	485
第400図 G-SH01出土土器	450	第445図 流路出土弥生土器 3	486
第401図 G-SH02平面図	451	第446図 包含層出土縄文土器等	487
第402図 G-SH03平面図	452	第447図 包含層出土弥生土器 1	489
第403図 G-SH02~SH04出土土器	453	第448図 包含層出土弥生土器 2	490
第404図 G-SH04平面図	453	第449図 包含層出土弥生土器 3	492
第405図 G-SH07平面図	454	第450図 包含層出土土師器	493
第406図 G-SH07出土弥生土器 1	455	第451図 包含層出土須恵器	495
第407図 G-SH07出土弥生土器 2等	456	第452図 包含層出土石器	496
第408図 G-SH08平面図	457	<b>第12節 一品野田遺跡の遺構と遺物</b>	
第409図 G-SH08出土縄文土器等	457	第453図 地区割り図・調査区北壁(部分)	
第410図 G-SH09平面図	458	土層断面図	498
第411図 G-SH09出土弥生土器・土師器等	459	第454図 第1面遺構全体図	499
第412図 G-SH10平面図	460	掘立柱建物跡 I-SB1001	500

第456図 井戸 I-SE1001・SX1001	501	第6章 第1節	
第457図 一品野田遺跡出土土器(1)	503	第468図 栗鹿遺跡の変遷図(1)弥生時代	541
第458図 I-SX1003・SX1004	504	第469図 栗鹿遺跡の変遷図(2)古墳時代	542
第459図 第2面遺構全体図	505	第470図 栗鹿遺跡の変遷図(3)古代・中世	543
第460図 一品野田遺跡出土土器(2)	507	第3節	
第461図 水田遺構	509	第471図 栗鹿遺跡出土古墳時代	
第462図 I-SK2002・SK2003	510	土器部変遷図	548
第463図 下層土層堆積状況	512	第4節	
<b>第5章</b>		第472図 「栗鹿大神元記」3	560
第464図 历年代較正結果(1)	529	第473図 「栗鹿大神元記」2	561
第465図 历年代較正結果(2)	530	第474図 「栗鹿大神元記」1	562
第466図 历年代較正結果(3)	537	第475図 栗鹿神社木製鳥居礎石実測図	564
第467図 历年代較正結果(4)	538	第476図 伊能忠敬測量隊の栗鹿での行程復原	570

## 本文写真目次

写真 6 E地区現地説明会風景（測量隊整列）	391	写真13 土器に記された文字	551
写真 7 F地区現地説明会風景	433	写真14 栗鹿神社社殿	556
写真 8 G地区現地説明会風景	496	写真15 栗鹿神社鳥居礎石写真	564
写真 9 重鉱物・火山ガラス・種実遺体	517	写真16 坐摩神社境内の石造品	565
写真10 重鉱物・火山ガラス・木材	523	写真17 伊能忠敬測量隊再現	
写真11 栗鹿遺跡の炭化材	526	（現地説明会にて）	568
写真12 栗鹿遺跡E地区方形貼石墓(E-SX01)	544	写真18 栗鹿山	572

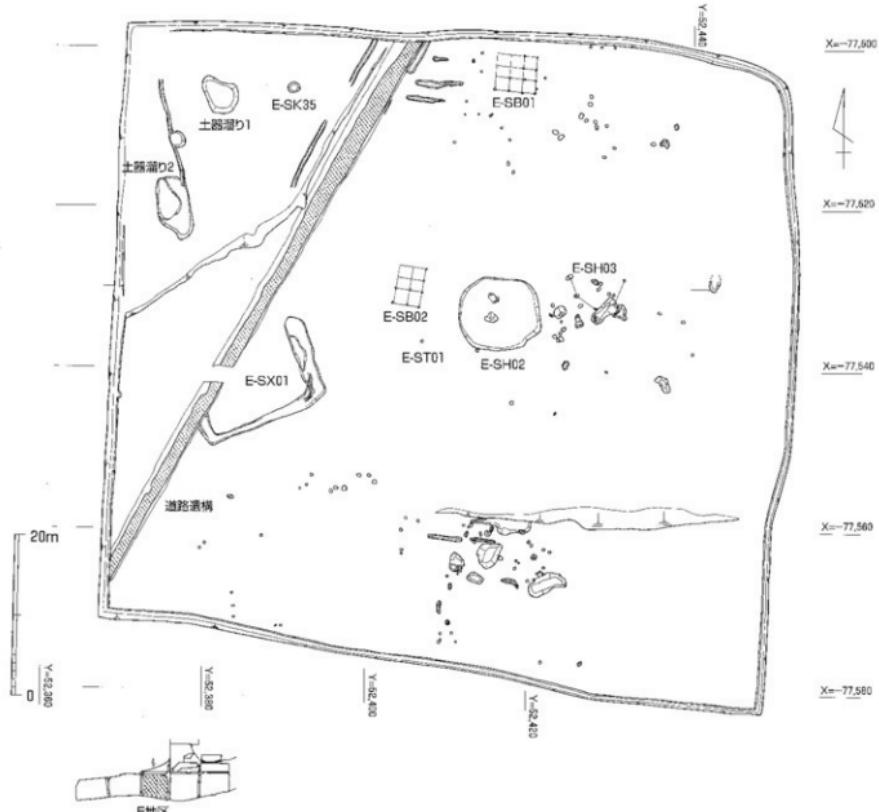
## 第7節 E地区の遺構と遺物

### 1. 概要

**位置** 現在の行政区画では大字栗鹿字大門にあたる。地形的には、段丘上の南東-北西方向に緩やかに傾斜する緩斜面に位置する。この段丘は、調査地南方を流れる栗鹿川によって形成された扇状地が後に段丘化したものである。したがって、遺跡の立地する基盤層は、洪水起源の砂礫層で構成され、当遺跡の性格を特徴付けるものとなっている。

**遺構面** 遺構面を2面検出した。大きく弥生時代の遺構面と中世の遺構面の2面である。ただし、圃場整備による削平のため、調査区中央から南東にかけては同一面で遺構を検出した。検出した遺構の中心を占めるものは、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、道路遺構、墓、土器溜りなどである。

**弥生時代の遺構** 方形貼石墓1基、土器棺1基、竪穴住居跡2棟、土器溜り2ヶ所を検出した。



第322図 E地区全体図

中世の遺構 振立柱建物跡2棟、道路遺構を検出した。

出土遺物 縄文時代晚期から近世までの遺物が出土した。28ℓ入りコンテナで49箱分の土器が出土した。

## 2. 基本層序

E地区の基本層序は、上から①層（耕作土層）、②層（圃場整備時の盛土層）、③層（灰色シルト層、中世後半～近世の土壤層）、④層（灰色砂混じりシルト層、中世前半の土壤層）、⑤層（黒灰色シルト層、黒ボクの2次堆積層）、⑥層（暗褐色砂疊層、扇状地を構成する洪水起源の堆積層）である。

ただし、調査地は、南東～北西方向に緩やかに傾斜していることから、調査区西側については、③層以下の堆積層がより厚くなる傾向がある。また、調査区南東側については、圃場整備時に上層が大きく削平されており、①層直下で⑥層が認められる。

## 3. 遺構・遺物

遺構の検出は、④層上面と⑥層上面の2面で検出した。ただし、前述のとおり圃場整備による削平を受けた調査区中央から南東にかけては1面で検出した。

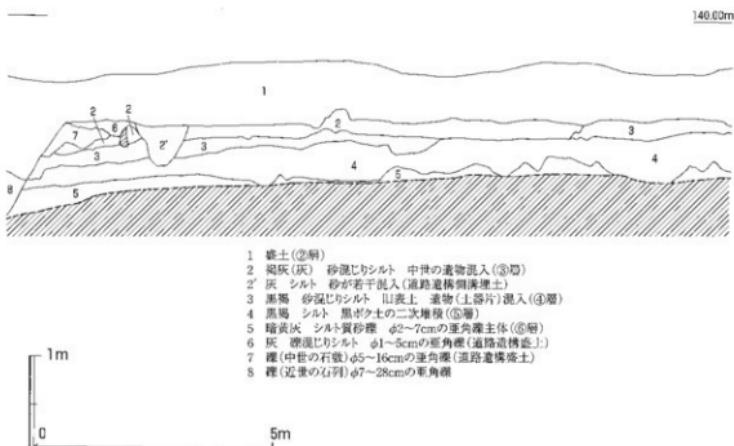
検出した遺構は、弥生時代から近世までのもので、竪穴住居跡、振立柱建物跡、道路遺構、墓、土器溜りなどである。

### （1）弥生時代の遺構

方形貼石墓

E-SX01

検出状況 調査区中央西よりに位置する。遺存状況は非常に悪く、北半分は道路遺構の造成時に破壊さ



第323図 調査区北壁標準土層断面図

れどおり、南半分についても方形の周溝がコの字に検出されるのみである。

**規 模** 墳丘の規模は、東西方向約13.2m、東西方向は、残存長で約9.3mを測る。

**埋葬施設** 削平のため検出されなかった。

**貼 石** 西辺から南西隅かけて墳丘の貼石を検出した。上部は削平されており、墳丘裾の基底部のみが残存していた。貼石には、50～30cm前後の河原石を用い、長軸方向を縦にして石を据えていた。周溝内には転落したものと考えられる同規模の河原石が散在していた。

**周 溝** 周溝の規模は、東辺で残存長10.8m、南辺で16.0m、西辺で残存長6.0mを測る。幅は、検出面で、東辺で最大2.3m、南辺で1.0m前後、西辺で最大2.2mを測る。平面形は削平のためコの字に検出された。本来は方形を呈するものである。南辺・東辺の溝については、依存状況が悪く、検出面から底までの深度は15cm前後を測る。細縫を密に含む黒褐色シルト混じり極細砂が堆積していた。

**出土遺物**

E-4 弥生 壺 やや長い胴部から直立する頸部につづく。口縁は外反し、口縁端部は縦方向の刻みが施される。外面上部はクシガキ調整の後、縦方向のヘラミガキ、内面上半は縦方向のヘラケズリ、上部は縦方向のハケ目調整が見られる。頸部内面は横方向のクシガキ調整がある。

E-5 弥生 壺 口縁と頸部を残すもので、やや長い頸部から外反する口縁をもつ。口縁端部は若干拡張され瓣部にはハケ目状の文様が施される。頸部外面には縦および横方向のハケ調整が見られる。

E-6 弥生 壺 頸部と胴部上半の破片である。やや長胴形の胴部からL字縁にかけて外傾する頸部となる。頸部下部には4条の浅い凹線が施され、胴部の外面および内面に縦方向のハケ目調整が見られる。

E-7 弥生 壺 胴部中央で最大径をもち、やや長く外傾する頸部から直口する口縁をもつ。口縁外面直下に2条の沈線、頸部下部に3条の凹線が施される。胴部上端付近に断面が隅丸方形の把手がつく。胴部外面は縦方向のハケ目の後、下半部は一部にヘラミガキが見られる。内面上半はクシガキ調整が、下半部は縦方向のヘラケズリがある。

E-8 弥生 壺 体部上半と頸部および口縁部が残る破片である。口縁部下には凹線文が3条、頸部下部には3条の凹線文が施される。胴部上端付近には断面四角形の把手がつく。外面にはクシガキ調整が一部みられる。

E-9 弥生 壺 口縁端部を上方につまみ、段をもつ。口縁端部にクシ状工具による施文がある。外面には繰かれたクシガキ調整が見られる。

E-10 弥生 壺 胴部最大径が上半にあり、口縁は内側につまみ、段をもつ。口縁端部にはクシ状工具による施文が認められる。外面はクシガキ調整の後ヘラミガキ、内面はクシガキとヘラミガキがみられる。

これらはいずれも弥生中期後半の資料である。

#### E-SX01 出土石器

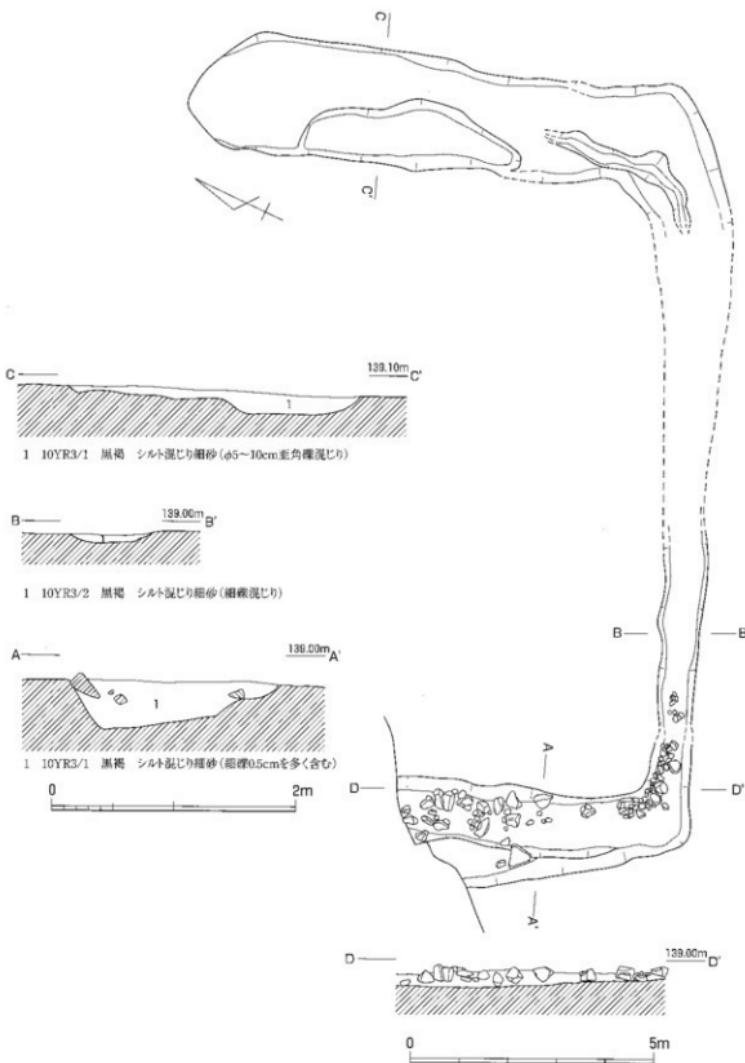
E-S2 石器 砥石 一辺50cm、厚さ8cmの三角形を呈した砂岩製の砥石である。図下辺には敲打痕があり、すべてが磨かれているのではないことから、多目的な台石状の石器と考えられる。

#### 土器棺

##### E-ST01

**検出状況** 調査区中央に位置する。ほぼ直位に埋設された棺身の壺は土圧により割れた口縁部が棺内部

第7節 E地区の遺構と遺物



第324図 E-SX01遺構平面図

方向にずれ込んでいる。棺蓋として脚部を打ち欠いた高杯の杯部を逆位に据えている。

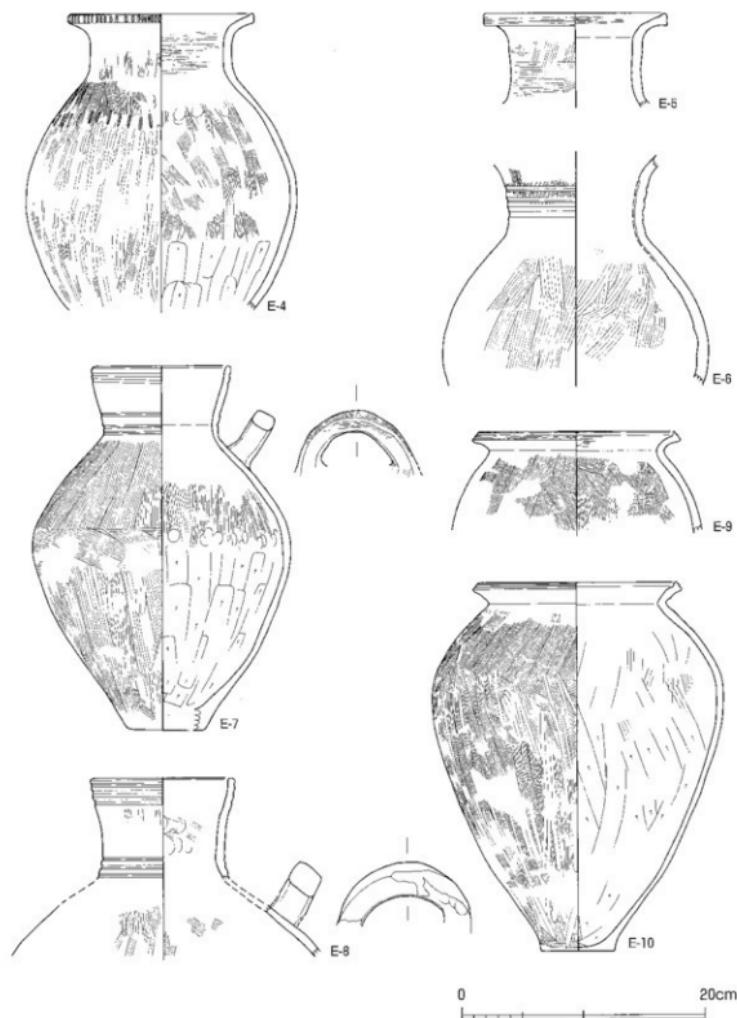
規模・形態 埋設土坑の平面形は楕円形を呈し、長軸方向 40.0 cm、短軸方向 35.5 cm を測る。検出した

土器棺の上端からの深度は 32.6 cm を測る。

#### 出土遺物

E-2 弥生 高杯 杯部破片を土器棺の蓋としたものである。

杯部中央で屈曲し口縁にかけては外反する。横方向のヘラミガキが見られる。



第325図 E-SX01出土遺物

E-3 弥生 墓 口縁は上方向に拡張され、端面には細かな4条の擬凹線が施される。体部は長卵形でありながら斜めに傾きややバランスに欠ける。外面はハケ、内面は底部付近から上方向に縱方向のケズリが、上方は横方向のヘラケズリが見られる。

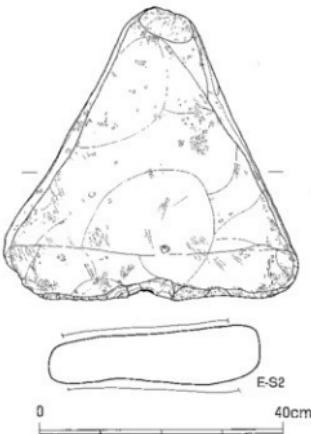
豊穴住居跡

E-SH02

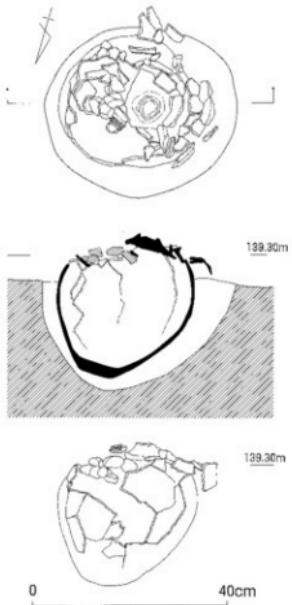
検出状況 調査区中央に位置する。検出面で炭化材を検出している。

規模・形態 平面形は梢円形を呈する。規模は、東西方向で10.2m、南北方向で9.0mを測る。検出面から床面までの深度は、最深部で23cmを測る。床面の標高は、139.0m前後である。床面積約72m<sup>2</sup>の大型の豊穴住居跡である。

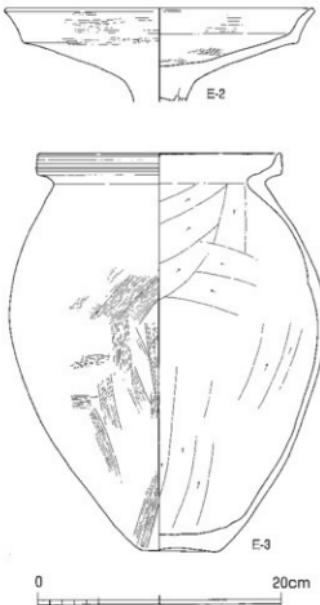
埋 土 細礫が密に混じる黒褐色シルト混じり細砂



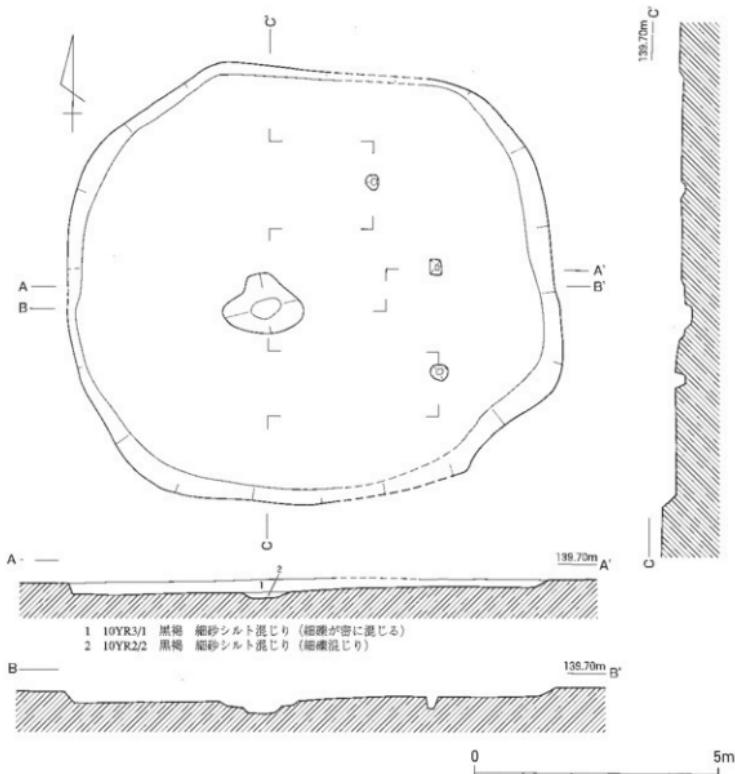
第326図 E-SX01出土石器



第327図 E-ST01遺構図



第328図 E-ST01出土土器



第329図 E-SHO2造構平面図

が堆積していた。

屋内施設 中央土坑・柱穴を検出した。

中央土坑 床面中央やや西よりに位置する。長軸方向で 1.7 m、短軸方向で 1.3 m、床面からの深度は最深部で 31 cm を測る。

柱穴 主柱穴を 3 基検出した。平均の柱間距離は 22 m である。各柱穴の平面形は円形・隅丸方形で、直径 30 cm 前後、床面からの深度は 10 ~ 25 cm である。いずれの柱穴も柱痕を確認することはできなかった。

出土遺物

E-S1 打製石斧 サスカイト製で左面に主要剥離面を残し、右面はやや細かな剥離を繰り返している。

刃部は主要剥離面に近く、不揃いである。基部付近は欠損しているものと考えられる。

## E-SH03

検出状況 調査区中央東寄りに位置する。遺存状況は非常に悪く、北半分は開場整備時の削平で消滅しており、南半分についても床面まで削平され、わずかに中央土坑と主柱穴のみが検出された。

規模・形態 削平のため北半は不明であるが、主柱穴の間隔から直径7m前後の円形の堅穴住居跡に復元できる。

屋内施設 中央土坑・柱穴を検出した。

中央土坑 床面中央で一列に2基検出した。

土坑1 平面形は長楕円形を呈し、長軸方向で0.9m、短軸方向で0.55m、床面からの深度は最深部で21cmを測る。埋土に炭片と土器片が認められた。

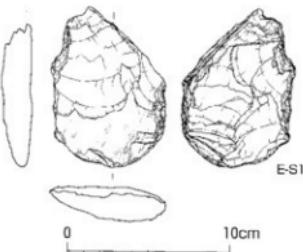
土坑2 平面形は楕円形を呈し、長軸方向で0.6m、短軸方向で0.4m、床面からの深度は最深部で18cmを測る。埋土に炭片と土器片が認められた。

ともに埋土に炭片と土器片が認められた。

柱穴 主柱穴を5基検出した。検出状況から、8本柱の建物に復原できる。平均の柱間距離は2.75mである。各柱穴の平面形は円形・楕円形で、検出面からの深度は30~40cmである。いずれの柱穴も柱痕を確認することはできなかった。

## 出土遺物

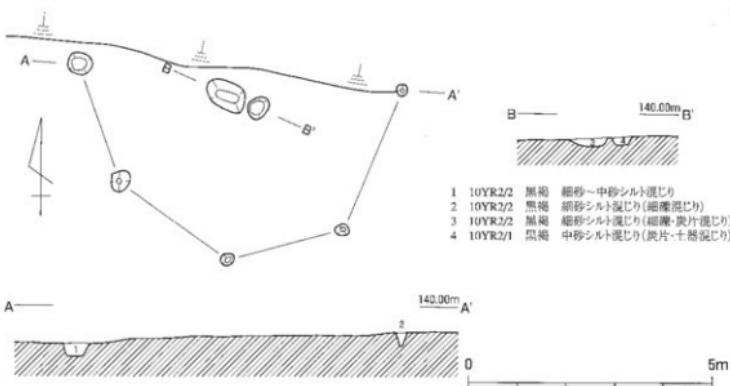
E-1 莢生 高杯 杯部中央で屈曲し口縁にかけて外反する。横方向のヘラミガキが顕著である。



第330図 E-SH03出土石器



第331図 E-SH03出土土器



第332図 E-SH03遺構平面図

**土器窪り****土器窪り 1**

検出状況 調査区北西隅に位置する。南7mに土器窪り2がある。本来は流路の底面の凹状地形で、流路埋没後に上部が削平され残存したものと考えられる。

規模・形態 平面形は不整形な楕円形を呈する。長軸方向で最大5.8m、短軸方向で最大4.4mを測る。長軸方向の断面形は皿形を呈する。検出面からの深度は、20cm前後を測る。

埋没状況 黒褐 シルト混じり粗砂～細礫が堆積していた。出土遺物から奈良時代には埋没したものと考えられる。

**出土遺物**

E-11 須恵器 杯身 底部付近で屈曲し口縁にかけて体部はやや外反する。端部はシャープである。

**土器窪り 2**

検出状況 調査区西端やや北よりに位置する。北7mに土器窪り1がある。本来は流路の底面の凹状地形で、流路埋没後に上部が削平され残存したものと考えられる。

規模・形態 平面形は不整形な楕円形を呈する。長軸方向で最大9.0m、短軸方向で最大4.8mを測る。長軸方向断面形は凸形を呈する。検出面からの深度は、20cm前後を測る。

埋没状況 黒褐 シルト混じり粗砂～細礫が堆積していた。出土遺物から奈良時代には埋没したものと考えられる。

**出土遺物**

E-12 弥生 壺 口縁が短く外反し体部上半に最大径をもつ。外面上半に横方向のヘラミガキ、下半に斜め方向のヘラミガキがみられる。体部内面は横方向のケズリとヘラミガキが交差する。

E-13 弥生 壺 口縁端部が斜め上方に拡張されたもので体部の張りは少ない。口縁にはハケ目状の工具で文様が施される。体部外面には斜め方向の細かなハケ目調整、内面は斜め方向のヘラケズリがみられる。

E-14 弥生 鉢 口縁端部が上方に拡張され、端部にはハケ目状の工具による文様が施される。体部にはタタキの痕跡があり、内面はヘラケズリが一部に見られる。

E-15 弥生 鉢 短い口縁が水平方向に開き、口縁端部は斜め上方に仕上げられるが文様はない。底面には本業痕が残る。

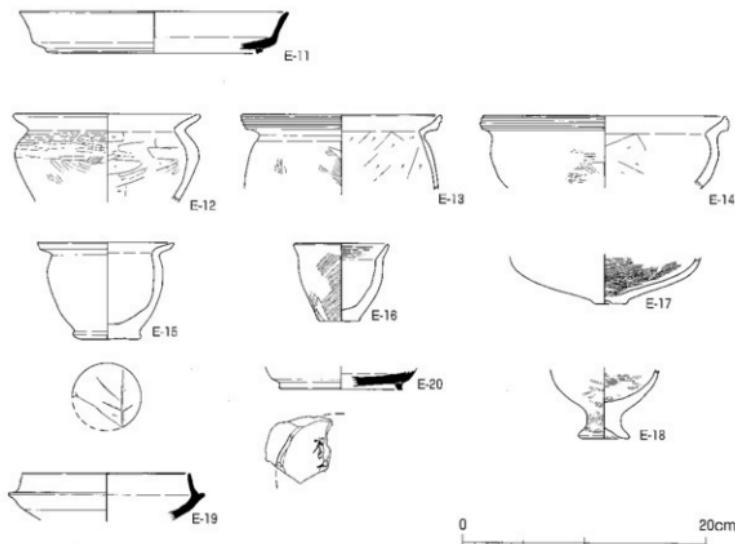
E-16 弥生 鉢 口縁はなだらかに斜め上方に外傾する小型品である。体部から底部にかけてタタキ目がみられ、口縁内面にハケ目が残る。

E-17 弥生 鉢 体部上部以上が欠損する資料である。大きく膨らんだ体部から小さな底部にいたる資料である。外面はナデ調整、内面は横方向のハケ目がみられる。

E-18 弥生 台付鉢 小型の鉢部をもち若干開き気味の脚部の小型品である。脚台は縦方向のハケ目、杯部内面は横方向のハケ目調整がみられる。

E-19 須恵器 杯身 口縁は内傾ぎみに突きだし、体部は底部にかけて斜め方向にすぼまる。体部外面のヘラケズリは受部に近い。口縁端部内面には僅かな段がみとめられる。

E-20 須恵器 杯身 体部以上が欠損し底部を残す資料である。底部中央付近に判読不能の墨書が存在する。



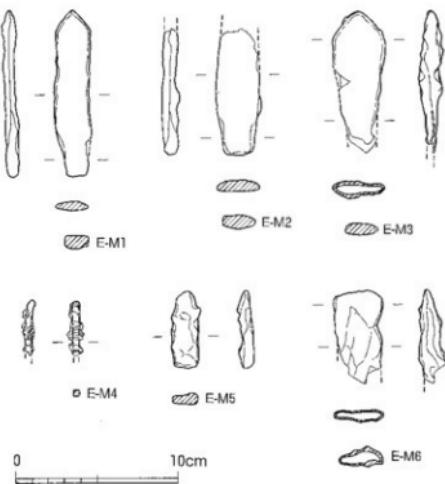
第333図 土器溝り1・2出土土器

土器溝り出土金属器

E-M1 鉄器 短剣? 長さ10.2 cm、幅2.0 cm、厚さ0.6 cmの完形品であるが鏽化が著しい。切先は45度に作られ両刃を呈する。基部の断面は長方形で1.4 cm、厚さ0.8 cmを測る。

E-M2 鉄器 剣? 切先を欠く資料である。残存長7.7 cm、最大幅2.6 cm、厚さ0.7 cmで鏽化が著しい資料である。刃部は両刃になるが鏽により丸く変形する。基部は長さ1.9 cm、厚さ0.8 cmで中央部がやや厚くなり長方形を呈する。

E-M3 鉄器 鐵 長さ8.7 cm、幅3.1 cm、厚さ1.0 cmの鏽化が進んでいる資料である。上部に



第334図 土器溝り2出土金属器

最大幅をもち、茎部分にかけて直線的にすぼまる。刃部の端部は鋒により彫れ丸く変形する。また中空化していることから変形が著しいものと考えられる。

E-M4 鉄器 釘 長さ 3.3 cm、厚さ 0.4 cm の断面正方形のもので両端を欠く資料である。表面には木質が付着することから釘として木材に打たれたことが判る。

E-M5 鉄器 不明 長さ 4.6 cm、幅 1.5 cm、厚さ 0.7 cm の鉄製品である。断面形が長方形に近いことから茎の可能性もある。

E-M6 鉄器 不明 長さ 5.7 cm、幅 2.6 cm、厚さ 1.3 cm の鉄製品である。先端がややとがり、上端の断面や下方の断面も中空となる。用途は不明である。

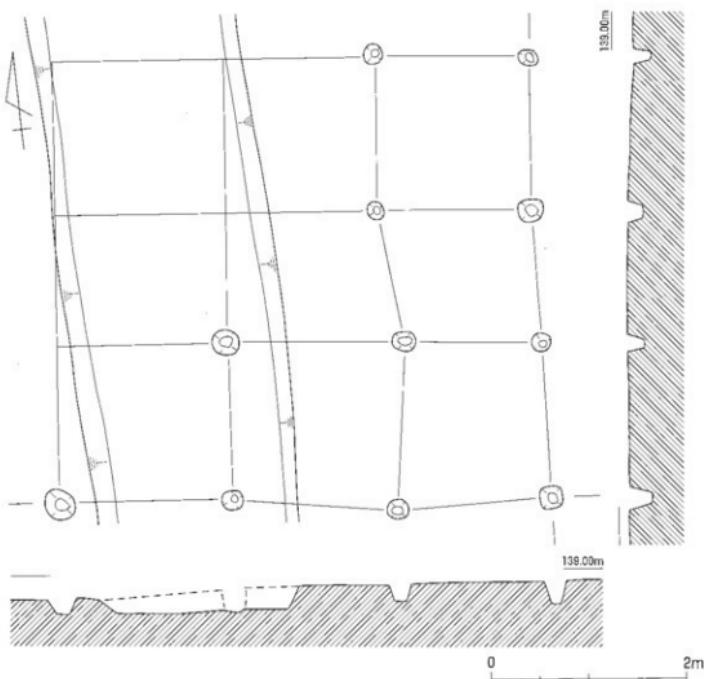
## (2) 中世の遺構

### 掘立柱建物跡

E-SB01

検出状況 調査区中央北端に位置する。西側 1間分では、確認トレンチの掘削により遺存状況は悪い。

規模・形態 棟軸方向を N87° W にとる桁行 3間、梁行 3間からなる総柱建物である。東側桁行方向で 4.55 m、南側梁行方向で 5.10 m を測る。平均主柱間距離は東側桁行方向で 1.51 m、南側梁行方向で



第335図 E-SB01遺構平面図

## 第7節 E地区の遺構と遺物

1.70 mを測る。床面積は約 23.5 m<sup>2</sup>である。

柱穴 挖り方の平面形は、円形・楕円形のものからなる。柱穴の規模は検出面で直径 25 cm前後を測る。いずれの柱穴も柱痕を確認することはできなかった。

### E-SB02

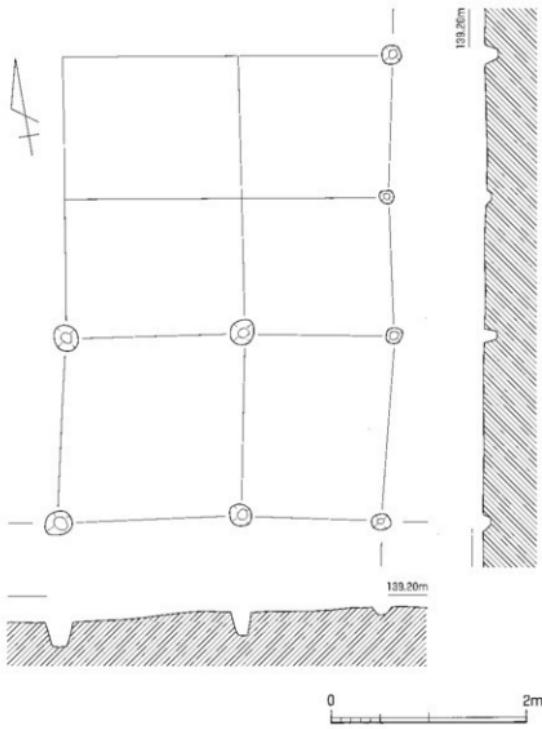
検出状況 調査区中

央やや北よりに位置する。北西部分は削平のため検出できなかつた。

規模・形態 棟軸方向は N11° E であり、桁行3間、梁行2間からなる純柱建物である。

東側桁行方向で 4.80 m、南側梁行方向で 3.35 mを測る。平均主柱間距離は東側桁行方向で 1.60 m、南側梁行方向で 1.68 mを測る。床面積は約 15.8 m<sup>2</sup>である。

柱穴 挖り方の平面形は、円形・楕円形のものからなる。柱穴の規模は検出面で直径 20 ~ 30 cmを測る。いずれの柱穴も柱痕を確認することはできなかつた。



第336図 E-SB02遺構平面図

### 道路遺構

道路遺構

検出状況 調査区南西隅から北東方向に約 80 mに渡って検出した直線道路遺構である。道路遺構の南側の延長線上に粟鹿神社鳥居が位置することから、粟鹿神社の参道であると考える。道路は盛土工法で築造されており、盛土の法面には石が積まれ、路面全面には石疊状に石が敷かれていた。道路遺構の西半について、数次にわたる積み直し等の改修痕が認められた。方形貼石墓を破壊して築造している。

規模・形態 主軸方位を N30° E にとる。道路遺構を挟んで西側が一段低く、調査区北端で地高差約 1.1 m、

南端で比高差約0.5mを測ることから、調査区北端から南へ22mの間の西側の石積みは2段積みとなっている。西側の石積みの裏込に石畳状の路面が切られており、道路が改修されたことがわかる。石畳状の路面を持つ当初段階を第1次道路、改修した段階を第2次道路とする。

第1次道路 路面幅は、西側が2次道路築造時に破壊されたため不明であるが、検出長で最大2.2mを測る。基底部の幅は、検出長で最大3.0mを測る。路面には、拳大から人頭大の扁平な河原石を石畳状に敷いていた。高さは東側法面標から路面上面まで調査区北端で15cm前後、中央で30cm前後、南端で10cm前後を測る。路面の標高は、調査区北端で138.61m、中央で139.14m、南端で139.18mを測る。道路の断面形は蒲鉾状を呈する。盛土は灰黄褐色土で、拳大から人頭大の石を多量に包含する。

第2次道路 路面幅は、圃場整備の際に上面が削平されていることから不明であるが、検出長で最大2.5mを測る。基底部の幅は、検出長で最大3.7mを測る。道路の断面形は蒲鉾状を呈する。高さは、検出面から西法面下端まで調査区北端で110cm前後、中央で80cm前後、南端で50cm前後を測る。西側法面は、基盤層及び第1次道路を大きく削り込み、一辺30~50cmの基盤石を据えた後に、裏込土を入れながら、基盤石と同程度の石を下方の石の谷間に落すようにして積む、積んだ石の目地が対角状を呈するいわゆる「落しと積み」で積み上げている。残りのよい部分で、基盤石を含めて4石分残存している。部分的に積み直しが認められた。盛土は灰黄色土で、拳大の石を包含する。調査区北端から南へ22mの間は、西側法面下から基盤層を削り出して犬走り状に幅約0.5mの平坦面を設けており、法面には石を1~2石積んでいた。更に、犬走り状の平坦面と西に約1.0m並行して幅約50cm、深さ約10cm、断面形が浅い皿形の飼溝を検出した。

改修 第1次道路は、中世後半に洪水により埋没する。その後、再度同じ位置に道路を作り直すが、この際に西側法面を大きく削り出して石積みの法面を築いた。この西側法面積み直しの際、埋没した第1次道路は西側を大きく削平され破壊される。その後、この道路遺構は中世から近世を通じて幾度も補修を受けながら栗鹿神社参道として機能し続け、圃場整備の行われた昭和53年に上部を大きく削平され埋め戻された。

#### 道路遺構石積裏込め出土遺物

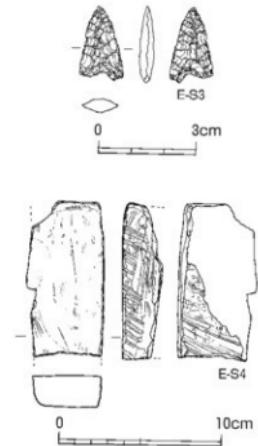
E-S3 石器 鎌 長さ23mm、幅13mm、厚さ4.4mm、重量1.1g チャート製である。下端両側が僅かにとびだす凹基無茎式である。両面とも両端から月念に剥離されている。

E-S4 砥石 長さ9.6cm、幅4.8cm、厚さ2.4cm、重量128g の粘板岩製品である。側面および裏面に荒い線条痕が認められ、他の面は細かな砥面がみられる。

E-21 磁器 瓢 表面にはコバルト系顔料による草花文が描かれ、内面には口縁付近に園線が入る。18世紀後半~19世紀前半、肥前系磁器である。

E-22 磁器 碗 口縁部は平坦に押さえられる。表面にはコバルトによる草花文様や珊瑚状文がプリントされている。19世紀中頃以降の製品と考えられる。

E-J1 ガラス 瓶 逆台形で乳白色を呈する。底には「尚

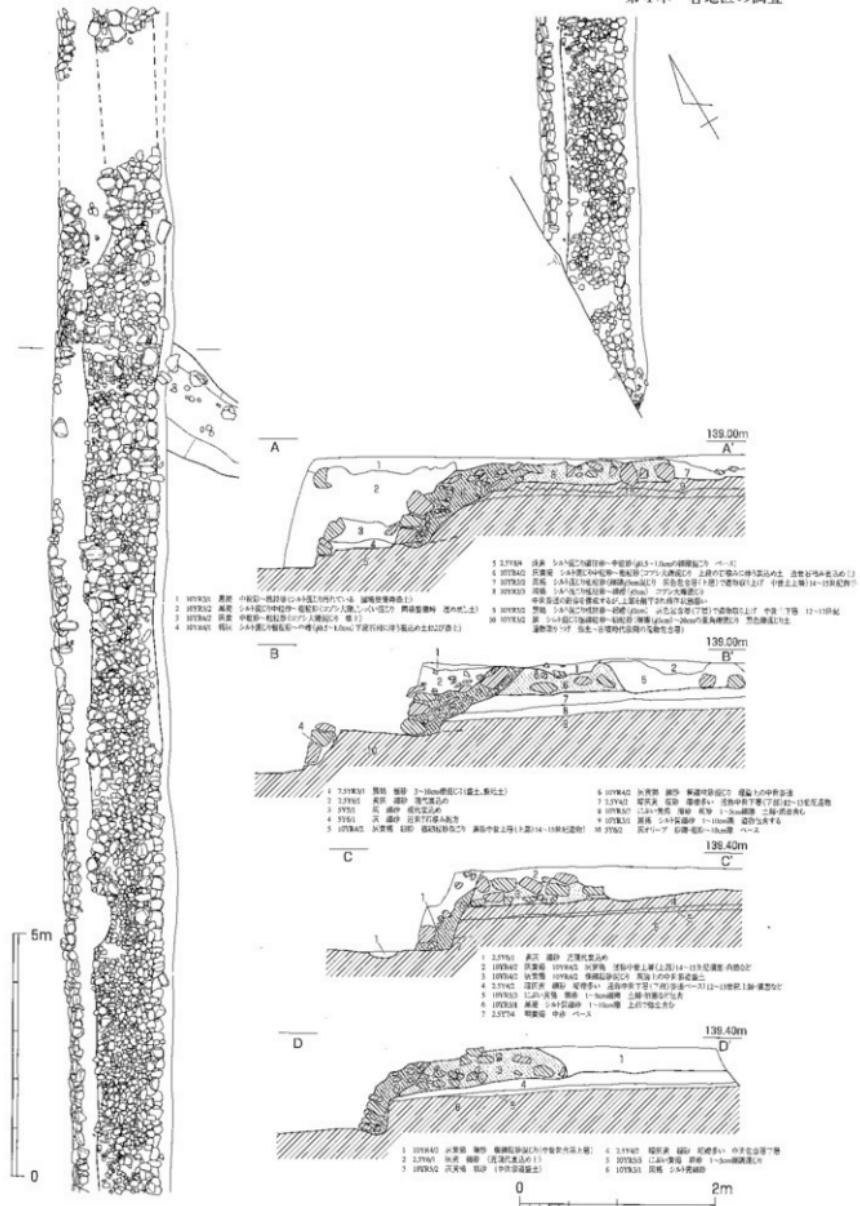


第337図 道路遺構石積裏込め出土石器

第7節 E地区の遺構と遺物



第338図 道路造構-1



第339図 道路遺構-2

## 第7節 E地区の遺構と遺物

美堂」の文字が見られる。化粧品瓶と考えられる。



### 包含層出土遺物

E-23 繩文 深鉢 黒色漆混層出土で、

口縁は平坦で内湾する。沈線2条が平行にめぐり、LR地縄文が施文される。後期中ごろの一乗寺K式と考えられる。

E-24 繩文 深鉢 黒色漆混層出土で、口縁端部は欠損するが直線的に外傾する資料である。口縁に平行して4条の沈線がみられLR縄文が施され、磨消される。後期中ごろの資料である。

E-25 繩文 深鉢 黒色ベース層出土で、胴部最大径付近にあたる資料である。平行する2条の沈線間にLR縄文が施され、磨消される。

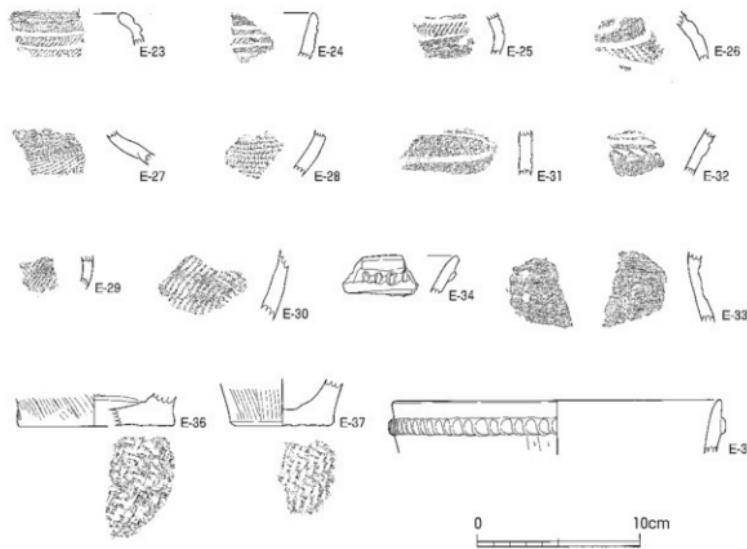
E-26 繩文 深鉢 黒色漆混層出土で、胴部上半の資料である。2条の屈曲する沈線下にRL縄文が磨消される。縄目は他に比べて撚りは大きい。

E-27 繩文 鉢 黒色土上面出土で、内傾する口縁下部の資料である。上方は丁寧なナデがあり、その下部にLR縄文が施される。後期中ごろ一乗寺K式と考えられる。

E-28 繩文 鉢 黒色漆混層出土で、胴部下半にあたる資料である。比較的粗いLR縄文が施される。縄文後期ごろの資料と考えられる。

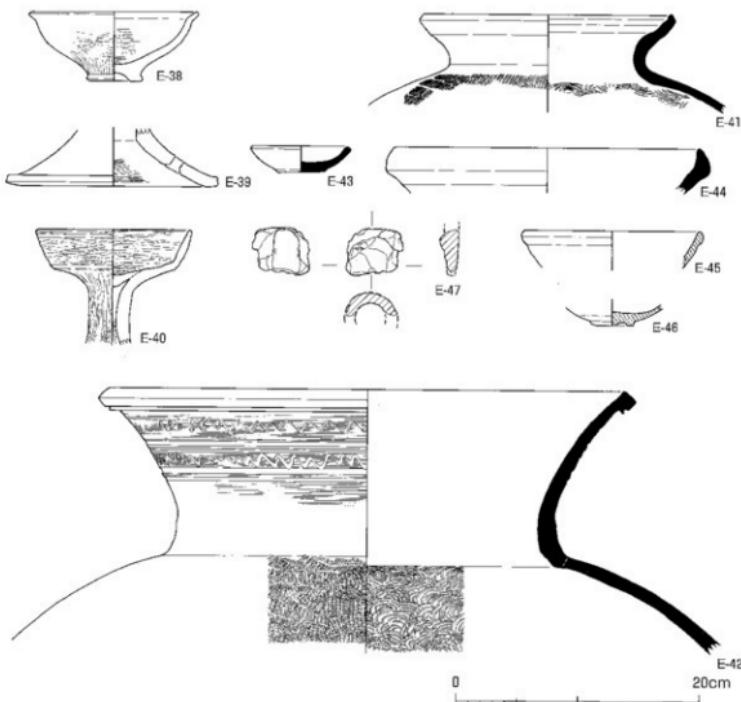
E-29 繩文 鉢 黒色絹藻混層出土で、胴部最大径付近の資料である。細かいLR縄文が施される。

第340図 道路遺構石積裏込め出土陶磁器・ガラス



第341図 包含層出土縄文土器

- E-30 繩文 鉢 黒色疊混層出土で、胴部下半の資料である。やや粗いLR繩文が施される。後期の資料と考えられる。
- E-31 繩文 深鉢 黒色疊混層出土で、胴部資料ではば直線的にのびる。太く浅い沈線が梢円をえがく。後期ごろの資料か。
- E-32 繩文 深鉢 黒色疊混層出土で、外傾する口縁下方の資料である。ヘラによる平行線文と右下がりの刺突文が施される。
- E-33 繩文 深鉢 黒色疊混層出土で、胴部上半の資料である。外面には棒状刺突が竪方向に見られる。表裏面ともヘラミガキにより調整される。
- E-34 繩文 深鉢 黒色疊混層出土で、口縁下部でやや尖った工具により刻まれた晩期凸帯文土器である。
- E-35 繩文 深鉢 黒色疊混層出土で、口縁下部でヘラ状工具により刻まれた晩期凸帯文土器である。
- E-36 繩文 底部 黒色疊混層出土で、平底の底面には網代痕跡が明瞭に残る。底面から体部にかけての立ち上がりは急で、外面にハケ目が残る。内面にはヘラによる凹線が1条みられる。
- E-37 繩文 底部 黒色土上面出土で、平底の底面には網代痕跡が明瞭に残る。底面から体部にかけ



第342図 包含層出土弥生土器・須恵器等

## 第7節 E地区の遺構と遺物

での立ち上がりは外傾し、外面に縱方向のハケ目が残る。

E-38 弥生 鉢 僅かに高台状に高くなった底部から口縁にかけて大きく外傾する。口縁端部はさらに屈曲する。内外面とも丁寧なヘラミガキが見られる。

E-39 弥生 高杯 脚端部にかけては大きく外反するもので端部上方には穿孔が見られる。内面縁部には横方向のハケ目が僅かに残る。

E-40 土師器 高杯 杯部から脚柱部が残る。杯部底面から口縁部にかけては直線的に伸びる。杯部上端と下端には浅い沈線がめぐり、内外面と脚部外面は丁寧なヘラミガキが見られる。全体に赤色系の化粧土が塗布される。

E-41 須恵器 豆 口縁下部で段をもち、体部は大きく開く。体部外面には平行文、内面は同心円形の青海波文がみられる。

E-42 須恵器 豆 頸部から口縁にかけてやや長く上半部にクシガキによる直線および波状文が施される。体部外面には平行線、内部には青海波文のタタキが残る。

E-43 須恵器 豆 底部からわずかに内湾しながら短くのびる。底部は糸切りである。

E-44 須恵器 こね鉢 口縁縁部がやや内側に拡張される。ロクロ整形によるユビナデ痕が見られる。14世紀代の東播系須恵器と考えられる。

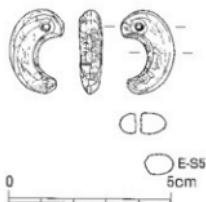
E-45 白磁 瓢 口縁縁部外面は玉縁となる。中国製で森田勉編年白磁碗D群である。

E-46 白磁 瓢 高台は削りだされる。中国製で森田勉編年白磁碗D類であり、県内出土例は少ない。

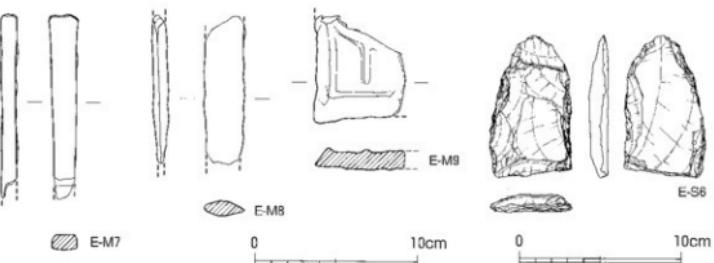
E-47 ふいご 羽口 内径14cmの孔の一部があり、内面は橙色、外面は灰色と異なる。片方に炉壁が付着するものである。

### 包含層出土石製品

E-S5 勾玉 黒色系の滑石製品で内径および外径は正円弧状となる。内外とも周縁は丸く研がれるが全体は扁平を帯びる。頂部中央には径2.5mmの穿孔がある。形態や材質から古墳時代のものと考えられる。



E-S6 打製石斧 粘板岩製のもので刃部は欠損する。左右両面からの打撃により剥離される。右面は主要剥離面となり、周辺部に僅かな剥離が認められる。



第344図 包含層出土金属器

第343図 包含層出土石製品

## 包含層金属製品

E-M7 鉄器 整? 長さ 7.7 cm、幅 1.8 cm、厚さ 0.9 cm で刃部は欠損する。断面は長方形を呈し、刃先と考えられる方向にかけて徐々に細くなる。

E-M8 鉄器 刃? 長さ 9.1 cm、幅 2.4 cm、厚さ 0.9 cm で両端は欠損する。断面は両刃と考えられる。

E-M9 鉄器 不明 長さ 6.6 cm、幅 5.5 cm、厚さ 1.3 cm で上端および片端が欠損する。上面は周囲および中ほどに隆起が見られる不明鉄製品である。

E-M10 銅銭 20-D 確認 トレンチ

から出土したもので、径 24 mm、厚

さ 1 mm の寛永通宝である。周囲の凸部に欠損部が多く、全体に鋳あがりは悪い。

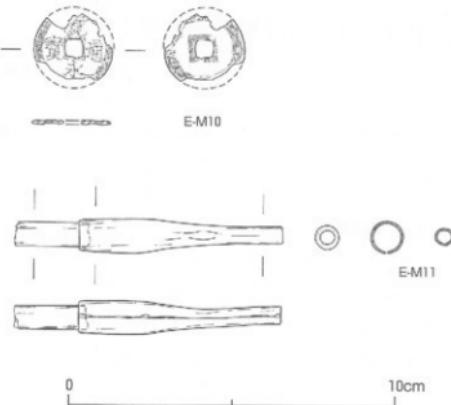
E-M11 銅製 燐管 20-D 確認 トレンチから出土したもので、長さ 8.4 cm、幅 1.0 cm を計る。先端には竹製ラオ材が挿入された状態で残る。本体は銅板を丸く加工した痕跡があわせ目となっている。

## 4. 小 結

弥生時代、中世の遺構を検出した。

弥生時代 調査区中央から北半にかけて方形貼石墓 1 基、土器棺 1 基、竪穴住居跡 2 棟、土器溜り 2ヶ所を検出した。調査区南半は圃場整備で大きく削平されており、遺構の空白地となっているが、本来的には南半にも遺構が広がっていたものと考えられる。特筆すべき遺構として、方形貼石墓を検出した。方形貼石墓は、弥生時代中期末から後期初頭にかけて、山陰地方から丹後地方の日本海沿岸地域にのみ確認される特徴的な墳墓で、兵庫県では初の検出例である。

中世 調査区中央から西半にかけて掘立柱建物跡 2 棟、道路遺構を検出した。特筆すべき遺構として栗鹿神社の石敷の旧参道を検出した。中世に神社の勢力を誇示すべく、從来の条里と異なった方位に神社と旧山陰道を結ぶ直線道路を構築したものと考えられる。



第345図 確認トレンチ出土金属器



写真 6 E 地区現地説明会風景（測量隊整列）

## 第8節 E2・E3 地区の遺構と遺物

基本土層は①盛土 ②オリーブ褐シルト ③暗褐シルト質細砂 ④黒色シルト ⑤黄褐細砂（地山）となっている。遺構は地山面で検出している。南から北に向かって下がっている緩斜面となっている。現状では大きな比高差はないが、圃場整備前は段丘面などが明瞭に看取された地形が残っていたようである。調査区北半は低くなっている。

### E2 地区の調査結果

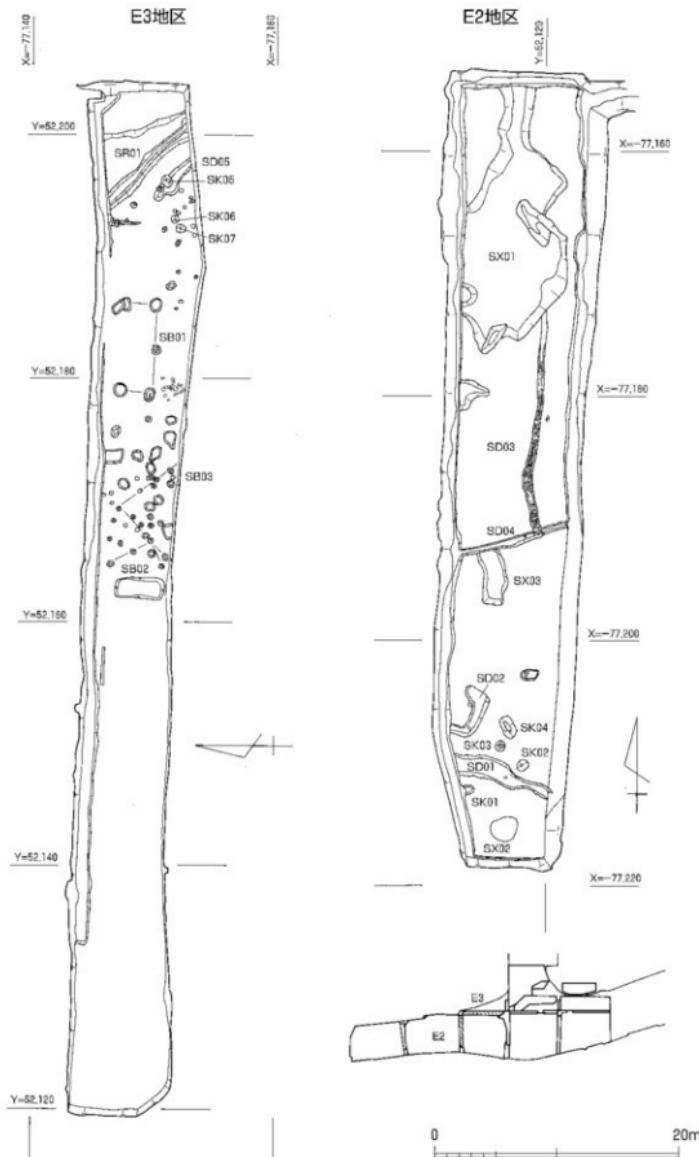
E2 地区は E 区の西側に位置する E 区と F 区に挟まれた南北の道路部分である。農道であることから、水道管などのライフラインなどの埋設はなかったが、南端部分のみ新しい道路部分との関係で搅乱を受けていた。出土遺物や遺構の時期幅があるが、調査としては 1 面で調査を実施した。

調査区北側は地山面が低くなっている。④層である黒色シルトの堆積が厚くなっている。自然流路と思われる落ち込み（E2-SX01）を検出している。ここから遺物の大半が出土している。下層は弥生土器に限られている。上層は須恵器・上師器が出土地しておらず、古墳時代の堆積層である。E2-SX01 は最大幅 9.5 m、長さ 22 m を測る。南から北側に向かって深くなっている。

調査区中央部分は近世の遺構が検出されている。それより古い遺構は確認されず、遺物も出土していない。2 本の溝を調査しており、南北方向の溝（E2-SD03）を東西方向の溝（E2-SD04）が切っている。E2-SD03 は暗渠で、幅 0.6 ~ 0.8 m で、深さ 0.25 ~ 0.5 m を測り、長さは 13 m 検出している。溝の北側はまっすぐ延びるが、南側は直線的ではなく緩やかに蛇行している。底に材を半裁して内面を削った樋を置き、両脇に礫で安定を図り、上に礫を積んで暗渠としている。北側は E2-SX01 までしか築かれていなかったと想像される。南側も暗渠築造時の水田は異なると考えられることから、1 枚の水田部の暗渠をすべて確認したものと思われる。E2-SD04 は北側を内側とした緩やかな弧を描く溝である。幅 0.5 ~ 0.7 m、深さ 0.1 ~ 0.25 m の断面形が箱形から U 字形をしている。上に礫を置いているが、樋の上部は大型の角礫も含まれているが、大半は拳大を中心とする円礫が使用されている。

南側は地形的に高くなっている、遺構が検出されている。溝 2 条と土坑 4 基、落ち込み 2 基である。E2-SD01 は東西方向に延びる溝である西側が幅 1.7 m と広く、東側では 0.8 m と狭くなっている。深さは西側の方が 10 cm 前後深くなっている。東側は調査区内で肩部が不明瞭になっている。底面は平滑でなく部分的に深い部分が認められる。E2-SD02 は E2-SD01 の北側に位置しているコの字状に曲がった溝で南北方向に延びている。幅 0.6 ~ 1.0 m、深さ 0.1 ~ 0.25 m で断面形状は箱形になる。北側に延びていた可能性も残っている。

E2-SK01 は南北 0.6 m の東西に長い梢円形の土坑である。東西方向は 0.9 m 調査している。1 m 余りの長径にならうかと思われる。深さ 0.34 m を測る。遺物は土師器の小片だけで明確な時期は不明である。E2-SK02 は E2-SD01 の北側に隣接した梢円形の土坑である。東西 0.75 m、南北 1.05 m、深さ 0.18 m を測る。埋土は黒色シルトで古い時期の可能性が高いが出土遺物は認められない。古墳時代から奈良時代とするのが妥当であろう。E2-SK03 は E2-SK02 の北西に存在する土坑で、径 0.8 m の円形で深さ 0.15 m を測る。底は平坦である。埋土は黒色シルトで礫が多く入っており、奈良時代以降と思われる。E2-SK04 は E2-SK03 の北側に存在する長梢円形の土坑である。北西から南東方向に主軸を有するもので、長径 1.8 m、短径 1.0 m を測る。深さは 0.18 m の摺鉢状になっている。埋土に礫を含むことから、



第346図 E2・E3地区全体図

## 第8節 E2・E3 地区の遺構と遺物

E2-SK03と同じく奈良時代以降と考えている。

E2-SX02は調査区南端近くで検出した径1.5m前後の円形の落ち込みである。深さは最大で0.2mと浅く、出土遺物もなく性格不明である。E2-SX03はE2-SD03に切られた遺構で僅かに弧を描いた長方形を呈している。幅2mで、残存長4.5mを測る。深さは最深で0.12mと浅い。南側のE2-SD02と同様の遺構の可能性が高いと思われる。埋土は黒色シルトである。

### E3地区の調査結果

基本土層はE2地区とはほとんど変化がない。だが、地形が東から西に下がっており、東側では④黒色シルト層は存在していない。逆に西半の一段低くなった部分は④黒色シルトならびに同色の礫が多く入ったシルト層が厚く堆積している。E3地区西半とE2地区的E2-SD03以北は圃場整備以前一段低い水田であったことが確実である。

遺構は東半で検出している。検出遺構は、掘立柱建物跡3棟、土坑3基、溝2条、流路1条とピット多数である。調査は1面で行っている。

E3-SB01はほぼ南北に主軸を持つ建物跡である。調査区東半中央付近で確認している。東西2間で北側の調査区外へ延びている。1間は1.5mで梁行は3.0mとなる南北棟である。桁行の1間は1.0mと狭くなっている。すべて柱は抜かれたよう柱根はもちろん柱痕跡確認されなかった。柱穴の径は最大で0.5mを測るやや大型である。残存状態は悪く、0.2~0.35mしか残っていない。柱穴内には円礫が幾つか見られる。柱穴の規模や方位から奈良時代の建物跡と思われる。

E3-SB02は東半の西端で検出している。西半は地形が下がっていることによって遺構面は残存していない。東辺は北側調査区外へ延びているようである。主軸はN35°WとE3-SB01とは異なっている。東西1間、南北2間を検出している。東西の柱間は1.8mで、南北は南から1.8m、2.0mを測る。柱穴の径は25~46cmと大きくなっている。柱穴の深さも最深で45cmを測り、他は20~30cmと浅い。柱穴土出土の遺物は土師器小片だけで、細かい時期を決定することは困難である。

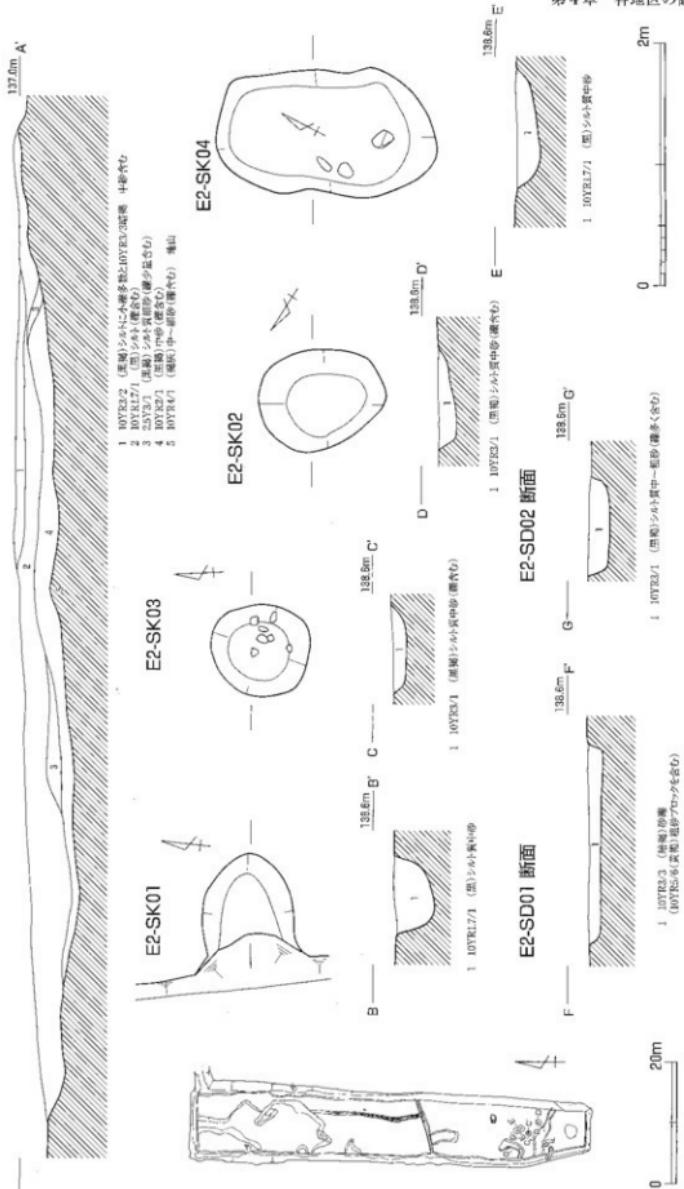
E3-SB03はE3-SB02と空間を共有する切り合い関係のある掘立柱建物跡である。主軸方向はE3-SB02とほぼ同じかさらに僅かに西へ振っている。2間×2間を調査しており、調査区南側に延びている。やはり、遺物は小片しか出土していない。

その他の遺構は調査区東端に集中している。土坑3基も近接している。E3-SK05は長径1.0m、短径0.75mの梢円形を呈している。埋土は礫を多く含む黒色中砂で、遺物は保有していない。深さは0.18mを測る皿状の形状である。

E3-SK06は長径0.7m、短径0.5mのやはり梢円形を呈している。深さは0.16mで断面形状は半円形である。埋土もE3-SK05と同じ黒色中砂である。遺物は出土していない。

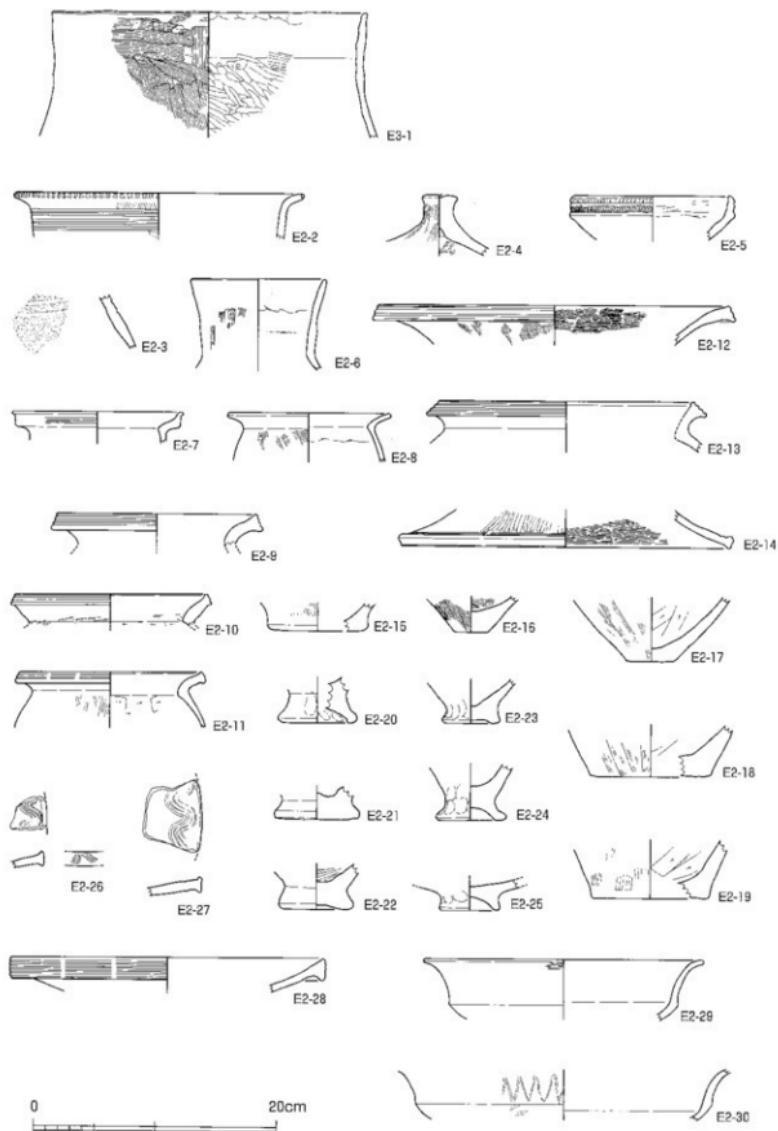
E3-SK07はE3-SK06の50cm西側と隣接して築かれた土坑である。長径0.8m、短径0.7mの平面形が卵形をしている。深さは0.1mと浅く、皿状の断面形状になっている。埋土は黒色中砂で、遺物はやはり含まない。

溝は2条検出しており、ほぼ平行して存在する。ともに、N45°Wの主軸を探り、南東から北西に向かっている。E3-SD05は西側に位置している溝で、E3-SD06の肩部と1.4m離れている。溝は、南側は調査区外へ延びている。北側は調査区中央で終焉している。幅0.6~0.8mで、深さ0.26mを測る。断面は逆台形の肩のしっかりした溝である。E3-SK05と切り合い関係にあり、E3-SK05より古い遺構

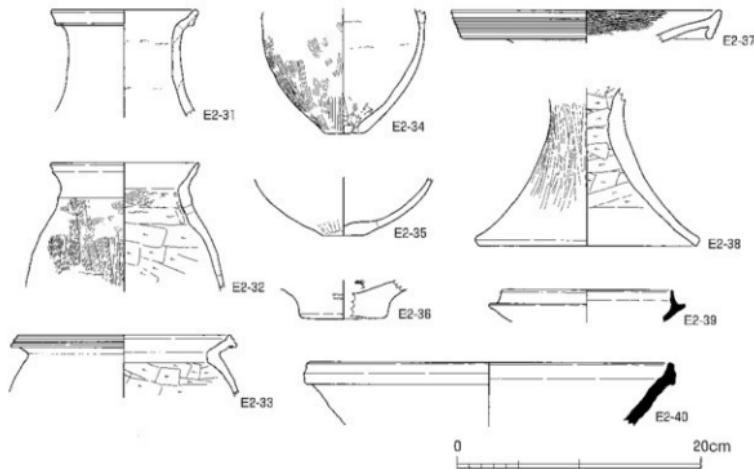


第347図 E2地区遺構土層断面図

第8節 E2・E3 地区の遺構と遺物



第348図 E3-SB01・E2-SX01出土土器



第349図 E2地区包含層出土土器

である。黒褐のシルト質中砂を埋土としている。

E3-SD06は流路の西肩部に存在するもので、流路の最終段階の溝であろう。幅1.0～1.4mで直線的に伸びている。深さは最大で0.45mを測る。断面形状はE3-SD05と同様で逆台形をしており、人工の溝と考えている。流路を利用したものかもしれない。E3-SD05と平行しているので、一体の遺構の可能性の十分に考えられる。埋土も同じである。遺物は土師器小片だけしか出土していないので、明確な時期は提示できない。主軸方向からすると、E3-SB02・03と同じである。中世前半の遺構の可能性が高い。

流路（E3-SR01）は調査区東端にあり、南東から北西方向に流れている。自然堆積を示しており自然のものと思われる。

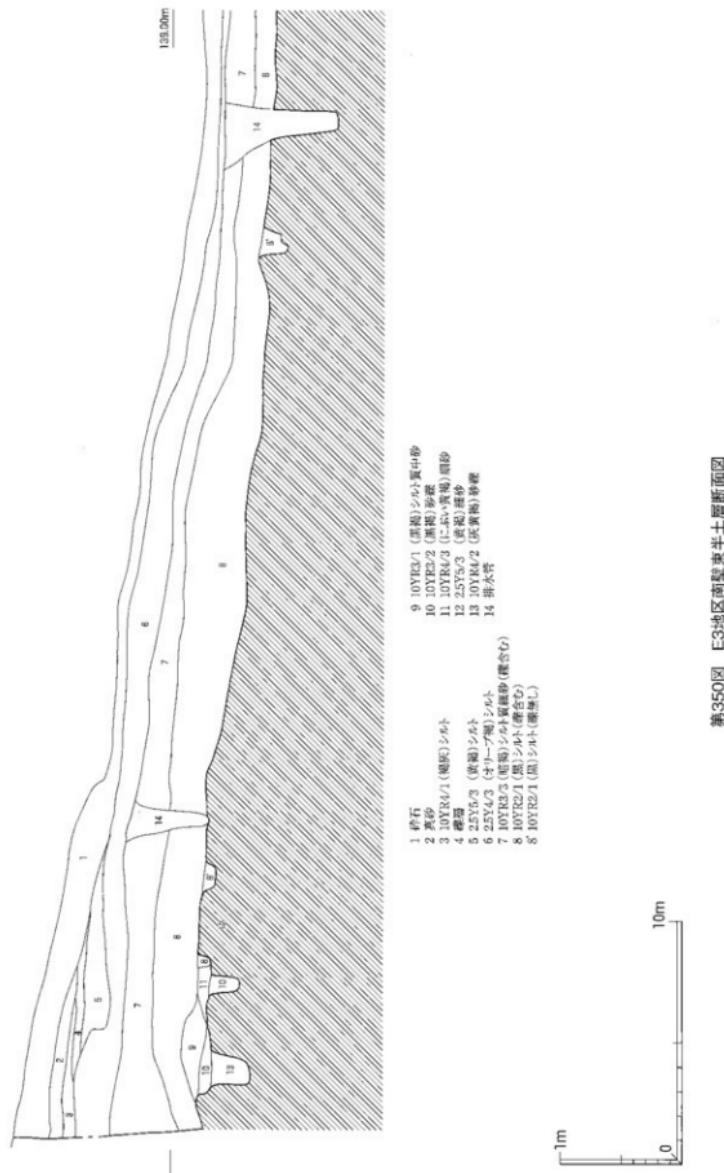
#### 出土遺物

出土遺物の量は多い方ではない。遺構出土は掘立柱建物跡の柱跡と落ち込みから出土している。

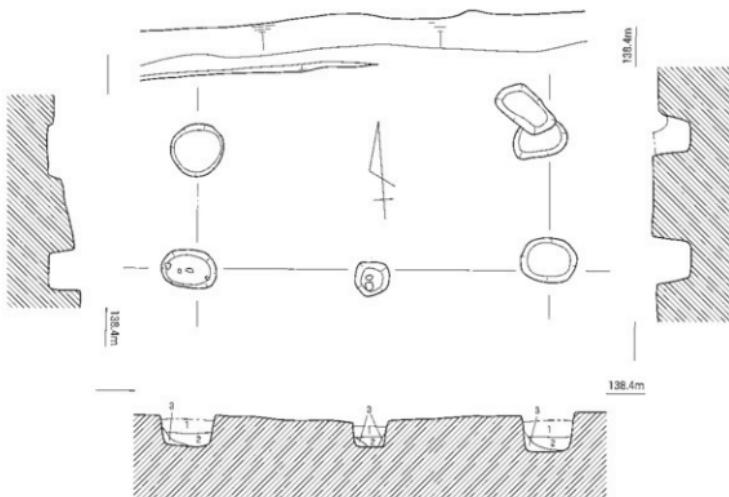
E3-1は縄文土器である。深鉢の口縁部で晩期のものと思われる。口径25.6cmに復原される大型品である。残存高は10.2cmを測る。粘土紐の単位が看取され、断面もその部分で段を生じている。口縁端部はユビで整形・調整しており、内側にはユビ押さえ痕跡が認められる。ハケ整形のちナデ調整を加えている。内面の方が丁寧でミガキ状に仕上げている。色調は内面にぶい褐色、外面灰褐色～黒色を呈している。砂粒を含み、焼成は良好である。外面には煤が付着している。E3-SB01の柱跡（P2）から出土しており、遺物の時期と遺構の時期は一致しない。

E2-2～E2-30はE2地区の北側の自然堆積と思われる落ち込みE2-SX01から出土している。

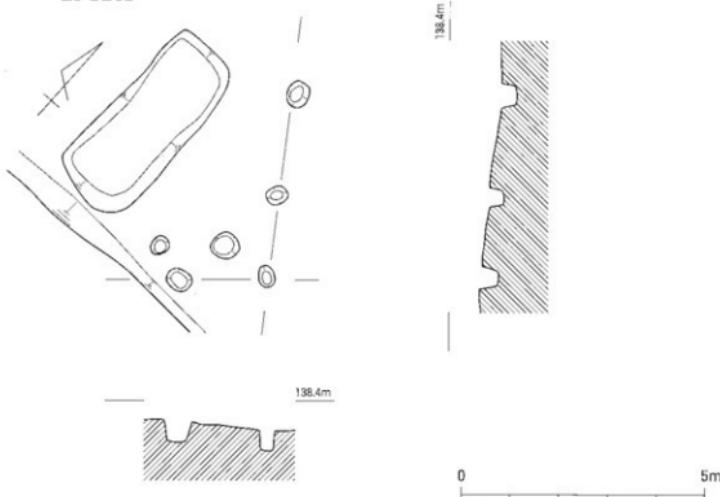
E2-2・3は弥生前期の土器である。E2-2は甌口縁部で、如意状の口縁をしている。端部には刻み目を有しており、体部上部に5条の沈線を施している。上の2条と下の3条はやや開いている。器面はハ



## E3-SB01

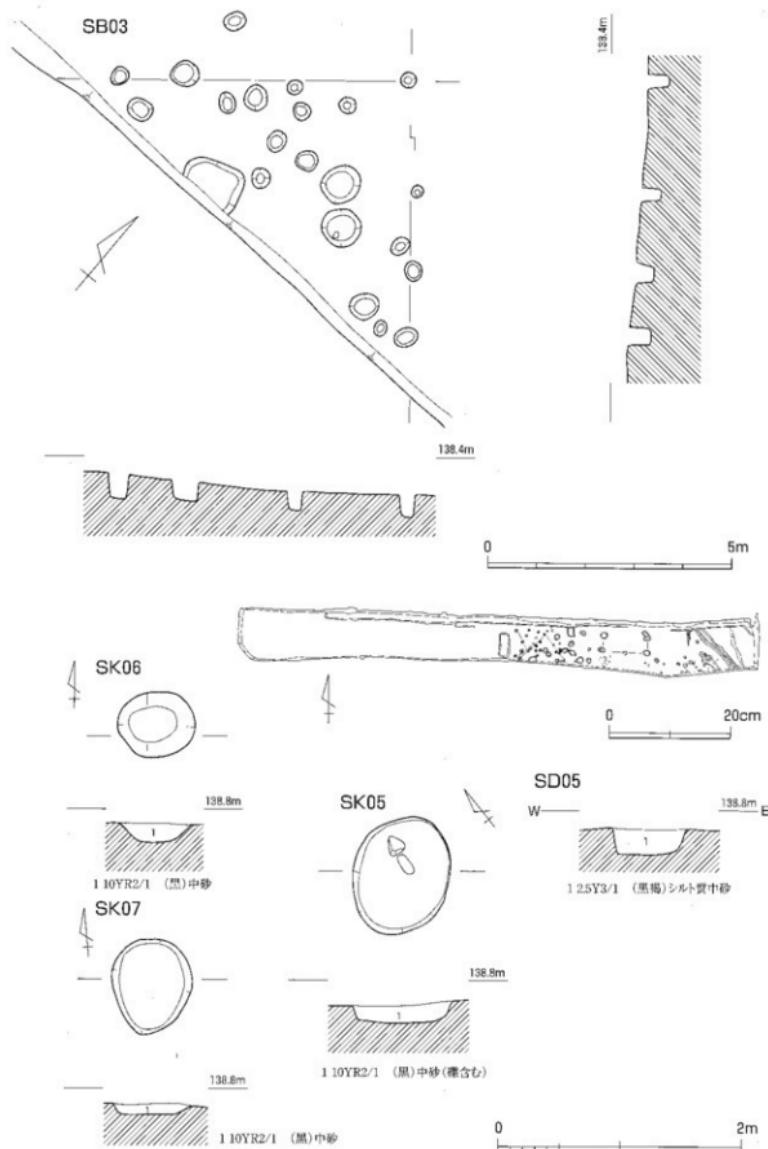


## E3-SB02



第351図 E3地区造構図(1)E3-SB01・SB02

第8節 E2・E3 地区の遺構と遺物



第352図 E3地区遺構図(2)

ケ整形を行い、口縁端部はヨコナデで仕上げられている。砂粒を多く含み、内面はにぶい黄橙、外面は褐灰色を呈している。口径 23.8 cm、残存高 3.7 cm を測る。E2-3 は壺腹部で 2 条の沈線が施されている。ナデで仕上げられており、小石粒を胎土に含んでいる。小片のため径などを復原することは困難である。内面は明黄褐、外面はオリーブ黒色である。

E2-4・5 は弥生中期の土器である。E2-4 は蓋であるが、口縁部を欠いている。残存高 4.9 cm で、つまみ部の径 2.9 cm を測る。E2-5 は壺口縁部である。受口状の口縁部になり、端面になっている。その中央に 1 条の円線を施し、上下に半載竹管文帯が施されている。E2-6～30 は弥生後期から古墳時代前半にかけての土器である。E2-6 は長頸壺の口縁部で、後期前半であろうか。口径 10.8 cm で残存高は 7.5 cm である。E2-7 は壺口縁部である。口径 13.75 cm で残存高は 2.6 cm を測る。擬凹線があることから、後期前半の壺と思われる。E2-8 も壺口縁部である。外面には焦が付着している。口径 12.8 cm、残存高 4.0 cm を測る。E2-9 も壺口縁部の破片である。口径 16.2 cm、残存高 2.6 cm を測る。E2-10 も口縁部に 3 条の凹線が施された壺口縁部である。口径 15.5 cm、残存高 2.5 cm を測る。E2-11 もくの字口縁の壺で、口径 14.8 cm、残存高 4.6 cm を測る。E2-13 は大型の壺口縁部である。口徑 20.65 cm、残存高 4.1 cm である。E2-12 は器台下台部である。口径 28.4 cm、残存高 3.2 cm を測る。E2-14 は器台裾部である。下台径 26.8 cm で、残存高 3.1 cm を測る。E2-15～19 は底部である。E2-15 は底径 7.45 cm、残存高 2.3 cm の壺である。E2-16 は壺で 2.6 cm と小さめの平底から内湾ぎみに外方に開いている。E2-17 はやや大きめの壺底部で、底径 3.8 cm、残存高 5.35 cm を測る。E2-18 は大型の壺で底径 10.0 cm を測る。E2-19 も大型壺で底径 9.0 cm、残存高 4.85 cm を測る。E2-20～24 は製塩土器である。成形技法はほぼ同一で、脚台Ⅱの時期であろう。E2-20 は残存高 3.7 cm、底径 5.35 cm を測る。E2-21 は平底で、底径 6.75 cm、残存高 2.6 cm で、残存部から外傾すると思われる。E2-22 は底径 5.0 cm、残存高 3.75 cm を測る。E2-23 は内湾する体部を持つ脚台である。底径 4.4 cm、残存高 3.6 cm を測る。E2-24 も上げ底になった脚台で、残存高 4.6 cm、底径 5.15 cm を測る。E2-25 は器種不明の底部である。底径 4.6 cm、残存高 2.55 cm を測る。天地逆で蓋になる可能性もある。E2-26～28 は器台である。E2-26・27 は小片で径を復原することは困難である。E2-26 は内外に肥厚する端部で、E2-27 は水平に近く外傾する上台部である。端部は内外に肥厚している。円形浮文が付加されていた可能性がある。E2-28 は上台部の口縁部である。口径 25.6 cm、残存高 2.8 cm を測る。E2-29・30 は高杯でともに口縁部の破片である。E2-29 は口径 22.7 cm、残存高 5.0 cm を測る。E2-30 は口縁端部を欠く杯部である。残存高は 4.2 cm である。E2-31～40 は包含層の遺物である。E2-31 は頸部の長い壺口縁部である。口径 11.8 cm、残存高 8.8 cm を測る。E2-32 は壺口縁部で、口径 11.9 cm、残存高 10.5 cm を測る。E2-33 は口径 17.3 cm、残存高 5.05 cm を測る。出土遺物の中では後期でも古い時期であろう。E2-34 は口頸部を欠く壺底部である。底径 3.7 cm、残存高 10.25 cm、最大腹径 13.4 cm を測る。E2-35 は壺底部で 2 次焼成を受けている。底径 3.3 cm で、残存高 4.75 cm で砂粒多く含む。E2-36 も壺底部である。底径 7.3 cm、残存高 3.1 cm を測る。E2-37 は器台上台部である。口径 21.8 cm、残存高 2.6 cm の丁寧に仕上げられた土器である。E2-38 は器高の高い高杯脚部である。裾部径 18.4 cm、残存高 12.9 cm を測る。E2-39 は須恵器杯身である。口径 13.8 cm、残存高 2.6 cm を測る。全体的に歪んでいる。器表は灰色であるが、器肉は紫っぽくなっている。E2-40 は中世須恵器で、捏鉢口縁部である。小石粒含み、灰色で、焼成良好である。外傾する体部で、口縁端部は内外に肥厚する。端部に重ね焼きの痕跡が看取され、自然釉がかかっている。口径 21.3 cm、残存高 5.15 cm を測る。東播系の須恵器である。

## 第9節 F 地区の遺構と遺物

### 1. 概要

**位置** 現在の行政区画では大字栗庭字御陵柿にあたる。地形的には、段丘上の南東-北西方向に緩やかに傾斜する緩斜面に位置する。昭和53年頃のは場整備により大区画水田となっている。遺跡の立地する基盤層は、洪水起源の砂礫層で構成されており、各所にその砂礫が露出している。

**遺構面** 遺構面は1面であり弥生時代や古墳時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、古代の溝により区画された中に掘立柱建物跡2棟が配置されるなど集合している。出土遺物は縄文時代から中世までの遺物が28ℓ入りコンテナで81箱出土した。

### 2. 基本層序

遺跡は原状地上をベースとしている。ベースはシルトを含む砂礫層が、氾濫等によって繰り返し堆積した土層から成っている。当地区では、包含層は部分的に残存しているだけで、基本的に耕土直下で検出されるベース上に弥生時代から奈良時代の遺構が構築されている。全般に圃場整備とともにになってベース面が大きく削平され、田んぼの畦下にあたるところでは遺構が全く検出されない。

### 3. 遺構・遺物

#### F-SH01

**検出状況** 調査区中央南端で検出した。遺存状況は悪く、住居の南半部を検出したにとどまる。

**規模・形態** 一辺約4.9mを測る方形の住居である。

**屋内施設** 周壁溝・柱穴を検出した。

**周壁溝** 周壁溝は西辺から南辺にかけて検出された。検出面での幅は最大で28cmを測る。床面からの深さは5cmである。

**柱穴** 住居内にあたる範囲で柱穴を検出しているが、配置からそのうち2基を主柱穴と推測した。直径約40cmを測る。

#### F-SH02

**検出状況** 調査区中央南端で検出した。検出面からの深さは約8cmと遺存状況は全体に悪く、北西の角は削平を受けて消失している。

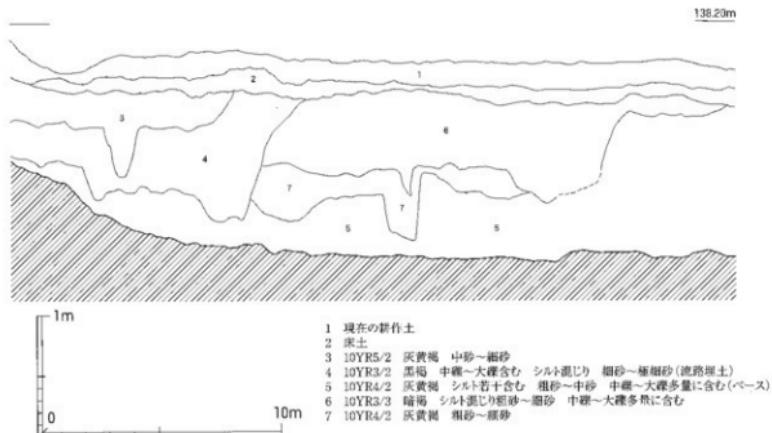
F 地区竪穴住居跡一覧表

遺構番号	形状	規模(m)	主柱穴	周壁溝	時代	燃焼施設	備考
F-SH01	方形	1辺4.9	2以上	あり	古墳時代後期	床面に施上	北端は削平
F-SH02	方形	1辺4.0	不明	なし	古墳時代後期	不明	
F-SH03	方形	1辺4.5	不明	なし	古墳時代後期	不明	西半は削平
F-SH04	方形	4.2以上×2.1以上	不明	あり	弥生時代後期	不明	南端と西は削平
F-SH05	円形	径7.7	4?	あり	弥生時代後期	中央土坑	北端は擾乱で削平
F-SH06	円形	径7.9	6	あり	弥生時代後期	中央十坑	突出部を持つ。建て替えあり。径14m住居存在か。

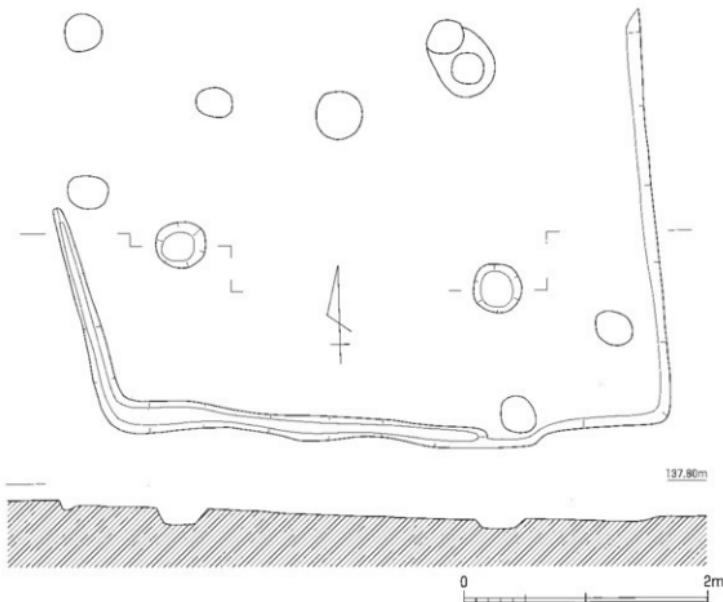


第353圖 F 地區全體圖

第9節 F 地区の造構と遺物



第354図 南壁土層断面図

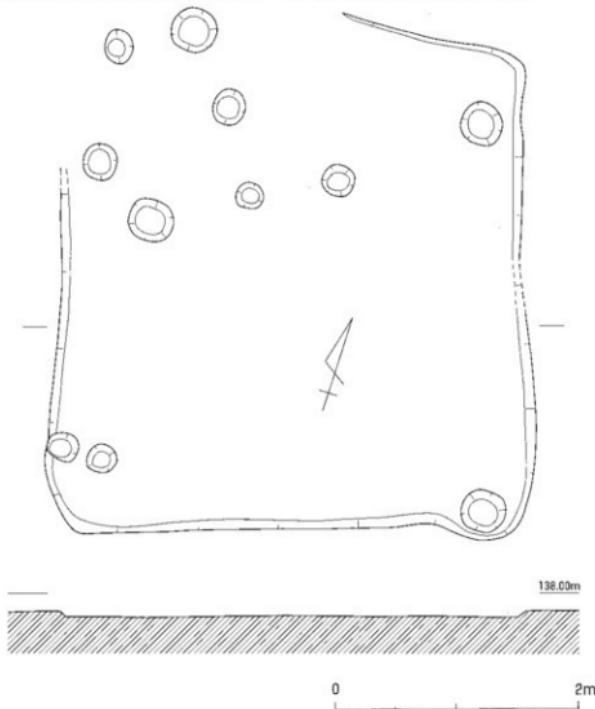


第355図 F-SH01平面図

規模・形態 一辺約4mを測る方形の住居である。

屋内施設 柱穴を検出した。

柱 穴 住居内にあたる範囲で柱穴を検出しているが、主柱穴は特定できなかった。



第356図 F-SH02平面図

#### F-SH03

検出状況 調査区中央南端で検出した。西側半分は調査整備の削平を受けて失われている。

形態・規模 東辺では一辺約4.5mを測る。方形の住居である。

屋内施設 柱穴を検出した。

柱 穴 住居内にあたる範囲で柱穴を検出しているが、主柱穴は特定できなかった。

出土遺物

F-1 土師器 麋 頸部から口縁にかけて直線的に外傾する。内面は頸部下にてヘラケズリがみられる。

#### F-SH04

検出状況 握立柱建物群の方形区画溝（F-SD01）の北辺と切りあう形で検出された。

形態・規模 平面は方形を呈する。現存値で南北4.2m、東西2.1mを測る。

## 第9節 F 地区の遺構と遺物

**屋内施設** 周壁溝・柱穴を検出した。

**周壁溝** 東辺に沿って周壁溝を検出した。床面での幅は約 35 cm を測る。

**柱穴** 住居内にあたる範囲で柱穴を検出しているが、主柱穴は特定できなかった。

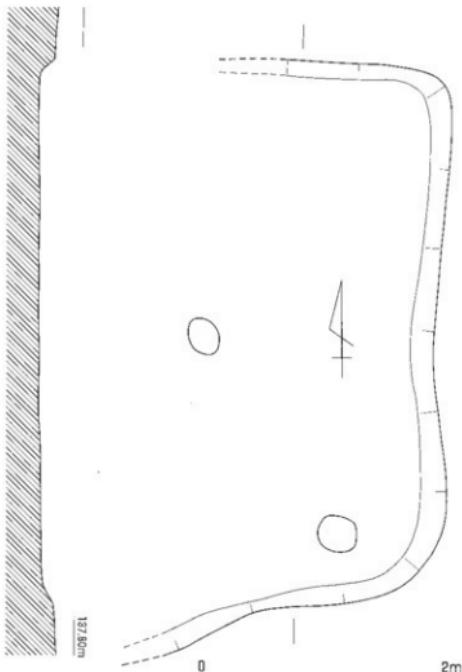
### 出土遺物

F-2 弥生 壺 口縁上端を拡張するもので、外面には 2 条の擬凹線が施される。内面は頸部以下にヘラケズリがみられる。

F-3 弥生 壺 口縁部は欠損するが胴部から底部が残る。短い体部から底部へとすばまる。

外面は縱方向のヘラミガキ、体部内面は横方向のヘラミガキ調整が顕著にみられる。

F-4 弥生 高杯 中実の脚部から盤部へと大きく聞くもので、穿孔がみられる。外面は縱方向のヘラミガキ、内面は細かなハケ目調整がみられる。



第357図 F-SH03平面図

### F-SH05

**検出状況** 調査区北東に位置する。北側約 3 分の 1 ほどを削平により消失している。

**形態・規模** 平面は円形を呈する。東西方向で径約 7.7 m を測る。

**屋内施設** 周壁溝・中央七坑・柱穴を検出した。

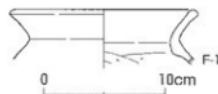
**周壁溝** 1 条検出した。検出面での幅は最大で 40 cm を測る。床面からの深さは約 10 cm である。

**中央土坑** 土坑の平面形はほぼ円形を呈し、2段掘りになっている。上面のものは直徑約 1.2 m、床面からの深さは 20 cm である。内側には直徑約 70 cm の円形の上坑が構築されている。

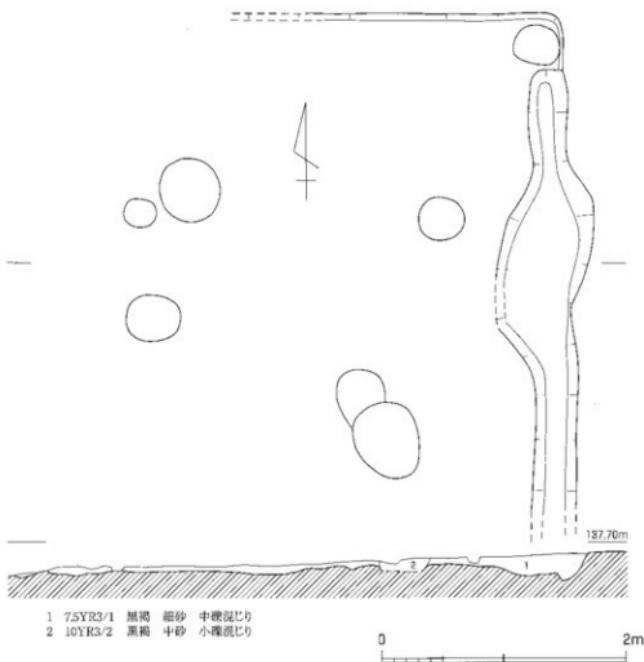
**柱穴** 主柱穴と考えられるものは 3 基検出された。北西では検出できなかったが、配置から元来 4 基あったものと推測される。直径は 25 ~ 60 cm を測る。

### 出土遺物

F-5 弥生 壺 脊部最大径付近に貼付凸帯があり、断面三角形の凸带上にはヘラ状工具で刻みが施される。弥生前期である。



第358図 F-SH03出土土器



第359図 F-SH04平面図

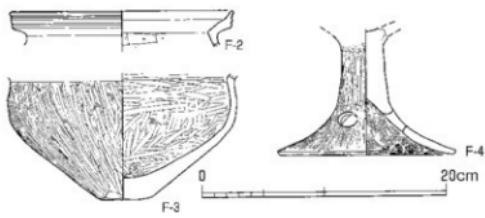
F-6 弥生 壺 球体の胴部から長頸をもつ。胴部外面にはヘラによる弧線があり、胴部内面はヘラミガキがみられる。

F-7 弥生 壺 口縁端部は欠損するが、下部に4条のヘラガキ沈線があり、中央部に棒状列点が施される弥生前期の壺である。

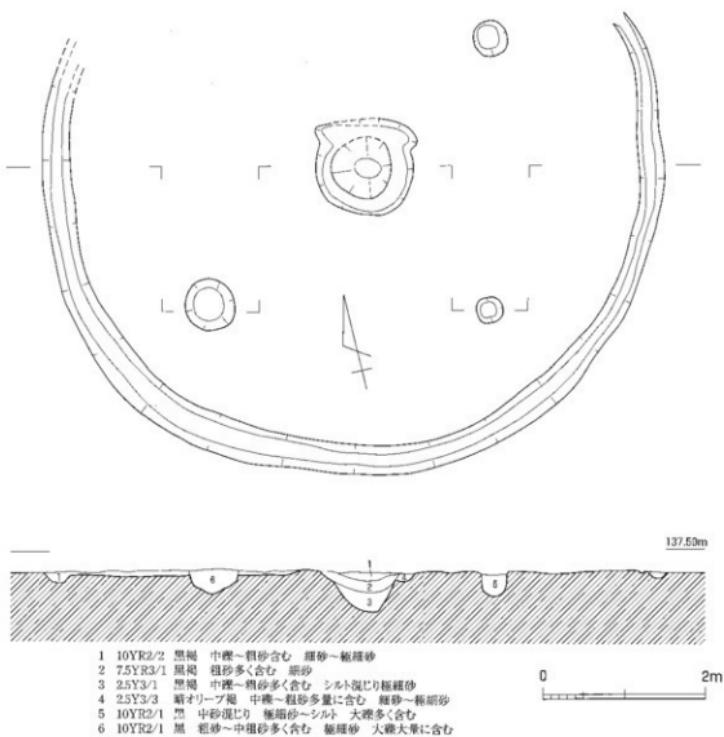
F-8 弥生 壺 長胴形の胴部から口縁にかけて短く外反する。端部は横から押さえられ上方で尖る。外面には擬凹線が2条施される。体部外面は縱方向のハケ目、内面は斜め方向のヘラケズリが見られる。

F-9 弥生 壺 長胴形の胴部から口縁にかけて短く外傾する。端部は上方につまみ上げられ段を有する。口縁外面を含めて内面にもハケ目調整があり、内面体部はヘラケズリがみられる。

F-10 弥生 鉢 短く直立した口縁部で体部上部に3条の沈線が施される。内外面ともヘラにより丁寧に研磨されている。



第360図 F-SH04出土土器



第361図 F-SH05平面図

F-11 弥生 台付鉢 底が凹む短い脚台をもつ鉢で球形の体部に至る。外面はハケ目調整、内面は縦方向のケラケズリが見られる。

F-12 弥生 高杯 杯部は有段、中空の脚部から端部にかけて大きく開き、全体に均整がとれる。杯部は内外面ともヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリがみられる。

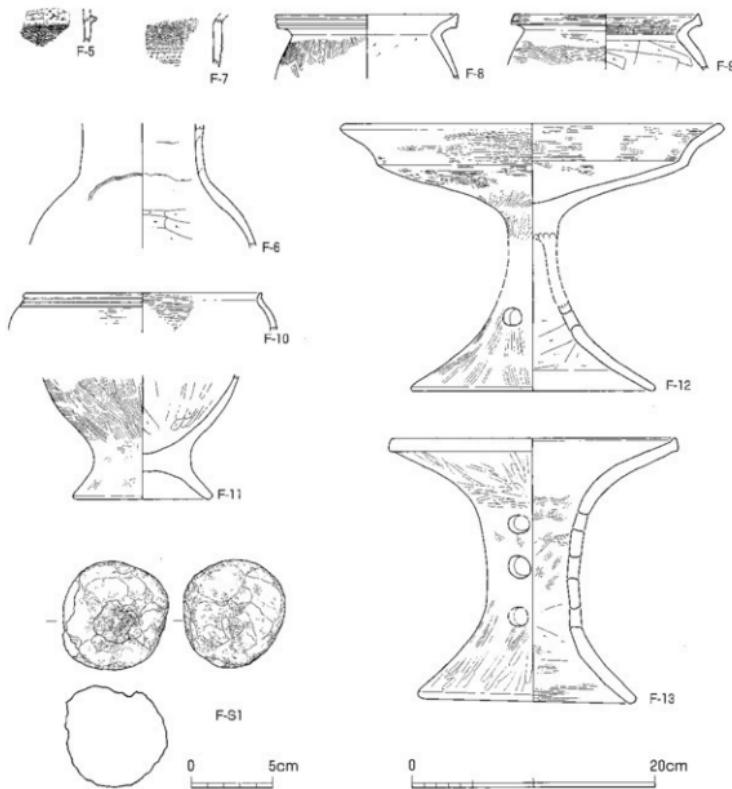
F-13 弥生 器台 上部の開きは下部の開きより大きいもので、上部口縁端部が僅かにつまみ上げられる。洞部には縦方向に3箇所穿孔され、外面はヘラミガキ、内面はハケ目調整がみられる。

F-S1 石器 凹石 径約6cmの球形を呈する。凹部は1箇所のみあり、径25mm、深さ10mmである。各所の敲打痕がみられ、凹石のはか敲石としても使用された石器と考えられる。

#### F-SH06

検出状況 調査区北東端に位置し、一部は調査区外へ続く。少なくとも2度の建て替えが行われたことがうかがわれる。

形態・規模 平面は円形を呈する。方形の突出部を有する。直径7.9mを測る。



第362図 F-SH05出土遺物

屋内施設 周壁溝・中央土坑・突出部・柱穴を検出した。

周壁溝 2条巡っている。外側のものは南端やや東よりで突出部に沿って張り出す。検出面での幅は最大で25cmを測る。床面からの深さはおよそ10cmである。一番外側には住居の周壁溝と同心の位置に、南側では検出されなかったが、復元すると直径約14mの溝が巡る。大型の住居の周壁溝である可能性もある。

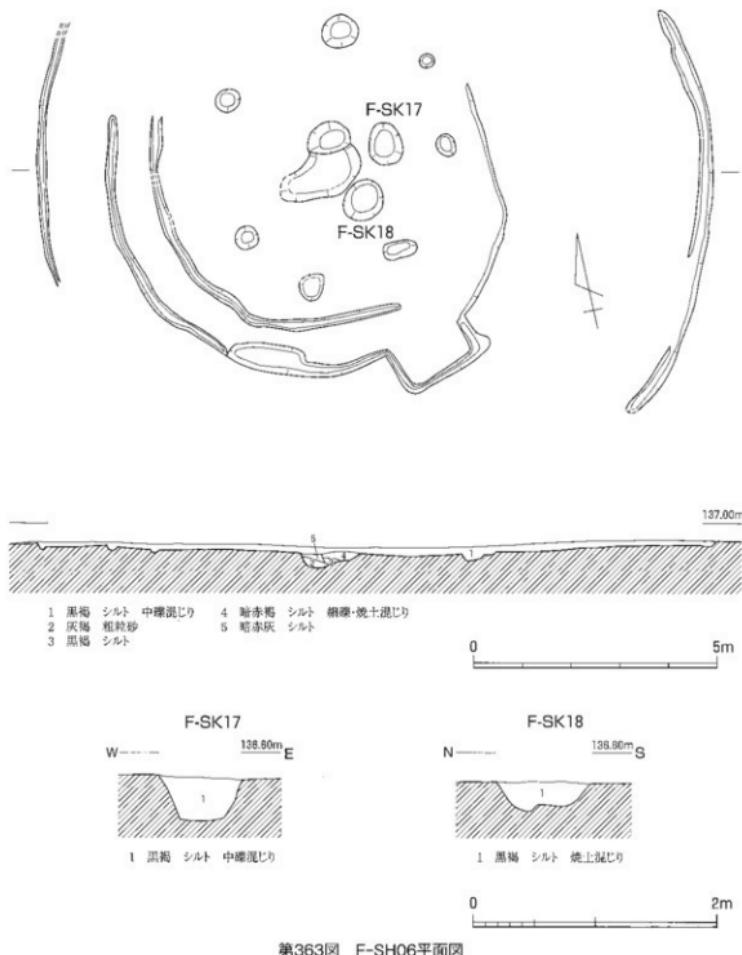
柱穴 主柱穴と思しきものは6基検出されているが、配列は住居のプランに対してやや偏っており、確実ではない。

#### 出土遺物

F-14 弥生 壺 胴部上端および頸部から口縁にかけて外反する資料である。胴部は綫方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリがみられる。

F-15 弥生 墓 頸部から拡張の少ない二重口縁にいたる資料である。胴部外面には綫方向のハケ目、

## 第9節 F地図の造構と遺物



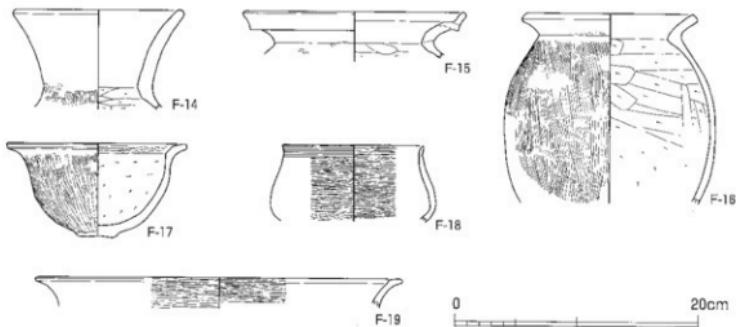
第363図 F-SH06平面図

内面は横方向のナデがみられる。

F-16 弥生 壺 短く外傾する口縁部と長胴形の胴部からなる資料である。外面は綫方向のハケ目、内面は横から斜め方向のヘラケズりがみられる。

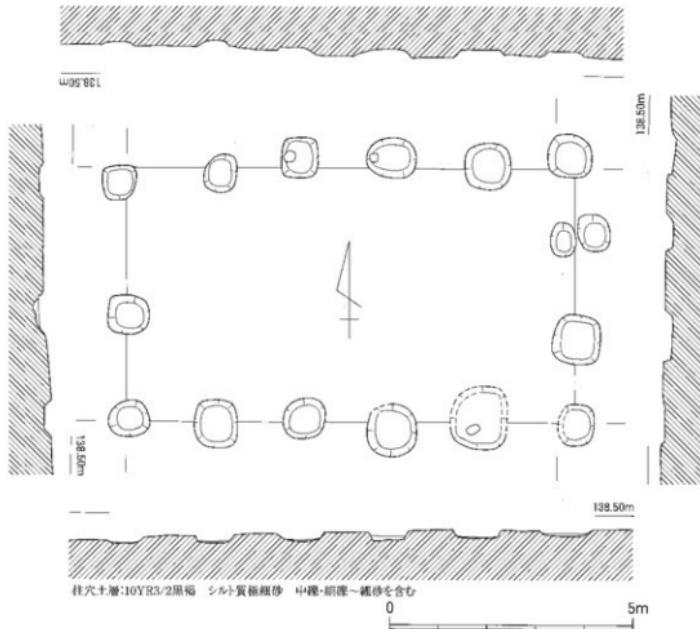
F-17 弥生 鉢 口縁部は水平方向に開くもので、体部から小さな底部へ球形にすぼまる。口縁端面には擬凹線が1条めぐる。体部はヘラミガキ、口縁部内面は横方向のヘラミガキ、体部内面はケズりがみられる。

F-18 弥生 鉢 最大径は下半に位置し、体部からなだらかに口縁部に至る資料である。体部下部は



第364図 F-SH06出土土器

屈曲ぎみにすばまる。口縁外面に3条の擬凹線が施される。外面ともヘラにより丁寧に研磨される。F-19 弥生 壱 頭部から口縁にかけて外反する資料で、口縁端面が水平に仕上げられ、内側に段をもつ。外面ともヘラにより丁寧に研磨されている。



第365図 F-SB01平面図

第9節 F 地区の造構と遺物



第366図 F 地区主要遺構配置図

F 地区据立柱建物跡一覧表

遺構番号	間数	規模(m)	方 位	基 方	時 期	備 考
F-SB01	5×2~3	9.2×5.3	N90° E	方形	奈良時代	
F-SB02	6×3	11.3×5.6	N0° E	方形	奈良時代	西側1間は庇か
F-SB03	4×2	7.3×4.2	N70° E	円形	飛鳥時代	
F-SB04	6×1	11.2×3.2~3.8	N93° E	円形	奈良時代	
F-SB05	6×1	11.5×2.7	N93° E	円形	奈良時代	同一建物か

### 掘立柱建物群

調査区中央南半で検出された。F-SB03 を除き、建物の配置から一連のプランに沿って建てられたものと考えられる。建物の周囲は方形の区画溝がめぐらしており、さらに横列も認められる。ここでは個々の造構についてみておく。

#### F-SB01

検出状況 建物群の中で最も南側にある。東西方向に長い建物である。

形態・規模 建物の主軸は N90° E である。梁方向は東側で 3 間、西側で 2 間と柱間に差が見られる、桁方向は 5 間の建物である。建物の規模は、梁方向で 5.5 m、桁方向で 9.2 m を測る。柱間距離はほぼ 1.8 ~ 1.9 m であるが、西側梁方向では 2.2 ~ 2.8 m と広くなっている。

柱 穴 前平を受けており、検出面からの深さは約 20 cm と浅い。柱痕はほとんど認識できなかった。

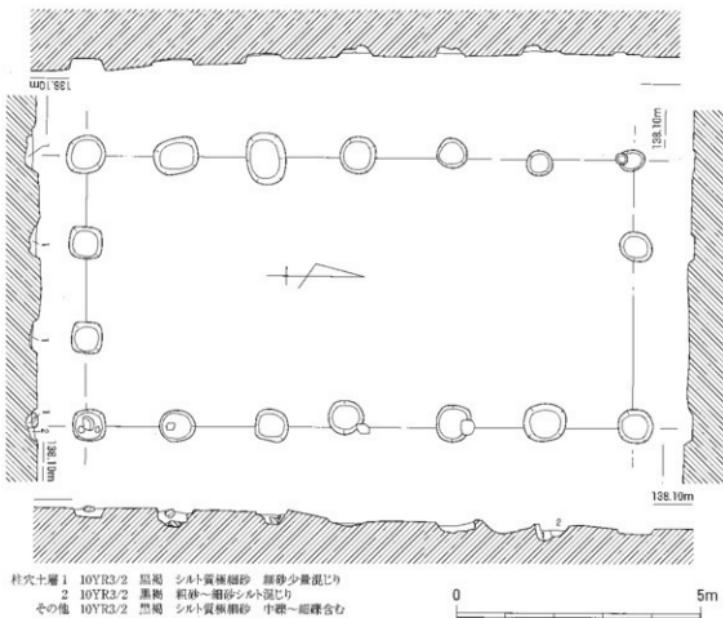
掘り方の平面形は元来一辺 1 m ほどの方形が主と思われるが、検出面では円形に近いものも見られる。

#### 出土遺物

F-20 須恵器 杯蓋 口縁部や立ち上がり、天井部が湾曲する資料である。ハラキリの位置は天井上方部に位置し外面にナデ調整が残るものである。



第367図 F-SB01出土土器



第368図 F-SB02平面図

## 第9節 F 地区の遺構と遺物

### F-SB02

検出状況 F-SB01 の北側に主軸を直交させて建てられた、南北に長い建物である。

形態・規模 建物の主軸は N0° E である。梁方向は南側で 3 間、北側で 2 間と柱間に差が見られる。

北側の梁では、検出した配列状況からは本来柱穴があったものが削平を受けて焼失している可能性もある。桁方向は 6 間の建物である。建物の規模は、梁方向で 5.6 m、桁方向で 11.3 m を測る。柱間距離はほぼ 1.8 ~ 1.9 m である。

柱 穴 削平を受けていたため遺存状態に差がある。検出面からの深さは最大で 30 cm を測る。明確な柱痕は認識できなかったが、東桁の南から 3 基の柱穴では根固めと思われる 20 cm 大の礫を検出した。掘り方の平面形は方形が主と思われるが、検出面では円形に近いものも見られる。大きさは一辺 80 cm を最大とする。

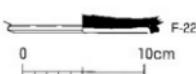
### 出土遺物

F-21 須恵器 蓋 端部にかえりをもつもので、天井部は低い扁平な資料である。



F-21

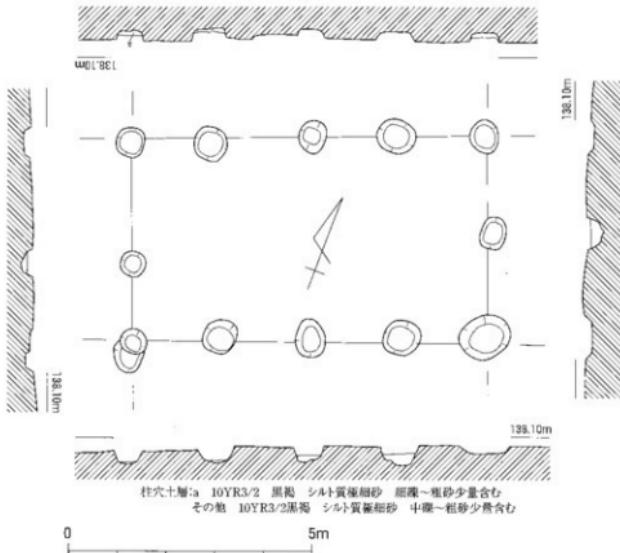
F-22 須恵器 杯身 杯部が欠損する底部資料である。高台はやや外方に張りだし、底部中央は下方に垂れこむ。



F-22

### F-SB03

検出状況 建物の主軸は N70° E と他の建物と異なるうえ、F-SB01、F-SB02 を囲む区画溝の西側南



第370図 F-SB03平面図

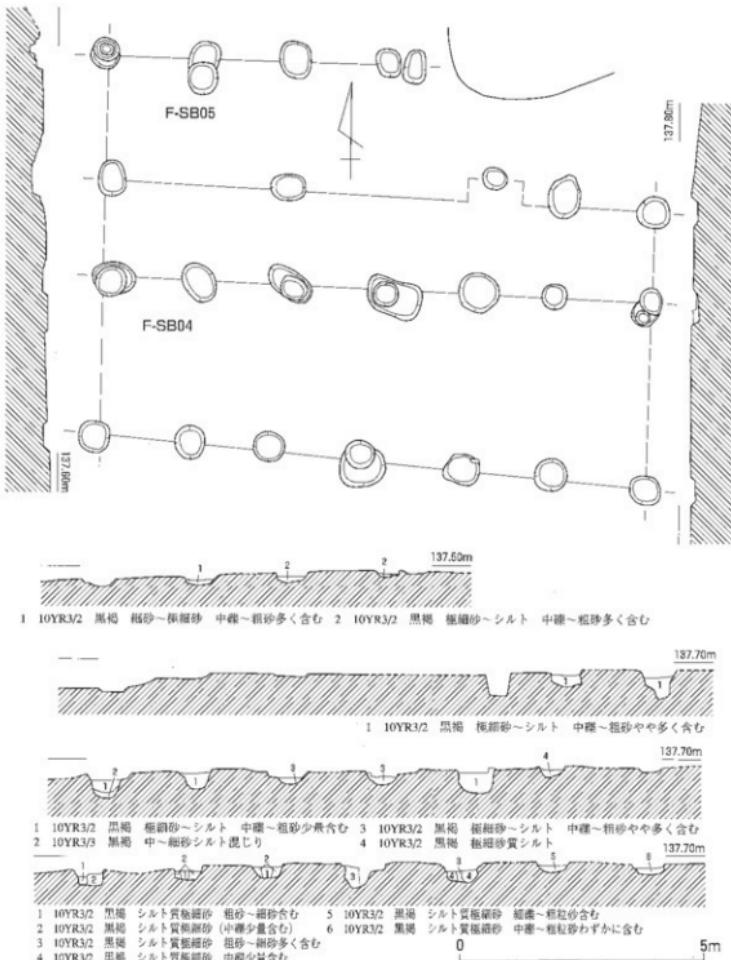
端で切りあうかたちで検出されている。

**形態・規模** 梁方向2間、桁方向4間の建物である。建物の規模は、梁方向で4.2m、桁方向で7.3mを測る。

桁方向の柱間距離は1.7～2.0m、梁方向で2～2.5mほどである。

**柱穴** 平面形は円形を主としており、直径は最大で90cm、最小で50cm、70cm前後のものが主流である。

検出面からの深さは、最大で40cmである。



第371図 F-SB04・SB05平面図

## 第9節 F 地区の遺構と遺物

### F-SB04・05

**検出状況** 方形区画溝（F-SD01）の北側に隣接するかたちで建てられている、東西方向に長い建物である。開場整備による削平を受け、北側については消失している部分が多く、全容は明らかでない。区画溝の拡張部分（F-SD02）との切り合い関係も見られるが、検出時には埋土の違いなどから戦後関係を明らかにすることはできなかった。桁方向と思われる柱列が4本並行して検出されているが、それらの梁方向への配置の間隔が均等ではないため、2棟の建物が近接しているのか、一連の建物であるかの判断ができないかねている。ここでは2棟の建物である可能性を含みつつ、南側の2列をF-SB04、北側の2列をF-SB05とし、それぞれの建物について述べる。

### F-SB04

**形態・規模** 建物の主軸はN93°EとF-SB01、F-SB02とは若干の振れがある。梁方向1間、桁方向6間の建物である。建物の規模は、梁方向で3.2～3.8m、桁方向で11.2mを測る。桁方向の柱間距離は1.8～2.0m、梁方向で3.3～3.5mほどである。

**柱穴** 平面形は円形を主としており、直径は50～80cmである。検出面からの深さは、最大で50cmである。

### F-SB05

**形態・規模** 独立した建物であることを前提とすれば、梁方向1間、桁方向は推定6間の建物である。建物の規模は、梁方向で2.7m、桁方向で11.5mである。桁方向の柱間距離は1.9～2.0m、梁方向で2.7mほどである。建物の主軸はF-SB04と同じでN93°Eとなっており、F-SB01、F-SB02とは若干の振れがある。

**柱穴** 平面形は円形を主としており、直径は50～80cmである。検出面からの深さは、最大で50cmである。

## 溝

### F-SD01

**検出状況** 調査区中央南端より長方形に巡る溝で、南北西半は調査区外へと延びる。南西隅及び東辺中央部で途切れる箇所が見られる。F-SB01、F-SB02、F-SA01を囲む形で走向する。F-SB03とは切り合い関係にあるが、先後関係は明らかにできなかった。また、一部を南北に走る溝に切られる。

**形態・規模** 内法で東西方向で14～17m、南北方向で29mの範囲を囲む。検出面での幅は最大で180cmである。全体に削平を受けているため、検出面からの深さはばらつきがあり、10～50cmである。本来は全周していたものと考えられる。掘り方の断面形態は逆台形を呈する。

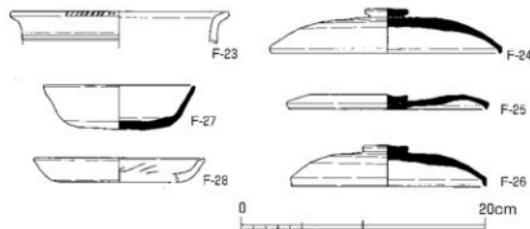
## 出土遺物

F-23 弥生 壺 F-SD04出土、直立した体部から外反する口縁にいたる。口縁端部は斜め方向の刻みがあり、体部上縁は2条のヘラガキ沈線がめぐる弥生前期資料である。

F-24 須恵器 杯蓋 つまみを持つ資料である。口縁端部はややたちあがり、天井部付近でヘラカリされる資料である。

F-25 須恵器 杯蓋 つまみを持つ資料である。口縁端部はややたちあがり、天井部は大きく落ち込む。口縁内面に墨痕がみられ中央部が擦られていることから転用鏡と考えられる。

F-26 須恵器 杯蓋 つ  
まみを持つ資料である。口



第372図 F-SD01出土土器

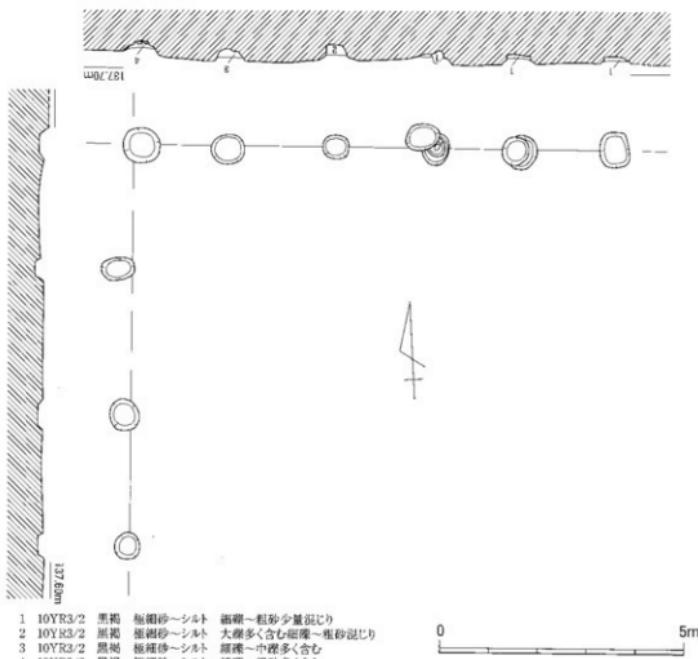
縁端部のたちあがりは鋭く、天井部付近はヘラキリされるもので、内面端部付近の屈曲も明瞭である。

F-27 須恵器 杯身 や  
や扁平な底部から口縁部に  
かけて外傾する。底部付近  
ではヘラキリが見られる。

F-28 土器皿 F-SD01 落ちこみ出土、不定方向にヘラケズリされた底部から口縁にかけて内済ぎ  
みにたちあがる。口縁内面には沈線が1条あり、杯部内面に斜方向の暗文が施される資料である。

## F-SD02

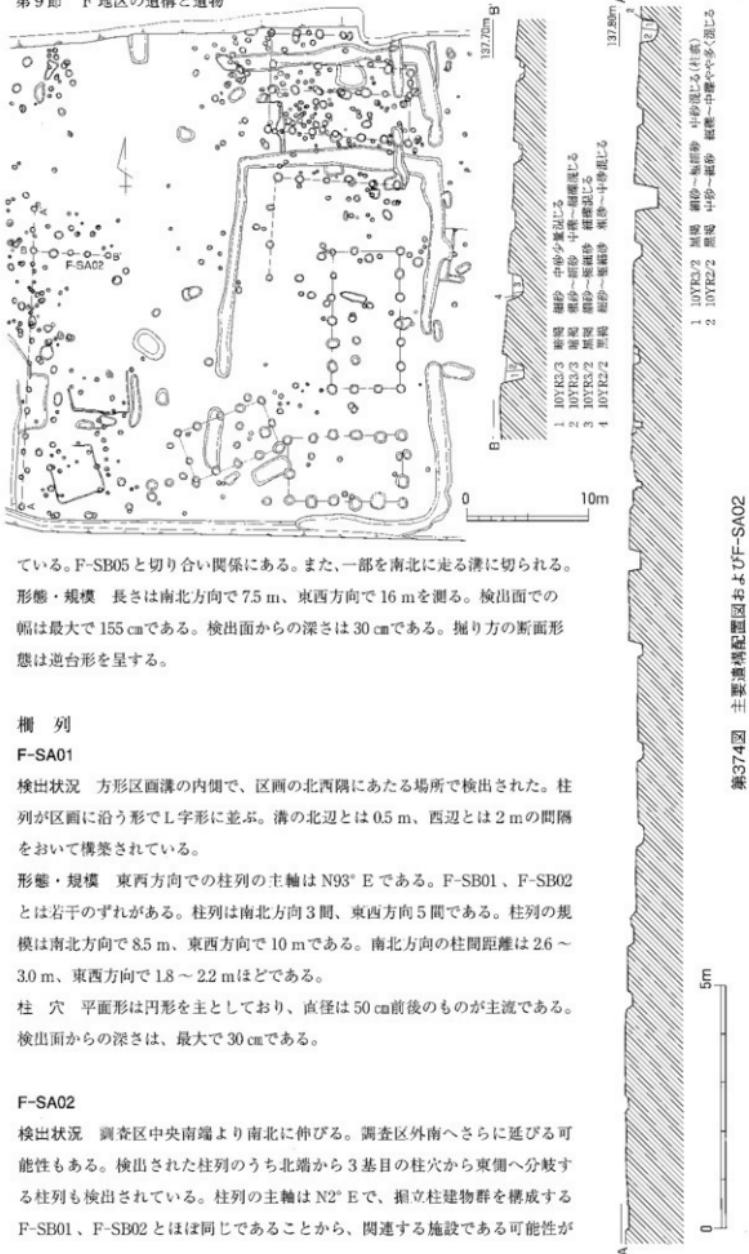
検出状況 F-SD01 東辺の延長線上で北へ延び、西へ直角に曲がり収束するかたちでL字形に構築され



第373図 F-SA01平面図

- |              |         |                |
|--------------|---------|----------------|
| 1 IOYR3/2 黒褐 | 板細目ーシルト | 粘土ー粗砂少量混じり     |
| 2 IOYR3/2 黒褐 | 板細目ーシルト | 粗砂多く含む粘土ー粗砂混じり |
| 3 IOYR3/2 黒褐 | 板細目ーシルト | 粘土ー中砂多く含む      |
| 4 IOYR3/2 黒褐 | 板細目ーシルト | 粘土ー粗砂多く含む      |

## 第9節 F 地区の遺構と遺物



ている。F-SB05と切り合い関係にある。また、一部を南北に走る溝に切られる。

**形態・規模** 長さは南北方向で7.5m、東西方向で16mを測る。検出面での幅は最大で155cmである。検出面からの深さは30cmである。掘り方の断面形態は逆台形を呈する。

### 柵列

#### F-SA01

**検出状況** 方形区画溝の内側で、区画の北西隅にあたる場所で検出された。柱列が区画に沿う形でL字形に並ぶ。溝の北辺とは0.5m、西辺とは2mの間隔をおいて構築されている。

**形態・規模** 東西方向での柱列の主軸はN93°Eである。F-SB01、F-SB02とは若干のずれがある。柱列は南北方向3間、東西方向5間である。柱列の規模は南北方向で8.5m、東西方向で10mである。南北方向の柱間距離は2.6～3.0m、東西方向で1.8～2.2mほどである。

**柱穴** 平面形は円形を主としており、直徑は50cm前後のものが主流である。検出面からの深さは、最大で30cmである。

#### F-SA02

**検出状況** 調査区中央南端より南北に伸びる。調査区外南へさらに伸びる可能性もある。検出された柱列のうち北端から3基目の柱穴から東側へ分岐する柱列も検出されている。柱列の主軸はN2°Eで、掘立柱建物群を構成するF-SB01、F-SB02とは同じであることから、関連する施設である可能性が

図374 主要遺構配置図およびF-SA02

考えられる。F-SB01 の西端から約 21 m 離れて構築されている。また、分岐して東へ延びる柱列の延長線上には、F-SB02 の北端がある。

**形態・規模** 柱列は南北方向に 14 間、東西方向 5 間である。柱列の規模は南北方向で 25 m、東西方向で 6.5 m である。南北方向の柱間距離は均等ではなく、15 ~ 25 m、東西方向では 1.4 ~ 1.8 m である。

**柱穴** 平面形は円形を主としており、直径は 30 cm 前後のものが主流である。

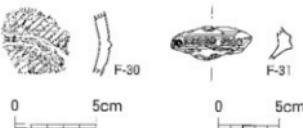
#### 出土遺物

F-29 須恵器 杯蓋 天井部はやや扁平で口縁立ち上がりにかけでは湾曲度が強い。天井部のヘラキリは上方に位置する。内面は口縁内側の段は僅かに認められる。



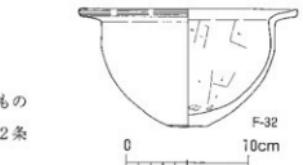
#### F-SK (土坑) 出土遺物

F-30 純文 深鉢 F-SK02 出土。胴部と考えられる破片全体に LR 繩文がみられ、湾曲する凸帯とその両脇に沈線がみられる。



F-31 弥生 壺 F-SK11 出土。肩部突堤に断面 M 字状の凸帯をもつ器形で、凸帯上および下端に渦巻状のスタンプ文を列点する。上および下端にクシあるいはハケによる弧状の文様が施される。

第376図 F-SK02・SK11出土土器



#### F-SX 出土遺物

F-32 弥生 鉢 F-SX04 出土、口縁部は水平方向に聞くもので、体部から小さな底部へ球形にすばまる。口縁端面には 2 条の擬凹線があり、体部内面はヘラケズリがみられる。

第377図 F-SX04出土土器

#### 流路

検出状況 調査区の西半部で蛇行しながら北流する。本来の肩は削平により消失しており、検出できたのは底部付近と考えられる。

規模 幅は狭いところで約 2 m、広いところでは 10 m を超える。

#### 出土遺物

F-33 弥生 壺 C10 区東西方向流路出土、頸部付近の資料である。断面三角形貼付凸帯が 3 条めぐり、全体に横ナデされる弥生前期資料である。

F-34 弥生 壺 頸部からやや外反する口縁をもち、腹部は僅かに内傾ぎみに整形する。頸部上半は横方向、下半は縱方向のハケ目調整がみえる。

F-35 弥生 壺 肩部上半に最大径をもちすばまつた頸部から口縁にかけて直立する。口縁端部からやや下がった箇所で僅かな段が見受けられる。頸部外面には縱方向のハケ目、口縁内面には横方向のハケ目、頸部内面は横方向のヘラケズリがみられる。

F-36 弥生 壺 長胴ぎみの頸部からややすばまつた頸部、口縁にかけては外反し上部に拡張された端部にいたる資料である。口縁端部外面には浅い凹みがみられる。外面はナデ調整、内面は横方向のナ

## 第9節 F 地区の遺構と遺物

テ調整がみられる。

F-37 弥生 壺 やや外傾しながら長い頸部が続き、口縁端部でさらに段をもちながら外反する。外面は丁寧な縱方向のヘラミガキ、内面は横方向のハケ目調整が見られる。

F-38 弥生 壺 丸みを帯びた底部から長い頸部が続き、口縁端部でさらに外反する。内外面とも縱方向のハケ目調整の後、上下方向に太いヘラ状の調整が繰り返される。

F-39 弥生 壺 やや外傾しながら長い頸部が続き、口縁端部でさらに外反する。端部は下方に拡張され、口縁端部外面には擬凹線が3条施される。内外面ともナデ調整がみられる。

F-40 弥生 壺 頸部上端で大きく開き口縁端部にいたる。口縁端部で下方に凸帯状の粘土帯を貼り付け拡張する。拡張された端部外面中央には細いヘラガキ沈線がありその上下はヘラにより刻まれる。弥生前期末から中期初頭の資料である。

F-41 弥生 壺 太く長い頸部が続き口縁端部で外反し、端部は斜め下方に拡張される。口縁端部外面には擬凹線が4条施され、頸部外面は縱方向のヘラミガキ、内面はユビナデ調整がみられる。

F-42 弥生 壺 頸部上半に最大径をもち頸部から口縁にかけて外反し口縁端部は丸みをおびるミニチュア壺である。内外面とも手づくねを示すユビナデがみられる。

F-43 弥生 壺 流路内下層出土。直立した体部で口縁は欠損する。上端は4条のヘラガキ沈線がめぐる弥生前期資料である。

F-44 弥生 壺 長胴形の体部上半から頸部をもち、口縁にかけて外傾する資料である。口縁端部は押さえによる凹線状の窪みが見られる。端部内面には1条のヘラガキ沈線がめぐる。外面にはタタキの後ハケ目調整、内面頸部最短下で横方向のヘラケズリがみられる。

F-45 弥生 壺 やや膨らむ体部上半から屈曲する頸部をもち、口縁にかけて外傾する資料である。口縁端部は1条の擬凹線が見られる。頸部下の区画線以下でハケ目調整がみられ、内面は頸以下で横方向のケラケズリがみられる。

F-46 弥生 壺 長胴形の体部上半からすぼまった頸部をもち、口縁にかけて外傾する資料である。口縁端部は1条の擬凹線が見られる。体部内外面はハケ目調整がみられる。

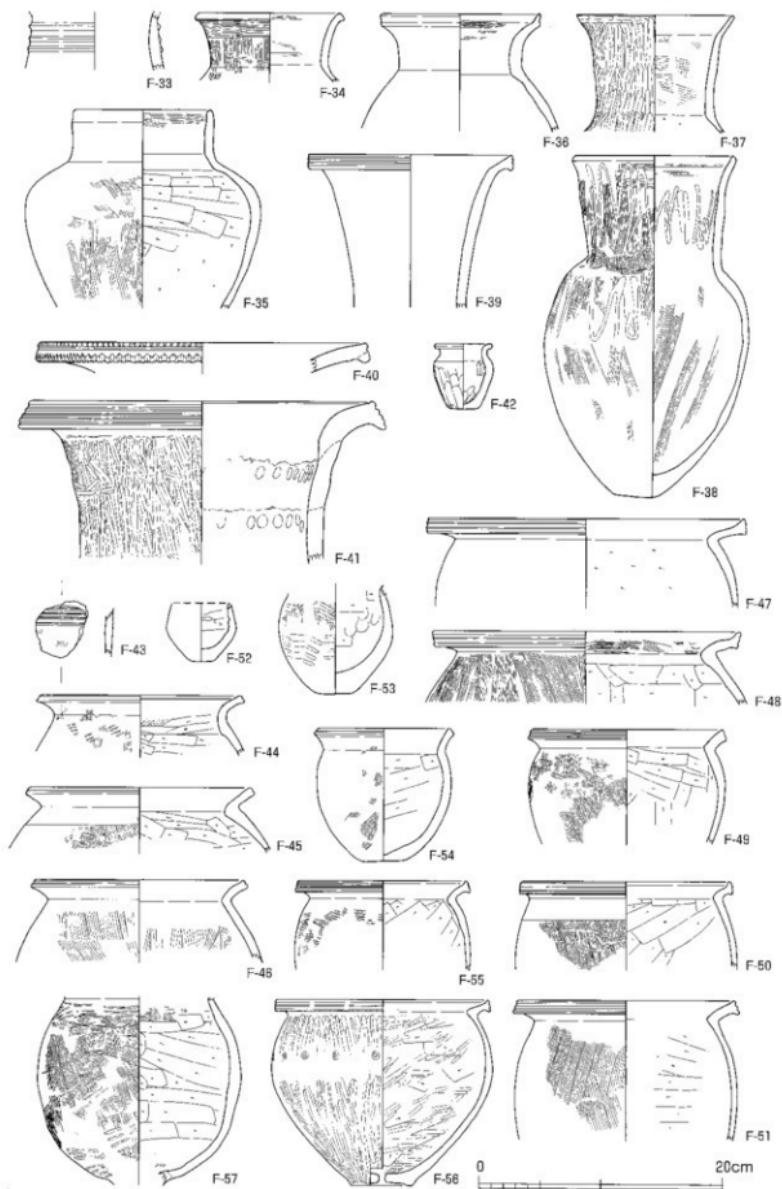
F-47 弥生 壺 やや膨らむ体部上半からすぼまった頸部をもち、口縁にかけて水平方向に大きく聞く資料である。口縁端部は上方に拡張され3条の擬凹線がめぐる。体部外面は縱方向のクシガキ調整、内面頸部下方で横方向のヘラケズリがみられる。

F-48 弥生 壺 やや膨らむ体部上半から屈曲する頸部をもち、口縁にかけて水平方向に大きく聞く。口縁は内側が窪み、端部上方に拡張され2条の擬凹線がめぐる。体部外面は縱方向のクシガキ調整、内面頸部下方で横方向のヘラケズリがみられる。

F-49 弥生 壺 やや膨らむ体部から、屈曲する頸部をもち、口縁にかけて外傾する資料である。口縁端部は内傾し2条の擬凹線が見られる。体部外面はハケ目調整、内面はヘラケズリがみられる。

F-50 弥生 壺 やや膨らむ体部から、屈曲する頸部をもち、口縁にかけて短く伸びる資料である。口縁端部は上下方向に拡張され段をもち、3条の擬凹線が見られる。頸部下の区画線以下で縱方向のハケ目調整があり、内面は頸以下でヘラケズリがみられる。

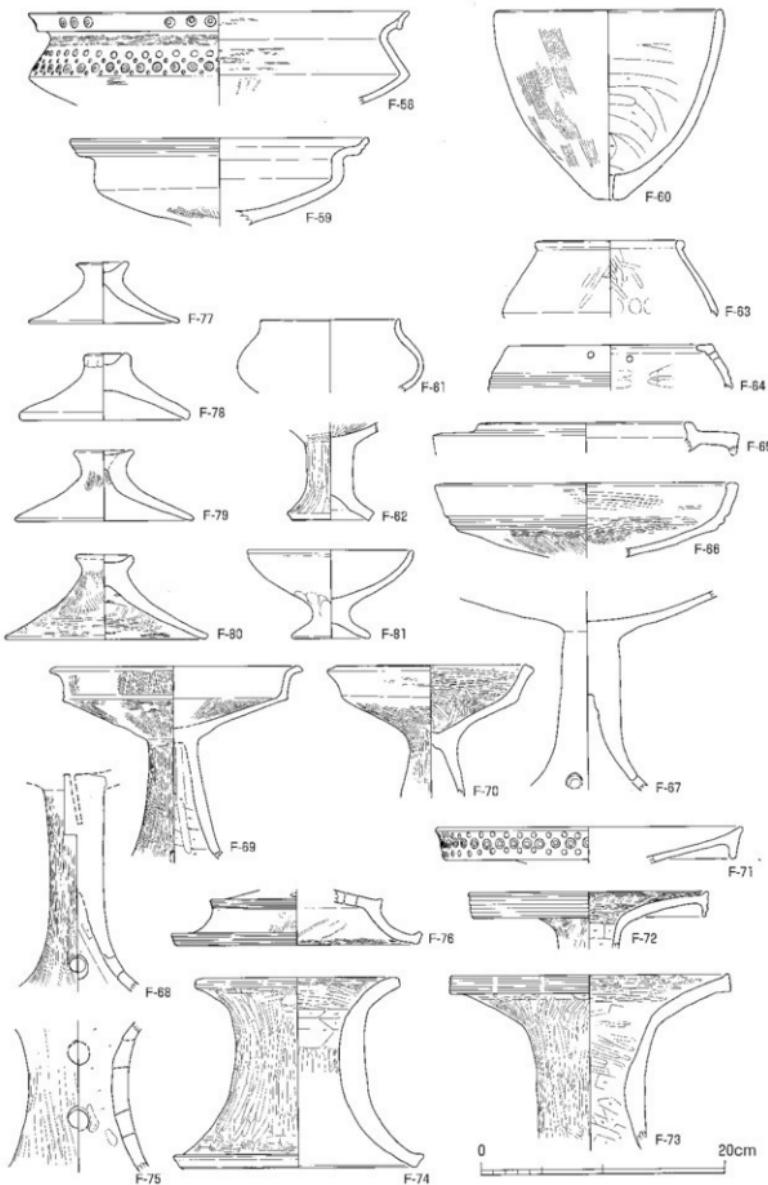
F-51 弥生 壺 やや膨らむ体部から、屈曲する頸部をもち、口縁にかけて外傾する資料である。口縁端部は下端方向に僅かに拡張され、2条の擬凹線が見られる。体部外面は縱方向のハケ目調整、内面は横方向のヘラケズリがみられる。



第378図 流路出土弥生土器1

## 第9節 F 地区の遺構と遺物

- F-52 弥生 壺 体部下半に最大径をもち頸部以上は欠損するミニチュア壺である。内面には手づくねを示す強いユビナデがみられる。
- F-53 弥生 壺 やや膨らむ体部から、屈曲する頸部をもち、口縁は欠損する資料である。体部外面はタタキの後、一部に縱方向のハケ目調整、内面はユビナデがみられる小型品である。
- F-54 弥生 壺 僅かに膨らむ体部から、口縁にかけて外傾する資料である。口縁端部は内傾し1条の擬凹線が見られる。体部外面はハケ目調整、内面はヘラケズリが見られる。
- F-55 弥生 壺 やや膨らむ体部から、屈曲する頸部をもち、「I」縁にかけて外反する資料である。口縁端部は両端方向に僅かに拡張され段をもち、3条の擬凹線がめぐる。体部外面はタタキの痕跡が残り、内面はヘラケズリが見られる。
- F-56 弥生 壺 底部中央には穿孔があり、やや膨らむ体部から、屈曲する頸部をもち、口縁にかけて外傾する資料である。口縁端部は両端方向に僅かに拡張され、体部最大径付近には棒状刺突がめぐる。口縁端部には2条の擬凹線が見られ、体部外面は縱方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリの後、ヘラミガキがみられる。
- F-57 弥生 壺 球形に近い体部から、屈曲する頸部をもち、口縁は欠損する資料である。体部外面はタタキの後、縱方向のハケ目調整、内面は横方向のヘラケズリがみられる。
- F-58 弥生 鉢 口縁部は下方に拡張され、頸部および胴部最大径付近が屈曲し、全体的に扁平なものである。口縁外面には3個単位の同心円状の竹管文があり、同部上半部に3種類の竹管文が列点される。内外面ともにナデ調整され、一部にヘラミガキがみられる。
- F-59 弥生 鉢 口縁部は斜め上方に外傾し屈曲した頸部から胴部中央で屈曲し、底部にいたる扁平な器形である。口縁外面には擬凹線が3条施され、体部下半に一部ヘラミガキがみられる。
- F-60 弥生 壺 直立する口縁から湾曲しながら小型の底部にいたる資料である。底部中央に径5mmの穿孔が1箇所みられる。外面はハケ目、内面はヘラケズリがみられる。
- F-61 弥生 鉢 短く直立した口縁部をもち体部中央で膨らむ。文様はなく全体にナデ調整される。
- F-62 弥生 台付鉢 杯部最下端と脚台部の資料である。脚部は中実で僅かに開き端部は斜めに立ち上がる。内外面はヘラミガキが施される。
- F-63 弥生 鉢 短く直立した口縁部は外側に粘土帯を付加し、体部にかけて直線的に開く。最大径部で屈曲し下半へといたる。体部の内外面はヘラミガキがみられる。
- F-64 弥生 鉢 胴部から口縁にかけて内傾し口縁端部は内側へ折れ曲がり端部は扁平に仕上げられる。口縁下には2個一対と考えられる穿孔がみられ、体部最大径付近で凹線が3条まで観察される。
- F-65 弥生 高杯 口縁は内傾し端部は平坦に押さえられる。口縁下部は大きく外方に鶴状に張り出し下方に拡張される。全体にヘラミガキ調整される。
- F-66 弥生 高杯 杯部資料であり、上半は厚みをもなながら内湾ぎみに上端が押さえられた壺部へといたる。杯部中央の屈曲部で凹線が2条施され、内外面ともヘラミガキ調整が見られる。
- F-67 弥生 高杯 杯部下半から脚部にかけての資料であり、杯部は大きく開く。中実の脚部から、脚下半にかけて広がる。脚下半では三方に穿孔がみられる。
- F-68 弥生 高杯 杯部下半から脚部にかけての資料であり、杯部は大きく開く。中実の脚部から、脚下半にかけて広がる。脚下半では三方に穿孔がみられる。また杯底部に中実脚部方向に深さ4cmの穴が観察できる。



第379図 流路出土弥生土器2

## 第9節 F 地区の遺構と遺物

F-69 弥生 高杯 杯部と脚部上半の資料である。杯部は直線的に広がり屈曲しながら外反する。脚部は中空で下方に透かし孔が確認できる。杯部上半と下半は1本の区画押さえにより分けられ、縦方向のヘラミガキが見られる。杯部と脚部の接合部においても押さえがみられ、ヘラミガキにより区画される。脚部内面はしばり目が残り、下半はヘラケズリされている。

F-70 弥生 高杯 杯部と脚部上半の資料である。杯部は脚部との接合部から僅かに外反しながら開き、中央で段をもち外傾する。杯部の端部は平坦に押さえられる。脚部は中空で下方にかけてやや外傾している。杯部上半と下半は緩やかなカーブをえがき、杯部と脚部の境も湾曲する。外面および杯部内面はヘラミガキされている。

F-71 弥生 器台 外傾しながら大きく開いた口縁部は下方が大きく拡張され、端部は鋭い。端部の拡張部には、一重と二重の竹管文が施される。

F-72 弥生 器台 外反しながら大きく開いた口縁部は下方へ大きく拡張され、短面には擬凹線が3条施される。外面には細かなハケ目、内面上部はヘラミガキ、脚部はヘラケズリがみられる。

F-73 弥生 器台 太い脚部から口縁にかけて外反しながら大きく開く。口縁端部はわずかに両端に肥厚され、擬凹線が3条施される。外面は縦方向のヘラミガキ、内面上半はヘラミガキ、下半はヘラケズリがみられる。

F-74 弥生 器台 器壁が厚く、径の太い脚部から口縁にかけて外反しながら開く。口縁部は丸く仕上げられ端部に擬凹線が1条施される。脚部はさらに広がり、下端は外方に立ち上がる。端面はナデにより僅かに凹む。外面および内面上方はヘラミガキ、内面下半はヘラケズリがみられる。

F-75 弥生 器台 器台中央部の資料であり、径18cmの穿孔が縦方向に2列が認められる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリがみられる。

F-76 弥生 器台 脚部下半の資料である。中央で大きく段を形成し端部にかけて外反する。段の上方には穿孔があり、段部に2条の擬凹線、下端部で2条の擬凹線がめぐる。脚下方の外面にはヘラミガキ、内面にも一部ヘラミガキがみられる。

F-77 弥生 蓋 天井部は凹み、下半にかけて外反ぎみに開く。内外面ともナデ調整される。

F-78 弥生 蓋 天井部は凹み下半にかけて直線的に開く。内外面ともナデ調整される。

F-79 弥生 蓋 天井部は僅かに凹み下半にかけて外反ぎみに開く。内外面ともハケ目調整の痕跡が認められる。

F-80 弥生 蓋 天井部は凹み下半にかけて外反ぎみに開く。内外面ともヘラミガキ調整される。

F-81 弥生 台付鉢 浅く内湾する杯部と短く僅かに開く脚部からなる。腕部口縁外側には1条の擬凹線がめぐる。脚部外面にはユビ押さえ痕がみられる。

### 流路出土遺物（須恵器）

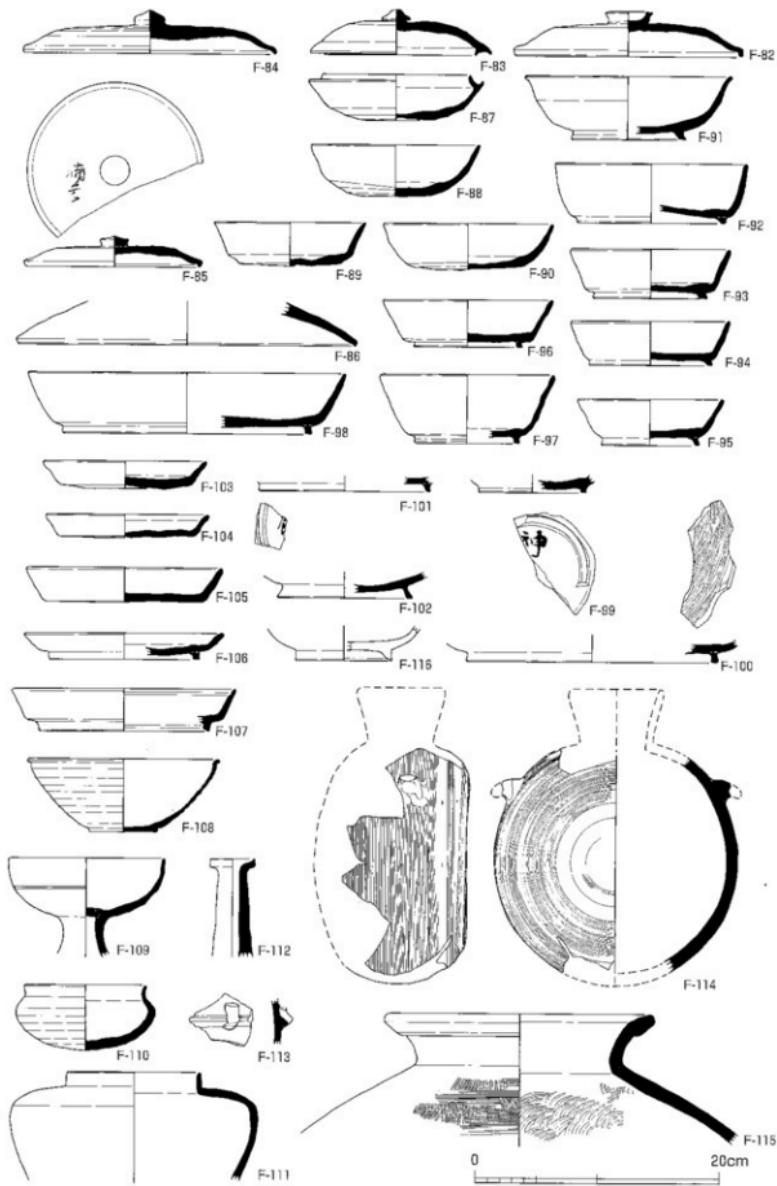
F-82 須恵器 杯蓋 つまみが大きく凹む稜輪の蓋である。やや扁平な天井部から口縁部付近で段状に屈曲する。天井部付近でヘラキリされるもので、内面端部付近の屈曲も明瞭である。

F-83 須恵器 杯蓋 つまみは山形で口縁端部はかえりをもつ。やや扁平な天井部から口縁部にかけて湾曲する。ヘラキリは天井部付近でみられ、端部内面のかえりは低い。

F-84 須恵器 杯蓋 若干高いつまみを持つ径20cmを超す大型資料である。口径の割には器高が低い。体部下方でヘラキリされ、口縁付近の段もなだらかである。

- F-85 須恵器 杯蓋 つまみを持つ小型で扁平なもので、口徑の割には器高が低い。天井部付近でへラキリされるもので、内面端部付近の屈曲も明瞭である。天井部外面には「満呂」の墨書が残る。
- F-86 須恵器 杯蓋 口径が28cmを超える大型の蓋である。天井部は欠損するがながらに曲曲する。胎土は良質で焼成は堅緻である。
- F-87 須恵器 杯身 口縁のかえりは短く反りながら突きだし、体部は底部にかけて湾曲しながらすぼまる。体部外面のヘラケズリは体部中央に近い。
- F-88 須恵器 杯身 湾曲をおびた扁底部から口縁部にかけて内湾する。体部下半から底部にかけてヘラキリが見られる。
- F-89 須恵器 杯身 平坦な底部から口縁部にかけて外反ぎみにのびる。体部下半から底部にかけてヘラキリが見られる。
- F-90 須恵器 杯身 平坦な底部から口縁部にかけて内湾する。体部下半から底部にかけてヘラキリが見られる。
- F-91 須恵器 杯身 体部中央付近で屈曲が見られる稜擁である。その屈曲度は弱くやや湾曲をおびた底部から口縁部にかけて内湾する。高台は外方にふんばり、端部はさらに外方に突きだす。体部下方から底面にかけてヘラキリがみられる。
- F-92 須恵器 杯身 低い高台をもち、底部から体部にかけて屈曲し、口縁部へは湾曲ぎみにのびる。
- F-93 須恵器 杯身 ややふんばった高台から外傾する体部をもつ資料である。
- F-94 須恵器 杯身 ややふんばった高台をもち、底部から外傾する体部をもつ資料である。
- F-95 須恵器 杯身 ややふんばった高台をもち、底部から外方に傾く体部をもつ資料である。
- F-96 須恵器 杯身 直立ぎみの高台をもち、底部から外傾する体部をもつ資料である。
- F-97 須恵器 杯身 直立ぎみの高台をもち、底部から外傾し器高の高い体部をもつ資料である。
- F-98 須恵器 杯身 口径が26cmを超える大型の杯身である。直立ぎみの高台をもち、底部から外傾する体部をもつ資料である。胎土は良質で焼成は堅緻である。
- F-99 須恵器 杯身 直立ぎみの高台をもち、体部以上は欠損する資料である。底部外面には「神マ」の墨書が残る。
- F-100 須恵器 杯身 底径が20cmを超える大型の杯身である。直立ぎみの高台をもち、体部はほぼ欠損する資料である。底部内面はヘラミガキが施される資料である。胎土は良質で焼成は堅緻である。
- F-101 須恵器 杯身 直立する高台をもち、体部はほぼ欠損する資料である。底部外面には「刀自」か或いは「組」の墨書が残る。
- F-102 須恵器 杯身 高台は高く外に踏ん張り稜擁と考えられる。体部はほぼ欠損する資料である。
- F-103 須恵器 皿 底部から口縁へはわずかに外反し短くのびる。底部はヘラキリの後なでられる。
- F-104 須恵器 皿 底部から体部で外反しながらのびる。底部はヘラキリの後なでられる。
- F-105 須恵器 皿 平坦な底部から口縁にかけて外傾する。底部はヘラキリの後なでられる。
- F-106 須恵器 皿 直立する高台をもち、底部から口縁にかけて外傾する。底部はヘラキリの後、なでられる。
- F-107 須恵器 皿 やや内傾する高台をもち、体部下半にて屈曲し口縁にかけて外傾する体部をもつ。口縁内面で1条の沈線がめぐる。
- F-108 須恵器 こね鉢 糸切りの底部から湾曲しながら口縁部にいたる。口縁部は外反する。器壁に

第9節 F 地区の遺構と遺物



第380図 流路出土須恵器

はユビナデ痕が強く残る。

F-109 須恵器 高杯 体部は湾曲し脚部は短く聞く。杯部外面中央付近に1条の沈線がめぐる。

F-110 須恵器 短頸壺 体部上半で最大径をしめす。体部から直口する短い口縁部にいたり、器壁にはユビナデ痕が残る。

F-111 須恵器 短頸壺 体部上半で肩を張るように最大径をしめす。体部から直立する短い口縁部にいたり、器壁にはユビナデ痕が残る。

F-112 須恵器 水瓶 口縁は受口状になり壺部はつまみあげられる。頸部は細く長い資料で体部以下は欠損する。

F-113 須恵器 耳壺 削部に1条の凸帯がめぐり2箇所の耳が凸帯に密着する。遺跡近隣である京都府夜久野窯で生産された可能性がある。平安時代頃と考えられる。

F-114 須恵器 提瓶 小さく垂れ下がった把手があり、円形の体部上半に貼り付けられる。体部にはカキ目が残る。

F-115 須恵器 壺 肥厚した口縁から短い頸部をもち、胴部は大きく膨らむ資料である。胴部外面は格子タタキ、内面には同心円タタキがみられる。

F-116 緑釉陶器 碗 口縁部および体部上半を欠損する資料である。底部内面には圓線がめぐり釉薬が施される。底径は7.8cmをはかり、直立ぎみの高台をもち、高台内面以外は緑釉が施される。緑釉の発色は深緑色を呈し、胎土は淡褐色を帯びる。近江あるいは東濃産であろうか。

#### 包含層出土遺物（縄文土器・弥生土器）

F-117 縄文 深鉢 口縁は丸くなれ口唇部は平坦である。口縁から下がった箇所に刻目をもった断面台形の貼付凸帯がめぐる深鉢型凸帯文土器の破片である。晩期末ごろの資料である。

F-118 縄文 浅鉢 口縁部は欠損し体部が残存する。体部中央に刻み目ない凸帯がめぐる。内面には朱の痕跡が認められる。晩期後半頃の資料である。

F-119 弥生 壺 頸部の破片である。頸部中央に3条のヘラガキ沈線がめぐる弥生前期の資料である。

F-120 弥生 壺 頸部中央から下方の資料で、外面には刻み目ない貼り付け凸帯が4条めぐる。弥生前期の資料である。

F-121 弥生 壺 やや外反する口縁をもち、体部はなだらかに湾曲する。体部上部にヘラガキ沈線が1条めぐり、内外面ともハケ目調整が見られる。弥生前期の資料である。

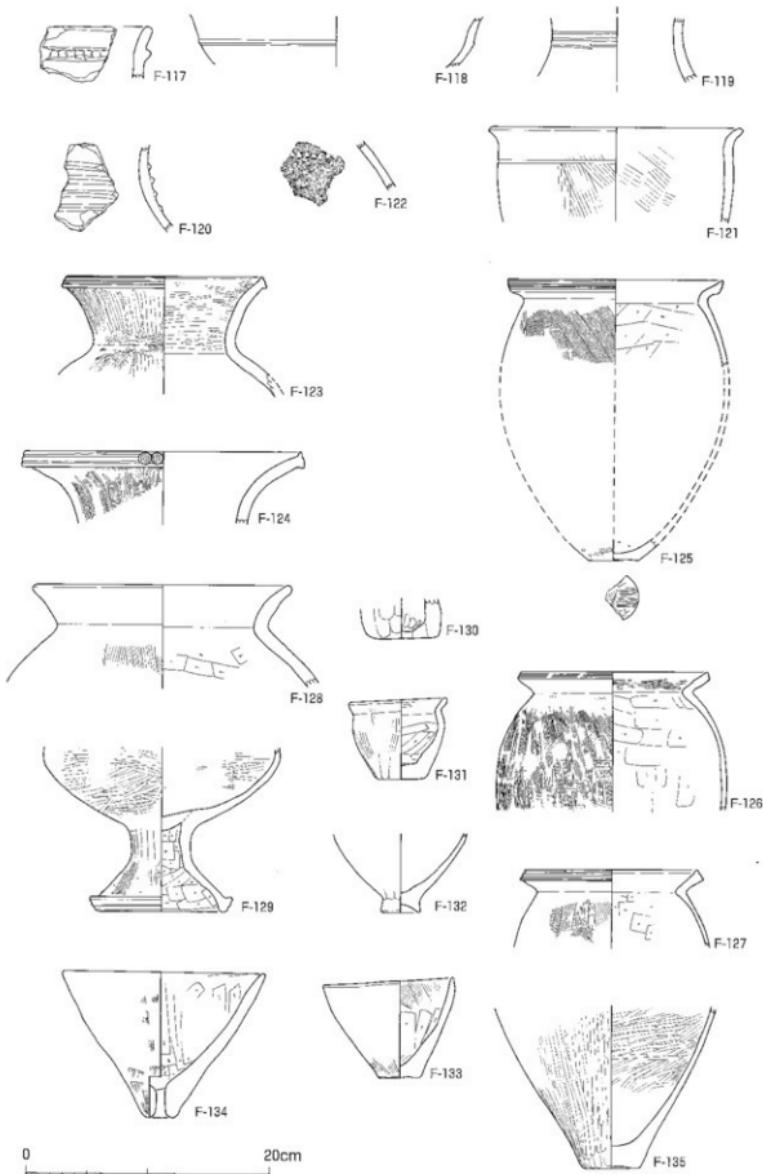
F-122 弥生 壺 頸部上半の破片であり、クシガキ波状文と三角形の列点文が施される。弥生中期初頭の資料である。

F-123 弥生 壺 頸部から口縁にかけてやや外反する。口縁端部は両端に拡張され、擬凹線が3条めぐる。内外面ともヘラミガキ調整される。中期末から後期の資料である。

F-124 弥生 壺 頸部から大きく外反する口縁にいたるもので、両端が拡張され擬凹線が2条めぐる。擬凹線上には2個一対の半截竹管文が施された円形浮文が配置される。外面はハケ目調整が顕著である。中期末から後期初頭の資料である。

F-125 弥生 壺 口縁外面は外方から平坦に仕上げられる。端部外面はハケ状の文様が施文される。体部の多くが欠損し小型の底部にいたるものである。体部外面および底部外面にはハケ目が残り、体部内面はヘラケズリが施される。

第9節 F 地区の遺構と遺物



第381図 包含層出土網文土器・弥生土器

- F-126 弥生 壺 体部から口縁にかけては屈曲し、短く張り出した口縁端部には擬凹線が2条めぐる。肩部は長く、外面にはハケ目、内面はヘラケズリされる。
- F-127 弥生 壺 体部から口縁にかけては屈曲し、短く張り出した口縁上端がつまみあげられる。端部には3条の擬凹線がめぐり、体部外面にはハケ目、内面はヘラケズリされる。
- F-128 弥生 壺 体部から口縁にかけて屈曲し、口縁端部にかけて外反する。体部外面にはハケ目、内面はヘラケズリされる。
- F-129 弥生 台付鉢 扁平な体部から脚台がつく。脚端部は両端に拡張され、端面には1条の擬凹線が施される。体部および脚部外面はヘラミガキがみられ、体部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラケズリが施されている。
- F-130 弥生 小壺 扁平な底部から肩部が直立する。器壁には手づくねを示す凹凸がある。
- F-131 弥生 小型壺 直線的な体部からくびれをもち、口縁が短く開く。体部外面はハケ目、内面はヘラケズリが残る。
- F-132 弥生 小型鉢 上げ底の小型底部から体部にかけて湾曲する。表裏面ともナデ調整がみられる。
- F-133 弥生 小型鉢 小型の底部から直線的に外傾し口縁付近で直立する。外面下部および内面上部はハケ目が、内面下部はヘラケズリが見られる。
- F-134 弥生 瓶 尖った底部に径7mmの穿孔が1箇所ある。口縁にかけて直線的に外類する。外面下部と内面にヘラケズリ調整がみられる。
- F-135 弥生 壺 体部上半を欠損するもので、底部から体部にかけて直線的にのびる。外面は縱方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ調整がみえる。
- F-136 弥生 高杯 杯上部で段をもち口縁にかけて外反する。外面には鋸歯文がめぐり、内面はヘラミガキがみられる。
- F-137 弥生 高杯 杯部資料であり脚部は欠損する。杯上部で段をもち口縁にかけて短く外反するものである。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。
- F-138 弥生 器台 杯上部の破片であり口縁は上下に拡張される。短面には擬凹線が4条めぐる。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。
- F-139 弥生 蓋 天井部は凹み下半にかけて外反ぎみに開く。内外面ともナデ調整される。
- F-140 弥生 蓋 天井部は僅かに凹み、下半にかけて内湾ぎみに端部にいたる資料である。内外面ともナデ調整される。
- F-141 弥生 蓋 天井部は凹み下半にかけて外反ぎみに開く。外面はナデ調整、内面下半はハケ目調整がみられる。
- F-142 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもつ鉢で球形の体部に至る。内外面ともヘラミガキがみられる。
- F-143 弥生 台付鉢 底が大きく凹む脚台をもつ鉢で、小型で球形の体部に至る。内外面ともヘラミガキ調整がみられる。
- F-144 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもつ鉢で、やや開き気味の体部に至る。一部にヘラミガキ調整がみられる。
- F-145 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもつ中型の鉢で、球形の体部に至る。全面にわたりヘラミガキ調整がみられる。
- F-146 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもつ中型の鉢で、開きぎみの体部に至る。一部にヘラミガキ調

## 第9節 F 地区の造構と遺物

整がみられる。

F-147 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもつ鉢で、やや直線的な脚柱部から外傾ぎみに開く体部に至る。

ハケ目調整の後、ヘラミガキが施される。

F-148 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもつ鉢で湾曲し口縁にいたる資料である。全面にわたり丁寧なヘラミガキ調整がみられる。

F-149 弥生 台付鉢 底が僅かに凹む脚台をもつ小型の鉢で、やや直線的に開き口縁にいたる。体部と脚部の境にはユビによる押さえがみられ、内外面にヘラミガキが施される。

F-150 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもち、口縁へは直立ぎみにのびる。口縁外面下には弱い1条の沈線がめぐる。脚内面にはハケ目が明瞭にみられる。

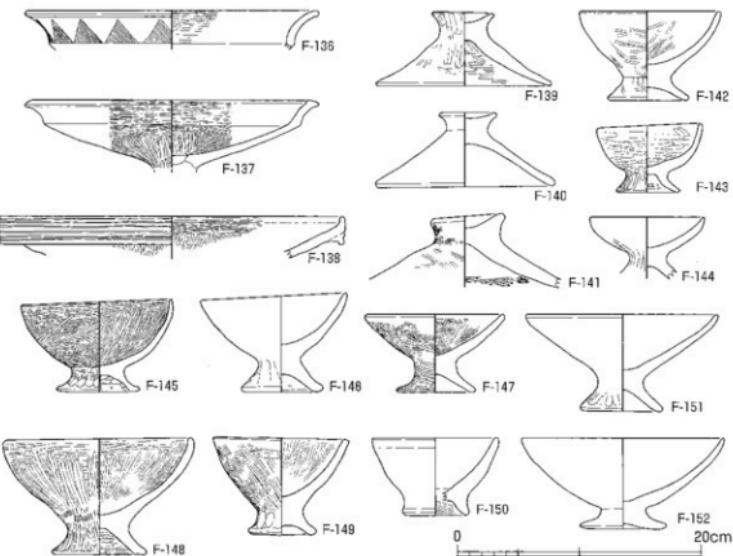
F-151 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもち、直線的に開き体部に至る。内外面ともナデ調整がみられる。

F-152 弥生 台付鉢 底が僅かに凹む脚台をもち、なだらかに湾曲しながら口縁にいたる大型の鉢である。脚台は大きく開く。器面全体にわたってナデ調整がみられる。

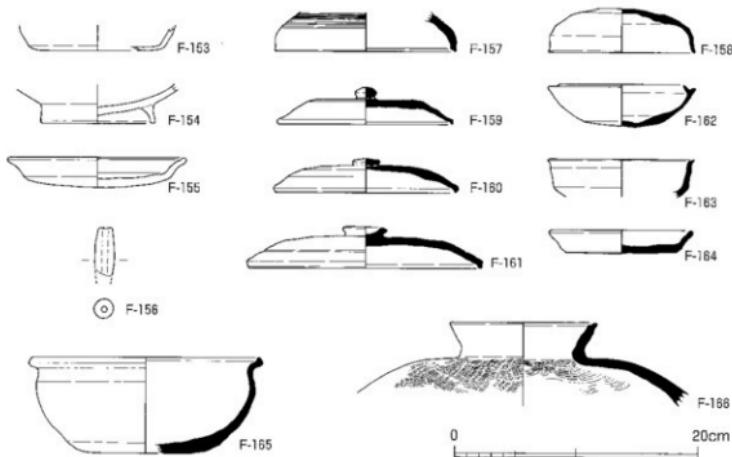
### 包含層出土遺物（土師器・須恵器）

F-153 土師器 杯 扁平な底部から屈曲し体部にいたる資料である。底部内面に不定方向のナデが残る。

F-154 土師器 高台杯 器壁は薄く直立した高台をもち、底部から体部にかけてなだらかに続く資料である。内面は磨かれ、外面はナデ調整がみられる。



第382図 包含層出土弥生土器



第383図 包含層出土土師器・須恵器

F-155 土師器 皿 やや丸みをおびた底部から屈曲し、口縁にかけて外反する資料である。口縁内面に段がある。

F-156 土師器 土錐 中心に径 0.34 cm の穿孔がある。一方は欠損するが全長 4 cm 程度の資料である。

F-157 須恵器 杯蓋 口縁から体部にかけて垂直に立ち、天井部は欠損するが、なだらかに湾曲を示す。体部外面は条線がめぐり、内面端部は屈曲する。

F-158 須恵器 杯蓋 L縁から体部にかけて垂直に立ち、境は段をしめす。天井部はやや湾曲する。

F-159 須恵器 杯蓋 L縁は下端が拡張され、丸いつまみを持つ扁平な資料である。天井部はヘラキリされるもので平坦にしあげられる。口縁にかけては直線的に開く。口縁内面も屈曲し段を有する。

F-160 須恵器 杯蓋 扁平なつまみを持つ資料である。天井部からなだらかに湾曲しながら口縁にいたる。L縁端部はつまれ段を有する。

F-161 須恵器 杯蓋 くほんだつまみを持つ大型のもので、稜輪の蓋である。天井部はやや平坦で口縁にかけて直線的に広がる。体部外面には 1 条の線がめぐる。

F-162 須恵器 杯身 口縁のかえりは短く反りながら突きだし、体部は底部にかけて湾曲しながらすぼまる。体部外面のヘラケズリは底部中心付近でみられる。

F-163 須恵器 杯身 体部中央付近で屈曲が見られる稜輪である。口縁端部は平坦で体部は直立ぎみである。体部との境の屈曲は明瞭で底部にかけて湾曲する。底部中心部分は欠損する資料である。

F-164 須恵器 皿 平坦な底部から僅かに外反しながら口縁にかけ短くのびる。底部はヘラキリの後、なでられる。

F-165 須恵器 鉢 口縁端部が屈曲し段を有し、体部から底部にかけて湾曲する資料である。外面にはロクロ整形時のナデが明瞭に残る。

F-166 須恵器 横瓶 頸部から口縁にかけて短く外傾し、口縁端部内面に僅かなかえりをもつ。体部

## 第9節 F地区の遺構と遺物

は大きく膨らむ。体部外面には平行タタキ、内面には同心円のタタキが明瞭に残る。

### 包含層出土遺物（金属器）

F-M1 鉄製品 釘 全長 69 mm、断面 5 mm の正方形の釘状鉄製品である。頭部は欠損するもので、使用時か後世に変形している。

F-M2 鉄製品 たがね 全長 131 mm、断面の長辺 10 mm、短辺 8.5 mm の長方形のたがね状の鉄製品である。頭部は扁平で、刃先は片刃を呈する。

F-M3 鉛玉 鉄砲玉 確認調査トレンチ 23-F 人力掘削中に出土したものである。直径 12.2 mm、重量 9.0 g、ほぼ球形を呈する。表面は風化により白色化しているが鉛材と考えられる。規模から火縄銃（細筒用）の三文目玉である。火縄銃は天文 12 年に渡来し、以降幕末まで使用されたことから同時代の所産と考えられる。形状は球形であり、衝突した際の変形が見られないことから、発射されなかったものか、発射されたとしても硬化した物に衝突したものではないと考えられる。これらのことから、戦闘用ではなく、狩猟用の火縄銃用に作られたものか、この地に何らかの要因で落としたものであろう<sup>(註1)</sup>。なお、県下での火縄銃の鉄砲玉の発掘調査による出土例は 4 例ある<sup>(註2)</sup>。

（註1）兵庫県鉄砲刀剣類登録審査委員、山口石根氏のご教示による。

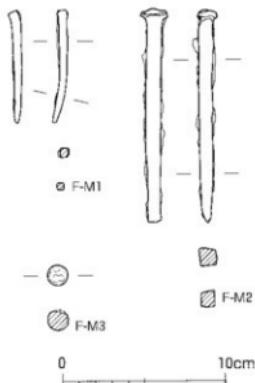
（註2）なお県下における鉄砲玉の出土例は豊岡市宮内遺跡にて 2 例、同市荷羽遺跡三間堂にて 1 例、丹波市青垣町上井遺跡にて 1 例がある。いずれも兵庫県教育委員会の発掘調査による出土品である。

### 包含層出土遺物（石器）

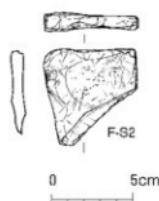
F-S2 石製品 砥石 残存長 6.0 cm、幅 5.7 cm、厚さ 0.7 cm を計り、側面を含めて底面がみられるものである。

### F- 確認調査出土遺物

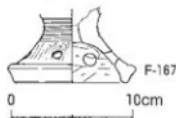
F-167 弥生土器 確認調査時に出土したもので、本調査区では流路部分にあたる。弥生中期後半から末の高杯脚部である。脚径は 10.5 cm を測り、内面はヘラ削りを施している。脚部には 6 方向の円形透孔、その上に沈線を施す。



第384図 包含層出土金属器



第385図 包含層  
出土石器



第386図 確認調査  
出土弥生土器

## 4. 小結

F 地区では弥生時代から奈良時代にかけての遺構が検出された。全面にわたって圃場整備時の削平を受けているため、遺構がまったく検出されなかつ箇所もある。調査区西半から北東へ向かって蛇行した流路が検出されており、弥生時代～奈良時代にかけての遺物が出土している。調査区東半部は南から

舌状に延びる緩やかな尾根の鞍部に当たると思われ、そこに住居跡や掘立柱建物が構築されている。弥生時代の住居跡は当地区では北西部に限られ、プランは円形だけである。古墳時代の遺構に関しては中央南端に方形プランの住居跡が集中して見られるがいずれも小型のものである。居住城の中心は南に広がっていることが考えられる。

当地区で特筆すべきは奈良時代の掘立柱建物群である。掘立柱建物、横列、方形区画溝から構成される構造物がほぼ方位に沿って、設計・構築されている。建物群は、いくつかの段階を経て北へ拡張されている。建物の主軸で検討すると、F-SB01、F-SB02、F-SA02 の一群（以下 A 群）と、F-SB04・05、F-SA01 の一群（以下 B 群）が、それぞれ同じプランに沿って構築されているものと判断される。構築順は A 群→B 群である。ここで問題となるのは、区画溝と B 群の先後関係である。区画溝は F-SD01 → F-SD02 への拡張がみられ、F-SD02 と F-SB04・05 との切り合いが確認できる。出土遺物から詳細な検討を行うことはできないが、AB 両群の建物群が何らかの関連性を有し、規模を拡大させているという前提に立ち、A 群・F-SD01 → F-SD02 への拡張→区画溝の廃絶→B 群の構築という順を提示しておく。

次に建物群の機能や性格であるが、なんらかの公的な役割を持った施設であることが想定される。歴史的な環境を概観すれば、但馬国一ノ宮である粟鹿神社に隣接し、遺跡の北側には古代山陰道および駅家の推定地がある。想像をたくましくすれば、赴任した国司が遠坂峠を越えて最初に立ち寄り国營めを行な際、その一行を迎える着到駿などが可能性として考えられよう。



写真7 F 地区現地説明会風景

## 第10節 F2地区の遺構と遺物

基本上層は①表土・盛土 ②黒褐シルト ③にぶい黄褐シルト ④灰黄褐中砂 ⑤暗オリーブ褐シルト ⑥オリーブ褐シルト（地山）となっている。遺構は地表面で検出しているが、本来は⑤層上面に築かれた遺構も存在したはずである。

F2地区はF区の西側に位置するF地区とG地区に挟まれた南北の道路部分である。県道で複数の水道管などのライフル線などの埋設があり、大きく削平されているものと思われていた。しかし、調査を行ってみると擾乱はあるものの、予想以上に遺構は残存していた。調査区内を大きく2本の管が平面的に通っている。西側が水道管で、東側が下水管である。両者ともに付け替えが認められ垂直的に移動している。水道管は管の繋ぎ部分は擾乱部が広がっている。また、水道管の西側に平行して石組の暗渠が通っており、近世から近代にかけての手も顯著に遺構面に認められる。暗渠周辺は弥生～古墳時代の遺構は残存していないかった。

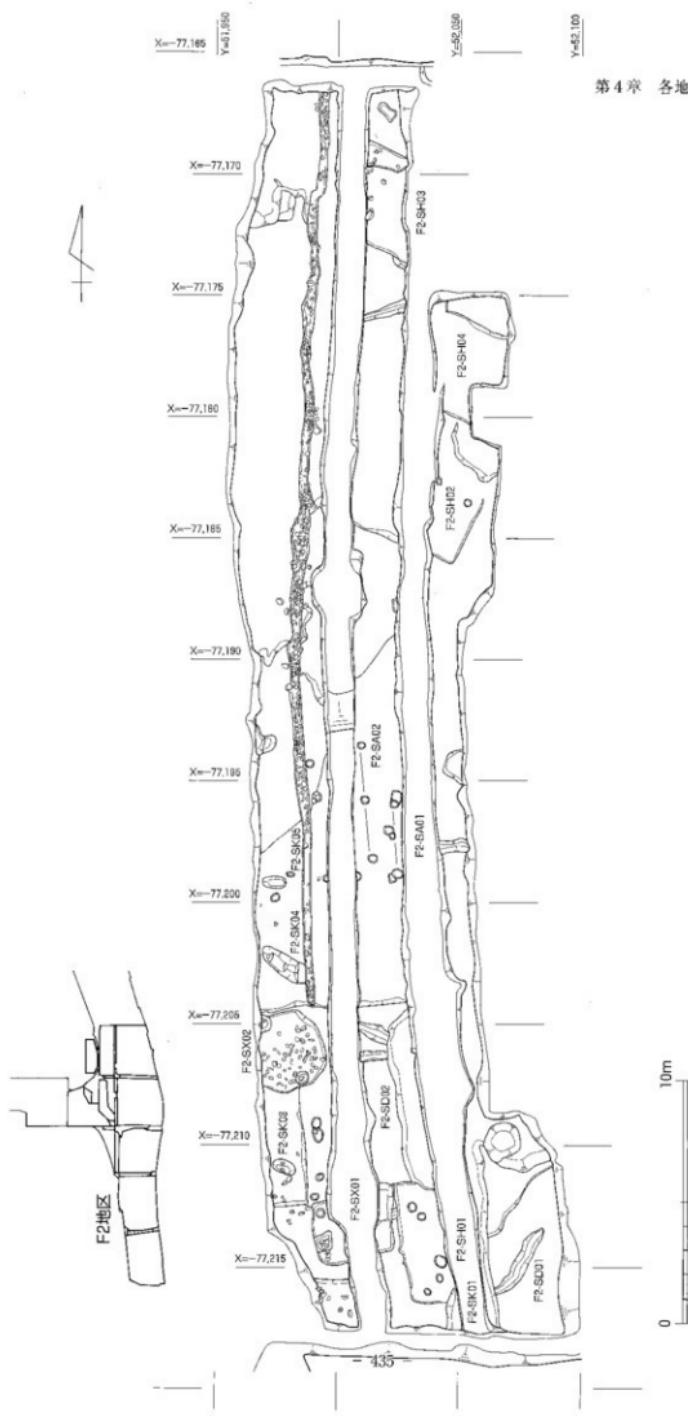
調査の結果、堅穴住居跡4棟、落ち込み2基、土坑4基、柵跡2列、溝2条などを検出している。時期は堅穴住居跡1棟と落ち込み1基が弥生後期で、それ以外の多くの遺構は古墳時代後期のものである。土坑・ピットの一部が古代以降のものと思われる。全体的に遺構の残りは悪い。包含層もほとんど残存していないもので、相当の削平を全体的に受けているものと思われる。特に東側はより低くなってしまい、遺構の残存状態は悪くなっている。また、水道管西側も低くなっている。水道管に平行に石組の暗渠が僅かに蛇行しながら南北に通っている。

F2-SH01は南端近くで検出されており、下水管より東側は残存していない。南北5.1mを測る方形プランの堅穴住居跡である。東西方向は1.7m残っており、下水管によって東側は残っていない。また、南側もF2-SK01によって切られており、北側も下水管接合部設置による擾乱で削平されている。床面までの深度は10cm前後である。黒褐中砂を埋土としている。礫を多く含み、炭もある程度含んでいる。壁溝は認められない。ピットは5基床面で検出しているが、上屋構造は想定できない。最も深いピットで22cmを測るが、多くは10cm前後である。

F2-SH02は、ほとんど床面だけを検出した程度の残りの悪い堅穴住居跡である。南辺と東辺の一部を検出している。北側に向かって低くなってしまい、肩部は残存していない。南東コーナー部が残っており、南辺は4.4m、東辺は3.05m残存している。埋土に炭や焼土が比較的多く含まれておらず、壁溝や支柱穴は検出していないものの堅穴住居跡と考えられる。南辺西端北側に土器とともに焼土・炭が固まっている、炉跡の可能性が考えられる。埋土は上下2層に分かれ、出土遺物時期差が大きい。下層の弥生中期末が堅穴住居跡の時期で窪んだ部分に古墳時代に堆積したものと想定している。下層上面では遺構は検出していない。

F2-SH03は北端近くで検出した住居跡である。水道管と下水管の間でのみ、床面が残存していた。長さ4mを測り、上層の浅い皿状部分に古墳時代の遺物が出土している。これをF2-SH03上層としているが、遺物の相違は顯著であるが、明確な間層はなかった。礫が比較的多く含まれている。上層の遺構で最大の深さ8cmを測る。下層の遺構は深さ15cmを測る。やはり、壁溝は検出していない。北辺に沿って幅0.8mの溝状に落ち込んでいる。床面からさらに約8cm深掘されている。この溝の南側は1.6mに渡って被熱した部分が認められる。炭も多く確認されている。明瞭な窪みではないが、炉跡の可能性が高い部分である。弥生中期末を中心とした土器が出土している。

第4章 各地区的調査



第387図 F2地区全体図

## 第10節 F2地区の遺構と遺物

F2-SH04は、F2-SH02の北側で検出している。やはり保存状態の悪い遺構であるが、埋土から竪穴住居跡と判断している。南北両辺の一部が残存している。F2-SH03同様南北方向は規模がつかめる。南北方向は3.95 mを測る方形プランの住居跡になる。規模もF2-SH03と近い数値を示している。深さは最大で8 cmで、多くは5 cm前後と浅いものである。焼土集中箇所があり、炉跡の可能性が高い。

F2-SX01は南端で検出した方形の落ち込みである。中央を水道管によって損壊を受けているが、全体のプランを把握できる。東北コーナー部がF2-SH01の肩部を切っていることから、F2-SH01より新しい遺構であることが判断できる。

F2-SX02は調査区南端近くの西側で検出した竪穴住居跡状の落ち込みである。やや不定形ながら径3.2～3.5 mの円形を呈している。F2-SX01同様上面に近世以降の洪水砂を被っており、確實に古墳時代に遡るか不明であることから、竪穴住居跡にはしてない。だが、十分に竪穴住居跡になる可能性が高い遺構である。深さは最大で0.15 mと浅く、旧河道の円礫が出ていている。床面にピットが1基検出されているだけで、壁溝は確認していない。出土遺物もなく明確な時期は特定できない。円形であることを考慮すれば、今回の調査区の中で最も古い住居跡になろうかと思われる。

土坑は4基検出している。F2-SK01は調査区南端で検出している。F2-SH01を切っている遺構である。南側に延びており、東は下水管によって切られている。それより東側では残存していない。遺物は土師器小片しか出土していない。明確な時期は決め難いが、近世以降かと思われる。幅0.7 mで長さ1.7 m残っている。深さは最深で0.25 mを測る。底面は平坦でなく、斜めになっており、東側が深くなっている。

F2-SK03はF2-SX01の北西部に存在する不定形円形の土坑である。幅0.5 m、長さ1.0 m、深さ0.25 mを測る。埋土は黒細砂であることから、古墳時代の遺構と思われる。

F2-SK04はF2-SX02の北側にある溝状の土坑である。東側を暗渠で削平されているが、その東側までは広がっていない。検出した長さは2.2 mで、最大幅は0.9 m、深さ0.28 mを測る。底面は平滑でなく凹凸が認められる。埋土は黒褐色中砂で古墳時代より新しい遺構である。

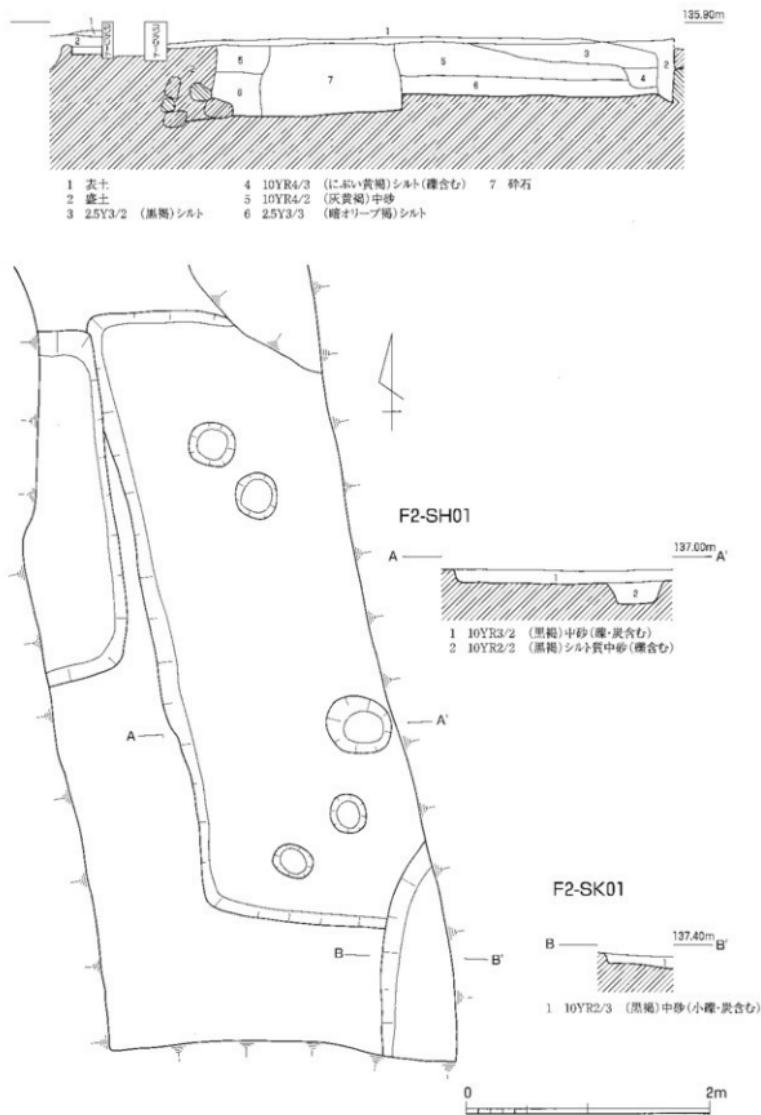
F2-SK05はF2-SK04の北側にある精円形の土坑である。長さ0.95 m、幅0.5 m、深さ0.2 mを測る。埋土は黒褐色中砂でF2-SK04同様新しい時期である。

溝は2条検出しており、F2-SD01は調査区南東隅に存在する。南西から北東に向かって弧状を呈している。長さ3.2 m、幅0.6 m、最大の深さ0.25 mを測る。断面形状は一定でなく、皿状を呈する部分が多い。断面や底面の状況からも自然のものの可能性が高い。時期は新しい範疇に入るだろうと思われる。

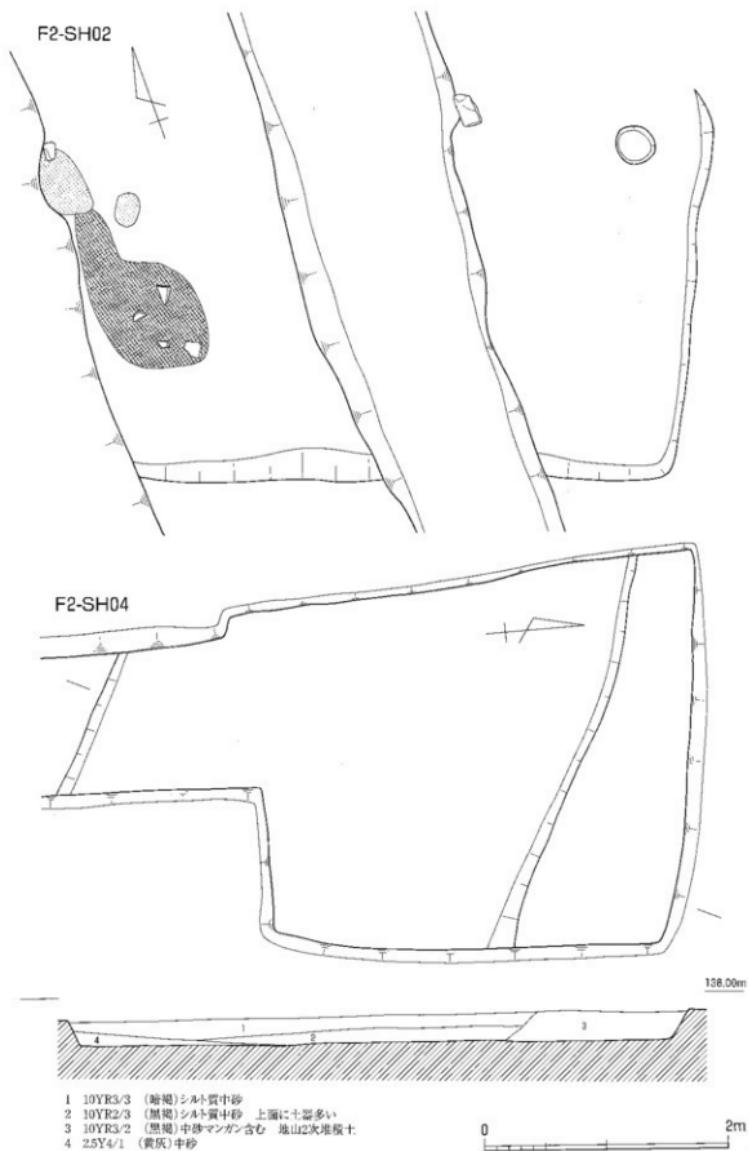
F2-SD02は南側のF2-SX02の東側に所在する直線的な溝である。水道管・下水管の反対側には続いていない。長さ1.2 m、幅0.4 mを測る。深さ0.3 mとほぼ同じで、断面形状は逆台形をしている。埋土からも古墳時代と思われる。

ピットは10基検出している。掘立柱建物跡に復原できなかったが、建物跡の可能性が十分に考えられる。2列の柱列を確認しているので、横跡として報告する。2列とも調査区中央付近で確認している。F2-SA01は東側にある柱列で基礎を伴う柱穴である。主軸方向はほぼ南北をとっている。3基南北に並んでおり、掘立柱建物跡として問題ない遺構と思われる。柱間は1.6 mで、東西方向の梁行2間の建物になろうと思われる。0.4～0.6 mの大きさの柱穴で、深さは最大0.5 mを測る。基礎以外に根固めの礫も入れられている。

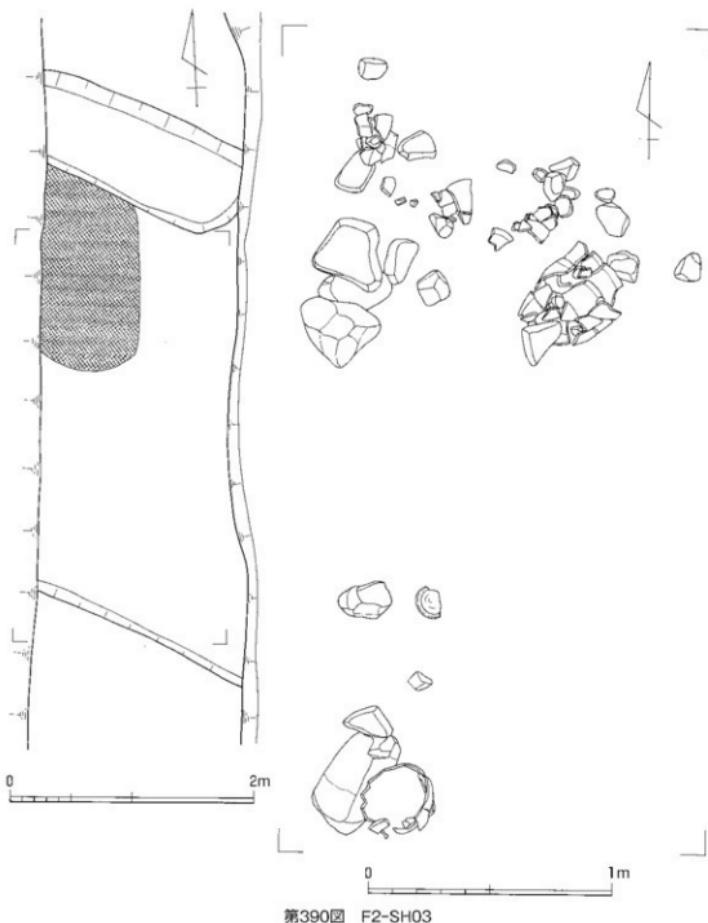
F2-SA02は西側に所在する横跡で主軸方向を5度前後振るN8°Wになっている。3基検出している。



第388図 F2北壁土層断面図、F2-SH01・SK01



第389図 F2-SH02・SH04



第390図 F2-SH03

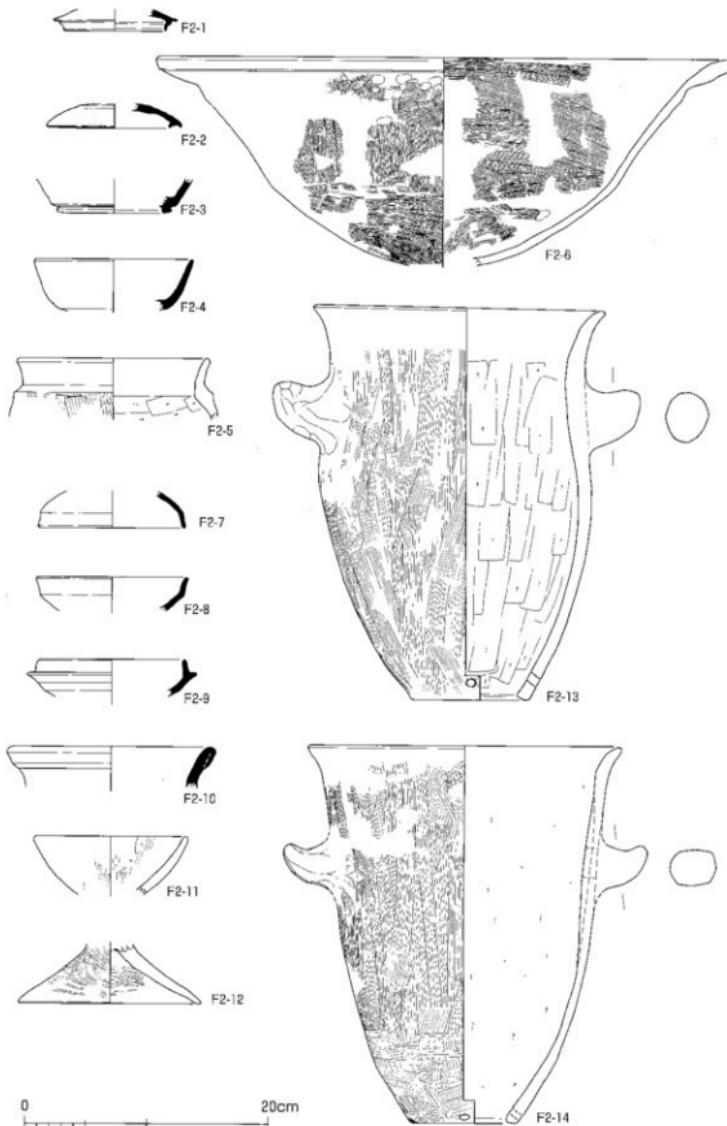
径は0.3mと小瓶になり、中世かと推測される。F2-SA01同様掘立柱建物跡の可能性が高い。

#### 出土遺物

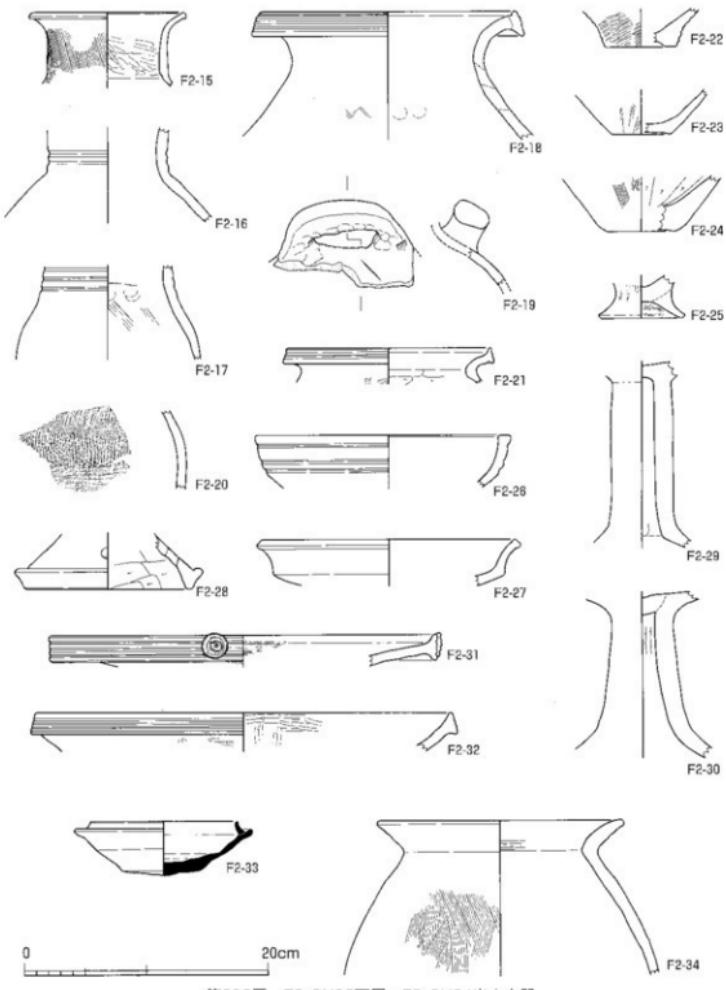
出土遺物は61点を図化している。そのうち、46点が遺構出土遺物で、残りの15点が包含層出土遺物である。弥生土器・土師器・須恵器・スラッグが確認されている。

F2-1はF2-SH01上面で出土している須恵器蓋である。口径8.2cm、残存高1.8cmを測る。内湾する天井部から水平ぎみに細くなっている端部は広がっている。端部は丸い。全体的にシャープな作りである。

F2-2～6はF2-SH02からの出土である。F2-2は須恵器杯蓋でつまみ部周辺を欠く。緩やかに内湾



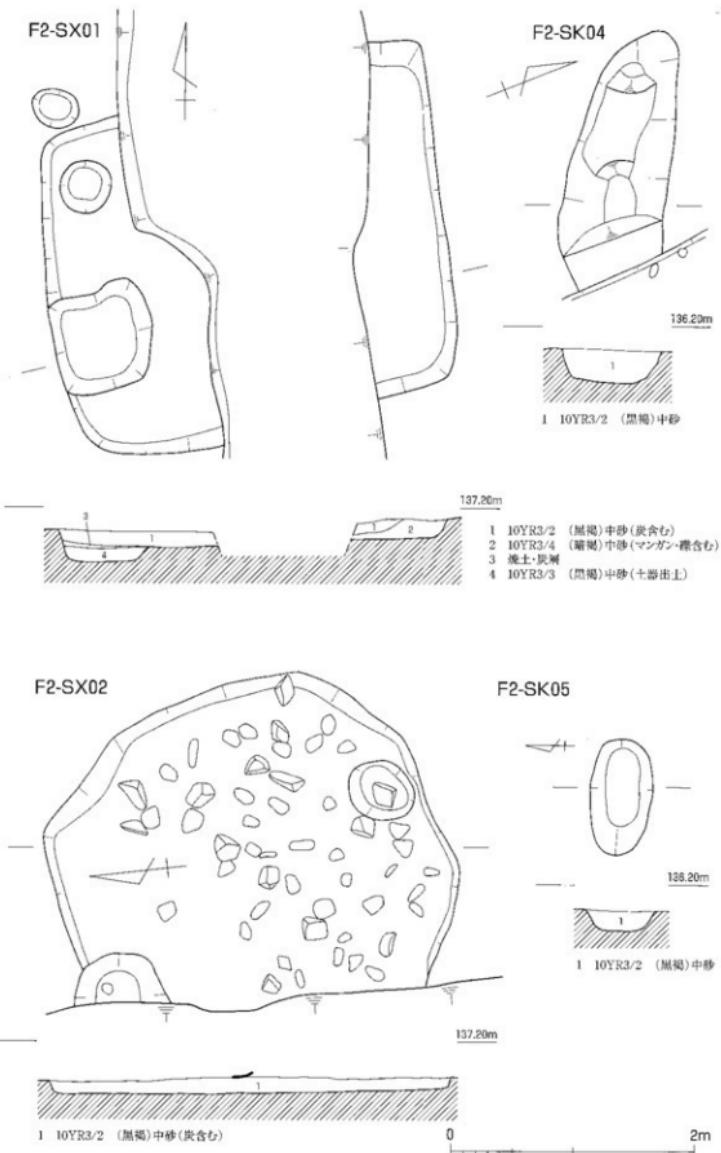
第391図 F2-SH02・SH03出土土器



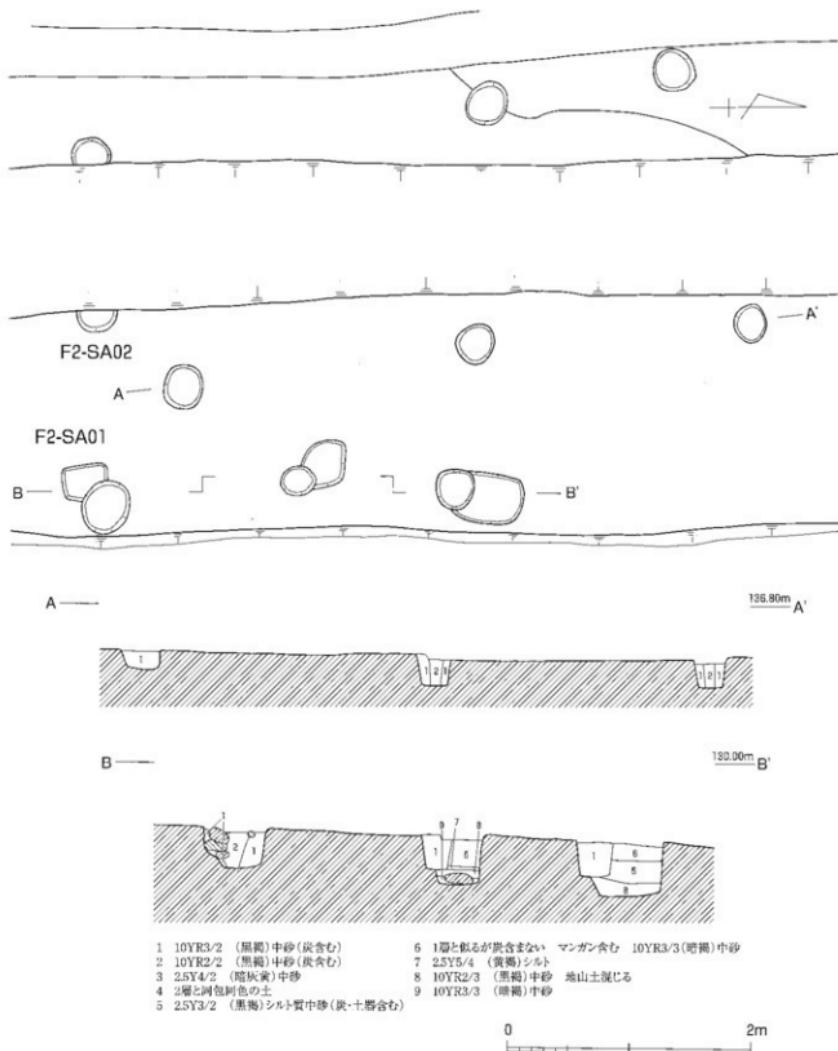
第392図 F2-SH03下層・F2-SH04出土土器

する体部で端部は丸い。口径 9.0 cm、残存高 2.0 cm である。ロクロナデで、灰色で胎土・焼成は良好である。F2-3 は杯 B である。底径 9.4 cm、残存高 28 cm を測る。F2-4 も杯 B と思われる。内溝する体部で、口径 12.8 cm、残存高 4.2 cm を測る。F2-5 は土師器甕口縁部で、口径 15.3 cm、残存高 5.05 cm を測る。F2-6 は大形鉢で、端部は角張り、口縁部の器壁は厚い。口径 46.4 cm、残存高 17.1 cm を測り、外面に煤が付着する。

F2-7 ~ 14 は、F2-SH03 上層出土である。F2-7 ~ 10 は須恵器、F2-11 ~ 14 は土師器。F2-7 は杯蓋



第393図 F2-SX01・SX02・SK04・SK05



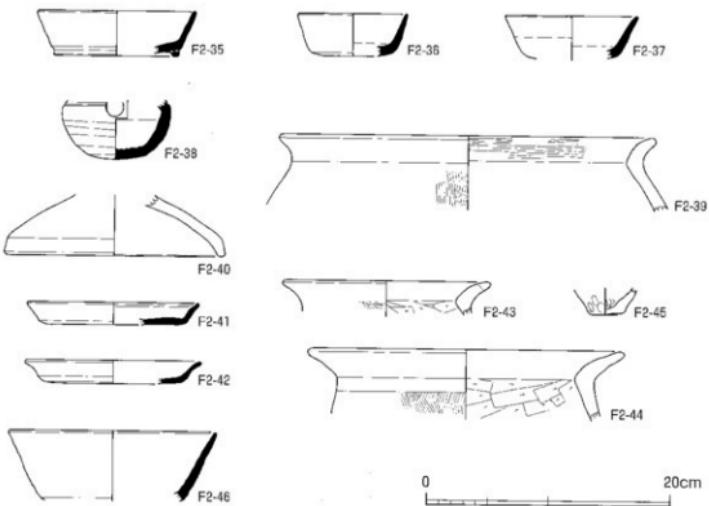
第394図 F2-SA01・SA02

で口径 11.9 cm、残存高 3.0 cm を測る。端部はやや尖る。F2-8 は杯身で 2 次焼成を受けている。F2-9 も杯身で時期が遅る。口径 11.9 cm、残存高 3.0 cm を測る。F2-10 は甕口縁部で玉縁状である。口径 16.3 cm、

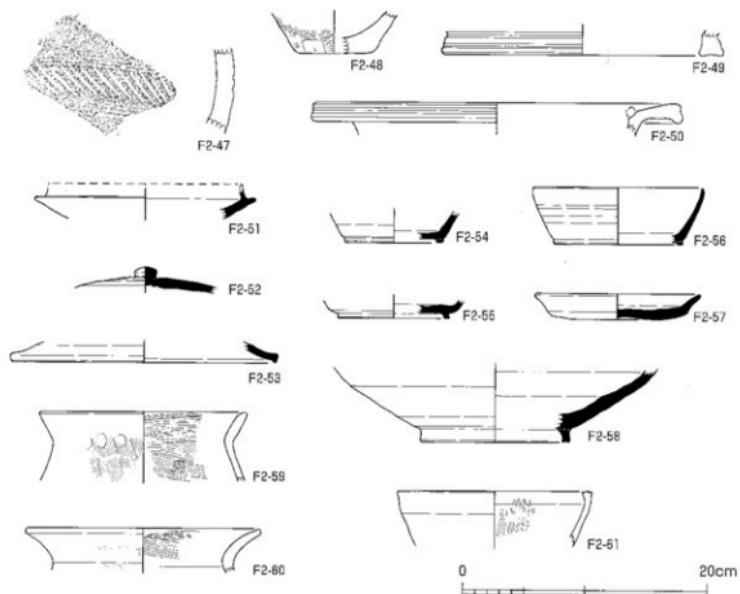
## 第10節 F2地区の遺構と遺物

残存高 3.4 cm を測る。F2-11 は鉢状であるが、器台上部であろう。F2-12 と同一個体の可能性がある。口径 12.4 cm で残存高は 4.8 cm を測る。F2-12 は器台下台部で、幅部径 14.6 cm、残存高 4.9 cm を測る。筒部との接続面で割れている。F2-13 は瓶で図上では完形に復原できた。口径 23.1 cm、器高 32.5 cm、底径 9.5 cm を測る。把手は頸部下に短く太い手捏ねのものが一対付加されている。底部上部に一对の円孔（径 8 mm）が焼成前に穿たれている。F2-14 も瓶で F2-13 と似た形状である。底径 8.95 cm で端部上にやはり小円孔を有する。1 個しか残存しないが、1 対のものと思われ、対角線上に存在したものであろう。太めで短い手捏ねの把手がユビ成形によって付けられている。口径 25.3 cm、器高 31.05 cm を測る。にぶい橙で小石粒を多く含んでいる。

F2-15 ~ 32 は、F2-SH03 下層の出土遺物である。F2-15 ~ 20 は壺で、F2-15 は頸部以下を欠く口縁部である。口径 12.3 cm、残存高 6.1 cm を測る。F2-16・17 は頸部の破片である。F2-16 は内傾し外反ぎみに直立する頸部で、2 条の凹線が施される。F2-17 は長頸壺か細頸壺で頸部に 3 条の凹線を施す。残存高 7.6 cm を測る。F2-18 は口縁部で、端面には 4 条の凹線があり、体部には波状文が施される。口径 20.8 cm、残存高 10.5 cm である。F2-19 は把手の付いた体部である。幅 10.6 cm、厚さ 1.7 cm である。F2-20 は装飾が施された体部で、8 条 1 帯の波状文が見られる。F2-21 は壺口縁部で、口径 16.6 cm、残存高 2.9 cm を測る。端面に 2 条の擬凹線を施す。F2-22 は壺底部で F2-23・24 も底部である。F2-23 は外面ハケ整形で上げ底ぎみの平底で直線的に広がっている。内面はヘラケズリと思われ、薄く仕上げている。内面はハケ整形ののちナデで仕上げる。底径 4.8 cm、残存高 3.6 cm を測る。F2-24 は大型壺の底部である。径 5.7 cm の平底で、残存高 4.4 cm を測る。F2-25 は脚台部で外反し、端部は上方に尖りぎみである。底径は 7.0 cm、残存高 3.5 cm である。F2-26 ~ 30 は高杯である。F2-26 は内湾し、端部が肥厚ぎみに角張る杯部である。外面に 3 条の凹線が認められる。F2-27 は棱線を持って外反する口縁部で



第395図 F2-SB01・河道・SX出土土器



第396図 F2地区包含層出土土器

ある。口径 20.6 cm、残存高 3.75 cm を測る。F2-28 は高脚脚台部である。据径 13.4 cm、残存高 4.6 cm で、2 次焼成を受けている。僅かに内済して端部は上方に大きく肥厚している。据端部から上部に円孔が認められる。F2-29 は直立する長い筒部で、残存高 15.2 cm を測る。F2-30 は裾端部を欠く柱状部である。円板充填法によって杯部を接合している。残存高 12.8 cm で 2 次焼成を受けている。F2-32 は器台上台口縁部である。端面には 3 条の四線を施したのち、竹管文を付加した円形浮文を付けている。口径 31.6 cm、残存高 2.6 cm を測る。F2-32 も器台上台部で口径 34.0 cm と大形に復原される。端面には 4 条の援凹線がみられる。F2-33・34 は F2-SH04 出土で、F2-33 は須恵器杯身である。歪な不安定な底から直線的に広がる体部から受部につながる。端部は丸く肥厚ぎみである。立ち上がり部は外反し端部は尖る。口径 11.9 cm、器高 4.4 cm である。F2-34 は土師器甕口縁部である。直線的な体部から外反する口縁部になる。器壁が厚めで、端部は丸い。口径 19.8 cm、残存高 12.6 cm を測り、2 点の土器から F2-SH04 は多くと同様に古墳時代末期の堅穴住居跡である。F2-35～39 は柱穴出土の遺物で、F2-35 は F2-SB01 として復原できた掘立柱建物跡柱穴出土である。須恵器杯 B で口径 12.7 cm、器高 3.7 cm を測る。F2-36 は小形の杯 A で、口径 8.8 cm、器高 3.5 cm を測る。ロクロナデで底部ヘラ切りである。灰色をしており、砂粒を少量含む。体部は直線的に広がり、端部は尖りぎみになる。F2-37 も杯 A で、口径 10.7 cm、器高 3.5 cm を測る。焼成時の重ね焼きの痕跡と火燐が外面に見られる。僅かに外反する体部で端部は丸い。灰～灰白色でロクロナデである。

## 第11節 G 地区の遺構と遺物

### 1. 概要

位置 現在の行政区画では大字栗鹿字高橋にあたる。地形的には、段丘末縁部にあり、栗鹿川の氾濫で形成された氾濫原に位置する。昭和 53 年ころの圃場整備により大区画水田となっている。遺跡の立地する基盤層は、洪水起源の砂礫層で構成されており、各所にその砂礫が露出している。

遺構面 遺構面は 1 面であり弥生時代や古墳時代の堅穴住居跡、古代の掘立柱建物跡などが一定方向に配置されている。出土遺物は縄文時代から中世までの遺物が 286 入りコンテナで 114 箱出土した。

### 2. 基本層序

調査区の南半は廐棄物処理に伴う擾乱によって大部分が消失している。F 地区と同様、崩状地上をベースとしている。ベースはシルトを含む砂礫層およびシルト質砂が、氾濫等によって繰り返し堆積した土層から成っている。基本的に耕土直下で洪水にともなう砂礫層もしくは砂層があり、これを除くとベース面上に達する。このベース上に弥生時代から奈良時代の遺構が構築されている。

### 3. 遺構

#### G-SH01

検出状況 調査区東端中央に位置する。他の住居跡との切り合い関係はなく、全体を検出した。

形態・規模 平面は方形を呈する。南北方向で 5.2 m、東西方向で 5.3 m を測る。検出面からの深さは最大で 25 cm である。

屋内施設 周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝 北西隅から西壁の中央部付近にかけて検出した。床面での幅は広いところで 40 cm 前後に達する。深さは 8 cm 程度である。

柱穴 住居の主柱穴と考えられるのは 4 基である。直径は 35 ~ 50 cm、床面からの深さは最大で 40 cm である。

#### 出土遺物

G-1 縄文 深鉢 口縁部が残存する晩期凸帯文土器である。やや尖った口縁端部を有し外反する頸部にいたる。凸帶は平面「O」形の押さえがある。

G-2 弥生 壺 大きく外反する口縁部で、両端が拡張され擬凹線が 3 条めぐる。内外面ともナデ調整される。

G-3 弥生 壺 口縁端部が内湾ぎみにつまみ上げられ、内外面ともナデ調整される。

G-4 土師器 壺 口縁部は斜め上方に外傾し頸部は屈曲する。内外面ともナデ調整が見られる。

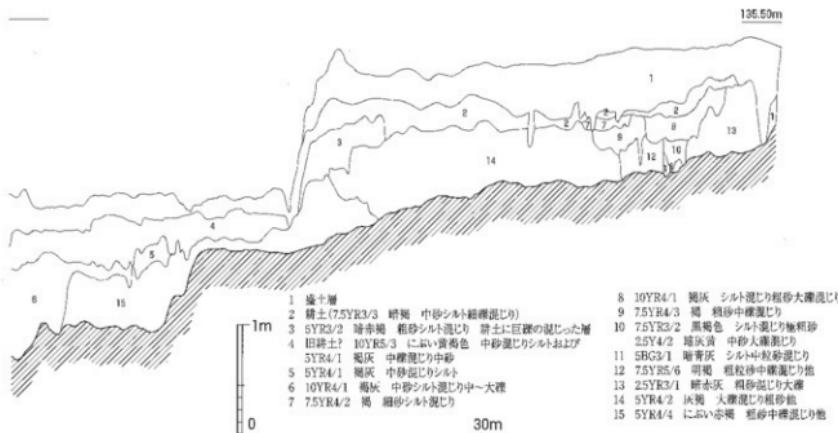
G-5 土師器 底部 小型の底部で体部と底部の境はない。内外面ともナデ調整がみられる。

G-6 須恵器 怀蓋 口縁から体部にかけて垂直に立ち上がり、境は段をしめる。天井部は彎曲する。

G-7 須恵器 壺 口縁下端が拡張され短い頸部を有する。腹部は球形を呈し、外面には平行タタキとカキ目、内面は同心円タタキがみられる。



第397回 G地区遭構配置図



第398図 G地区北壁土層断面図

## G-SH02

検出状況 調査区東部、G-SH01の西側に隣接する。G-SH03、04に西半部分を切られる。

形態・規模 平面は方形を呈する。南北方向で5.1mを測る。

屋内施設 周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝 北辺に沿って検出した。幅は最大で40cmを測る。深さは6cm程度である。

柱 穴 主柱穴は特定できていない。

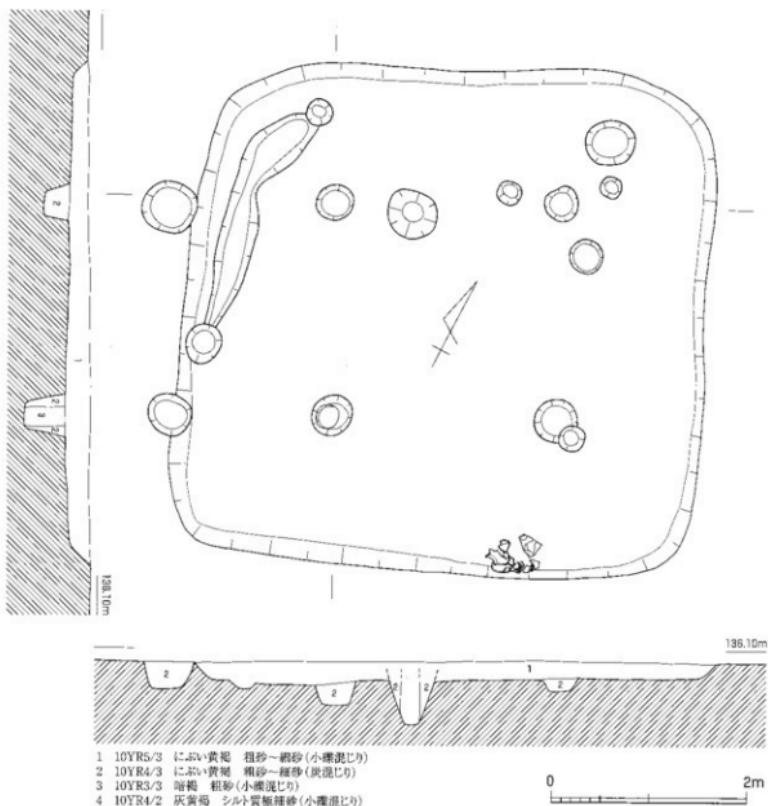
## G-SH03

検出状況 G-SH02を切っており、G-SH04とは切り合い関係にあるが先後関係は定かでない。

形態・規模 平面は方形を呈する。南東壁で5.1mを測る。削平を受けており、検出面からの深さは10cmと浅い。

G地区豎穴住居跡位置表

遺構番号	形 状	規 模 (m)	主柱穴	周壁溝	時 代	燃焼施設	備 考
G-SH01	方形	5.2×5.3	4	一部あり	古墳時代後期	なし	
G-SH02	方形	(1辺5.1)	不明	一部あり	古墳時代後期?	なし	西はG-SH03・04と切り合う
G-SH03	方形	(1辺5.1以上)	不明	なし	古墳時代後期?	なし	東はG-SB03・北はG-SB04と切り合う
G-SH04	方形	(3.2×3.1)	2以上	なし	不明	不明	東はG-SB02・南はG-SB03と切り合う
G-SH07	円形?	直径6.5	3以上	なし	弥生時代中期後半	中央土坑	北は削平
G-SH08	方形	(1辺6.4)	不明	なし	不明	なし	北は削平
G-SH09	方形	5.4×5.2	4	なし	古墳時代後期	竈	
G-SH10	隅丸長方形	(9.5×7以上)	不明	なし	古墳時代前半	なし	
G-SH11	方形	(1辺5.1)	1以上	なし	古墳時代前半	なし	西は削平
G-SH12	方形	(1辺5以上)	不明	なし	古墳時代?	竈	南は削平



第399図 G-SH01平面図

屋内施設 柱穴を検出した。

柱穴 主柱穴は特定できなかった。

G-SH02～SH04 出土遺物

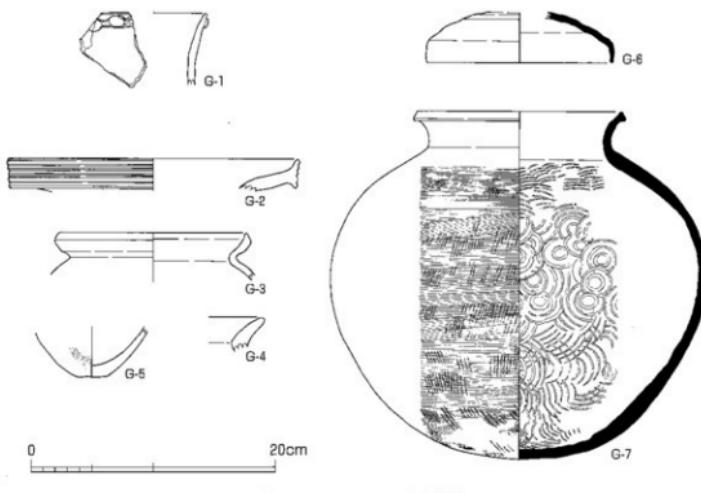
G-8 土師器 鉢 G-SH02 出土で、丸みをおびた底部から直立する口縁にいたる手づくね鉢の資料である。外側には一部ハケ目、内面は手づくねによるユビナデが残る。

G-9 弥生 器台? G-SH03 出土で、口縁直下で段をもつものである。内外面ともナデ調整がみられる。

G-10 弥生 蓋 G-SH03 出土で、天井部は凹み下半にかけて直線的に開く。

G-11 弥生 壺 G-SH04 出土で、頸部はなだらかに湾曲し口縁にかけ外反する。内外面ともナデ調整がみられる。

G-12 弥生 高杯 G-SH04 出土で、杯部は湾曲し、端部は平坦に仕上げられる。口縁下部には2条の凹線がめぐり、内外面ともナデ調整が施される。



第400図 G-SH01出土土器

#### G-SH04

検出状況 G-SH02 を切っており、G-SH03 とは切り合い関係にあるが先後関係は定かでない。削平を受けており、北東隅から全体の 1/4 程度の範囲を検出したに過ぎない。

形態・規模 平面は方形を呈する。北辺で 3.2m、東辺で 3.1m を測る。

屋内施設 柱穴を検出した。

柱 穴 床面で 8 基の柱穴を検出したが、その配置から主柱穴と推定できるものは東壁に並行する 2 基である。直径は 30 ~ 40 cm、床面からの深さは 15 cm ほどである。

#### G-SH07

検出状況 調査区東端に位置する。全体に削平を受けており遺存状況は悪い。北半は擾乱を受けて消失している。

形態・規模 平面はいびつな円形を呈する。東西方向で径 12.5 m を測る、大型の住居跡である。

屋内施設 中央土坑・柱穴を検出した。

中央土坑 長方形を呈する土坑 (G-SK06) で、175 × 75 cm の規模である。検出面からの深さは 15 cm である。いわゆる <sup>いわゆる</sup> | ○ 土坑で、○形の土坑は擾乱によって消失した可能性が高い。

柱 穴 検出した柱穴のうち 3 基が主柱穴であったと考えられる。直径は 60 cm ほどである。しかし、住居の規模に対して柱数が少なく、元来の本数はもっと多いと思われる。

出土遺物

#### G-SH07 出土遺物 (壺)

G-13 弥生 壺 直口する頸部から口縁は外反し端部は拡張される。頸部は中央で最大径をしめす。口縁端部にはクシガキ波状文、頸部は 3 条の凹線、頸部上半にクシガキ波状文とクシガキ直線文が交互に施される。頸部下半はヘラミガキが顯著で、頸部内面はヘラミガキがみられる。

G-14 弥生 壺 湾曲した頸部から端部が拡張された口縁に外反する。腹部は長胴形を呈す。口縁端部には押圧の弱いクシガキ波状文、胴部上半にクシガキ波状文とクシガキ直線文が交互に施される。外面胴部下半や内面は口縁から胴部にはヘラミガキがみられる。

G-15 弥生 壺 口縁部および頸部を欠損し、体部および底部が残存する資料である。胴部最大径が胴部上半に位置し大型で胴長である。胴部上端にはヘラガキ沈線が2条めぐり、胴部上半には5条程度のヘラガキによる弧線がみられる。胴部外面にはヘラミガキが、内面にはハケ目調整が見られる。また胴部最大径付近には径2.6cmの穿孔がみられることから、転用された可能性が高い。

G-16 弥生 壺 なだらかに外反した頸部から水平方向に聞く口縁にいたる。口縁端部両端は僅かに拡張される。腹部に文様はなく、頸部下端に3条の凹線がめぐる。頸部外面には縱方向のハケ目が明瞭に残る。

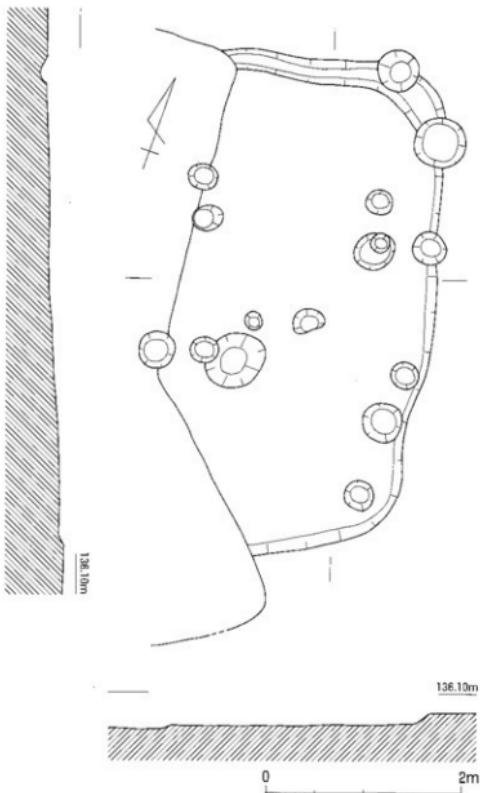
G-17 弥生 壺 外反する頸部から水平方向に聞く口縁にいたる。口縁端部上端は僅かに拡張される。腹部に文様はなく、頸部下端に1条の凹線がめぐる。頸部外面には縱方向のハケ目が明瞭に残る。

G-18 弥生 壺 外反する頸部から口縁にいたる。口縁端部は僅かに上方に拡張される。口縁端部に沈線が4条めぐり、縱方向に9本のヘラガキ沈線が交錯する。頸部下端に4条の凹線がみられる。頸部外面にはハケ目調整が残る。

G-19 弥生 壺 わずかに外反する頸部から口縁にかけて直口する。口縁端部は内側に平坦に押さえられる。口縁外面には3条の凹線がめぐり、頸部にも1条の凹線が施される。

#### G-SH07 出土遺物（壺）

G-20 弥生 壺 最大径が体部上半に位置する大型の壺で、屈曲した頸部から短く外傾する口縁にい



第401図 G-SH02平面図

たる。口縁端部内面に沈線が1条めぐり、上につまみ見上げられ屈曲する。体部外面縦方向のハケ目調整がみられる。

G-21 弥生 壺 長胴の大壺の壺で、最大径が体部上半に位置すると考えられる。体部から底部にかけてなだらかにすぼまり、底部はやや直立する。体部外面縦方向のハケ目調整がみられ、内面はヘラケズリされる。

G-22 弥生 壺 屈曲する頸部から口縁にかけて短く伸びる資料である。口縁端部は上方に向て拡張され屈曲する。罐面には2条の擬凹線が見られる。

G-23 弥生 壺 屈曲する頸部から口縁にかけて短く伸びる資料である。口縁端部は両端方向に拡張される。端面には3条の擬凹線が見られる。

G-24 弥生 鉢 体部上半

で屈曲し短く口縁に外傾する。最大径は体部上半に位置し扁平なものである。体部外面ヘラミガキ、内面はハケ目がみられる。

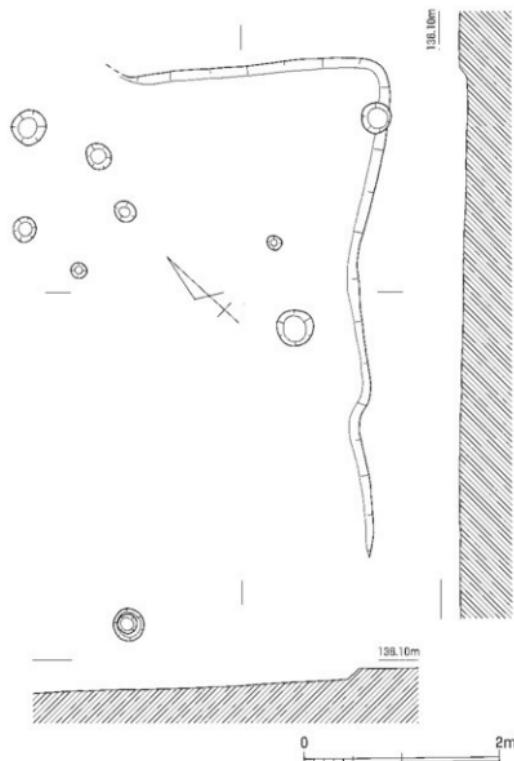
G-25 弥生 高杯 杯部上部の資料であり、下半や脚部は欠損する。杯部上半は内湾ぎみに立ち上がり、上縁が押さえられた端部へといたる。杯部中央で凹線が1条施され屈曲する。内外面ともヘラミガキ調整が見られる。

G-26 弥生 脚台 下縁が外方に拡張される。上部にかけては若干内湾する。中央付近には穿孔がみえ、外縁はヘラミガキされる。台付鉢などの脚部である。

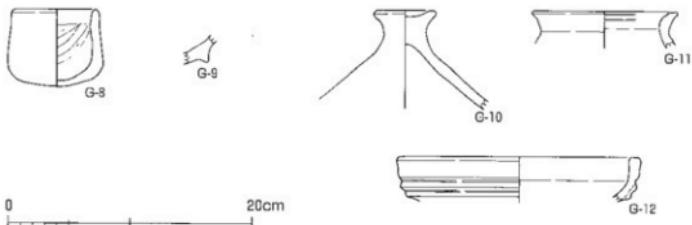
G-27 弥生 器台 受部上部の資料であり、大きく開く。端部は下方に僅かに拡張され、罐部は3条の擬凹線がめぐる。

G-28 土師器 壺 体部から頸部にかけてはわずかに内湾し、口縁にかけて直線的に外傾する。体部外面にはハケ目、内面はナデ調整される。

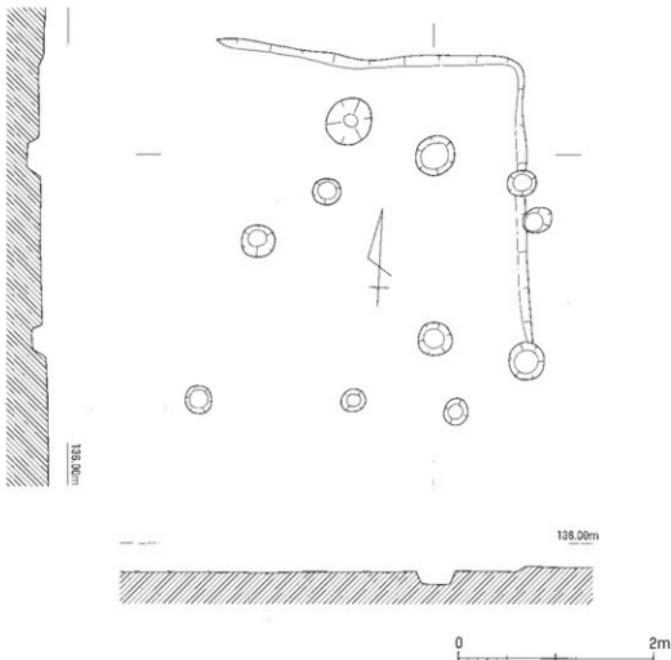
G-29 須恵器 杯蓋 天井部にやや扁平なつまみがつき、口縁立ち上がりにかけては沈線により分け



第402図 G-SHO3平面図



第403図 G-SH02~SH04出土土器



第404図 G-SH04平面図

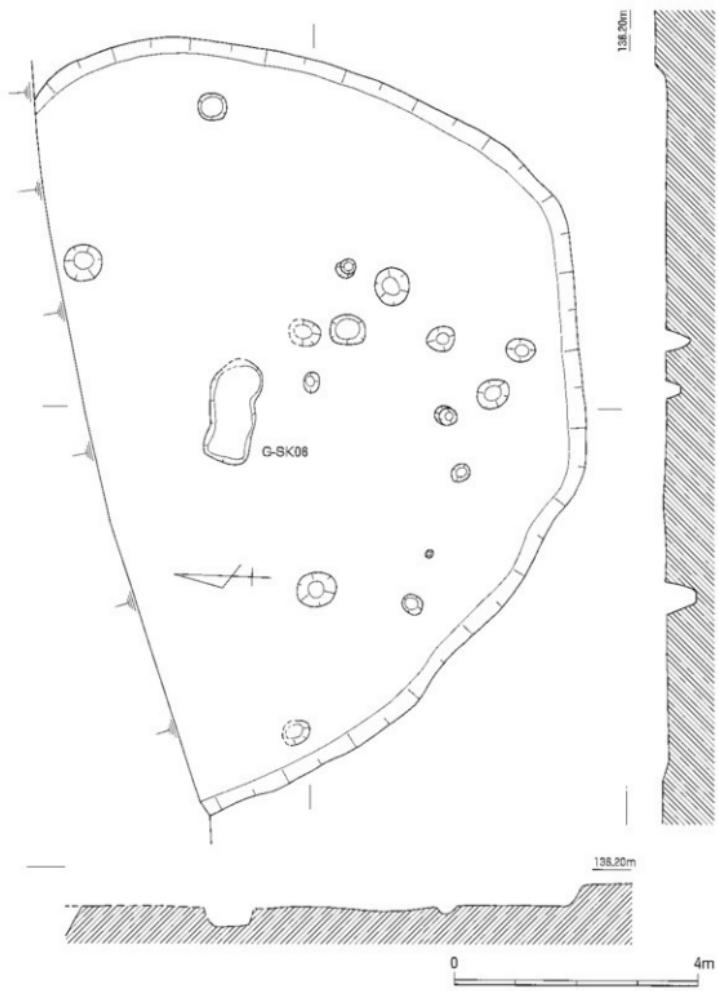
られ湾曲する。天井部にはカキ目が目立ち、口縁内部端部には弱い段がある。

G-30 須恵器 杯蓋 天井部はやや扁平で、体部から口縁にかけてはゆるく屈曲する。

G-31 須恵器 杯蓋 天井部は扁平で体部から口縁にかけてはやや外反ぎみに立ち上がる。

G-32 須恵器 杯身 口縁は短く反りながら、かえりが突きだし、体部は底部にかけて湾曲しながらすぼまる。体部外面のヘラケズリは体部底に近い。

G-33 須恵器 鉢 丸みをおびる底面から口縁にかけては直立する。口縁端部下部で僅かな段を形成する。底部は不定方向のヘラケズリが見られる。



第405図 G-SH07平面図

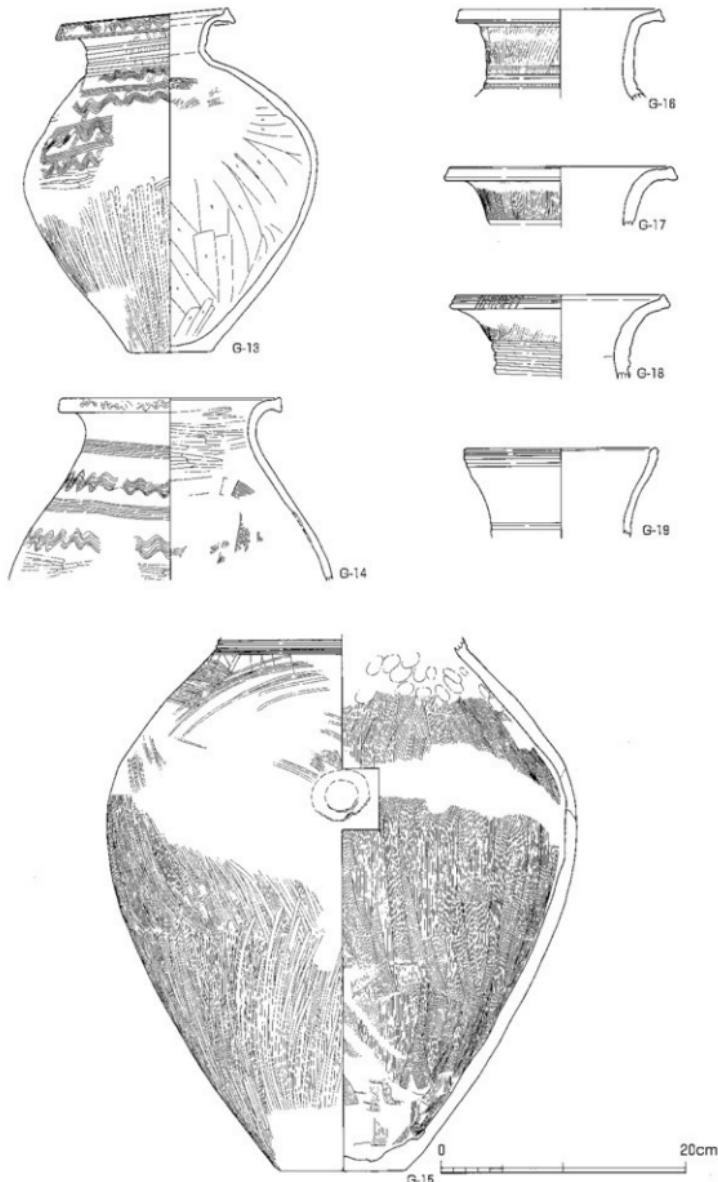
**G-SH08**

**検出状況** 調査区東半中央に位置する。全体に削平を受けており遺存状況は悪い。北半は擾乱を受けている。

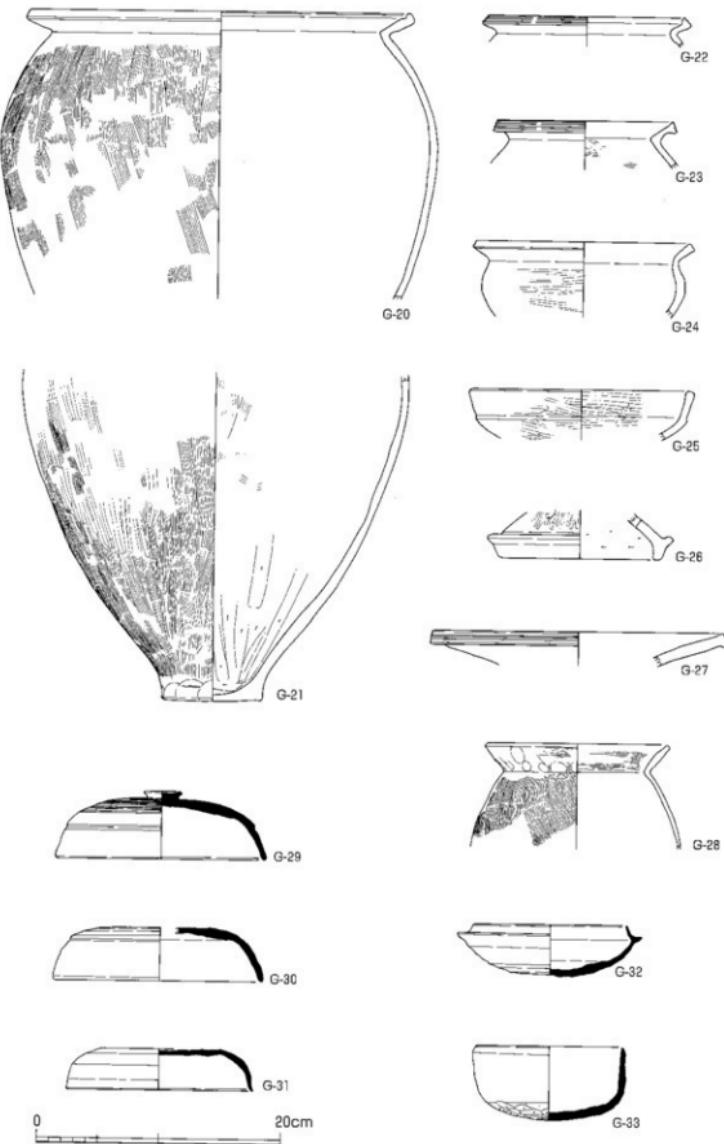
**形態・規模** 平面は方形を呈する。東西方向で 6.4m を測る。検出面からの深さはおよそ 15 cm である。

**屋内施設** 柱穴を検出した。

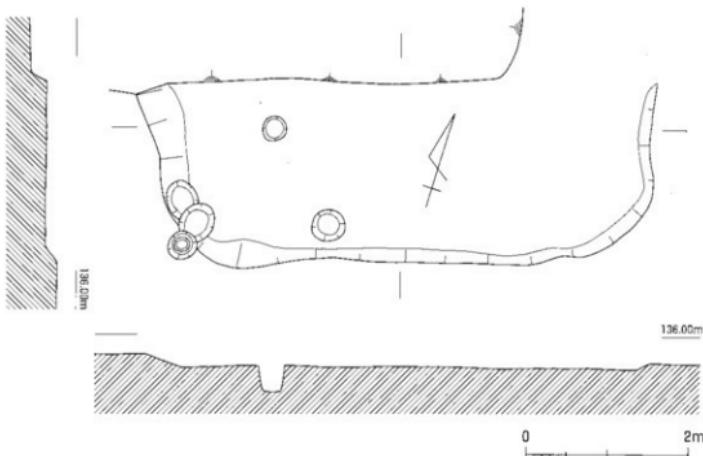
**柱 穴** 検出した柱穴のうち主柱穴と考えられるのは 1 基である。



第406図 G-SH07出土弥生土器 1



第407図 G-SH07出土遺物弥生土器 2等



第408図 G-SH08平面図

## 出土遺物

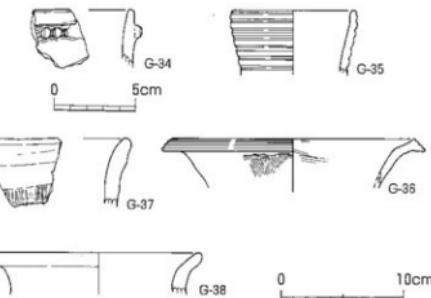
G-34 縄文 深鉢 口縁下部の貼付凸帯はやや尖った工具により刻みがつけられる。縄文晩期後半の凸帯文土器である。

G-35 弥生 壺 頭部から口縁にかけて、僅かに外傾しながら端部付近で内済する。外面には7条の凹線がめぐる長頸壺である。

G-36 弥生 壺 頭部から口縁にかけて大きく外反し口縁端部が拡張される。端面には擬凹線が3条めぐる。内外面にハケ目がみられる。

G-37 弥生 壺 ほぼ直口する口縁をもち、口縁近くで僅かな段を形成する。体部にかけては粗いハケ目がみられる。

G-38 土師器 壺 体部上端から僅かに外反し口縁にいたる。内外面ともナゲ調整がみられる。



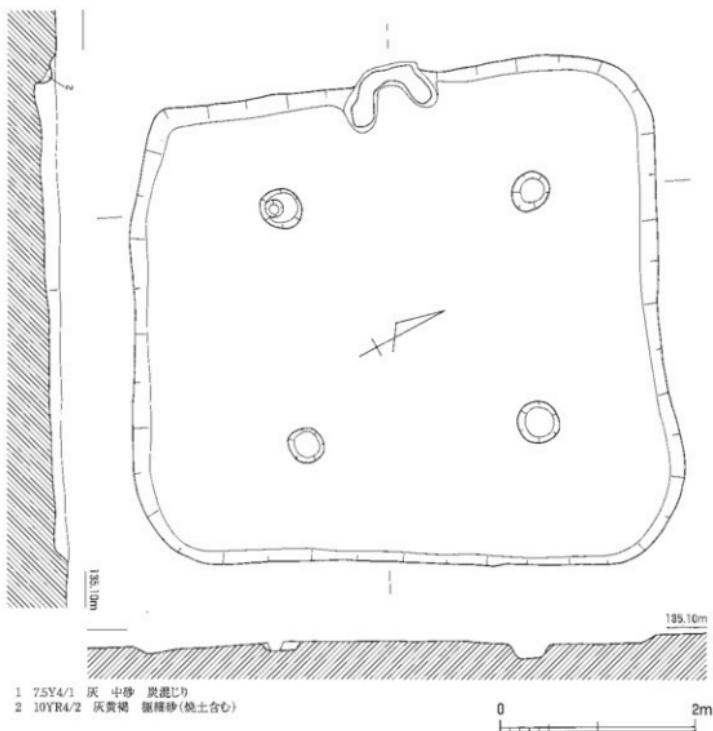
第409図 G-SH08出土縄文土器等

## G-SH09

検出状況 調査区中央北半に位置する。G-SH10、11を切っている。

形態・規模 平面は方形を呈する。南北方向で5.4m、東西方向で5.2mを測る。検出面からの深さは15cmほどである。

屋内施設 壺・柱穴を検出した。



第410図 G-SH09平面図

竈 西壁の中央に造りつけられている。燃焼部の幅は元来 40 cm 程であったと考えられる。

柱 穴 主柱穴を 4 基検出した。掘り方の直径は 40 cm、床面からの深さ 15 cm である。

出土遺物

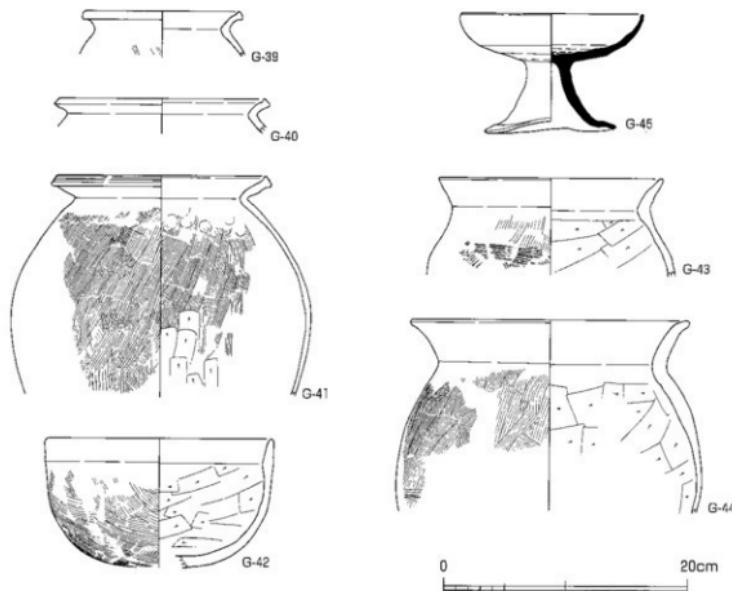
G-39 弥生 壺 屈曲する頸部から口縁にかけて外反する資料である。口縁端部は上下方向に拡張される。体部の一部にはハケ目がみられる。

G-40 弥生 壺 屈曲する頸部から口縁にかけて短く外傾する資料である。口縁端部は上方向に拡張され段をもつ。

G-41 弥生 壺 最大径が体部中央に位置する中型の壺で、屈曲した頸部から短く外傾する口縁にいたる。口縁端部上がつままれ段をもつ。口縁部端部は 2 条の擬凹線がめぐる。体部外面は斜め方向のハケ目調整がみられ内面上部は斜め方向のハケ目、下半は縱方向のヘラケズリがみられる。

G-42 土師器 鉢 丸底でなだらかにカーブする体部から、直口とする口縁にいたる。口縁下付近で肥厚し、段を形成する。体部外面にはハケ目が、内面はヘラケズリが見られる。

G-43 土師器 壺 屈曲する頸部から口縁にかけて外傾し口縁端部は器壁が薄くなる。頸部から体部



第411図 G-SH09出土弥生土器・土築器等

にかけて直線的に膨らむ。体部外面は不定方向のハケ目、内面はヘラケズリが見られる。

G-44 土師器 壺 屈曲ぎみの頭部から口縁にかけて外反し、口縁端部は器壁が薄くなる資料である。

頭部から体部にかけては球形に膨らむ。体部外面は斜め方向のハケ目、内面は横方向のヘラケズリが見られる。

G-45 須恵器 高杯 湾曲する杯部と接合部から下端にわたって外湾する脚部からなる資料である。脚部下端において段差が認められる。

#### G-SH10

検出状況 調査区中央北半に位置し、G-SH09、SH11 に北端を切られる。また、G-SB06 に切られる。

形態・規模 平面は北西 - 南東方向に長い溝丸長方形を呈する。東西方向で 9.5m、南北方向で 7 m 以上の規模である。検出面からの深さは、30 cm である。

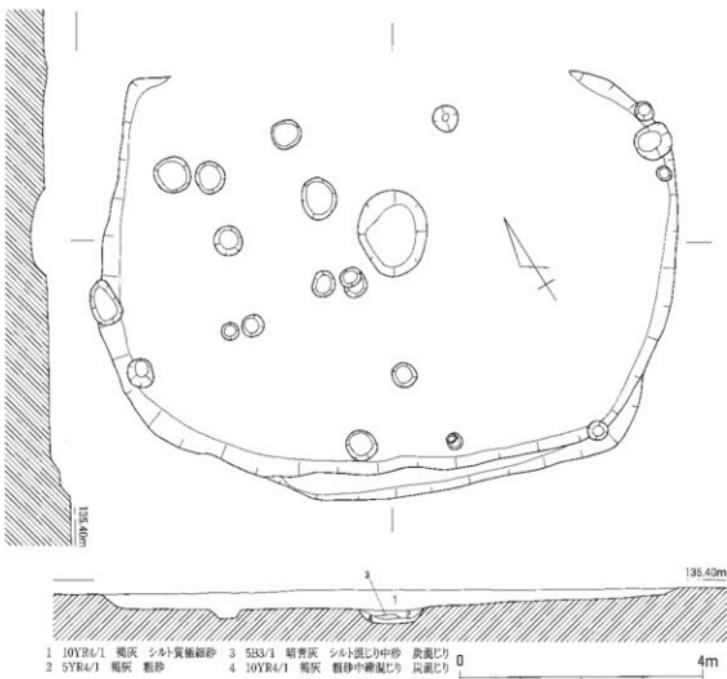
屋内施設 中央土坑・柱穴を検出した。

中央土坑 ほぼ中央に位置し、南北方向 140 cm、東西方向 120 cm の規模である。床面からの深さは 25 cm である。

柱 穴 床面上で 10 基以上の柱穴を検出したが、ほぼ全てが西半に集中している。主柱穴を特定することはできなかった。

出土遺物

G-46 弥生 壺 体部上半と頭部の接点は屈曲ぎみに口縁にかけて外反する。口縁端部は外方につま



第412図 G-SH10平面図

まれる。外面には丁寧なヘラミガキが施される。

G-47 土師器 壺 二重口縁をもち、屈曲部がやや長く、球形の胴部にいたる。胴部外面に横方向のハケ目、内面は横方向のヘラケズリがみられる。

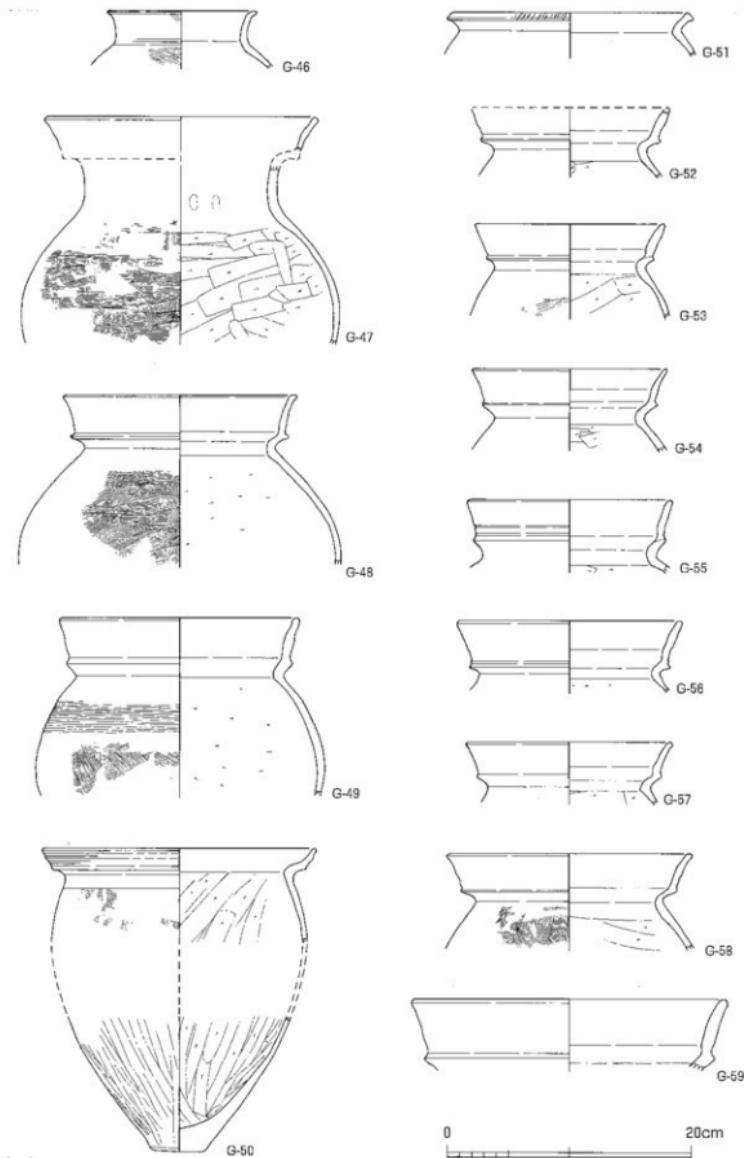
G-48 土師器 壺 二重口縁をもち、屈曲部の突出が著しい。体部は球形を呈し体部外面はクシガキ直線文と波状文が施される。内面は最短頸下方でヘラケズリが見られる。

G-49 土師器 壺 二重口縁をもち、屈曲部の突出は少ない。体部は球形を呈し体部外面はクシガキ直線文が施され、下半ではハケ目調整が見られる。内面は最短頸下方でヘラケズリが見られる。

G-50 土師器 壺 口縁は短く外方に開く。体部の膨らみは少なく底部にいたる。口縁端部には細かなクシガキ状の線が施され、体部上半はハケ目、下半はヘラミガキが見られる。体部内面はヘラケズリがされる。

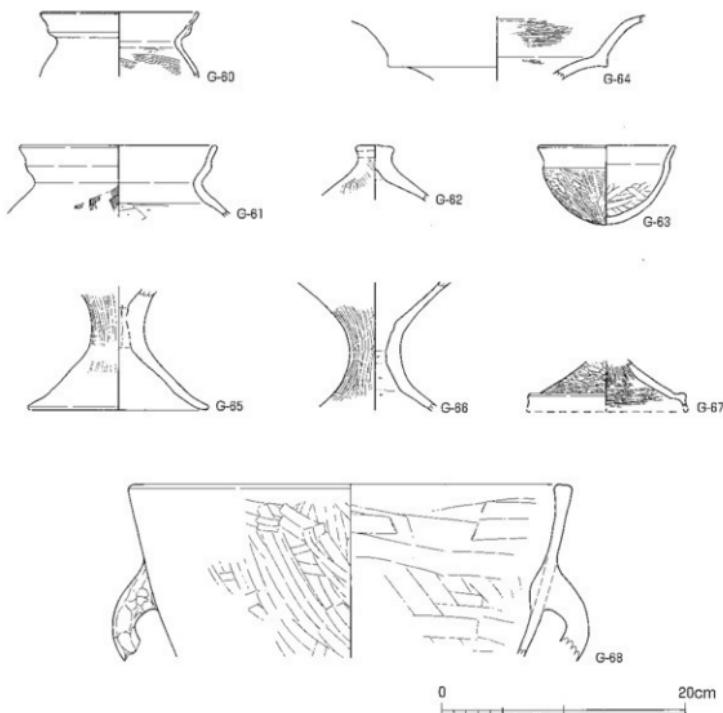
G-51 弥生 壺 屈曲する頭部から口縁にかけて短く伸びる資料である。口縁端部は両端方向に拡張される。口縁外面にはヘラによる斜線文がみられる。

G-52 土師器 壺 二重口縁をもち、屈曲部の突出が著しい。体部以下は欠失する。内面は最短頸下方でヘラケズリが見られる。



第413図 G-SH10出土土器-1 弥生土器等

第11節 G 地区の遺構と遺物



第414図 G-SH10出土土器-2 土築器

G-53 土築器 壺 二重口縁をもち、屈曲部の突出が著しい。体部は膨らみが少なく、中央部以下は欠失する。体部外面の一部にタタキが残り、内面は最短頸下方でヘラケズリが見られる。

G-54 土築器 壺 二重口縁をもち、屈曲部の突出が著しい。体部中央部以下は欠失する。内面は最短頸下方でヘラケズリが見られる。

G-55 土築器 壺 二重口縁の開きは少なく、屈曲部の突出は少ない。口縁部下部に振門線が2条施される。体部上半以下は欠失し、内面は最短頸下方でヘラケズリが見られる。

G-56 土築器 壺 二重口縁をもち、屈曲部の突出が著しい。体部上半以下は欠失する。内面は最短頸下方でヘラケズリが見られる。

G-57 土築器 壺 二重口縁をもち、屈曲部の突出が著しい。体部上半以下は欠失する。二重口縁内部は押さえられ凹む。内面は最短頸下方でヘラケズリが見られる。

G-58 土築器 壺 二重口縁をもち、屈曲部の突出が著しい。体部中央部以下は欠失する。体部外面は縱方向のハケ目があり、内面は最短頸下方でヘラケズリが見られる。

G-59 土築器 壺 二重口縁をもち、屈曲部の突出が著しい。体部以下は欠失する。二重口縁内部は

押さえられ凹む。

G-60 土師器 壺 二重口縁をもち、屈曲部は弱くの突出も少ない。体部の膨らみは少なく、中央部以下は欠失する。体部内面は最端頸下方でハケ目が見られる。

G-61 土師器 壺 二重口縁状を呈するが、屈曲部は弱い。体部は膨らみ、中央部以下は欠失する。体部外面は一部にハケ目、内面は最端頸下方でヘラケズリが見られる。

G-62 土師器 蓋 つまみ部天井は若干突出する。体部は直線的に開き、外面はハケ目がみられる。

G-63 土師器 鉢 僅かに外反する口縁から丸い底まで湾曲する。口縁部の内外面はナデ、体部は内外面ともヘラミガキが見られる。

G-64 土師器 壺 二重口縁部分で、口縁は大きく開く。内外面ともヘラミガキがみられる。

G-65 土師器 器台 柱状部から下端にかけて開く。外面は縱方向のヘラミガキがみられる。

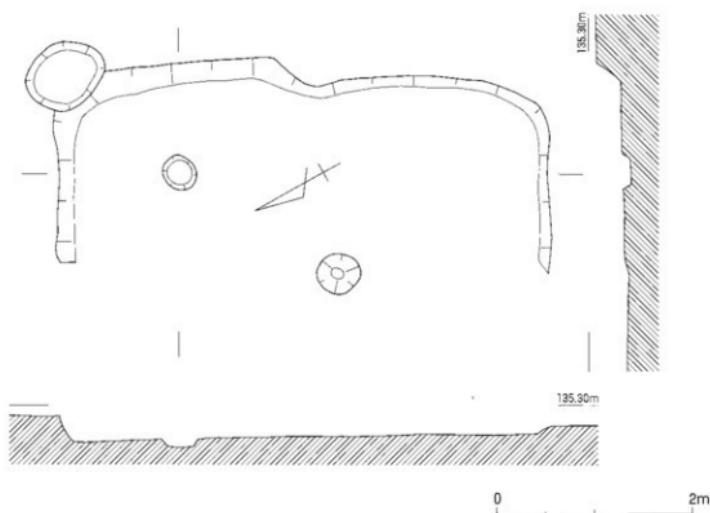
G-66 土師器 器台 柱状部付近の資料である。外面は縱方向のヘラミガキ、内面下部はヘラケズリがみられる。

G-67 土師器 器台 脚下端にかけて開き、下端は段をもち直立する。外面はヘラミガキ、内面上方はハケ目、下方はヘラミガキがみられる。

G-68 土師器 瓶 口縁部端部は平らに押さえられ下部方向に僅かに内湾する。2方向に把手が貼り付けられる。内外面ともナデ調整がみられる。

#### G-SH11

検出状況 調査区中央北半に位置し、G-SH09 に西半部を切られている。また、G-SH10 を切っているが、南西側の立ち上がりについては検出することができなかった。一部を G-SB06 に切られる。



第415図 G-SH11平面図

## 第11節 G 地区の遺構と遺物

形態・規模 平面は方形を呈し、南北方向で 5.1m を測る。床面からの深さは 28 cm である。

屋内施設 柱穴を検出した。

柱 穴 床面では 2 基の柱穴を検出した。北東の 1 基はその配置から主柱穴と考えられる。直径は 35 cm、深さは 10 cm である。

出土遺物

G-69 土師器 壺 二重口縁を呈し口縁にむかって外反する。頸部は直立し、体部は球形に膨らむ。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリされる。

G-70 土師器 壺 口縁部を欠失する資料である。頸部はわずかに外反しながら直立し、体部は球形に膨らむ。体部外面はハケ目があり、内面はヘラケズリされる。

G-71 土師器 壺 二重口縁の開きは少なく、屈曲部の突出も少ない。体部上半以下は欠失し、内面は最短頸下方でヘラケズリが見られる。

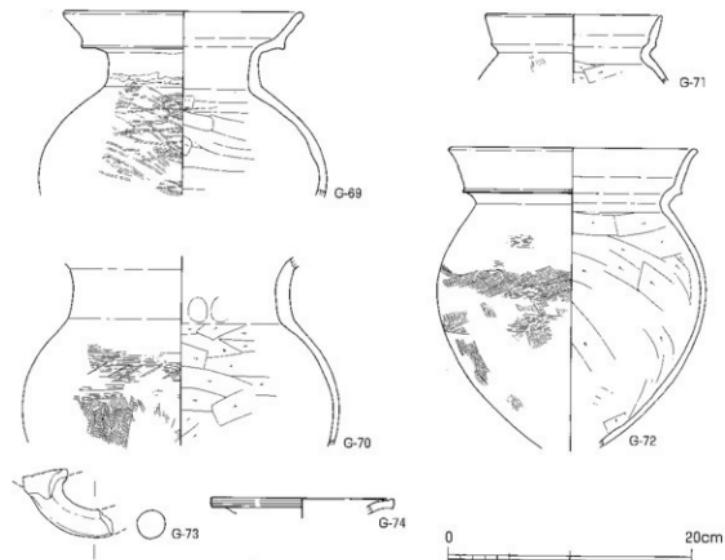
G-72 土師器 壺 二重口縁をもち、屈曲部の突出が著しい。体部はやや上方で最大径を示す。体部外面はハケ目調整が残り、内面は全体にヘラケズリが見られる。

G-73 土師器 把手 径 2.3 cm あり、接合部分で剥がれています。瓶の把手部分の可能性もある。

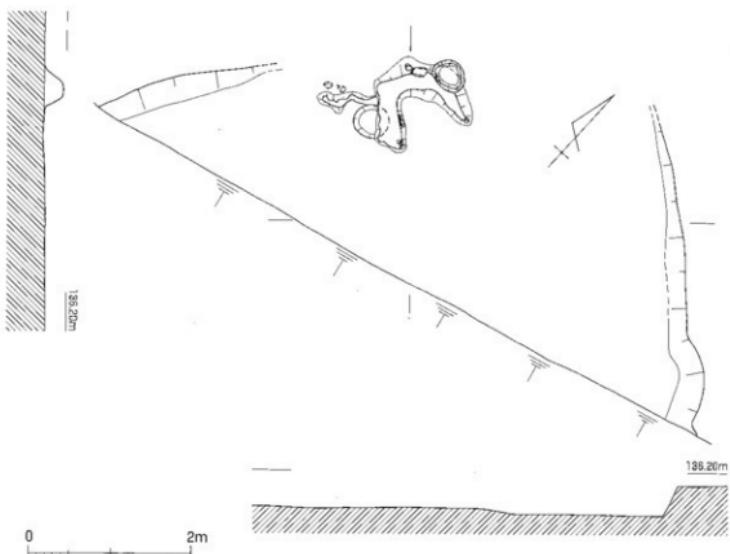
G-74 土師器 器台 受部上端の資料であり、大きく聞く。端部は上方に僅かに拡張され、端部は 2 条の擬凹線がめぐる。

### G-SH12

検出状況 調査区東端に位置する。G-SH03 と切り合い関係にあるが、ほぼ接する形で建ち並んでいる。



第416図 G-SH11出土土師器



第417図 G-SH12平面図

南側の大半を後世に擾乱を受けて消失している。

**形態・規模** 平面は方形を呈する。少なくとも一辺5m以上  
の規模に復元できる。検出面からの深さは35cmである。

**屋内施設** 窓を検出した。

**電** 北西側の壁の中央に造りつけられている。燃焼部は幅50  
cm、奥行き60cmである。

**出土遺物**

G-75 弁生 瓦 扉曲する頭部から口縁にかけて短く外反する資料である。口縁端部は押さえられ外  
方に拡張される。

G-76 土師器 電 扉曲する頭部から口縁にむかい短く外傾する。器壁は厚く砂粒がめだつ。

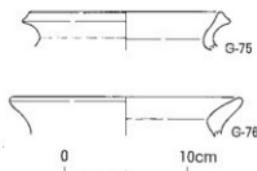
#### G-SX01

**検出状況** 調査区東端に位置する。埋土中に瓦、須恵器片、10~20cm大の亞角礫を含む。

**形態・規模** 平面は不整な方形を呈する。規模はほぼ3m四方である。検出面からの深さは38cmを測る。  
掘り方の断面は鍋底状を呈する。

**出土遺物**

G-77 丸瓦 長さ38.3cm、幅20.0cm、厚さ2.8cmの完形品である。上端と下端は差がある。隅部分は  
各所面取りされる。凸面は繩目タタキ、凹面は布目が見られる。



第418図 G-SH12出土土師器

## 第11節 G 地区の遺構と遺物

G-78 丸瓦 長さ 34.9 cm、幅 18.4 cm、厚さ 2.6 cmで上端が欠ける。上端と下端の差はあまりない。隅部分は各所面取りされる。凸面は縄目タタキ、凹面は布目が見られる。

G-79 丸瓦 長さ 38.6 cm、幅 19.0 cm、厚さ 2.5 cmで下端の一部が欠ける。上端と下端の差は若干みられる。隅部分は各所面取りされる。凸面は縄目タタキ、凹面は布目が見られる。

G-80 丸瓦 長さ 38.5 cm、幅 14.1 cm、厚さ 1.9 cmで下端の一部が欠ける。上端と下端の差は少ない。隅部分は各所面取りされる。凸面は縄目タタキ、凹面は布目が見られる。

G-81 丸瓦 下端の破片である。隅部分は各所面取りされる。凹面は布目が見られる。

G-82 平瓦 破片資料である。凸面に格子目タタキがあり、凹面は布目が見られる。

G-83 須恵器 杯蓋 つまみ部分は欠損する大型資料である。やや扁平な天井部から口縁部にかけてなだらかに湾曲する。ヘラキリは天井部付近でみられ、端部内面のかえりは低い。

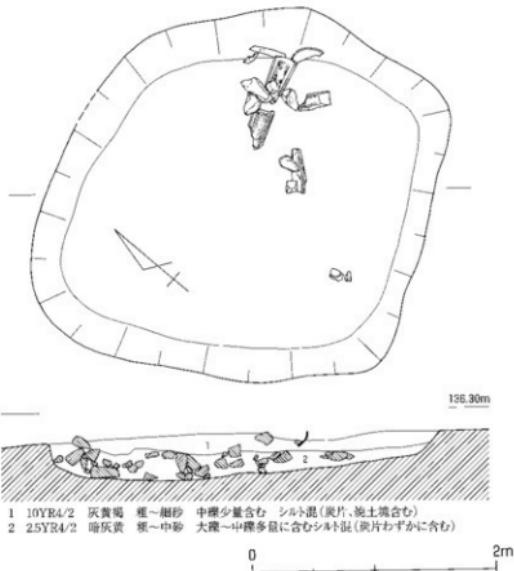
G-84 須恵器 杯蓋 中央が僅かに突出するつまみ部分をもつ資料である。やや扁平な天井部から口縁部にかけてなだらかに湾曲する。ヘラキリは天井部付近でみられ、端部内面のかえりは直立し低い。

G-85 須恵器 杯蓋 つまみ部分は欠損する扁平な資料である。天井部から口縁部にかけてなだらかに湾曲する。ヘラキリは天井部付近でみられ、端部内面のかえりは低い。

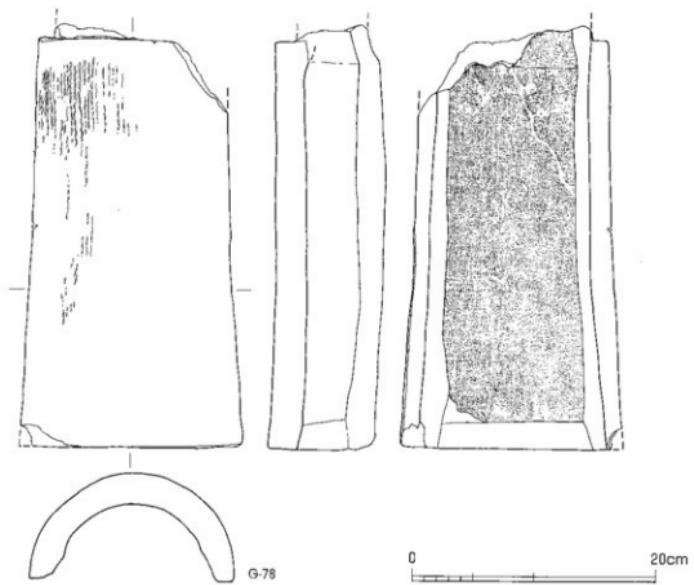
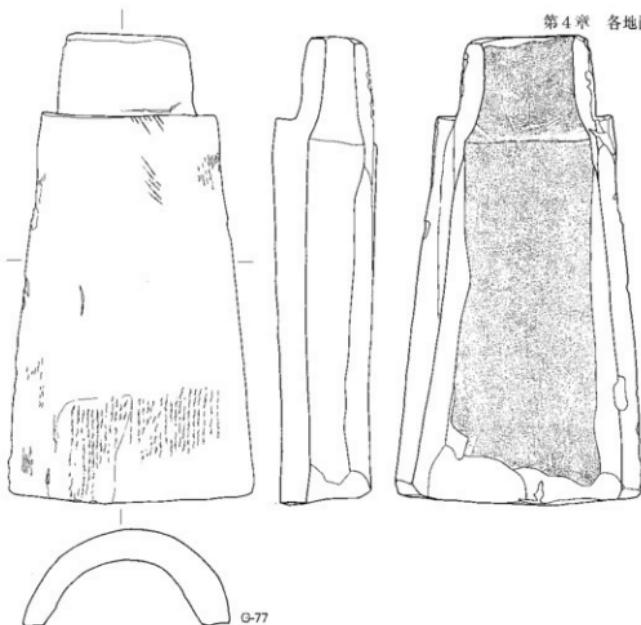
G-86 須恵器 杯身 扁平な底部から口縁部にかけて外傾し、口縁付近で僅かに外反する。

G-87 須恵器 杯身 扁平な底部から口縁部にかけて外傾する。口縁端部付近で僅かに外反する。体部下半で僅かな段を有する。

G-88 土師器 瓢 大きく聞く体部から口縁にいたる資料である。端面にはヘラで押さえられた跡が残る。外面には粗いハケ目が残る。

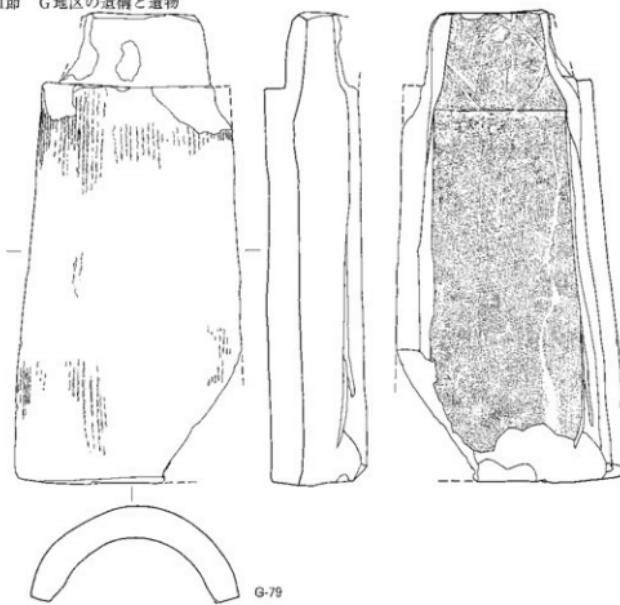


第419図 G-SX01平面図

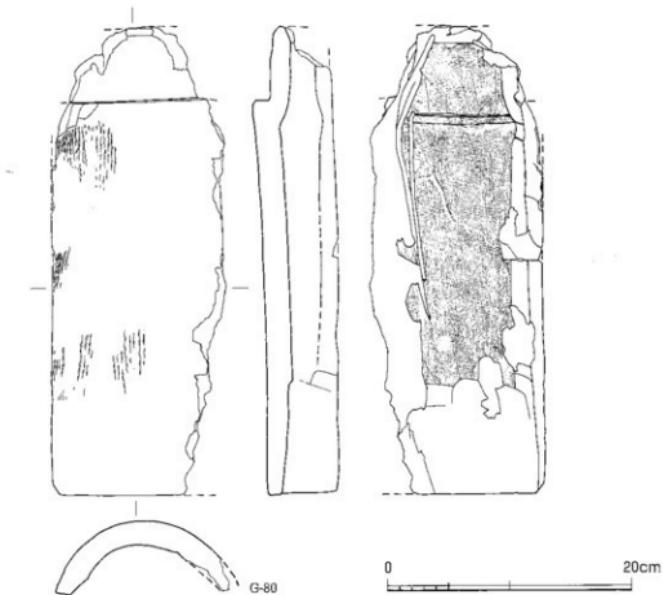


第420図 G-SX01出土瓦1

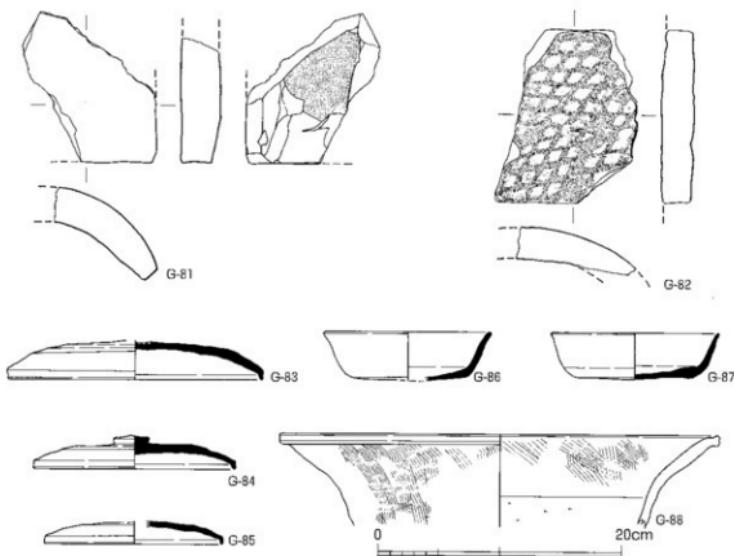
第11節 G 地区の遺構と遺物



G-79



第421図 G-SX01出土瓦2



第422図 G-SX01出土瓦3・須恵器等

## 掘立柱建物

## G-SB01

検出状況 調査区北東端に位置する。調査区外北側へさらに延びる。

形態・規模 建物の主軸は N<sup>6°</sup> E である。梁方向は検出できていない柱穴もあるが3間に復元される。桁方向は5間以上の建物である。建物の規模は、梁方向で 5.6 m、桁方向で現存値で 9 m を測る。柱間距離はほぼ 1.8 ~ 2.0 m である。

柱 穴 掘り方の平面形は円形が主で、直径は 60 cm ~ 1 m である。

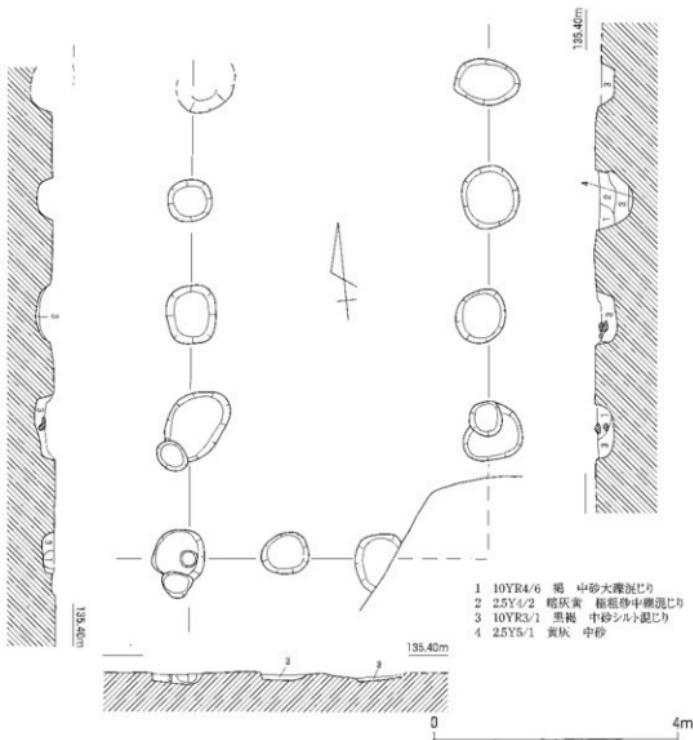
## G-SB02

検出状況 調査区北東端に位置する。調査区外北側へさらに延びる。

形態・規模 建物の主軸は N<sup>3°</sup> E である。梁方向は3間、桁方向は4間以上の建物である。建物の規模は、

G 地区掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	間数	規模(m)	方 位	堤 方	時 期	備 考
G-SB01	5以上×3	9以上×5.6	N <sup>6°</sup> E	円形	奈良時代	
G-SB02	3以上×3	6.6以上×5.4	N <sup>3°</sup> E	円形	奈良時代	
G-SB03	2×2	4.2×4.0	N <sup>2°</sup> E	円形	奈良時代	籠柱
G-SB04	4×3	7.4×5.5	N <sup>26°</sup> W	円形	不明	
G-SB05	2×1	3.3×3.5	N <sup>58°</sup> W	円形	奈良時代?	南面庇存在か
G-SB06	2×2	2.5×3.6	N <sup>82°</sup> W	円形	奈良時代?	籠柱



第423図 G-SB01平面図

梁方向で 5.4 m、桁方向で現存値 6.6 m を測る。柱間距離は梁方向で 1.8 m、桁方向で 2.0 m である。

**柱穴** 挖り方の平面形は円形が主で、直径は 60 cm 前後である。

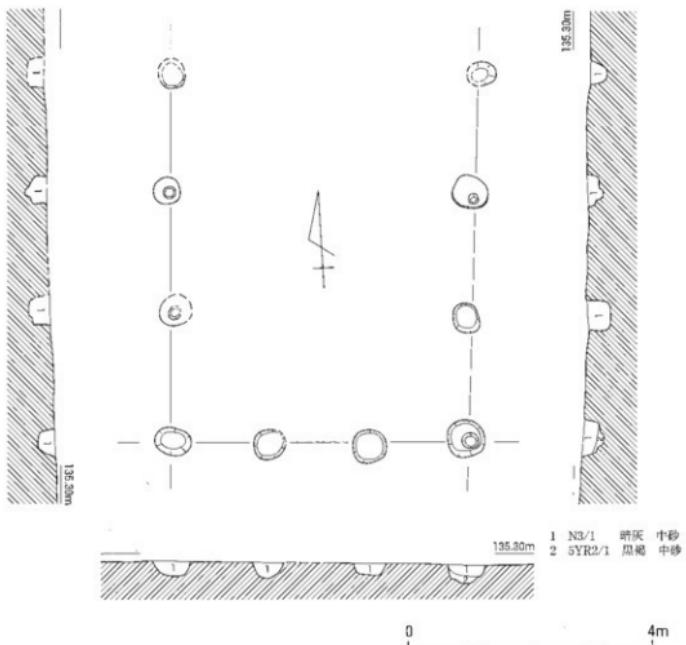
#### G-SB01・SB02 出土遺物

**G-126 須恵器 杯蓋** G-SB01 出土で、つまみ部分は欠損し扁平な資料である。天井部は平らで屈曲しながら直線的に口縁部いたる。ヘラキリは天井部付近でみられ、端部内面のかえりは低い。

**G-127 須恵器 杯身** G-SB01 出土で、扁平な底部から口縁部にかけて短く外傾する。口縁端部内面で 1 条の沈線がみられる。

**G-128 須恵器 杯身** G-SB01 出土で、高台は直立し、やや垂れ下がった底部から体部は外傾し口縁部にかけて直線的にのびる。

**G-129 須恵器 杯身** G-SB02 出土で、体部中央付近で屈曲が見られる稜腕である。その屈曲度は弱くやや湾曲し口縁部にかけて外反する。体部下半以下は欠損する。



第424図 G-SB02平面図

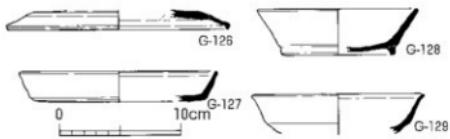
**G-SB03**

検出状況 調査区中央北半に位置する。

形態・規模 建物の主軸は N2° E である。東西方向 2 間、南北方向 2 間の總柱建物である。建物の規模は、梁方向で 4 m、桁方向は現存値で

4.2 m を測る。柱間距離はおよそ 1.8 m である。

柱穴 掘り方の平面形は円形が主で、直径は 40 ~ 60 cm である。検出面からの深さは 40 cm ほどである。



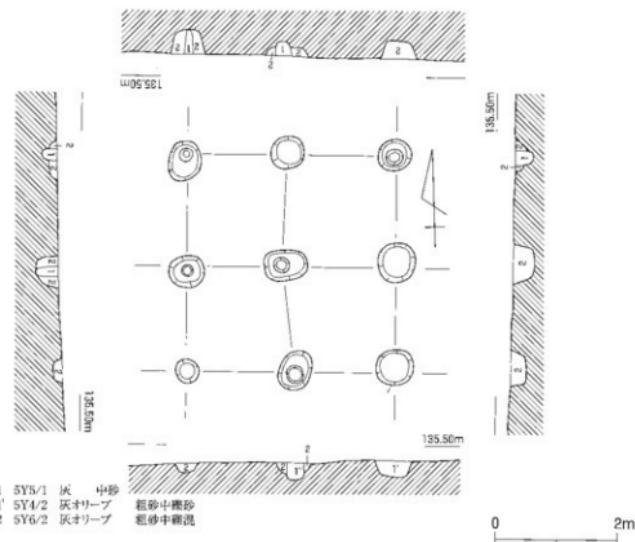
第425図 G-SB01・SB02出土土器

**G-SB04**

検出状況 調査区東半中央に位置する。

形態・規模 建物の主軸は N26° W である。梁方向は 3 間、桁方向は 4 間の建物である。建物の規模は、梁方向で 5.5 m、桁方向は現存値で 7.4 m を測る。柱間距離は梁方向で 1.6 ~ 1.8 m、桁方向で 1.7 ~ 2.0 m である。

柱穴 掘り方の平面形は円形が主で、直径は 40 ~ 60 cm である。検出面からの深さは 40 cm ほどである。



第426図 G-SB03平面図

**G-SB05**

検出状況 調査区中央北半に位置する。G-SH09 にはば接する形で検出された。

形態・規模 建物の主軸は N58°W である。梁方向 1 間、桁方向 2 間の建物であるが、桁方向南側にもう 1 つ柱列が並行しており、間隔から庇などの施設にともなう可能性が考えられる。建物の規模は、梁方向で 3.3m、桁方向で 3.5m を測る。桁方向の柱間距離はおよそ 2.0m である。庇列との間は 40cm である。柱穴 挖り方の平面形は不整ながらも円形が主で、直径は 20 ~ 40 cm である。検出面からの深さは 40 cm ほどである。

**G-SB06**

検出状況 調査区中央に位置する。G-SH10、11 と切り合う。

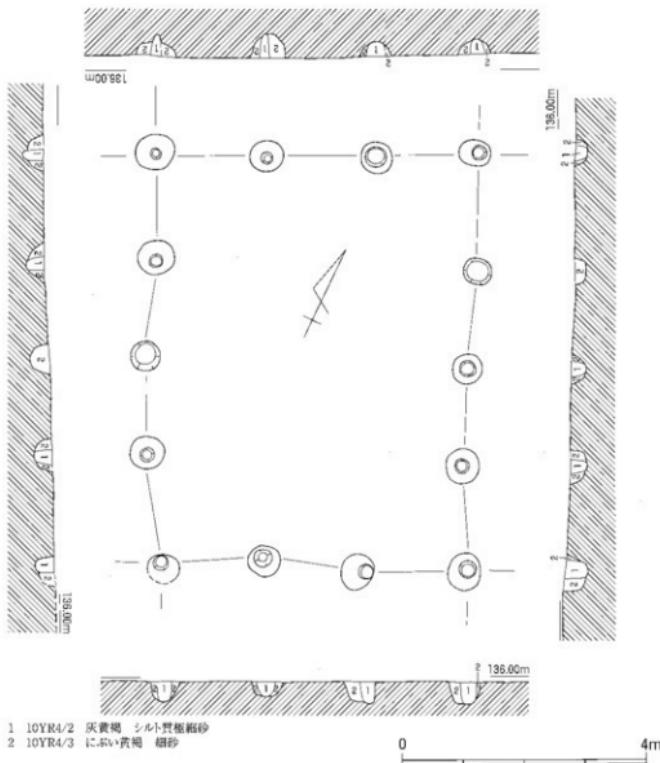
形態・規模 建物の主軸は N82°W である。梁方向 2 間、桁方向 2 間の建物である。建物の規模は、梁方向で 2.5m、桁方向で 3.6 m を測る。桁方向の柱間距離はおよそ 1.6 m、針方向では 1 m 前後である。

柱穴 挖り方の平面形は不整ながらも円形が主で、直径は 20 ~ 50 cm である。検出面からの深さは 20 cm ほどである。

**G-SA01**

検出状況 調査区北東隅に位置する。調査区外北へさらに延びる可能性がある。G-SB01 とは並行して 5 m の間隔をあけて構築されている。

形態・規模 建物の主軸は N10°E である。現存値で全長は 6.7m である。



第427図 G-SB04平面図

**柱穴** 掘り方の平面形は円形が主で、5基の柱穴からなる。直径は30~50cmである。検出面からの深さは20cmほどである。

#### G-SA02

**検出状況** 調査区北東隅に位置する。調査区外北へさらに延びる可能性がある。G-SB02の東側約2m離れて構築されている。

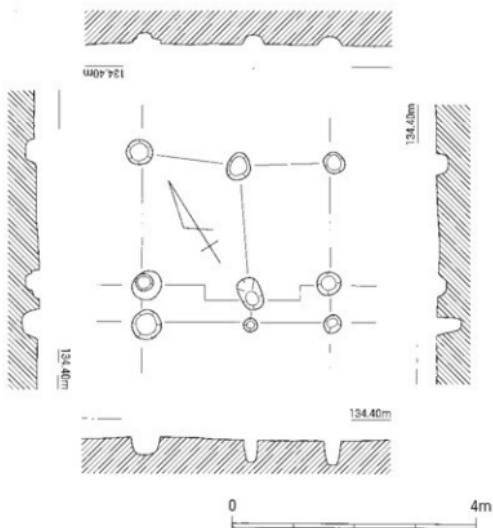
**形態・規模** 建物の主軸はN11°Eである。現存値で全長は5.8mである。

**柱穴** 掘り方の平面形は円形が主で、4基の柱穴からなる。直径は30~50cmである。検出面からの深さは20cmほどである。

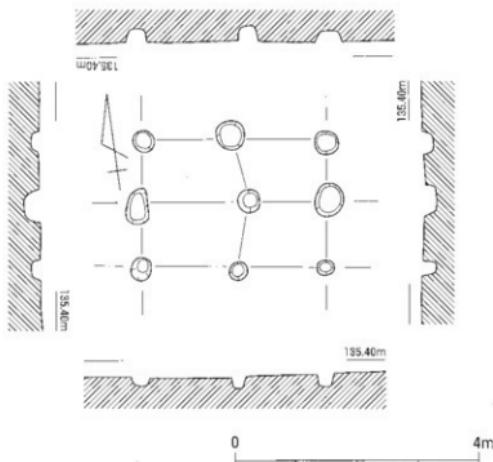
#### G-ST01

**検出状況** 調査区東部中央に位置する。明確な掘り方ではなく、遺構検出時に土器を検出したため、慎重

第11節 G 地区の遺構と遺物



第428図 G-SB05平面図



第429図 G-SB06平面図

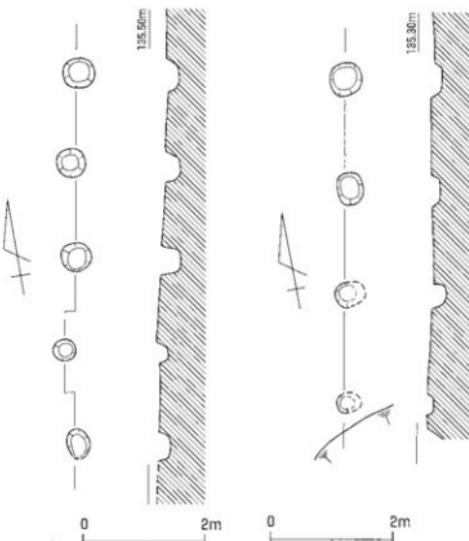
に掘り下げていった。断ち割って断面を観察したが、明確な土層の差異は認められなかった。なお、身となる壺はやや東に傾いてはいるがほぼ直立させてある。口縁部から体部にかけては破損しているが、故意に打ち欠いたものかどうかは判断できない。蓋に相当する土器は検出できなかった。

**形態・規模** 身となる壺の現存する頂部から底部までは 24 cm を測る。

#### 出土遺物

G-89 弥生 鉢 屈曲した頸部から胴部中央で屈曲し、底部にいたる扁平な器形である。口縁外面には擬凹線が 1 条施される。体部内面上半にヘラミガキがみられる。

G-90 弥生 壺 長胴の大型の壺で、最大径が体部中央付近に位置する。体部から底部にかけてなだらかにすぼまり、底部は厚い。体部外面輻方向のハケ目調整がみられ、内面はヘラケゼリされる。



第430図 G-SAO1平面図

第431図 G-SAO2平面図

#### G-SK01

**検出状況** 調査区中央に位置する。柱穴 2 基が切り合っている。

**形態・規模** 平面は隅円長方形を呈し、長軸方向で 82 cm、短軸方向で 65 cm を測る。検出面からの深さは 5 cm で、掘り方の断面形態は皿状を呈する。

#### 出土遺物

G-91 弥生 器台 大きく外反する口縁部で、両端が拡張され擬凹線が 3 条めぐる。内外面ともナデ調整される。

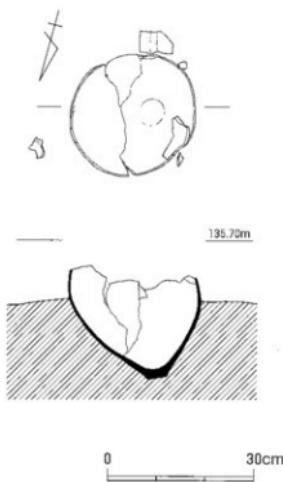
#### G-SK02

**検出状況** 調査区中央北端に位置する。G-SK05 の南側に近接している。

**形態・規模** 平面は梢円形を呈し、長軸方向で 141 cm、短軸方向で 116 cm を測る。検出面からの深さは 18 cm で、掘り方の断面形態は皿状を呈する。

#### G-SK03

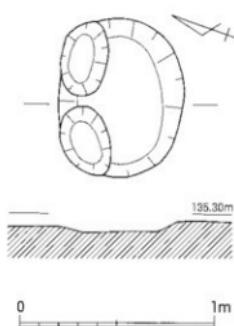
**検出状況** 調査区中央に位置する。4 基の柱穴との切り合いがみられる。



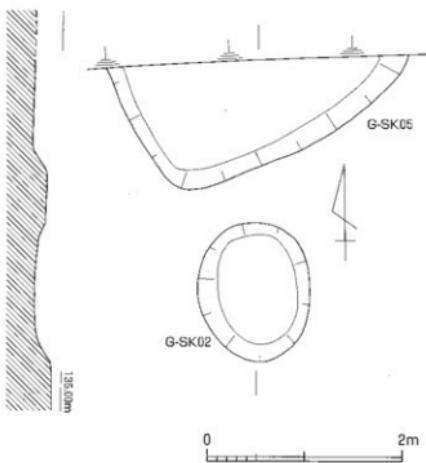
第432図 G-ST01平面図



第433図 G-ST01出土弥生土器



第434図 G-SK01平面図



第435図 G-SK02・SK05平面図

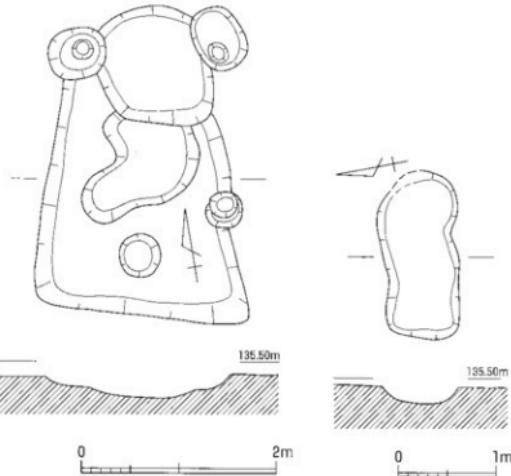
**形態・規模** 平面は不整な長方形を呈し、土坑の中央部分から北側にかけて底面は緩やかなステップ状になっている。長軸方向で3.2m、短軸方向で2.2mを測る。検出面からの深さは20cmで、北端の最深

部では25cmを測る。掘り方の断面形態は皿状を呈する。

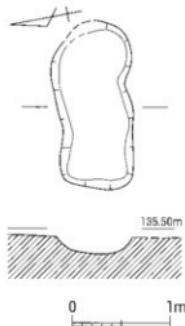
#### G-SK05

**検出状況** 調査区中央北端に位置し、大半は調査区外北へさらに広がっている。G-SK02の北側に近接している。

**形態・規模** 平面は方形のプランであると思われるが、大半は調査区外に統くため検出した範囲では直角三角形様を呈する。現状では最大1辺2.8m以上の規模に復元できる。検出面からの深



第436図 G-SK03平面図



第437図 G-SK06平面図

さは15cmで、掘り方の断面形態は皿状を呈する。

#### 出土遺物

G-92 弥生 壺 頭部から口縁にかけて外傾する。外面はナデ、胴部内面はヘラケズリが見られる。

G-93 弥生 壺 屈曲する頭部から口縁にかけて外傾し、罐部は下に拡張される。端部外面には5条の擬凹線がめぐる。外面はヘラミガキがみられる。

G-94 弥生 壺 屈曲する頭部から口縁にかけて短く伸びる。口縁端部は上方向に拡張され段を形成する。端面には3条の擬凹線が見られる。外面にはユビ押さえ、体部内面はヘラケズリがみられる。

G-95 弥生 壺 屈曲する頭部から口縁にかけて短く外反する。口縁端上部は上方向につまみ段を形成する。端面には2条の擬凹線が見られる。体部外面にはハケ日、内面はヘラケズリがみられる。

G-96 須恵器 杯身 直立する高台をもち、体部は欠損する資料である。底部外面には「方□」の墨書きが残る。

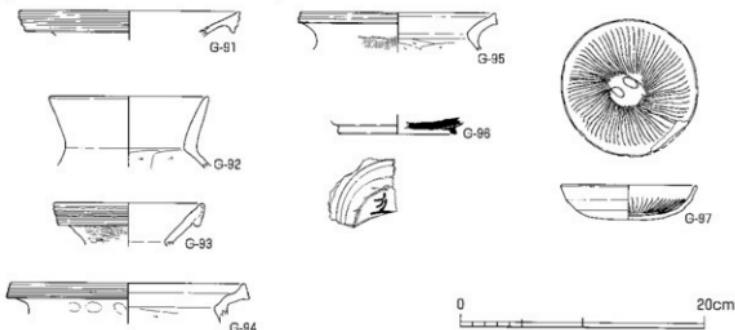
G-97 土師器 杯 丸みを帯びた底部からなだらかに体部、口縁にいたる資料である。体部下半に縱方向の暗文が施され、その延長で底は螺旋状を呈する。

#### G-SD01・SD02

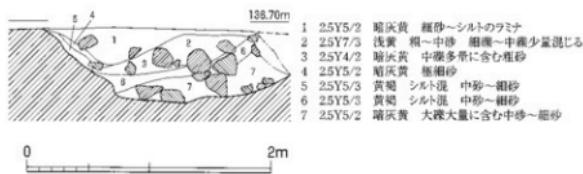
**検出状況** 調査区東部域で検出され、F2区から西へ延び途中調査区南東部の擾乱により大きく掘削され消失している。西寄りでG-SD02があり、G-SD01の延長と考えられる。位置関係からすると同一遺構と考えられる。

**形態・規模** 東西両端は若干南へ湾曲し、その間は約40mをはかり方形を呈するものかもしれない。幅は約2.5m、深さ0.8mであり、南側の栗鹿川からの洪水砂による土砂が堆積している。

## 第11節 G 地区の遺構と遺物



第438図 G-SK01～03・05・06出土土器



第439図 G-SD01・SD02断面図

### 出土遺物

G-98 須恵器 杯蓋 G-SD01 出土で、中央が凹むつまみをもつ。扁平な天井部から屈曲し口縁部にかけて外反する。ヘラキリは天井部付近でみられ、端部内面のかえりは直立し屈曲が著しい。

G-99 須恵器 杯蓋 G-SD01 出土で、中央が僅かに凹むつまみをもつ。丸みを帯びた天井部から口縁部にかけてなだらかに湾曲する。ヘラキリは天井部付近でみられ、端部内面のかえりは内傾し低い。

G-100 須恵器 杯蓋 G-SD01 出土で、つまみ部分を欠損した資料である。丸みを帯びた天井部から口縁部にかけてなだらかに湾曲する。ヘラキリは天井部付近でみられ、端部内面のかえりはなだらかで低い。

G-101 須恵器 杯身 G-SD01 出土で、体部中央付近で屈曲が見られる接続である。体部下半は欠損する。屈曲部から口縁にかけては外反し、端部は若干かえりをもつ。

G-102 須恵器 杯身 G-SD01 出土で、ややふんばった高台をもち、底部から外傾する体部をもつ。

G-103 須恵器 杯身 G-SD01 出土で、直立する高台をもち、底部から外傾する体部をもつ。

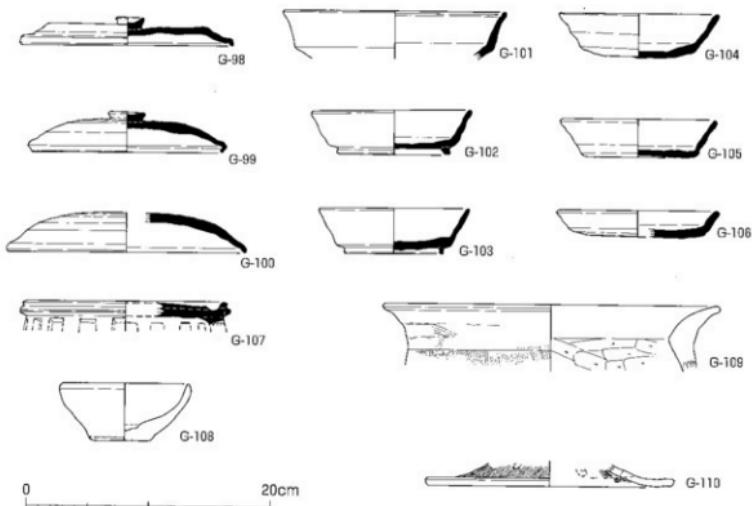
G-104 須恵器 杯身 G-SD01 出土、やや丸みを帯びる底部から体部、口縁にかけて開きながら外傾する。

G-105 須恵器 杯身 G-SD01 出土、扁平な底部から体部を経て段をもち、口縁にかけて外傾する。

G-106 須恵器 皿 平らな底部から体部、口縁へと外傾する。底部と体部の境はやや屈曲する。

G-107 須恵器 円面鏡 G-SD01 出土、天井である鏡面と体部上半が残存する踏脚鏡である。円面外周は墨滴りの溝があり、体部は長方形の透かしが連続する。

G-108 上師器 梱 G-SD01 出土で、分厚い底部から直線的に外傾し、口縁にかけては直立ぎみになる。



第440図 G-SD01・SD02出土須恵器等

G-109 土師器 瓢 G-SD01 出土で、胴部から口縁にかけては湾曲する。頭部から口縁にむかひ短く外傾する。体部外面はハケ目、内面は器壁が厚く砂粒がめだつ。

G-110 异生 高杯 G-SD02 出土で、脚部下半の破片である。下半部端にかけては大きく開く。一部に穿孔がみられ、内外面ともハケ目がみられる。

#### 流路状落ち込み

検出状況 調査区南西域で検出された流路状の落ち込みである。北方向には流路幅が狭くなり二手に分流する流路へとつながる。

形態・規模 南方を東から西へ流れる栗鹿川の洪水時の水流痕跡と考えられる。東西の幅約 25m、南北約 30m の規模で深さは 0.3m である。

#### 出土遺物

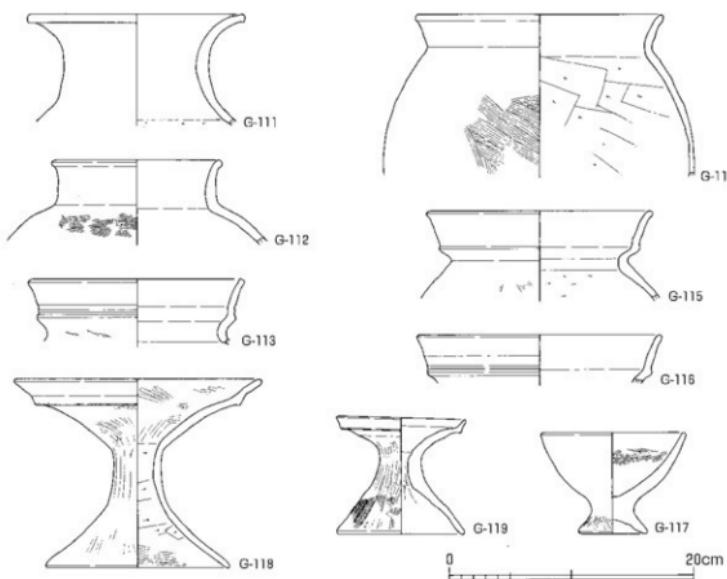
G-111 异生 壺 頭部がやや長く、口縁は外反する。口縁端部は外方に向かい平坦になでられる。胴部上端内面はケズリがみられる。

G-112 异生 瓢 直立ぎみに立ちあがった頭部から口縁にかけて外反する。端部は丸く收められる。体部中央以下は欠損するが、おおむね球形を呈する。外面はハケ目、内面はナデ調整がみられる。

G-113 土師器 瓢 二重口縁を呈し、口縁の開きは少ない。屈曲部の突出がみられ、口縁部下部に擬凹線が2条施される。体部上半以下は欠失し、内面は最短頭下方でヘラケズリが見られる。

G-114 土師器 瓢 球形の体部から口縁にかけてはわずかに外反する。体部外面にはハケ目、内面はヘラケズリが施される。

G-115 土師器 瓢 二重口縁を呈し、屈曲部の突出が著しい。体部上半以下は欠失し、二重口縁内部



第441図 流路状落ち込み出土土器

は押さえられ凹む。内面は最短頭下方でヘラケズリが見られる。

G-116 土師器 壺 二重口縁を呈し、口縁部の開きは少ない。口縁部下部に擬凹線が1条施される。体部以下は欠失する。

G-117 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもつ小型の鉢で、内湾し口縁にいたる。内外面の一部にハケ目がみられる。

G-118 土師器 器台 杯部口縁下部で凸部を設け、段を形成する。脚部は段や拡張ではなく、杯部より小さく聞くものである。内外面ともヘラミガキが見られる。

G-119 土師器 器台 杯部口縁直下で段を形成し、脚端部にかけて聞く。脚部は段や拡張ではなく、内外面ともヘラミガキが見られる。

#### G- ピット出土

G-120 繩文 深鉢 G-P320 出土である。口縁は外傾し、口縁直下に垂れ下がった状態の貼付凸帯を巡らす。口唇部には刻みがなく、凸帯は棒状工具を押圧により刻みをつけた縄文晚期後半凸帯文土器である。

G-121 繩文 深鉢 G-P103 出土である。口縁は直立し、口縁下部に断面台形の貼り付け凸帯を巡らす。口唇部には刻みはなく、凸帯上はヘラ状工具で刻みをつけた縄文晚期後半凸帯文土器である。

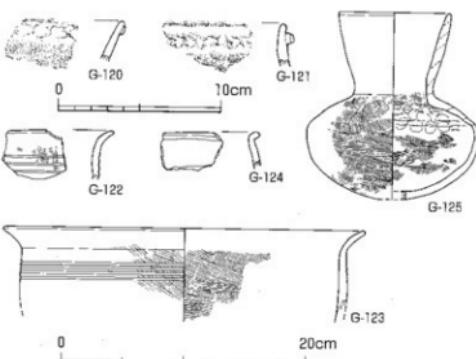
G-122 弥生 壺 G-P264 出土である。口縁は外反し体部にかけて直立する。口唇部には刻みはなく、体部上部にヘラガキ沈線が3条めぐる。内外面ともハケ目調整が見られる。弥生前期の資料である。

G-123 弥生 壺 G-P133 出土である。口縁は外反し体部から底部にかけてゆるやかに内湾する。口

唇部には刻みはなく、体部上部にヘラガキ沈線が4条めぐる。内外面ともハケ目調整が見られる。弥生前期の資料である。

G-124 弥生 壺 G-P247 出土である。口縁は鋭く外反し体部にかけて湾曲する。口唇部や体部上部にも文様はない。内外面ともナデ調整される。弥生中期前葉の資料である。

G-125 弥生 壺 G-P13・14 出土である。頸部から口縁にかけて長く、僅かに外傾する。体部は上半で最大頭を示し、丸底にいたる。胴部外面はハケ目、胴部内面上半はユビ押さえ、下半はハケ目がみられる。



第442図 G-SP出土土器

### 流路

検出状況 調査区中央を西流する。擾乱を受けているため、断続的にした検出できなかった。西端は圃場整備による削平を受けて、底部付近を検出するにとどまっているため、肩などは不明瞭である。

形態・規模 幅は広いところで5m、検出面からの深さは50cmである。

### 出土遺物

#### 北西隅落ち込み・流路

G-130 弥生 壺 北西隅落ち込み出土である。口縁中間部分で屈曲し端部は直立する。胴部は球形に膨らむ。体部外面はハケ目、内面はハケ目調整の後部分的にヘラミガキがみられる。

G-131 上傳器 壺 北西隅落ち込み出土である。屈曲する頸部から口縁にかけて短く伸びる資料である。口縁端部は上方に向て拡張され屈曲する。体部内外面ともハケ目調整がみられる。

G-132 弥生 高杯 北西隅落ち込み出土で、杯部下半から脚柱部の資料である。脚柱部がやや長く中空であり、脚柱下部から縫部にかけて大きく開く。杯部内外面はヘラミガキがみられる。

G-133 弥生 壺 流路出土である。頸部から口縁にかけて大きく外反する。口縁端部は上下に拡張され、3条の擬凹線がめぐる。胴部は球形で、僅かに肥厚し底部にいたる。胴部外面は一部にヘラミガキ、内面はヘラケズりが見られる。

G-134 弥生 壺 流路出土である。頸部から口縁にかけて直立し、縫部にかけて外反する。口縁端部は上方に拡張され、2条の擬凹線がめぐる。胴部にかけては大きく開く。頸縫部外面はヘラミガキ、縫部内面はヘラケズりが見られる。

G-135 弥生 壺 流路出土である。頸部から口縁にかけてやや外反し、縫部にかけて上方につまみ上げられる。縫部外面は3条の擬凹線がめぐる。胴部の膨らみは少ない資料である。頸縫部外面はヘラミガキ、縫部内面はヘラミガキ、胴部内面はユビ押さえが見られる。

G-136 弥生 壺 流路出土である。頸部から口縁にかけてやや外反し、縫部にかけて上方につまみ上

## 第11節 G 地区の遺構と遺物

げられる。端部外面は2条の擬凹線がめぐる。頭部と胴部は屈曲し胴部にかけて膨らむ。胴部外面の一部にハケ目、内面の一部にヘラケズリがみられる。

G-137 弥生 壺 流路出土である。頭部から口縁にかけて長く伸び、ほぼ直口する口縁にいたる。文様はなく、外面は縱方向のヘラミガキ、内面はナデ調整がみられる。

G-138 弥生 壺 流路出土である。頭部から口縁にかけて長く、ほぼ直口する口縁にいたる。胴部は縱長で、底部は明確でない。文様はなく、内外面ともナデ調整がみられ、口縁部内面の一部にヘラミガキがみられる。縱方向のヘラミガキ、内面はナデ調整がみられる。

G-139 弥生 壺 流路出土である。頭部から口縁にかけて長く直立し胴部は最大径が胴部上半に位置する資料である。文様はなく、内外面ともナデ調整がみられ、内面の一部で輪積み痕跡がみられる。

G-140 弥生 壺 流路出土である。頭部から口縁にかけて長く、やや外反しながら口縁にいたる。胴部は縱長で、底部は欠損する。文様はなく、外面はハケ目、頭部内面はハケ目、胴部はヘラケズリがみられる。

G-141 弥生 壺 流路出土である。屈曲する頸部から短く外反し口縁にいたる。口縁部端部は外方から押さえられ尖る。胴部上半以下は欠損し、外面はハケ目、内面はヘラケズリがみられる。

G-142 弥生 壺 流路出土である。頭部から口縁にかけてやや外反し、端部にかけて屈曲し上方に直立する。胴部以下は欠損する資料である。頭部の内外面はハケ目調整される。

G-143 弥生 壺 流路出土である。頭部は直立し口縁中央で段をもち、端部にかけてつまみ上げられる。胴部以下は欠損する資料である。頭部外面の下半にハケ目、頭部内面はハケ目、最短頭下方でヘラケズリが見られる。

G-144 弥生 壺 二重口縁を呈し口縁にむかって外反する。頭部以下は欠損する資料である。内外面ともハケ目が施される。

G-145 弥生 壺 短く直立する頭部から鋭く外反し、口縁部端部にかけてつまみ上げられる。頭部には2箇所の穿孔がみられ、端部には擬凹線が3条めぐる。胴部は短く膨らむ小型資料である。外面の一部にヘラミガキ、最短頭下方で段差をもち、ユビ押さえが見られる。

### G- 流路（壺）

G-146 弥生 壺 屈曲する頭部から口縁にかけて短く外反する。口縁端部は上方向に拡張され、面には3条の擬凹線が見られる。体部外面はハケ目、内面はヘラケズリがみられる。

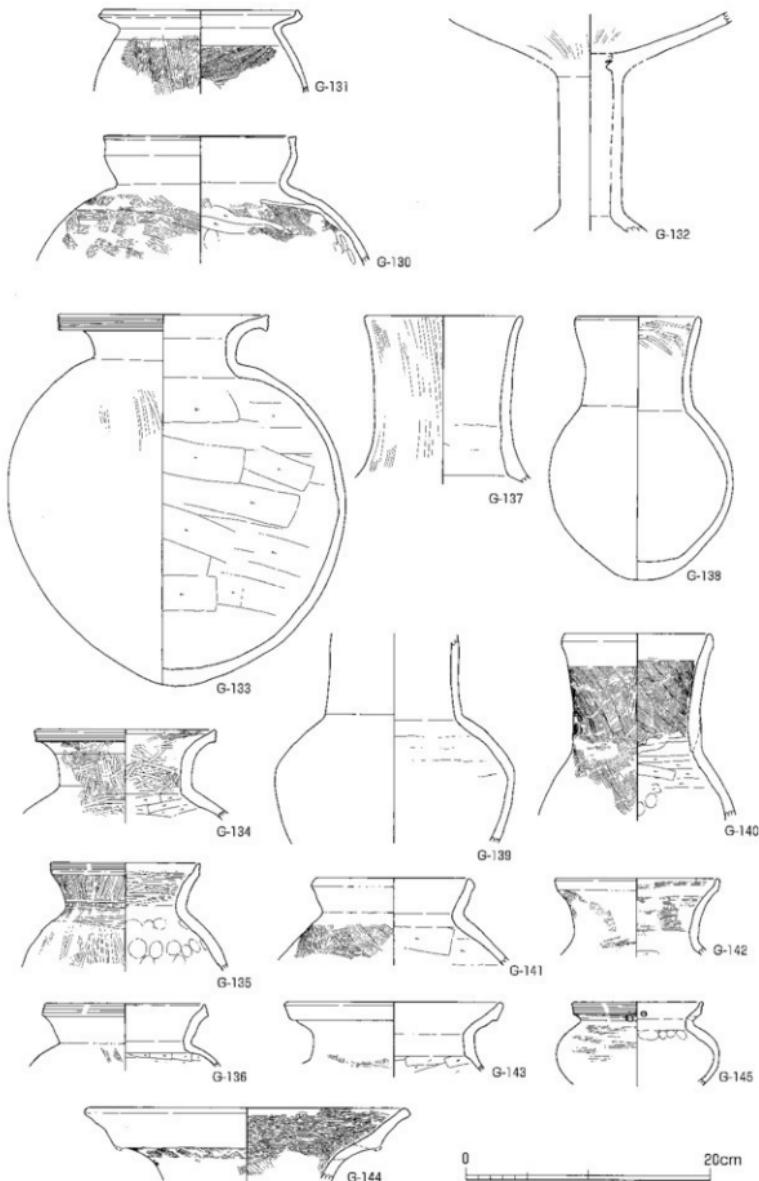
G-147 弥生 壺 屈曲する頭部から口縁にかけて短く外傾し、体部の膨らみは少ない。口縁端部は両端方向に拡張される。端面には3条の擬凹線が見られ、体部には把手の痕跡がみられる。

G-148 弥生 壺 短く外傾する口縁部と体部上半の資料である。口縁端部には1条の擬縄文がめぐる。体部外面はタタキのちハケ目、内面はヘラケズリがみられる。

G-149 弥生 壺 屈曲する頭部から短く外傾する口縁部にいたる。口縁端部は側面から押さえられる。体部の膨らみは少なく、中央以下は欠損する。体部外面はハケ目のちヘラミガキ、内面は最短頭下方でヘラケズリが見られる。

G-150 弥生 壺 頭部から口縁部にむかってなだらかに外済し、体部は欠損箇所はあるが若干縱長で、肥厚する底部にいたる。体部外面はハケ目、内面はナデ調整がみられる。

G-151 弥生 壺 鈍く屈曲する頭部から口縁で鈍い段をつくり端部は丸く収められる。体部の膨ら



第443図 北西隅落ち込み・流路出土弥生土器 1

## 第11節 G 地区の遺構と遺物

みは少なく、中央以下は欠損する。体部外面はハケ目のちヘラミガキ、内面はヘラケズリの後ヘラミガキがみられる。

G-152 弥生 壺 鈍く屈曲する頸胴部から口縁で鈍い段をつくり端部は外反する。体部の膨らみは少なく、中央以下は欠損する。体部外面はハケ目、内面はヘラミガキがみられる。

G-153 弥生 壺 鈍く屈曲する頸胴部から口縁で鈍い段をつくり端部は丸く収められる。体部は球形を呈し、底部は欠損する。体部外面はタタキの後ハケ目、内面はヘラミガキが施される。

G-154 弥生 壺 屈曲する頸部から口縁にかけて短く外反し、中央で僅かな段を形成する。体部の膨らみは少なく上半以下は欠損する。体部外面にはハケ目、内面はヘラケズリがみられる。

G-155 弥生 壺 鈍く屈曲する頸部から口縁にかけて短く外傾し、体部の膨らみは少ない。口縁端部は外方から押さえられ上部は尖る。体部外面はタタキの痕跡が残る。

G-156 弥生 壺 湾曲する頸部から口縁にかけて短く外反し、体部の膨らみは上部に位置する資料である。口縁部端部は外方から押さえられ水平方向に尖る。底部の張りは少ない。体部および底部外面はハケ目、内面はヘラケズリがみられる。

G-157 弥生 壺 頸部から口縁部はなだらかに外湾する。体部は綫長で肥厚する底部にいたる。体部外面はヘラミガキ、内面は口頭部がヘラミガキ、体部はヘラケズリがみられる。

G-158 弥生 壺 頸部から口縁部にむかって屈曲し外傾する。体部は綫長で、体部の膨らみは上部に位置する。小形で肥厚する底部にいたる。体部外面上半はタタキ、下半はヘラミガキ、内面はヘラケズリが見られる。

G-159 弥生 壺 膨らんだ体部から肥厚した底部にいたる資料である。外面はタタキがあり、底面まで施される。

### G- 流路（鉢・高杯・器台）

G-160 弥生 小型鉢 底部から直線的に外傾し口縁付近は器壁が薄い。外面はユビナデ、内面は板ナデがみられる。

G-161 弥生 小型鉢 底部から内湾しながら口縁付近は直立する。外面はヘラミガキとユビナデ、内面はナデがみられる。

G-162 弥生 小型鉢 なだらかな底部から内湾しながら口縁にいたる。外面はハケ目の後ナデ、内面ヘラケズリの後ハケ目が施される。

G-163 弥生 壺 口縁部端部は丸く、下部方向に僅かに内湾しながら底部にいたる。底部中央に焼成前の2mmの穿孔がある。

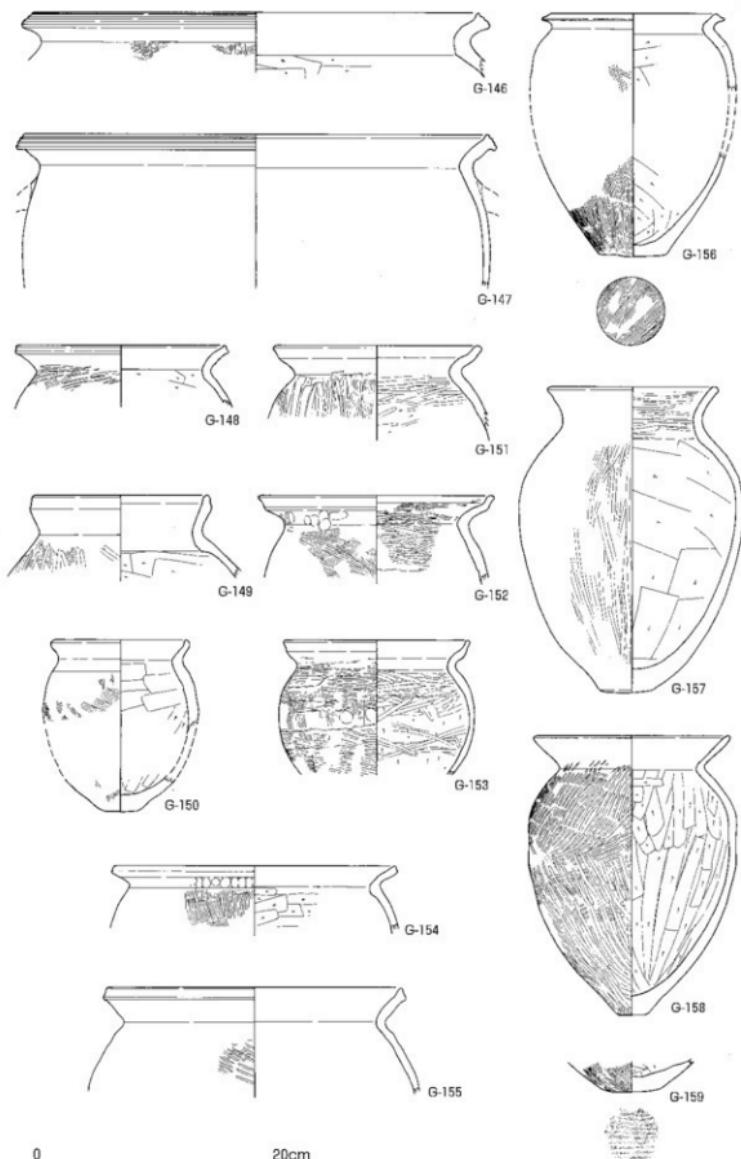
G-164 弥生 鉢 体部中央で屈曲し口縁部にむかって直立する。口縁部端部は内側に押さえられ端部は尖る。脚部以下は欠損する。内外面ともヘラミガキがみられる。

G-165 弥生 鉢 体部上半で屈曲し短く、口縁は外傾する。体部は中央でゆるやかに湾曲し底部にかけて内傾する。体部外面はヘラミガキ、内面上半はハケ目、下部はヘラミガキがみられる。

G-166 弥生 台付鉢 底が凹む脚台の中型の鉢で体部は開く。一部にユビナデ調整がみられる。

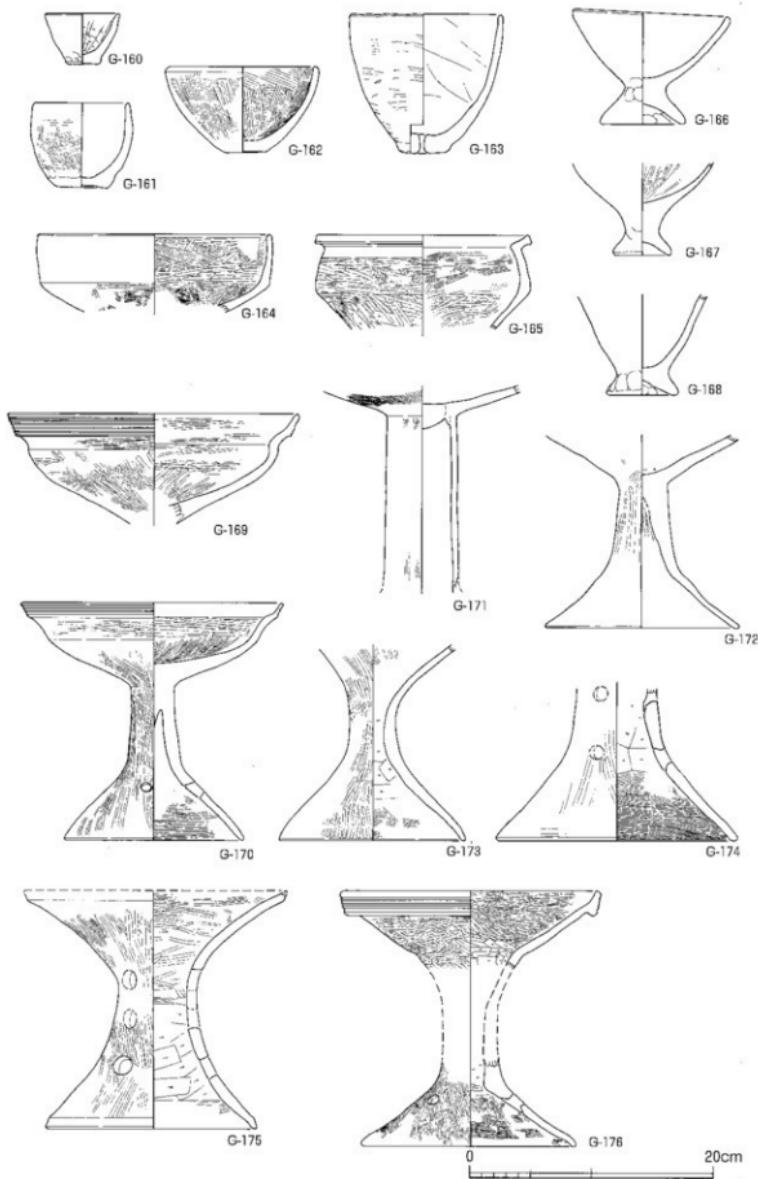
G-167 弥生 台付鉢 底が僅かに凹む脚台をもつ小型の鉢で体部は湾曲する。内外面にヘラミガキが施される。

G-168 弥生 台付鉢 底が僅かに凹む脚台をもつ小型の鉢で体部にかけて外傾する。内外面にナデ調



第444図 流路出土弥生土器2

第11節 G 地区の遺構と遺物



第445図 流路出土弥生土器 3

整され、脚部はユビ押さえの痕跡が残る。

G-169 弥生 高杯 段をもつ口縁部から杯部下半にかけてすばみ、脚部以下は欠損する。口縁端部は5条の擬凹線がめぐり、杯部内外面はヘラミガキがみられる。

G-170 弥生 高杯 段をもつ口縁部から杯部下半にかけてすばみ、脚部以下はなだらかに端部にいたる。口縁端部は3条の擬凹線がめぐり、内外面はヘラミガキが施される。

G-171 弥生 高杯 杯部下部と脚柱部の資料である。脚柱部は長く中空である。全体に器壁は薄く丁寧に仕上げられ、外面はハケ目、杯部内面はヘラミガキ、脚柱部はヘラケズリがみられる。

G-172 弥生 高杯 杯部下半から脚部端部にいたる資料である。杯部と脚部の接合部は屈曲するが全体はなだらかにつくられる。内外面はナデが施される。

G-173 弥生 器台 受部下部以下の資料である。脚部以下はなだらかで端部にいたる。外面はヘラミガキ、受部内面はヘラミガキ、脚部はヘラケズリ、下端はハケ目がみられる。

G-174 弥生 器台 脚部以下が残る資料である。脚部はなだらかで、端部まで広がり、柱部下半に縱に2箇所の穿孔がみられる。外面はヘラミガキ、柱部内面はヘラケズリ、下端はハケ目がみられる。

G-175 弥生 器台 上部が下部の開きより大きく、上部口縁端部が僅かにつまみ上げられる。脚部は縱方向に3箇所の穿孔がある。外面はヘラミガキ、内面上部はヘラミガキ、中央部はヘラケズリ、下部はハケ目調整がみられる。

G-176 弥生 器台 口縁部は拡張した段をもつもので、受部下半は直線的にすばまる。脚部中央が欠損する資料である。脚部以下は端部にかけて広がり穿孔がみられ、口縁端部には4条の擬凹線がめぐる。受部内外面はヘラミガキ、脚下半部内外面はハケ目が施される。

#### 包含層（縄文・弥生前期・中期）

G-177 縄文 深鉢 口縁下部にやや尖った工具により刻みをつけ、断面台形を示す晩期後半の凸帯文土器である。

G-178 弥生 壺 脚部上半付近の資料である。断面三角形貼付凸帯が4条めぐり、全体に横ナデされる弥生前期資料である。

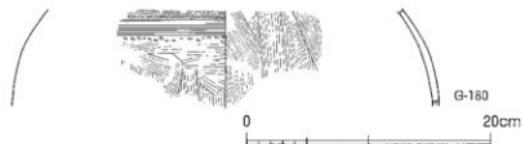
G-179 弥生 壺 脚部上半の資料である。断面三角形貼付凸帯2条で弧線文をえがく。全体に横ナデされる弥生前期資料である。

G-180 弥生 壺 体部上半の破片であり、クシガキ波状文、クシガキ直線文、三角形の列点文が施される。体部内外面はハケ目がみられる。弥生中期前半の資料である。



#### 包含層(弥生中期以降)

G-181 弥生 壺 口縁端部は上端方向に僅かに拡張され段をもつ。口縁端部クシによ



第446図 包含層出土縄文土器等

## 第11節 G地図の遺構と遺物

る刺突が連続する。

G-182 弥生 壺 頸部から口縁にかけて直口する口縁をもつ。胴部最大径は上半に位置する。文様はなく、胴部外面は縱方向のヘラミガキ、ヘラケズリがみられる。

G-183 弥生 壺 頸部から口縁にかけて外反するもので、端部は半坦に押さえられる。外面にはヘラミガキがみられる。

G-184 弥生 壺 頸部から口縁にかけてやや外反し、端部にかけて上方につまみ上げられる。端部外面は1条の擬凹線がめぐる。胴部の膨らみは少ない資料である。頸胴部外面はヘラミガキ、胴部内面はユビ押さえが見られる。

G-185 弥生 壺 頸部は長く口縁にかけて直口する。胴部以下は欠損するもので、口縁端部には1条の擬凹線がめぐる。外面はヘラミガキがみられる。

G-186 弥生 壺 頸部が長く口縁にかけて直口する。胴部以下は欠損するもので、口縁付近で僅かに屈曲し端部には3条の擬凹線がめぐる。内外面はヘラミガキがみられる。

G-187 弥生 壺 屈曲した頸部から口縁にかけて直口する。胴部は長圆形を呈する。直口する口縁には6条の凹線がめぐる。胴部上端には断面長方形の把手がつけられ、最大径付近にはクシによる列点文がめぐる。胴部外面および底部底面にはハケ目、胴部内面上半にもハケ目、下部はヘラケズリがみられる。

G-188 弥生 壺 脇部上端から口縁が直立する無頸壺である。口縁端部は外方から押さえられ内側に尖る。脇部は上半に最大径をもち、底部にかけてすぼまる。胴部および底部外面にはハケ目、内面にはヘラケズリがみられる。

G-189 弥生 壺 脇部最大径が上半に位置し、口縁・頸部が欠損する資料である。底部は径3cmの穿孔がある。脇部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリがみられる。

### 包含層（弥生後期～ 壺・蓋・鉢・台付鉢・高杯・器台）

G-190 弥生 壺 体部と口縁接合部は屈曲し、口縁端部にかけて斜上方に短く外傾する。体部の膨らみは少ない資料である。口縁端部は下方に拡張される。口縁および体部外面にはヘラミガキ、体部内面にもヘラミガキがみられる。

G-191 弥生 壺 体部と口縁接合部は屈曲し口縁端部にかけて短く外傾する。口縁端部は上につまみ見上げられ段を形成する。端面には5条の擬凹線がめぐる。体部外面の一部にはタタキが残る。

G-192 弥生 壺 膨らみのない体部から屈曲し、口縁端部にかけて短く外反する。口縁端部は両端拡張され段を形成する。端面には1条の擬凹線がめぐる。内外面にはヘラミガキがみられる。

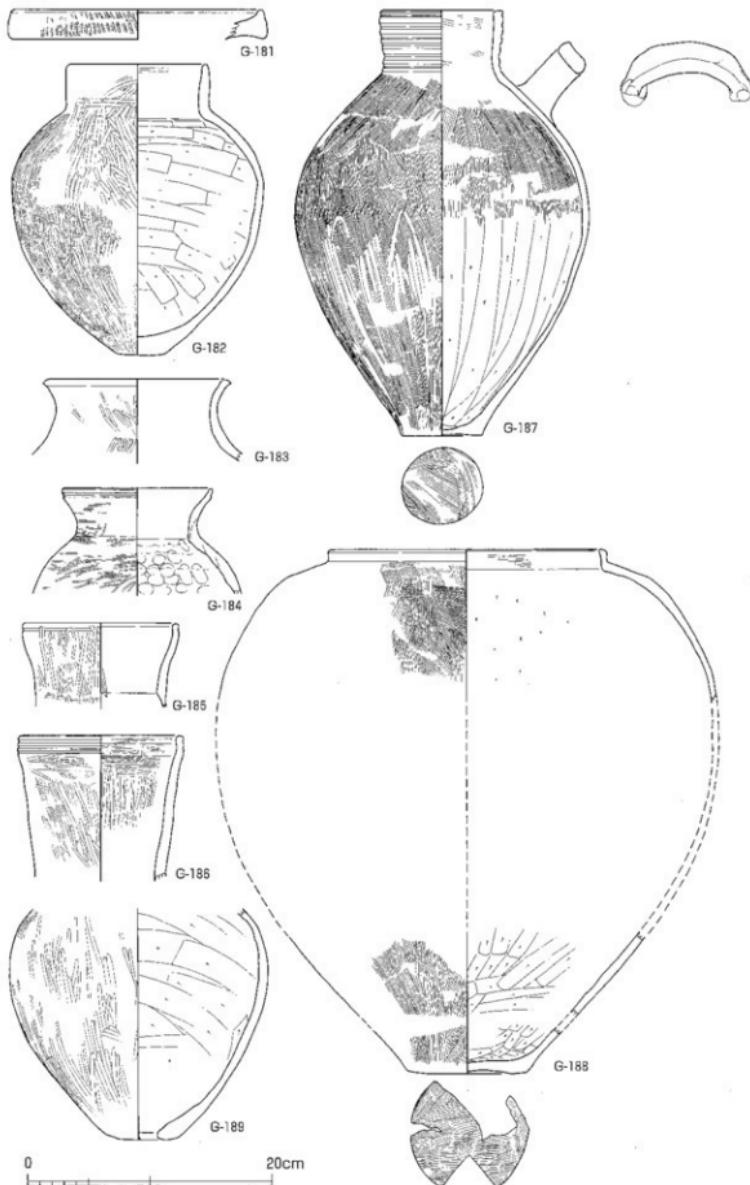
G-193 弥生 壺 体部と口縁接合部は屈曲し端部にかけて短く外反する。口縁端部は下方に拡張される。体部上端にはタタキの痕跡がみられる。

G-194 弥生 壺 天井部は僅かに凹み、下半にかけて外反ぎみに開く。内外面ともヘラミガキ調整される。

G-195 弥生 壺 天井部は凹み、下半にかけて外傾ぎみに開く。内外面ともナデ調整される。

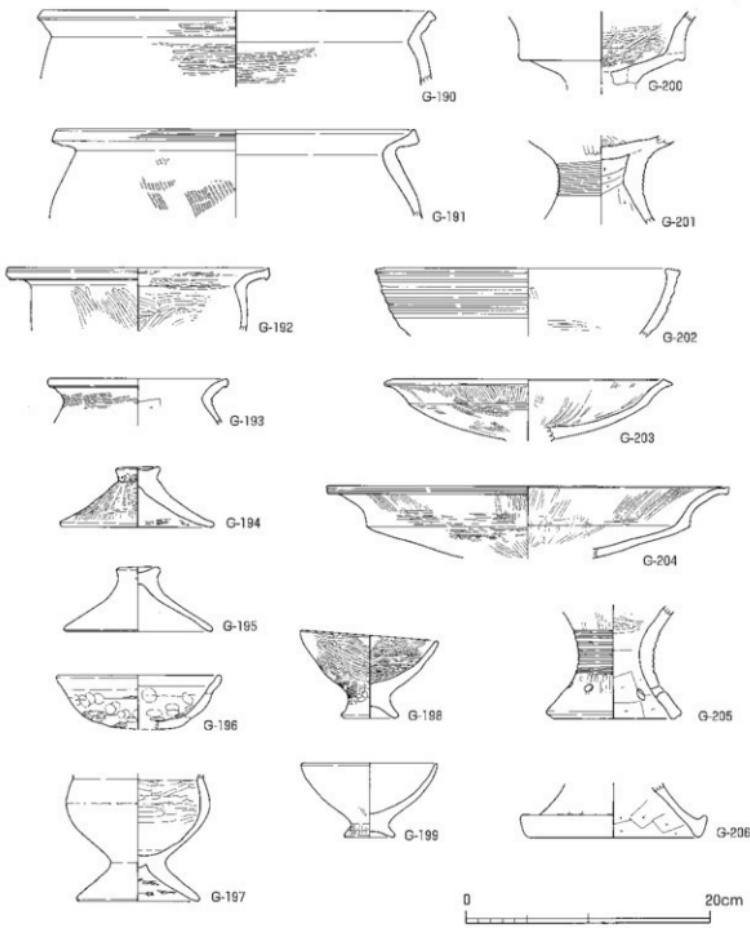
G-196 土師器 鉢 丸底から済曲し口縁にいたる資料である。口縁下部ではわずかに段をもち外反する。文様はなく、輪積み痕や内外面ともユビ押さえが明瞭に残る。

G-197 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもち、鉢部は膨らみをもつ。口縁は欠損するが外傾すると考えられる。鉢部内面にはヘラミガキ、脚部内面にはハケ目調整が残る。



第447図 包含層出土弥生土器 1

第11節 G地区の遺構と遺物



第448図 包含層出土弥生土器2

G-198 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもつ鉢で内湾しながら開き、杯部にいたる。内外面とも丁寧なヘラミガキがみられる。

G-199 弥生 台付鉢 底が凹む脚台をもつ鉢で内湾しながら開き杯部にいたる。内外面ともナデ調整がみられる。

G-200 弥生 高杯 杯部下半と脚部接合部付近の資料である。杯部中央で屈曲し直立ぎみにたちがある。脚部との接合部分で欠損するため中空か中実かは不明である。杯部内面はヘラミガキされている。

G-201 弥生 高杯 杯部下半と脚中央部付近の資料である。杯部から脚部にかけては弧をえがく。脚

部上端部には8条のクシガキ沈線がめぐり、杯部は内外面へラミガキ、脚部内面はヘラケズリがみられる。

G-202 弥生 高杯 杯部上半部の資料である。口縁からなだらかに内湾するもので、口縁端部は平坦に仕上げられ、外面に5条の凹線がめぐる。内面にはヘラミガキがみられる。

G-203 弥生 高杯 杯部の資料である。杯部は大きく開き、上半までなだらかに湾曲する。口縁付近では外反ぎみに開く。口縁端部はやや傾斜をもち平坦に仕上げられる。器面全体は丁寧なヘラミガキが施される。

G-204 弥生 高杯 杯部の資料である。杯部は直線的に開き、上半は大きく外反する。口縁端部は垂直方向に平坦化し、端部に1条の擬凹線が施される。器面全体は丁寧なヘラミガキが施される。

G-205 弥生 器台 脚部下半の資料である。なだらかに弧をえがき、平坦に仕上げられた下端にいたる。脚部中央にはヘラによる沈線が8条めぐりその下に6箇所の穿孔がある。外面は縱方向のヘラミガキ、内面下方はヘラケズリがみられる。

G-206 弥生 器台 脚部下部が直線的に開く資料である。下端は上方に拡張される。内面はヘラケズリがみられる。

#### 包含層（土師器 皿・杯・壺）

G-207 土師器 皿 平坦な底部から体部にかけては屈曲する。内外面ナデ調整がみられる。

G-208 土師器 杯 やや高い高台が踏ん張り、外傾する。器壁が薄く丁寧な仕上げである。

G-209 土師器 杯 なだらかに湾曲し底部は欠損する。口縁上端付近で外面が押さえられ弱い段を形成する。口縁端部内面にもわずかな段があり、体部下半に直線的な暗文が施される。

G-210 土師器 杯 底部から口縁に至るまで、なだらかに湾曲する。特に強いナデなどの特徴もなく、内外面ともナデ調整される。

G-211 土師器 壺 なだらかに湾曲する頸部から口縁をもち、胴部中央以下は欠損する資料である。口縁端部は丸く、体部は球形に膨らむ。体部外面はハケ目、内面は斜め方向のヘラケズリが見られる。

G-212 土師器 壺 なだらかに湾曲する頸部から口縁の資料である。口縁端部は丸くおさめられ、体部内面はヘラケズリが見られる。

G-213 土師器 壺 屈曲する頸部から口縁をもち、胴部下半以下は欠損する。口縁端部は丸くおさめられ、体部は継長に膨らむ。体部内面は斜め方向のヘラケズリが見られる。

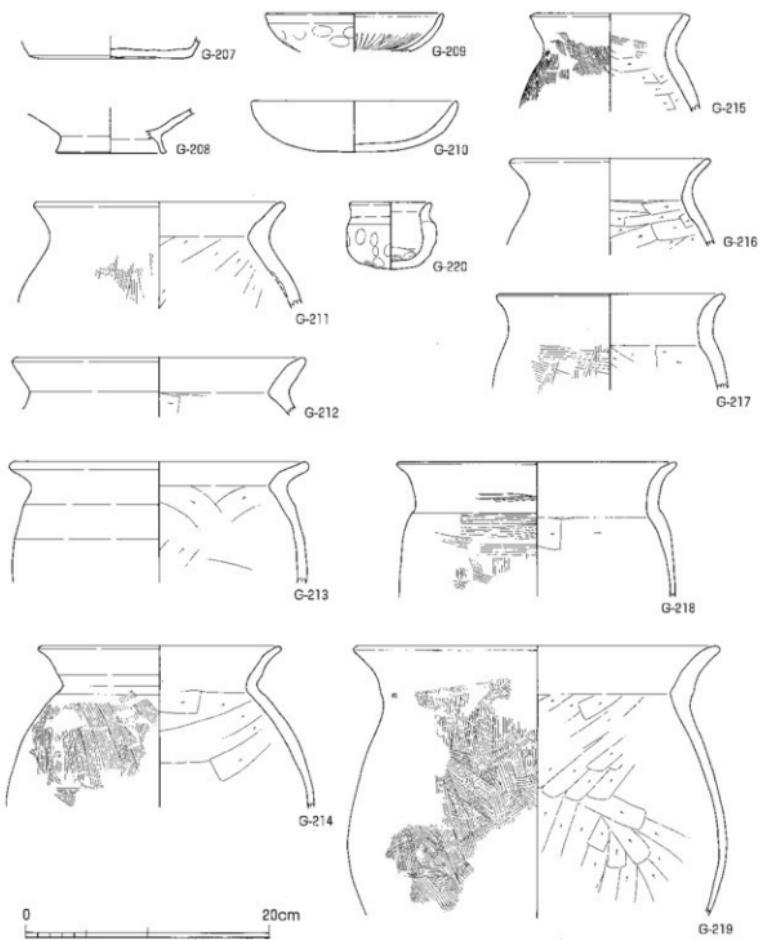
G-214 土師器 壺 屈曲する頸部から口縁をもち、胴部下半以下は欠損する。口縁端部は丸くおさめられ、体部は継長になる。体部外面はハケ目、内面は斜め方向のヘラケズリが見られる。

G-215 土師器 壺 なだらかに湾曲する頸部から口縁をもち、胴部中央以下は欠損する。口縁端部は平坦に押さえられ、体部の膨らみは少ない。体部外面はハケ目、内面は横方向のハケ目とヘラケズリが見られる。

G-216 土師器 壺 なだらかに湾曲する頸部から口縁をもち、胴部上半以下は欠損する。口縁端部は平坦に押さえられ、体部は継長に膨らむ。体部内面は横方向のヘラケズリが見られる。

G-217 土師器 壺 なだらかに湾曲する頸部から口縁をもち、胴部上半以下は欠損する。口縁端部は丸くおさめられ、体部の膨らみは少ない。体部外面はハケ目、内面は最短頭下方で横方向のヘラケズリが見られる。

G-218 土師器 壺 直立する頸部から外反する口縁をもち、胴部中央以下は欠損する。口縁端部は丸

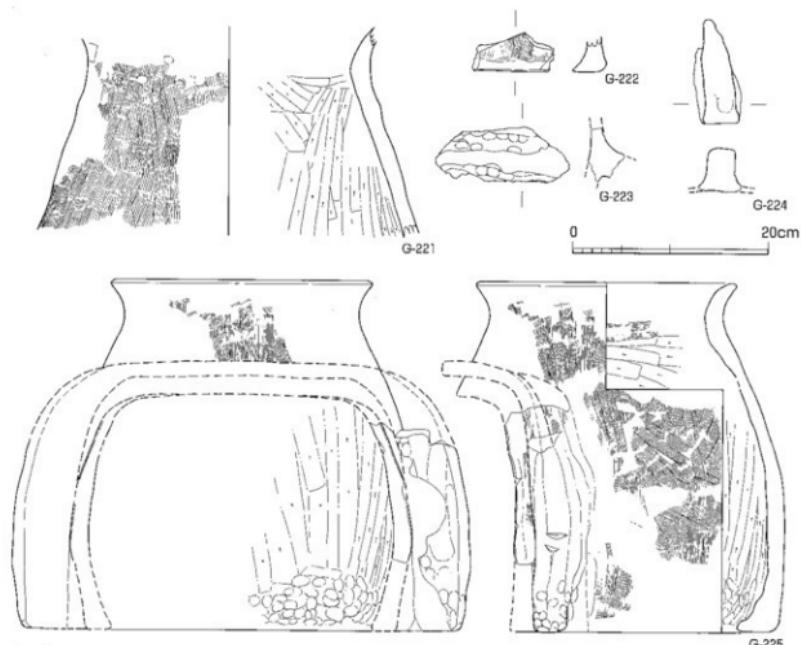


第449図 包含層出土弥生土器3

くおさめられ、体部の膨らみは少ない。体部外面はハケ目、内面は最短頸下方で横方向のヘラケズリが見られる。

G-219 土師器 壺 口縁から頸部、体部へとなだらかに湾曲し腹部下半以下は欠損する。口縁端部は丸くおさめられ、体部は縱長で膨らみは少ない。体部外面は不定方向のハケ目、内面は斜め方向のヘラケズリが見られる。

G-220 弥生 小型鉢 底部から内湾しながら口縁まで直立し端部付近で外反する。内外面はユビ押さ



第450図 包含層出土土師器

えがみられる。

#### 包含層（竈）

G-221 土師器 竈 受け部上端および下端が欠損する中央部の破片である。受部まではなだらかに湾曲するもので、外面はハケ目、内面はヘラケズリがみられる。胎土は砂粒が目立つ。

G-222 土師器 竈 竈本体の下部端片である。下面は内側に拡張されており、外面はハケ目がみられる。

G-223 土師器 竈 竈炊口の鋸部分である。外面には指あるいは棒状の工具で押された痕跡が残る。

G-224 土師器 竈 竈炊口の鋸下端部分である。ユビ押さえ痕が残る。

G-225 土師器 竈 受部および竈の炊口鋸部分を含めて全容が判る資料である。外面はハケ目、内面はヘラケズリがみられ、胎土は砂粒が目立つ。

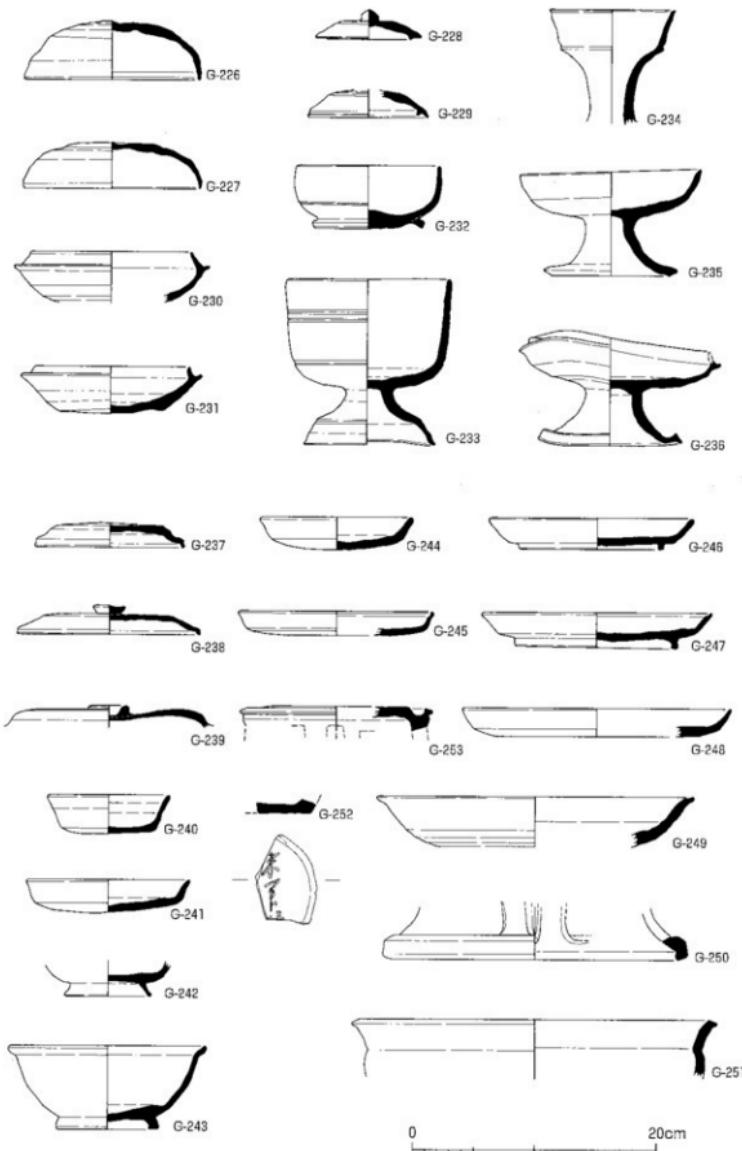
#### 包含層（須恵器）

G-226 須恵器 杯蓋 口縁部の立ち上がりがややあり、端部には段を有する。全体的に天井部が湾曲する。ヘラキリの位置は体部中央付近に位置し外面にナデ調整が残るものである。

G-227 須恵器 杯蓋 口縁から天井部にかけて湾曲し、口縁端部も尖りぎみである。全体的に扁平な資料である。ヘラキリの位置は天井上方部に位置し外面にナデ調整が残る。

## 第11節 G 地区の遺構と遺物

- G-228 須恵器 杯蓋 つまみを持つ資料である。口縁端部はかえりをもち、直線的に天井部にむかう。天井部中心にやや背の高いつまみを有する。
- G-229 須恵器 杯蓋 つまみ部を欠損する資料である。口縁端部はかえりをもち、やや内湾しながら天井部にいたる。天井部付近でヘラケズリがみられる。
- G-230 須恵器 杯身 口縁にかえりをもち、体部は底部にかけて湾曲しながらすぼまる。体部外面のヘラケズリは受部に近い。
- G-231 須恵器 杯身 口縁のかえりは短く内湾し、体部は底部にかけて直線的にすぼまる。体部外面のヘラケズリは底面付近に近い。
- G-232 須恵器 杯身 底面は平らで体部から口縁にかけて直立する。底面は焼成により大きく膨らみ、高台は外方に向かって貼り付けられる。口縁端部および体部下半でヘラガキ沈線がめぐる。
- G-233 須恵器 台付椀 直立する椀形の体部と段をもつ脚部からなる資料である。体部中央にヘラガキ沈線2条、下半に1条を有する。脚台の段付近にも1条の沈線がめぐる。
- G-234 須恵器 楼上部のみ残存する。細長い受け部が上半で段をつくり口縁端部にいたるものである。口縁端部および段部分でヘラガキ沈線が1条めぐる。
- G-235 須恵器 高杯 扁平な杯部と接合部から大きく開く脚部からなる資料である。杯部中央に僅かな段がみられ、脚部端部付近における段も僅かである。
- G-236 須恵器 高杯 扁平でかえりをもつ杯部と接合部から大きく開く脚部からなる焼け歪みが著しい資料である。杯部口縁端部のかえりは短く内傾する。脚部は端部付近における段がみられる。
- G-237 須恵器 杯蓋 つまみを持たない資料である。口縁端部はややたちあがり段をもつ。天井部は平坦でその付近でヘラキリされる小型資料である。
- G-238 須恵器 杯蓋 つまみを持つ資料である。口縁端部は短くたちあがり、天井部付近でヘラキリされる資料である。
- G-239 須恵器 杯蓋 大きく凹むつまみを持つ稜擁の蓋である。天井部は大きく落ち込み、口縁が欠損する資料である。天井部付近でヘラキリされるものである。
- G-240 須恵器 杯身 やや扁平な底部から口縁部にかけてやや外反する。底部付近ではヘラキリが見られる。
- G-241 須恵器 杯身 平らな底部から体部、口縁へと外傾する。底部と体部の境はやや屈曲する。
- G-242 須恵器 杯身 外方に突きだした高台をもち、底部から湾曲する体部をもつ。
- G-243 須恵器 梗 高台は垂直ぎみに立ち、体部から口縁にかけては背が高く若干湾曲する。口縁端部で外傾し段を形成する。底部はヘラキリがみられる。9～10世紀の資料である。
- G-244 須恵器 皿 丸みを帯びる底部から口縁にかけてわずかに外反する資料である。
- G-245 須恵器 皿 平らな底部から僅かに外反しながら口縁付近で段をもつ。底部はヘラキリの後などでられる。
- G-246 須恵器 皿 平らな底部から口縁にかけて外傾する。底部は直立する高台をもち、底面はヘラキリの後などでられる。
- G-247 須恵器 皿 平らな底部から口縁にかけて外傾する。口縁端部内面には段をもつ。底部は直立する高台をもち、底面はヘラキリの後ナデられる。
- G-248 須恵器 皿 平らな底部から段を形成し口縁にかけて外傾する資料である。体部下半から底面



第451図 包含層出土須恵器

## 第11節 G 地区の遺構と遺物

にかけてヘラケズリがみられる。

G-249 須恵器 Ⅲ 底部から口縁にかけて大きく聞く資料である。口縁付近は外反し、端部は平坦に押さえられる。下半はヘラケズリが明瞭に残る。

G-250 須恵器 観 脚部のみ残る蹄脚硯である。下端は大きく段をもち、方形と考えられる透かしがめぐる。

G-251 須恵器 壺 口縁は上方に外反し端部は平坦に仕上げられる。体部の膨らみは少ない。

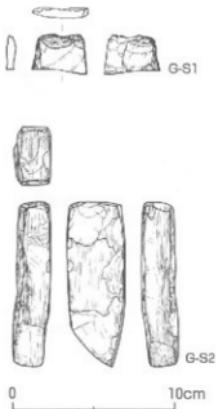
G-252 須恵器 底部 底面のみ残存する資料である。底面に「米万呂口」のヘラガキ文字がある。

G-253 須恵器 観 上部が残り脚中央以下が欠損する蹄脚硯である。硯面は使用により平滑化し、周囲は墨溜りがめぐる。脚部には方形の透かしがめぐる。

### G-P215 出土

G-S1 楕形石器 サスカイト製のもので平面形は台形を呈する。厚さ5mm程度の剥片を使用しており全体は薄い。2方向からの打撃痕がみられ、削器の可能性もある。

G-S2 柱状片刃石斧 基部や刃部側面で一部に剥離がみられるが完形品である。幅22mmに比べて厚さ35mmでやや厚い。表面は丁寧な研磨が施されるが、刃部先端においても使用時に発生したと考えられ微少な剥離がみられる。



第452図 包含層出土石器

### 4. 小 結

G地区は南北を広い範囲で擾乱されており、西半部は氾濫原となっているため遺構が検出できたのは調査区東北部分に限られている。遺構としては弥生時代から奈良時代までのものが検出されており、遺物は縄文時代のものも見られる。

弥生時代～古墳時代にかけては断続的に住居跡が検出されており、居住域として利用されていたことがわかる。掘立柱建物跡に関しては、個々の建物の時期について限定することは難しいが、古墳時代から中世に及ぶと考えられる。そのうち、北端で検出した大型の柱穴を持つ一群（G-SB01・SB02、G-SA01・SA02）は、その主軸方向が近いことから、F地区で検出された掘立柱建物群との関連に注意しておきたい。当地区の奈良時代の遺構は、栗鹿神社との関係を考えなければならないが、その性格や機能について特定しうるような成果は得られなかった。これらの建物群は調査区北へ広がっており、その全容は知るべくもないが、F地区的建物群と比較すれば、相対的に私的な性格を帯びたものと思われる。



写真8 G地区現地説明会風景

## 第12節 一品野田遺跡の遺構と遺物

一品野田遺跡は国道427号に面した調査区である。確認調査の結果、平安時代の遺物が若干出土しており、その位置から旧山陰道が検出される可能性があった。

調査区は調査前には東西2区画の更地になっていたが、もともと3棟の家屋が建っており、家屋が建てられた時点で、旧地形が著しく改変されている。また、家屋の基礎や家屋の撤去・解体に伴って掘削されたゴミ穴が各所に開けられており、遺構面が残存する部分は極限されていた。

調査地点は段丘化した扇状地に位置しており、もともとは調査区の北東部は旧中州(扇状地の微高地)、北西部から西部は旧河道にあたる地点である。

調査の結果、上下2枚の遺構面を検出した。検出した遺構面は旧河道が埋積してゆく過程及び安定した時点で形成されたもので、上面(第1面)は13世紀代の集落跡、下面(第2面)は11世紀～12世紀にかけての水田跡と考えられるものである。旧山陰道については検出されなかった。

### 地区割りと層序(第453図)

調査区を東端から大きく11区に分割している。

調査区の層序は上層から、表土、床土、洪水砂疊層Ⅰ、その下から第1面を構成する暗灰黄色疊混じり細砂が出現する。

第2面は第1面との間に洪水砂疊層Ⅱを挟む。第2面より下層からは疊層が出現する。

以下、各面の概要について述べる。

### 第1面の概要(第454図 写真図版367)

第1面は13世紀代と考えられる時期の遺構面である。遺構としては掘立柱建物跡1棟、井戸1基、土坑5基を検出している。

検出した遺構面は東から西へ傾斜しており東端では標高132.5m、西端では標高131.4mを測る。遺構面は現代に著しく削平を受けており、遺存状態は極めて悪い。

#### 掘立柱建物跡

I-SB1001(第455・457図 写真図版367・375)

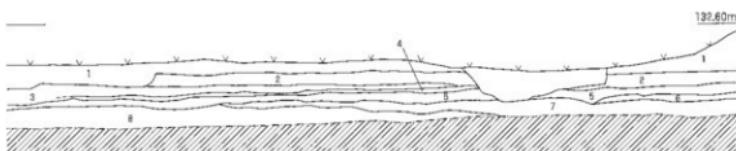
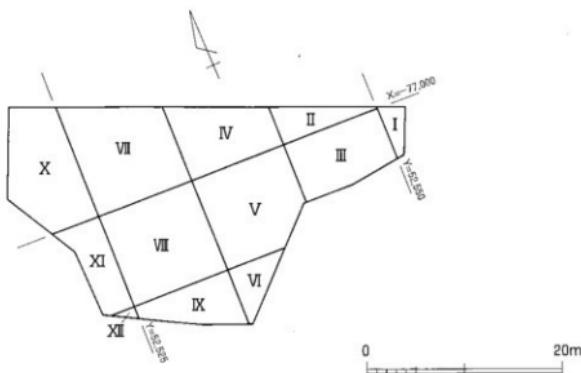
検出状況 調査区中央北半において検出した。

形状・規模 桁行方位をほぼ真東にとる總柱建物跡である。桁行南北6間(12.3m)・梁行東西3間(7.8m)以上の規模が想定できるが、詳細は不明である。建物の柱間は、大きく桁行では2間ごとにほぼ4.1m間隔であり、間の1間分は2.4m・1.6m前後に分かれる。梁行は2.6m・3m・2.2m前後の柱間をとる。平面プランからみて、柱穴が密な中央部の桁行3間・梁行2間分には間仕切り・床貼りなどが存在した可能性が考えられる。

柱穴 円形を基本とし径20cm～30cm、3個の柱穴は円環によって埋められている。

出土遺物 柱穴I-P1009・I-P1024・I-P1030からは13世紀代の須恵器碗片が出土している。

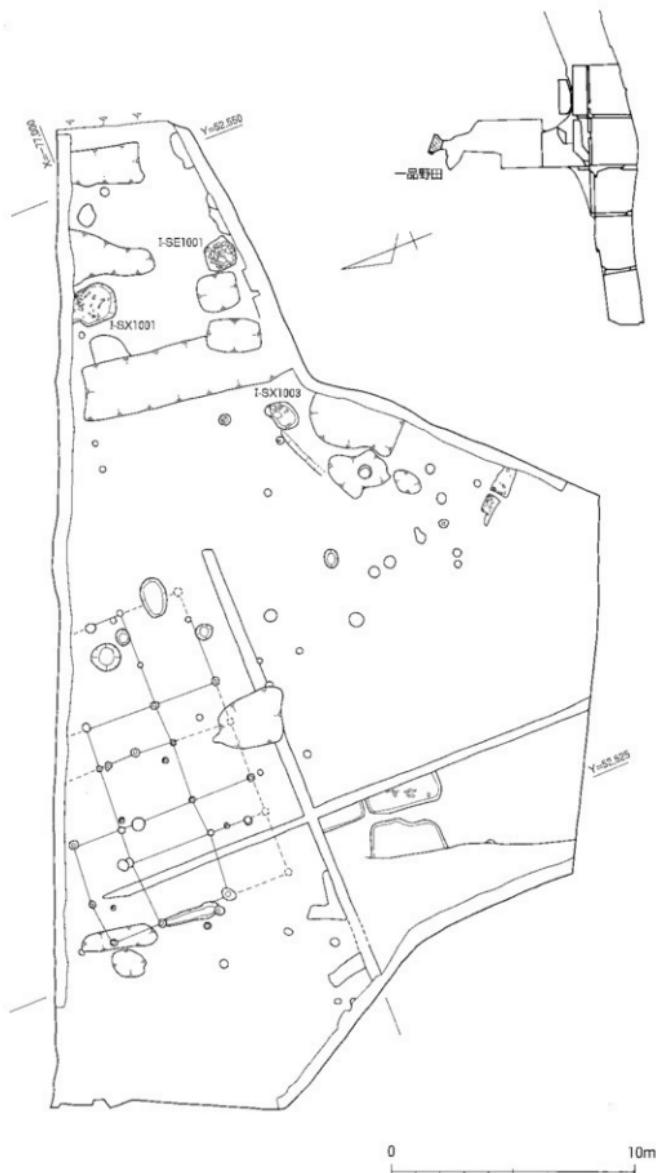
I-P1009より出土した、I-2はロクロ成形の土師器碗である。体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。形態的には東播系須恵器碗に酷似する。



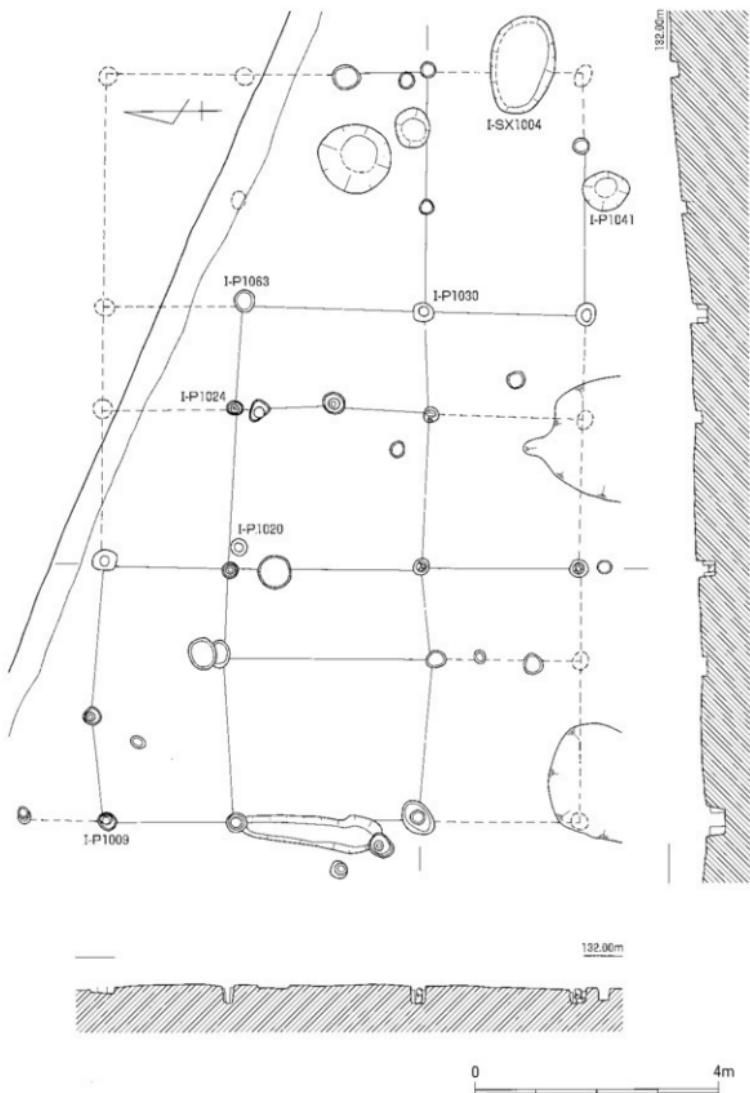
- 1 表土・複合土 (建物撤去時に搅乱される)
  - 2 暗灰色土 1層との間に鉄分集積
  - 3 湿れた淡灰色土
  - 4 黄灰色土 鉄分集積層
  - 5 2.5Y5/2 暗灰黄色 緑混じり細砂 4層との間に洪水砂礫層Ⅰ (1a層)
  - 6 灰色砂礫 2-5cm厚難土・洪水砂礫層Ⅱ
  - 7 10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂 第2面水田土壤 (IIa層) -6層との間に鉄分集積する
  - 8 10YR4/1 暗灰色 粗砂混じり層-2.5Y5/2 暗灰黄色 緑層
- \* 5層以下については色調記載に土色板を使用した



第453図 地区割り図・調査区北壁（部分）土層断面図

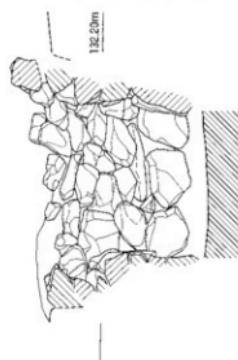
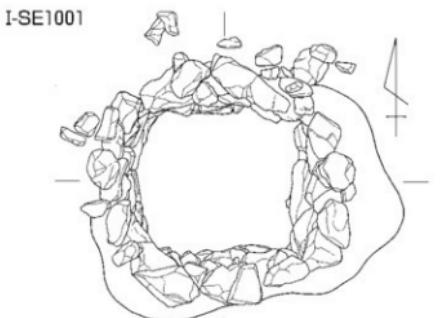


第454図 第1面遺構全体図

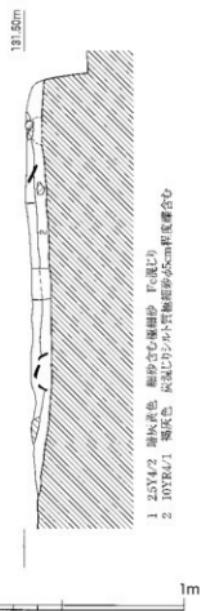


第455図 挖立柱建物跡I-SB1001

I-SE1001



I-SX1001



第456図 井戸I-SE1001・SX1001

## 第12節 一品野田遺跡の遺構と遺物

I-P1024 より出土した、I-6 はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面は未調整で糸切痕が残る。

I-P1030 より出土した、I-3 は須恵器碗である。体部は緩やかに斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。東播系須恵器碗で 13 世紀代の所産と考えられる。

### 井戸 I-SE1001 (第 456・457 図 写真図版 368・376)

検出状況 井戸 I-SE1001 は調査区東端において検出した。上坑 I-SX2001 と切り合い新しい。

形状・規模 SE1001 は長辺約 1.3 m・短辺約 1 m を測る方形の掘り方に一辺約 60 cm 四方の溝丸方形・残存する深さ約 70 cm を測る石積みの井側をもつ井戸である。石積みは 5 段～6 段分残存している。井戸の上面には瓦質鍋片が散乱して検出されており、そのことから推して、もともとの井戸の深さについても 1 m を大きく上回る深さではなかったと考えられる。

出土遺物 井戸内からは瓦質鍋片・須恵器碗片が出土している。13 世紀代の時期と考えられる。

土師器鉢 I-9 は体部は緩やかに斜め上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。体部外面には指頭圧痕が見られる。

土師器小椀 I-10 は体部が僅かに内彎気味にはば直上に延びる。内外面とも指おさえの後、ヨコナデ調整を施す。

土師器皿 I-11 は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は緩やかに斜め上方に延びる。内外面とも指おさえの後、ヨコナデ調整を施す。

瓦器碗 I-12 は体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に取める。内外面とも指おさえの後、ヨコナデ調整を加え、体部外面には指頭圧痕が残る。

瓦質土器脚 I-13 は外面ともナデ調整を施す。瓦質土器三足鍋の脚部と考えられる。

瓦質土器鍋 I-14 は体部がほぼ直線的に直上に延びる。口縁部は大きく外方にひらき、口縁部端部上面に端面をもつ。粘土紐巻上げ成形で内外面ともヨコナデ調整を施す。体部外面に指頭圧痕が残る。I-15 は体部が僅かに内彎し、口縁部は外方にひらく。調整技法は I-14 と同じで口縁部内外面に指頭圧痕が残る。

I-SX1002 I-16 はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は短く斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面は未調整で糸切痕が残る。

### 土坑

土坑は 5 基検出した。集石をもつ I-SX1003 以外は浅い皿状の落ちである。

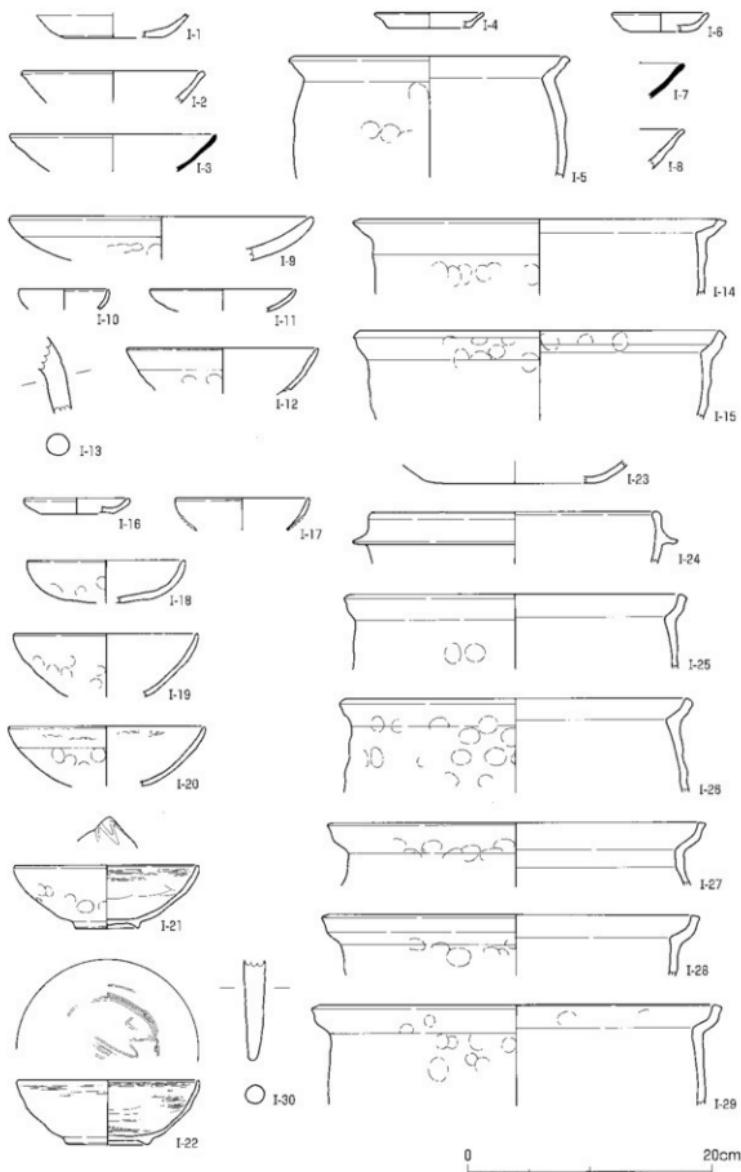
#### I-SX1001 (第 456・457 図 写真図版 369)

検出状況 土坑の内、土坑 (SX1001) は調査区東半において検出した。遺構の性格は不明である。

形状・規模 長辺 2 m 以上・短辺 1.5 m・深さ約 6 cm を測る隅丸長方形の浅い皿状の土坑である。

出土遺物 炭化物とともに瓦質三足鍋・土師器皿 I-18・I-23、瓦器碗 I-17・I-19～I-22 が出土した。

土師器皿 I-18 は非ロクロ成形の土師器皿である。平底で体部と底部の界は不明瞭で体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部内外面には強いヨコナデ調整、底部内面にはナデ調整、外面の体部から底部にかけては指おさえの後ナデ調整がそれぞれ施される。体部外面には指頭圧痕が残る。I-23 は大型の皿の底部と考えられる。非ロクロ成形で体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。内外面ともヨコナデ調整を施す。



第457図 一品野田遺跡出土土器(1)

## 第12節 一品野田遺跡の遺構と遺物

瓦器碗 I-17 はやや小振りの瓦器碗で、器面の摩滅が著しい。外面ともヨコナデ調整を施す。I-19 は体部は内彎気味に斜め上方に延びる。外面とも指おさえの後ヨコナデ調整を加え、体部外面には指頭圧痕が残る。I-20 もほぼ I-19 と同タイプの碗である。器面が摩滅しているため明瞭ではないが、口縁部内面にミガキ調整の痕跡が見られる。I-21 は断面三角形状の低い高台を貼り付ける。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁部は尖り気味に取める。外面ともヨコナデ調整を施す。内面には丁寧にミガキ調整を施し、底部内面には波状の暗文が見られる。12世紀後半から13世紀前半代に比定される。I-22 は I-21 に比べてやや器高が深い。内面は丁寧なミガキ調整を施し、暗文が見られる。12世紀後半代に比定される。

土師器羽釜 I-24 は体部は僅かに内彎し、口縁部外面に断面台形形状の比較的短い鉢を貼り付ける。外面とも指おさえの後、ヨコナデ調整を施す。

土師器鍋 I-25～29 は鍛造の鉄鍋を模倣した鉄鍋タイプの鍋である。口縁部が「く」の字状に屈曲するもの (I-24・25) と「く」の字状に屈曲しさらに口縁部の中ほどでさらに内側に屈曲するもの (I-27～29) に大きく分類される。いずれも粘土紐巻上げ成形で、指おさえの後、ヨコナデ調整を施し、体部外面には指頭圧痕が残る。兵庫津遺跡に類例が見られ、I-27～29 は 13 世紀の前半代に、I-25・26 はそれをよりは先行するタイプと考えられる。

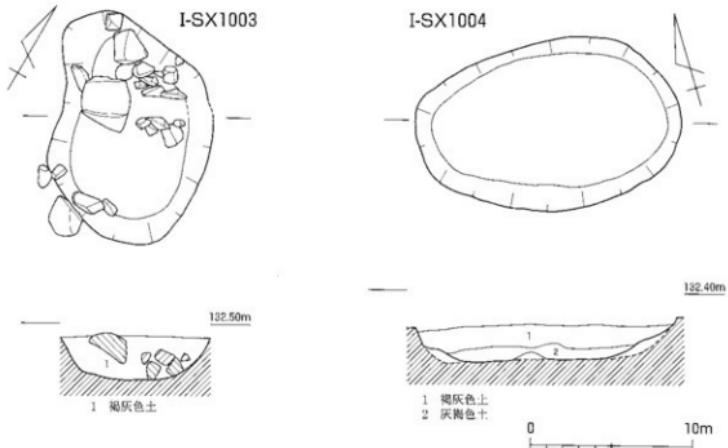
瓦質土器鍋脚部 I-30 は外面ともナデ調整を施す。I-6 と同様の三足鍋の脚部と考えられる。

### I-SX1003 (第458図 写真図版 369)

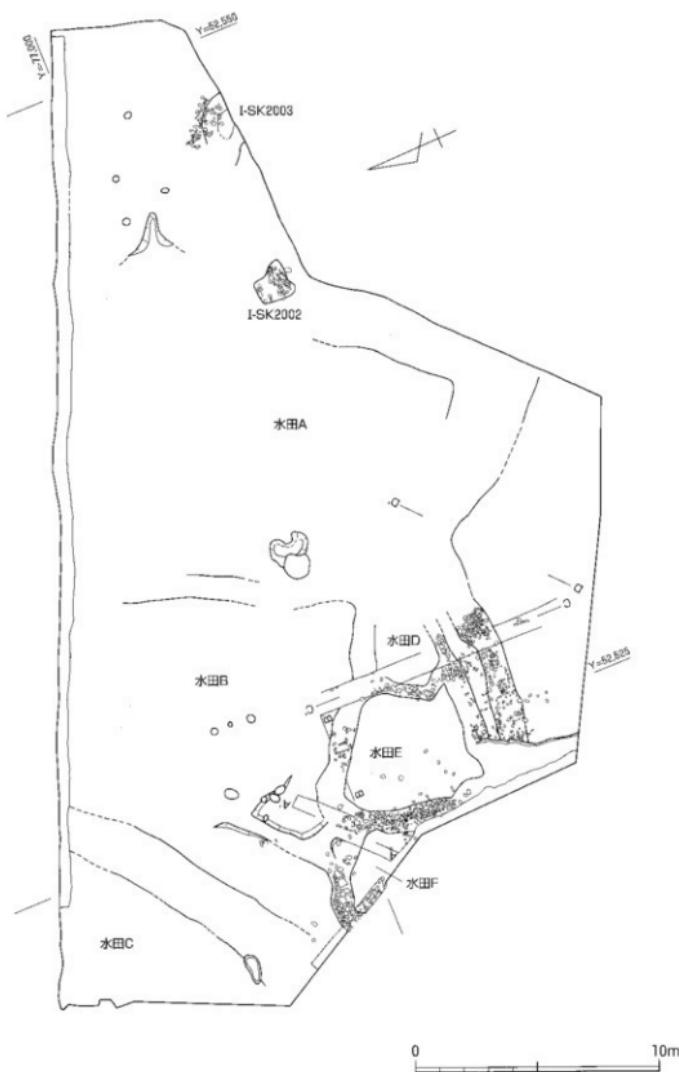
検出状況 調査区東半において検出した。

形状・規模 長径 1.45 m・短径 0.9 m・深さ約 27 cm を測る不整梢円形の土坑である。土坑の東半には径 10 cm～20 cm の角礫が入れられている。

出土遺物 出土遺物はない。



第458図 I-SX1003・SX1004



第459図 第2面遺構全体図

## 第12節 一品野田遺跡の遺構と遺物

I-SX1004 (第 458・460 図 写真図版 369・379)

検出状況 調査区中央北縁において検出した。

形状・規模 長径 1.65 m・短径 1.1 m・深さ約 22 cmを測る橢円形の土坑である。

出土遺物 瓦器碗 2点を図示した。

I-31・I-32 はいずれも瓦器碗である。体部は僅かに内擣気味に斜め上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面とも指おさえの後、ヨコナデ調整を施し、体部外面には指頭圧痕が残る。内面にはミガキ調整が加えられ、暗文が見られる。

### 第2面の概要 (第 459 図 写真図版 370)

第2面は調査区中央部から南西半部にかけて検出した。一品野田遺跡の西半部は柴川の旧河道にある。

第2面は旧河道が埋没する過程において営まれた水田遺構と調査区東半において検出した土坑1基(I-SX2001) からなる。

第1面より下層への掘削に際して A～D の土層観察柱を残し調査を行っている。第2面の水田土壤は第1面より 10 cm～20 cm 下層より出現している。また旧河道が埋没した直上より形成され始めていると考えられる。

### 水田遺構 (第 461 図 写真図版 370・380)

検出状況 水田遺構は微高地縁辺部から旧河道内にかけて検出されており、微高地縁辺部のものを水田 A～C、旧河道内のものを水田 D～F とした。

形状・規模 水田一筆ごとの規模については遺存状態が悪く、一枚の区画が辛うじて判る水田 E は 5 m 四方の規模を測る。

水田に伴う遺構は幅 1 m～幅 2 m の畦畔を検出している。畦畔のうち、微高地縁辺部の水田 A～C のものは痕跡が残るのみであるが、旧河道内及び旧河道と微高地縁辺部の境に造られた水田 B・水田 D～F の畦畔については径 10 cm～20 cm の河原石を盛り上げ畦畔の芯材としたものが検出されている。

水田面の標高は地形に合わせて東から西、北から南へ順次低くなっている。各水田間には比高差が見受けられる。水田 A は標高 132 m、水田 B は標高 131.5 m、水田 D は標高 131.2 m、水田 E は標高 130.9 m である。

出土遺物 大畦畔に伴う集石遺構上より須恵器杯・土師器皿が出土している。

I-37 は須恵器杯である。強いヨコナデを施し、口縁部を外反させる。底部はヘラキリ調整である。

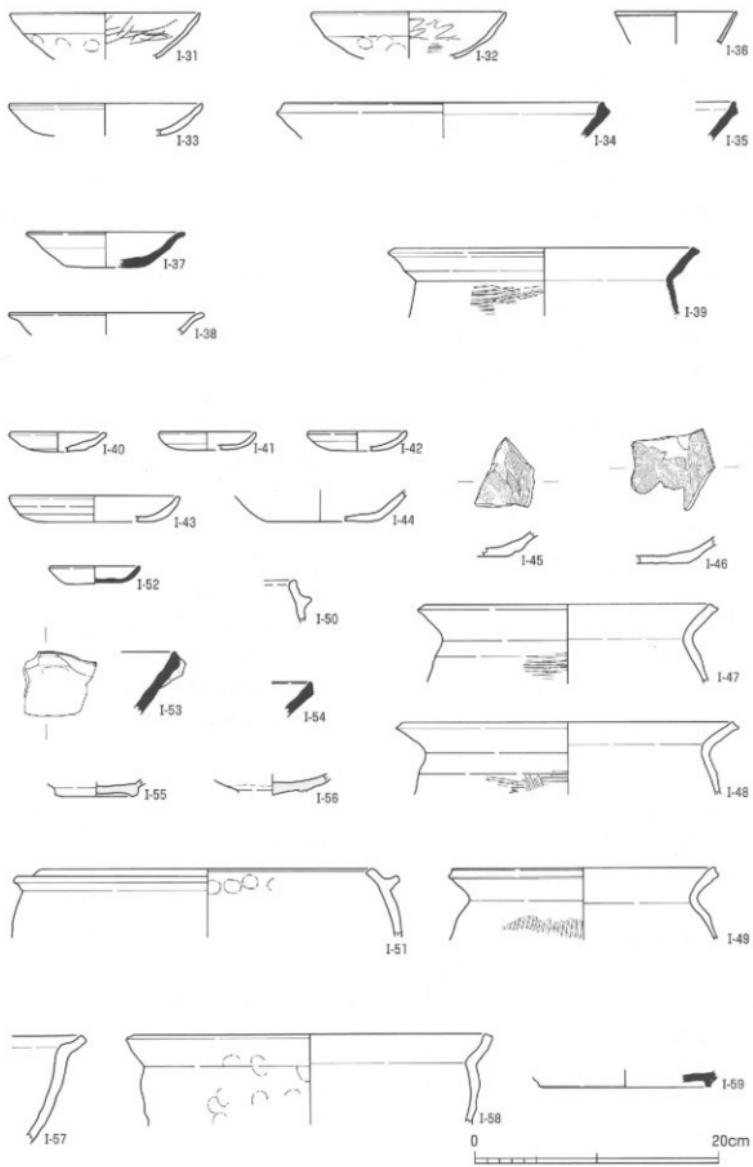
I-38 は非クロコ成形の土師器皿である。口縁部は外方に大きくひらく。内外面ともヨコナデ調整を施す。

時期 検出した水田遺構の時期は、第2面よりも下層の旧河道を埋める洪积砂の中から奈良時代の須恵器が出土している他、第2面の水田耕土からは 10 世紀代と考えられる土師器皿片が出土していること、第1面の時期が 13 世紀と考えられることから 11 世紀～12 世紀にかけてと考えられる。

### 土坑

I-SK2002 (第 460・462 図)

検出状況 調査区東半において検出した。



第460図 一品野田遺跡出土土器(2)

## 第12節 一品野田遺跡の遺構と遺物

形状・規模 長辺 1.3 m・短辺 1.1 m・深さ約 50 cm を測る長方形を基調とした不定形の土坑である。断面形状は丸い。南半部を中心に 1 辺 10 cm ~ 20 cm 程度の角礫が入れられている。

出土遺物 土師器鍋が出土している。I-39 は土師器鍋である。口縁部は大きく「く」の字状に外方にひらく。粘土紐巻上げ成形で、口縁部外面は強いヨコナデ調整を施す。体部外面は未調整で斜め方向の平行叩き目が残る。長谷川分類播丹型 I 類相当で、13 世紀前半代に比定される。

### I-SK2003 (第 462 図)

検出状況 井戸 I-SE1001 と切り合い古い。

形状・規模 長辺 2 m 以上・短辺 2 m・深さ 25 cm の規模をもつ長方形の土坑である。土坑の東縁に沿って 1 辺 10 cm 程度の角礫が多量に検出されている。

出土遺物 遺物の出土はなく、性格等は不明である。地面上において検出しているため、第 1 面に伴う遺構である可能性も残るが、第 2 面に伴う遺構としておく。

### 各柱穴内の出土遺物 (第 457 図 写真図版 375)

I-P1003 I-1 はロクロ成形の土師器である。平底で体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切痕が残る。

I-P1020 土師器皿 I-4 はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は短く直線的に斜め上方に延びる。内外面とも強い回転ナデ調整を加える。

土師器鍋 I-5 は土師器鍋である。体部は内側気味にはば直上に延び、口縁部は大きく外方にひらく。口縁部外面には強いヨコナデ調整が施される。また体部内面にはナデ調整、体部外面には指おさえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。

I-P1041 I-7 は須恵器碗である。内外面とも回転ナデ調整を施す。東播系須恵器碗と考えられる。

I-P1063 I-8 は土師器碗である。内外面とも回転ナデ調整を施す。形態的には東播系須恵器碗に酷似する。

### 土坑出土遺物 (第 457 図 写真図版 377)

I-SX1002 I-16 はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は短く斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施す。底部外面は未調整で糸切痕が残る。

### I-SK1006 (攪乱坑) (第 460 図 写真図版 379)

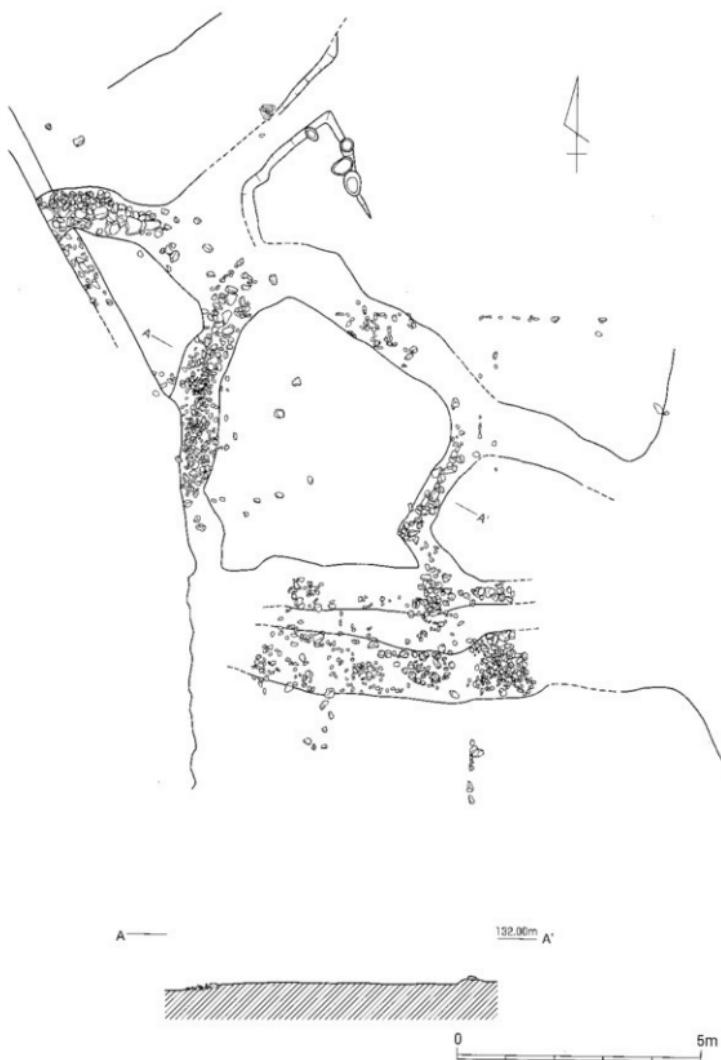
土師器皿 I-33 は非ロクロ成形の土師器皿である。平底で体部と底部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部内外面には指おさえの後、ナデ調整を施す。

須恵器鉢 I-34・I-35 はいずれも須恵器鉢である。口縁端部を斜め方向に切るタイプで、I-34 は端部を斜め上方につまみ上げる。内外面とも強い回転ナデ調整を加える。東播系須恵器鉢で 12 世紀後半代に比定される。

染付磁器碗 I-36 は比較的器壁が薄く、体部は直線的に斜め上方に延びる。内面に呉須で界線を 1 条描く。近世後半から近代の製品と考えられる。

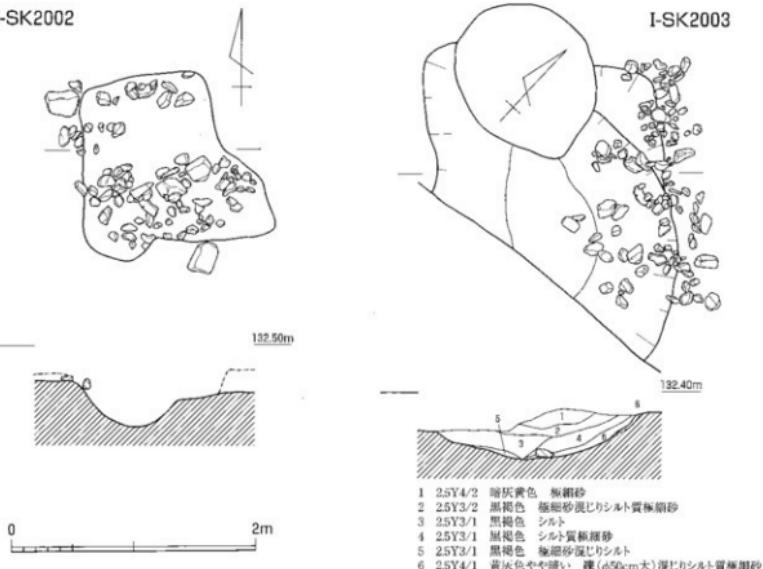
## 包含層出土遺物（第460図 写真図版380・381）

土師器皿 土師器皿にはロクロ成形のもの（I-40・44）と非ロクロ成形のもの（I-41～43）がある。I-40は比較的器壁が厚く、底部と体部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。I-44はや



第461図 水田遺構

I-SK2002



第462図 I-SK2002・SK2003

や大型の皿で、底部と体部の界は明瞭で体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。I-40・44はいずれも内外面に回転ナデ調整を施し、底部外面にはヘラ切痕が残る。非クロクロ成形のI-41は底部と体部の界が明瞭であるのに対して、I-42は不明瞭で体部は緩やかに斜め上方に延びる。I-43は比較的大型で底部と体部の界はI-41と同様に比較的明瞭である。I-41～43はいずれも内外面にヨコナデ調整を施し、底部外面はI-41・43はヘラ削りの後ナデ、I-42は指おさえの後、ナデ調整を加え、I-42の底部内面には煤が附着する。

**土師器鉢** I-45・46はいずれも鉢の底部と考えられる。平底で外面はナデ調整、内面はハケ目調整が加えられる。

**土師器壺** I-47～49はいずれも土師器壺もしくは鍋である。いずれも口縁部は「く」の字状に大きく外方にひらく。粘土紐巻上げ成形で、口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部外面は未調整で、I-47は横方向の叩き目が、I-48は横方向と縱方向の叩き目が交互に、さらにI-49は縱方向の叩き目がそれぞれ残る。

**土師器羽釜** I-50・51は土師器羽釜である。I-50は口縁部外面に退化した断面三角形状の鈎を貼り付けるもので、内外面とも強いヨコナデ調整を施す。長谷川分類播磨型IA類に相当し、15世紀前半代に比定される。I-51は口縁部が内傾し、口縁部外面に断面台形状の短い鈎を貼り付ける。口縁部から体部内外面は指おさえの後、ヨコナデ調整を施す。口縁部内面には指頭圧痕が残る。

**須恵器鉢** I-53・54はいずれも須恵器鉢である。いずれもほぼ同タイプ口縁部は斜め方向に切り、I-53は端部を若干上方につまみ上げ、片口を捻って作り出す。内外面とも強い回転ナデ調整を加える。また、

口縁部外面には重ね焼痕が見られる。東播系須恵器鉢で12世紀後半代の所産と考えられる。

白磁Ⅲ I-55は低い高台をもつ。内面は透明釉を施釉し灰白色に発色する。外面は露胎である。13～14世紀代の華南産白磁皿で面子に転用されたと考えられる。I-56も白磁皿とと考えられるが高台を欠失している。

#### 擾乱層（第460図 写真図版381）

土師器鉢I-57・58は鍛造の鉄鍋を模倣した鉄鍋タイプの鍋である。いずれも口縁部が「く」の字状に大きく外方にひらく。粘土紐巻上げ成形で、指おさえの後、内外面ともヨコナデ調整を加える。I-58の体部外面には指頭圧痕が見られる。

須恵器杯I-59は須恵器杯底部である。体部との境に接し、短く退化した逆台形の高台が貼り付けられる。

#### 下層土層堆積状況（第463図 写真図版374）

第1面より下層への掘削に際してはA～Dの土層観察畦を残し調査を行っている。

#### 小 結

微地形の変遷を加味して調査地点の遺跡の変遷を述べておく。

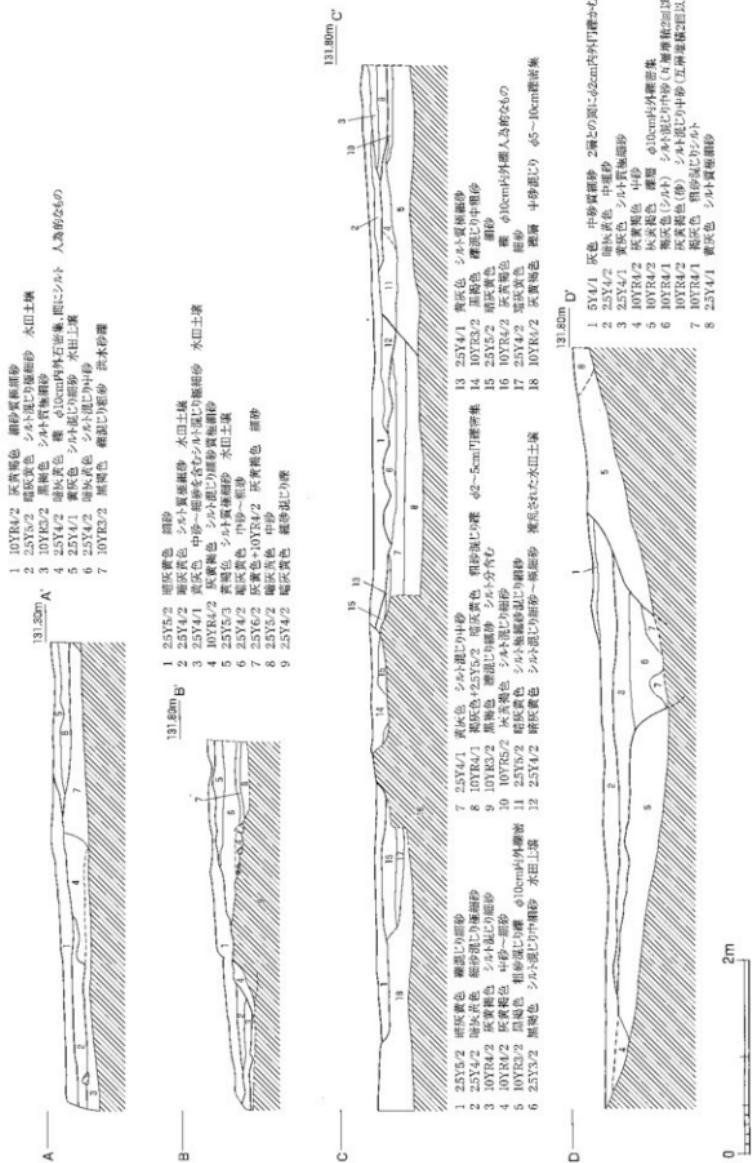
一品野田遺跡は、段丘化した扇状地に位置している。

調査区の北東部に旧中州（扇状地の微高地）の末端、北西部～西部には旧河道が認められる。検出された11～12世紀の水田（第2面）は旧河道に分布する。この扇状地は、主に疊徑の大きな砂礫からなる。砂礫の上面をみると、扇状地の形成当初は、比高約1.5mの中州がつくられていたと考えられる。

調査区の西部～北西部には古柴川が流れていたが、その後流路変更し、ここは疊徑の小さい砂礫によって埋積されている。埋積は比較的短時間になされたと思われる。11～12世紀頃から、砂やシルトなどの細粒堆積物が柴川によって調査区付近にもたらされるようになったと考えられる。最初は旧河道、その後、旧中州をも覆うように堆積した。

11～12世紀頃の水田經營はこのような砂やシルトなどの堆積開始期になされたと考えられる。

段丘化の時期は11～12世紀以降と考えられ、13世紀に至って調査地点は安定し、集落として使用されるようになったものと考えられる。



第463図 下層土層堆積状況

## 第5章 自然科学分析結果

### 第1節 D地区火山灰分析および種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

兵庫県東部の山東盆地東端付近に所在する栗鹿遺跡は、栗鹿川によって形成された北北西に広がる扇状地の先端付近に位置する。平成12年に行われたD地区の発掘調査では、弥生時代後期および古墳時代中期末～後期とされる竪穴住居跡が多数検出され、それらの遺構に伴う土器などの遺物も多数出土している。

本報告では、D地区において遺構や遺物を包含する扇状地表層を覆う土壤層について、重鉱物組成および指標テフラに由来する火山ガラスの有無を確認することにより、その年代と層序にかかる資料を得る。また、古墳時代の土坑から出土した種実遺体の種類の同定も行い、該期の植生等について考察する。

#### 1. 試 料

土壤層の試料は、2000194 D地区より採取された土壤サンプル1～3の3点である。土壤サンプル1および2は黒褐色を呈するシルト質の土壤であり、土壤サンプル3は灰黄褐色を呈する砂質の土壤である。

種実同定は、D地区のSK29 (SH12内) から検出された種実遺体1点について実施する。

#### 2. 分析方法

##### (1)重鉱物・火山ガラス比分析

試料約40gに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が $1/16\text{ mm}$ より小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径 $1/4\text{ mm} \sim 1/8\text{ mm}$ の砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の3つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた纖維束状のものとする。

なお、本分析では、試料が「火山灰（テフラ）」とされていることから、火山ガラスが検出された場合には、テフラの同定のための指標として、その屈折率を測定する。測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

## 第1節 D地区火山灰分析および種実同定

### (2)種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川,1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか,2000)等と比較し、種類を同定する。分析後の種実遺体は、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

## 3. 結 果

### (1)重鉱物・火山ガラス比分析

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成は、3点の試料ともに「その他」とした不明粒が非常に多く、

表1 重鉱物・火山ガラス比分析結果

地点名	試料名	重鉱物組成							火山ガラス比							
		斜方輝石	單斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	紅レン石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
2000194 D地区	土壤サンプル1	8	0	28	0	3		0	5	206	250	8	0	0	242	250
	土壤サンプル2	14	3	28	0	17	1	1	2	184	250	4	0	1	245	250
	土壤サンプル3	15	0	34	1	41	0	0	0	159	250	16	0	2	232	250

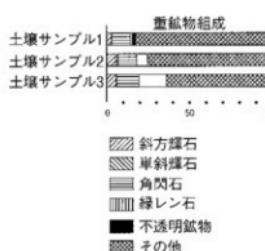


図1 2000194 D地区試料の重鉱物組成および火山ガラス比

それを除けば、いずれも斜方輝石、角閃石、緑レン石の3者を主体とする組成である。ただし、土壤サンプル1は他の試料に比べて緑レン石が微量しか含まれない。なお、重鉱物組成において「その他」とした粒は、不定形を呈し、表面には凹凸があり、透過光下では不透明、落射光下では白灰色を帯びる。光学的な性質が得られないため、鏡下での同定は不能である。後述する周辺地質を考慮すれば、蛇紋石等の鉱物が考えられるが、同定するためにはX線回折などにより確認することが必要である。

火山ガラス比では、3点の試料ともに、少量の無色透明のバブル型火山ガラスが検出された。比較的多く含まれていた土壤サンプル3中の火山ガラスの屈折率を測定したところ、n1.499～1.500の狭いレ

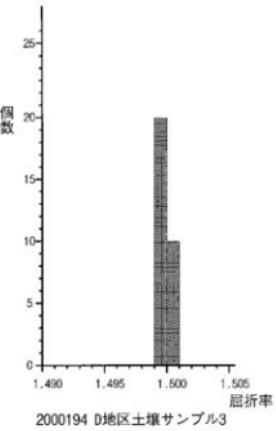


図2 火山ガラスの屈折率測定結果

ンジに集中する結果が得られた（図2）。

## （2）種実同定

種実遺体1点は、マメ類（マメ科）の種子に同定された。炭化しており黒色を呈す。2枚からなる子葉の合わせ目から半分に割れた1片で、半長椭円体、長さ7mm、径5mm程度。種皮表面は焼け崩れいるなど状態は悪く、腹面中央の子葉の合わせ目上にある臍は確認されない。子葉内面は胚乳の窪みがみられる。幼胚、初生葉は不明瞭。

## 4. 考 察

### （1）土壤サンプルについて

栗鹿遺跡の位置する山東盆地周辺の地質については、猪木（1981）や日本の地質「近畿地方」編集委員会編（1987）などにより概観することができる。盆地を取り巻く山地を構成している地質は、主に白亜紀～古第三紀の花崗閃緑岩であり、その岩体の周囲には夜久野岩類と呼ばれる変成岩や斑塊岩からなる地質や相生層群とよばれる安山岩類の溶岩や火碎岩からなる地質が分布する。これらの地質に由来する碎屑物が、山東盆地に供給されていると考えられる。今回の土壤サンプルの重鉱物組成に認められる斜方輝石、角閃石、緑レン石という組み合わせは、それぞれ安山岩類、花崗閃緑岩、変成岩に由来する碎屑物が混在していることを示唆している可能性がある。したがって、山東盆地内の土壤層の重鉱物組成は、基本的には今回得られた組成と同様であると考えられ、現時点では詳細な層序対比の指標になり得るものであるか否かは判断できない。今後の分析例の蓄積が必要と考えられる。

一方、火山ガラスについては、その形態と屈折率から、始良 Tn 火山灰（AT：町田・新井,1976）に由来すると考えられる。ただし、今回の分析結果からは、その降灰層準を推定することはできない。現時点では、3点の試料は、いずれも AT 降灰以降に形成された土壤である可能性が高いといえるが、それ以上の詳細な年代観については不明である。なお、AT の噴出年代については、80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか（1987）、村山ほか（1993）、池田ほか（1995）、宮入ほか（2001）など）から、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおける AT の発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5～3.2万年前におよぶとされている（町田・新井,2003）。町田・新井（2003）は、AT の放射性炭素年代を層年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、層年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になるであろうとしている。

### （2）種実について

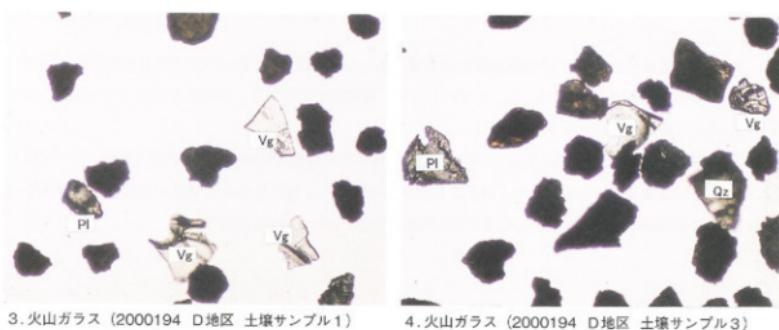
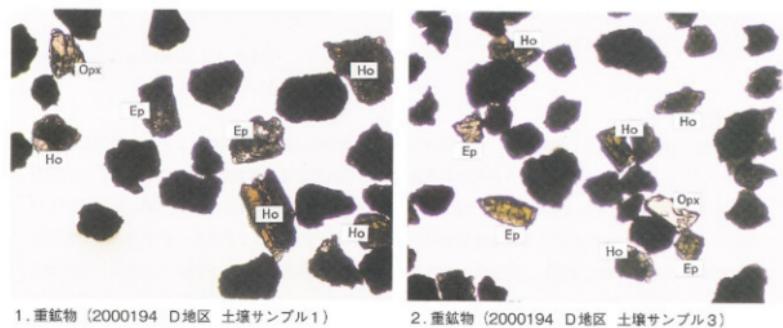
遺跡出土の炭化マメ類について、子葉内面の幼胚や初生葉の形態から、ササゲ、アズキ、リョクトウなどを判別する試みが行われている（吉崎,1992）。一方、野生種との雜種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しいとも考えられている（南木,1991；南木・中川,2000など）。最近では、DNA分析による判別が開発されつつある（矢野,2002）。今回検出されたマメ類は、遺存状態が悪いため、現時点では形態のみによる種類の特定は控え、今後の資料の蓄積を持ち検討したいと考える。

なお、マメ類は、古くから栽培のために渡來した植物であり（南木,1991）、種子が食用される。栽培植物のマメ類の可食部である種子が、1個のみではあるが、住居跡から炭化した状態で検出されたことを考慮すると、当時の本遺跡周辺における利用が推定される。

## 第1節 D地区火山灰分析および種実同定

### 引用文献

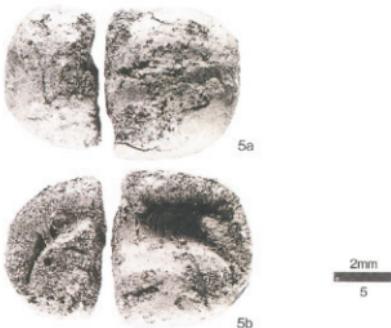
- 池田亮子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫.1995.南九州、姶良カルデラ起源の大崩降下軽石と入戸火碎流中の  
炭化樹木の加速器質量分析法による<sup>14</sup>C年代.第四紀研究,34,377-379.
- 猪木幸男.1981.20万分の1地質図幅「姫路」.地質調査所.
- 石川 茂雄.1994.原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会.328p.
- 埋蔵文化財研究会.2001.埋蔵文化財データーベース.第50回埋蔵文化財研究集会 環境と人間社会－適応、開発から共生  
へ－ 発表要旨集.
- 町田 洋・新井房夫.1976.広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－.科学,46,339-347.
- 町田 洋・新井房夫.2003.新編 火山灰アトラス.東京大学出版会.336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗.1987.姶良Tn火山灰の<sup>14</sup>C年代.第四紀研究,26,79-83.
- 南木 陸彦.1991.枕塔植物・古墳時代の研究 4 生産と流通 I.石野博信・岩崎章也・河上邦彦・白石太一郎編.雄山閣.  
165-174.
- 南木 陸彦・中川 治美.2000.大型植物遺体.琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3-2 球津湖底遺跡 自然流路  
(栗津洞底遺跡Ⅲ).滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会.49-112.
- 宮入篤介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎.2001.姶良Tn火山灰のC-14年代のクロスチェック(演旨).地球惑  
星科学関連学会合同大会予稿集(CD-ROM).2001.Qm-010.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦.1993.四国沖ビストンコア試料を用いたA T火山灰噴出  
年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の<sup>14</sup>C年代－.地質学雑誌,99,787-798.
- 中山 至大・井之口 喜秀・南谷 忠志.2000.日本植物種子図鑑.東北大学出版会.642p.
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会.1987.日本の地質6 近畿地方.共立出版.297p.
- 矢野 桢.2002.遺跡から出土した小型豆のDNA分析.DNA考古学Newsletter3.
- 吉崎 昌一.1992.古代雜穀の検出.月刊考古学ジャーナル,No.355,2-14.



Qz : 石英 PI : 斜長石 Opx : 斜方輝石 Ho : 角閃石 Ep : 緑簾石 Vg : 火山ガラス

0.5mm

1.2.3.4



5. マメ類種子 (D地区 SK29 (SH12内))

写真9 重鉱物・火山ガラス・種実遺体

## 第2節 A3地区火山灰分析およびF・G地区樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

兵庫県山東町に所在する栗鹿遺跡では、平成12年度に行われた本発掘調査により、弥生時代・古墳時代および奈良時代を中心とする大規模な集落跡が確認されている。本報告では、平成12年度の調査区のうち、A3地区において採取された火山灰（テフラ）とされる堆積物について、重鉱物組成および指標テフラに由来する火山ガラスの産状を調べることにより、テフラ層であるか、テフラ層である場合には指標テフラとの対比を行い、調査区における年代と層序にかかる資料を得る。また、F地区およびG地区において検出された奈良時代とされる掘立柱建物跡より採取された柱根とされる木材の樹種同定もを行い、該期の木材利用について考察する。

### 1. 試料

テフラとされた試料は、A3地区東壁断面5層とされた橙灰色シルト層より採取された堆積物1点であり、試料名は栗鹿A3火山灰No.1とされている。発掘調査所見では、指標テフラのAT（後述）に相当する可能性があると考えられている。

樹種同定の対象とされた柱根は、いずれも奈良時代の掘立柱建物跡の柱穴より採取されたW1～W7までの7点である。これらのうち、W1はF地区の遺構より、他の6点はG地区の遺構より採取されている。各試料の採取された柱穴の番号等は同定結果を呈示した表2に併記する。

### 2. 分析方法

#### (1)重鉱物・火山ガラス比分析

試料約40gに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。乾燥させた後、簡別して、得られた粒径1/4mm～1/8mmの砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の3つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた纖維束状のものとする。

なお、本分析では、試料が「火山灰（テフラ）」とされていることから、火山ガラスが検出された場合には、テフラの同定のための指標として、その屈折率を測定する。測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

## (2)樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・桿目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

## 3. 結果

表1 重鉱物・火山ガラス比分析結果

## (1)重鉱物・火山ガラス比分析

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成は、角閃石が最も多く、全体の60%程度を占める。次いで斜方輝石が多く、20%程度を占め、さらに10%程度の緑レン石と微量の不透明鉱物を含む。

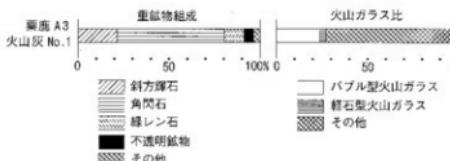


図1 火山灰試料の重鉱物組成および火山ガラス比

火山ガラス比では、火山ガラスが30%弱の量比で計数された。

火山ガラスのはほとんどは無色透明のバブル型であり、微量の無色透明の軽石型も含まれる。火山ガラスの屈折率は、n1.499～1.500の狭いレンジに集中する

結果が得られた（図2）。

## (2)樹種同定

樹種同定結果を表2に示す。柱根は針葉樹のヒノキが多く、他に針葉樹のヒノキ科と落葉広葉樹のクリが各1点同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

表2 樹種同定結果

試料 No.	地区	造構	層位	種類	樹種
W1	F 地区	ピット315		柱根	ヒノキ
W2	G 地区	ピット156		柱根	ヒノキ
W3	G 地区	ピット159		柱根	ヒノキ
W4	G 地区	ピット188		柱根	クリ
W5	G 地区	ピット202	2層	柱根	ヒノキ科
W6	G 地区	ピット273		柱根	ヒノキ
W7	G 地区	ピット311		柱根	ヒノキ

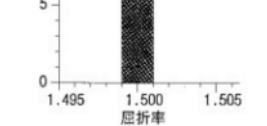


図2 火山ガラスの屈折率測定結果

## 第2節 A3 地区火山灰分析およびF・G 地区樹種同定

### ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1 分野に 1-3 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

### ・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10 細胞高。

上記ヒノキの可能性が高いと考えられるが、分野壁孔が観察できなかったために他のヒノキ科の可能性も否定できず、ヒノキ科とした。

### ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔團部は 3-5 列、孔團外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

## 4. 考 察

### (1)火山灰試料について

試料より検出された火山ガラスについては、その形態と特徴的な屈折率の状況から、始良 Tn 火山灰 (AT:町田・新井,1976) に由来することは確実である。AT の噴出年代については、80 年代後半から 90 年代にかけて行われた放射性炭素年代測定 (例えば松本ほか (1987)、村山ほか (1993)、池田ほか (1995)、宮入ほか (2001) など) から、放射性炭素年代ではおよそ 2.5 万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおける AT の発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ 2 と 3 の境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は 2.5 ~ 3.2 万年前におよぶとされている (町田・新井,2003)。町田・新井 (2003) は、AT の放射性炭素年代を曆年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、曆年ではおそらく 2.6 ~ 2.9 万年前頃になるであろうとしている。

今回の火山ガラス比分析により得られた火山ガラスの量比は、一般的な堆積物に比べると多量の火山ガラスを含む堆積物であると判断される。すなわち、試料が採取された橙灰色シルト層は、AT の降下堆積層であるとは言えないが、AT の降下堆積層が擾乱を受けた層あるいは AT が降下堆積後にそれほど時間を置かずに再堆積した層であると考えられる。したがって、火山灰試料を含む A3 地区 5 層の堆積年代は、AT の噴出年代に近い時期である可能性が高い。栗鹿遺跡の位置する付近の地形は、栗鹿山北西部に広がる麓肩面とされる緩斜面とその北側に扇状地の上面に相当するさらに緩い傾斜の斜面からなることが、栗鹿遺跡の発掘調査概報にも述べられている。丹波高地や播但山地内に分布する盆地には、麓肩面や扇状地が形成されていることが多い (太田ほか編 2004) が、上述した山東盆地の地形もその例に含まれると考えられる。これら麓肩面や扇状地の成因は、山地付近の小流域内での岩屑・土砂生産の盛衰、降水・出水量の変化すなわち水文環境の変化によると考えられており、後期更新世における水期・間水期のサイクルに対応した 4 期におよぶ形成時期も設定されている (田中・野村,1992)。また、この形成時期の設定には、地形を構成する碎屑物中に挟まれている指標テフラが用いられている。上述したように、今回の分析により、栗鹿遺跡の位置する扇状地堆積物中にも AT の降灰年代に近い可能性の

ある年代指標が得られたことから、その地形の形成について周辺との関係から推定されることが期待される。今後、栗鹿遺跡周辺の堆積層に関して、その層位や周辺の層序および地形との関係などの詳細が明らかになることがあれば、後期更新世および完新世における山東盆地の地形発達を推定することも可能と考えられる。このことは、例えば、山東盆地における旧石器時代や縄文時代の遺跡の有無あるいは分布にも関連することになる。

ところで、当社では平成12年度調査区の一つであるD地区で採取された堆積物についても今回と同様の分析を行い、周辺の地質に由来する重鉱物組成と少量のATの火山ガラスの含有を確認している。今回の重鉱物組成も前回と同様の斜方輝石、角閃石、緑レン石という組み合わせであり、これらは周辺の地質を反映している。また、D地区の堆積物は「その他」とした不明鉱物が多いという点では、今回の試料とは異なる組成とも言えることから、現時点では、堆積物の重鉱物組成が層序対比の指標になり得るものか否かは判断できない。なお、今回の試料では、ATの火山ガラスが比較的多く含まれることから、重鉱物組成における斜方輝石の中には、ATに由来するものも含まれていると考えられる。

## (2)柱根について

柱根は、F地区の1点がヒノキ、G地区6点のうち、4点がヒノキ、2点がヒノキ科とクリであり、ヒノキを中心とした木材利用が推定される。これらの柱材は、いずれも奈良時代の掘立柱建物のものとされるが、柱穴と建物の対応などの詳細は不明である。

ヒノキは木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性に優れる。ヒノキ科は、ヒノキのほか、サワラ、アスナロ、ネズコ等の有用材が含まれ、ヒノキと同様に加工が容易で耐水性が高い。一方、クリは重硬で強度および耐朽性・耐水性が高いが加工はやや困難である。いずれも耐水性が比較的高い点で共通点があるが、1点のみ認められたクリは、加工性等の材質がヒノキ・ヒノキ科とは異なるため、利用状況が異なった可能性もある。

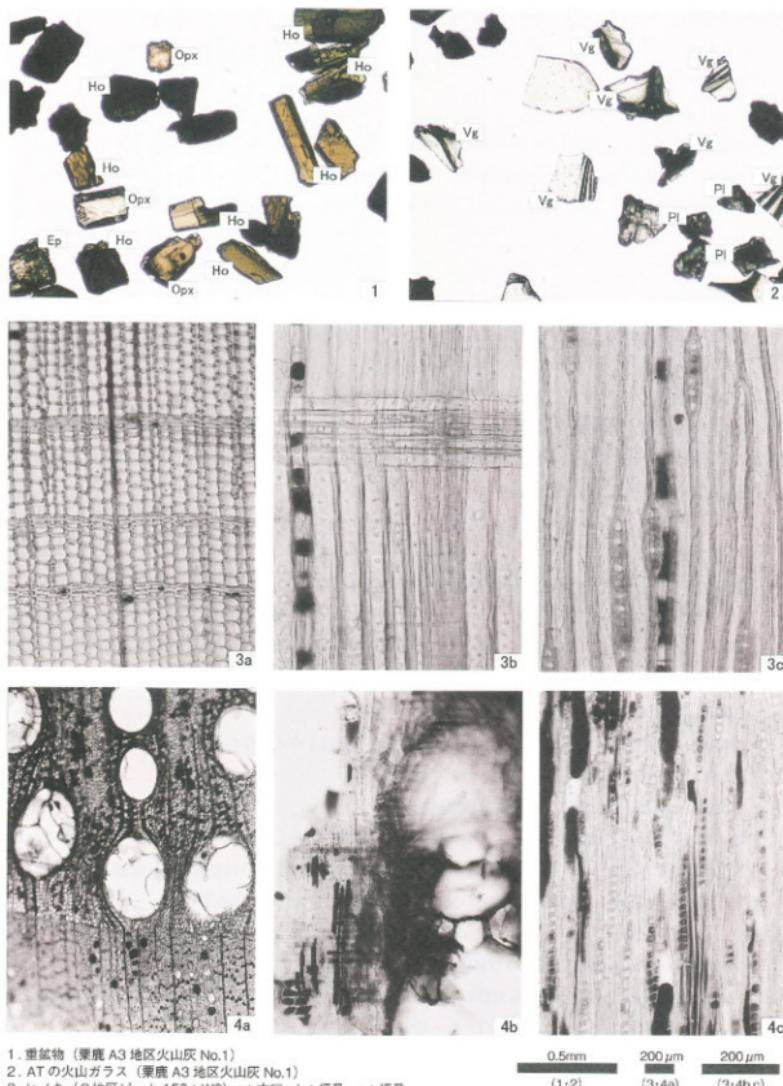
兵庫県内では、播磨地域を中心に柱材の樹種同定が実施されており、古代以降ヒノキが多くなる傾向があるとされる（中村,2001）。本遺跡が含まれる但馬地域では、同時期の建築部材について樹種同定を実施した例がほとんど無いため、木材利用については不明であったが、今回の結果から播磨地域と同様にヒノキを利用していた可能性がある。

## 引用文献

- 林 明三,1991,日本産木材 跡敷鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫,1995,南九州、姶良カルデラ起源の人萬降下轟石と入戸火葬流中の炭化樹木の加速器質量分析法による<sup>14</sup>C年代,第四紀研究34,377-379.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 町田 洋・新井房丈,1976,広域に分布する火山灰-姶良Tn火山灰の発見とその意義-,科学,46,339-347.
- 町田 洋・新井房丈,2003,新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗,1987,姶良Tn火山灰の<sup>14</sup>C年代,第四紀研究26,79-83.
- 官山陽介・吉田邦丈・宮崎ゆみ・小原圭一・兼岡一郎,2001,姶良Tn火山灰のC-14年代のクロスチェック(演旨),地殻惑星科学関連学会合同大会予稿集(CD-ROM),2001Qm-010.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦,1993,四国沖ビストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タントドロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の<sup>14</sup>C年代-地質学雑誌,99,787-798.
- 中村 弘,2001,兵庫県における樹種同定資料について,兵庫県歴史文化財研究紀要,創刊号,兵庫県教育委員会歴史文化財調査

## 第2節 A3地区火山灰分析およびF・G地区樹種同定

- 事務所,103-121.
- 太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正編,2004,日本の地形6 近畿・中国・四国,東京大学出版会,383p.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz L and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,説明木材組織,地球社,176p.
- 田中眞吾・野村亮太郎,1992,中国山地東部における後期更新世の山地堆積地形とその形成環境,地理学評論,65,180-194.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 I AWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



1. 重鉱物 (栗鹿 A3 地区火山灰 No.1)  
 2. ATの火山ガラス (栗鹿 A3 地区火山灰 No.1)  
 3. ヒノキ (G地区ピット 156; W2) a:木口 b:胚目 c:板目  
 4. クリ (G地区ピット 188; W4) a:木口 b:胚目 c:板目  
 PI:斜長石 Opx:斜方輝石 Ho:角閃石 Ep:緑レン石 Vg:火山ガラス

写真 10 重鉱物・火山ガラス・木材

## 第3節 A・C・D地区炭化材樹種同定

株式会社古環境研究所

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。なお、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2. 試 料

試料は、栗鹿遺跡で出土した炭化材3点である。時期は古墳時代とされている。

### 3. 方 法

試料を剖析して、炭化材の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（桿目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4. 結 果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

#### モミ属 *Abies* マツ科 写真11-1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同心放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、そのうちウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

#### ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科 写真11-2

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1～3細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10~15m、径30~40cmである。材は堅硬で、韧性に富み、建築などに用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 写真11-3

横断面：小型の道管が、単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔孔からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で單列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8~10m、径20~30cmである。材は強靭かつ堅硬で、建築、器具などに用いられる。

## 5. 所 見

同定の結果、栗鹿遺跡の炭化材はモミ属1点、ヤマグワ1点、サカキ1点であった。モミ属のうちモミおよびヤマグワは、温帯の谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好む。サカキは、西南日本に分布する照葉樹林の主要構成要素であり、谷間や斜面等の肥沃地を好む。いずれの樹種も温帯もしくは温帯下部の暖温帯に分布するものばかりであり、遺跡周辺あるいは近隣よりもたらすことのできる材である。

### 参考文献

- 佐治浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞・木材の構造.文永堂出版.p.20-48.  
 佐治浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞・木材の構造.文永堂出版.p.49-100.  
 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧.雄山閣.p.296  
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成.植生史研究特別第1号.植生史研究会.p.242

表1 栗鹿遺跡における樹種同定結果

地 区	遺 構	結 果 (学名/和名)	
A地区	A-SH105	<i>Abies</i>	モミ属
C地区	C-SH2013南側	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
D地区	D-SH17	<i>Morus australis</i> Poiret	ヤマグワ

第3節 A・C・D地区炭化材樹種同定

栗鹿遺跡の炭化材

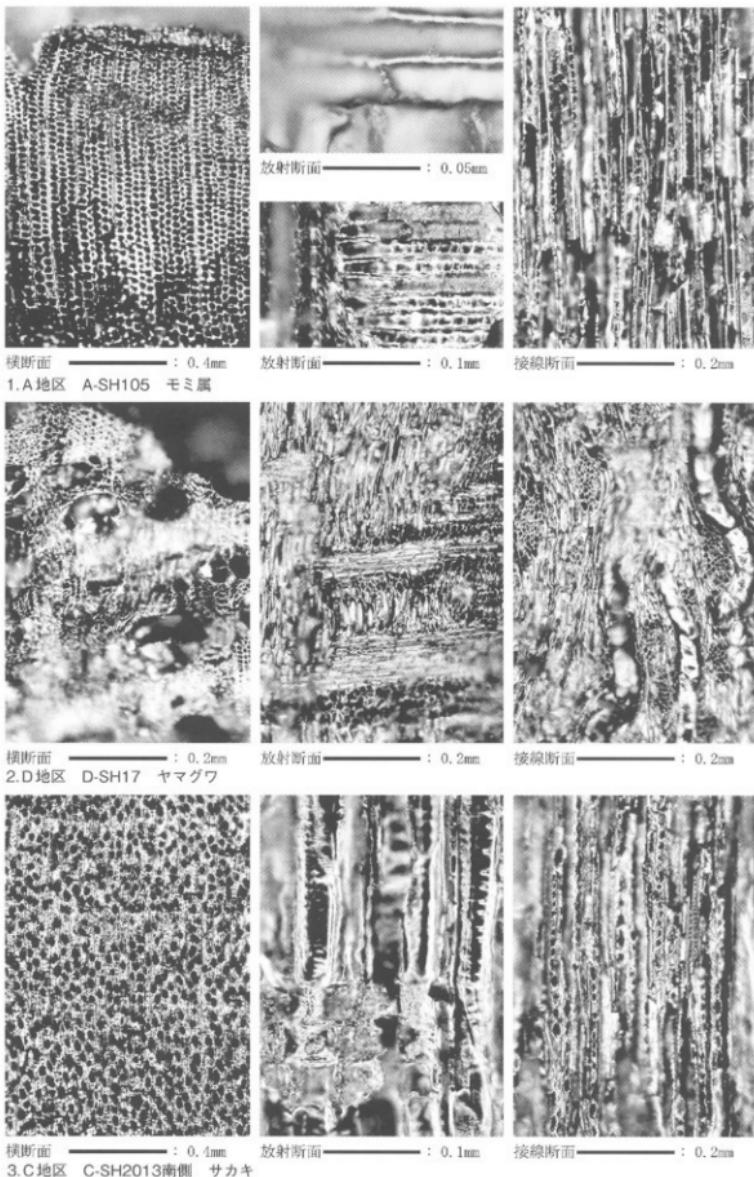


写真 11 栗鹿遺跡の炭化材

## 第4節 A・C・D地区炭化材等の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

### 1. はじめに

栗鹿遺跡より検出された炭化材および炭化種子の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

### 2. 試料と方法

試料は、A地区から採取した炭化材1点、C地区から採取した炭化材1点、D地区Iから採取した炭化材2点、D地区IIから採取した炭化材4点、D地区IIIから採取した炭化材1点、D地区IVから採取した炭化材1点、D地区から採取した炭化種子1点の併せて11点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定した<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した<sup>14</sup>C濃度を用いて<sup>14</sup>C年代を算出した。

### 3. 結 果

表1に、各試料の同位体分別効果の補正值(基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を示す。

<sup>14</sup>C年代は、AD1,950年を基点にして何年前かを示した年代である。なお、<sup>14</sup>C年代値(yrBP)の算出は、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の<sup>14</sup>C年代が、その<sup>14</sup>C年代誤差範囲内に入る確率が68.2%であることを意味する。

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

### 曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5,730 ± 40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、<sup>14</sup>C年代を曆年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較、および海成堆積物中の繊維状の堆積構造を用いて<sup>14</sup>C年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を算出する。

<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代の算出にOxCal v3.10(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、 $1\sigma$ 曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する、68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、 $2\sigma$ 曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差の2倍に相当する、95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその $1\sigma$ 曆年代範囲および $2\sigma$ 曆年代範囲の確からしさを示す確率である。 $1\sigma$ 曆年代範囲および $2\sigma$ 曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

## 4. 考 察

各試料は、同位体分別効果の補正および曆年代較正を行った。曆年代較正した  $1\sigma$  曆年代範囲および  $2\sigma$  曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

\*バレオ・ラゴ AMS 年代測定グループ

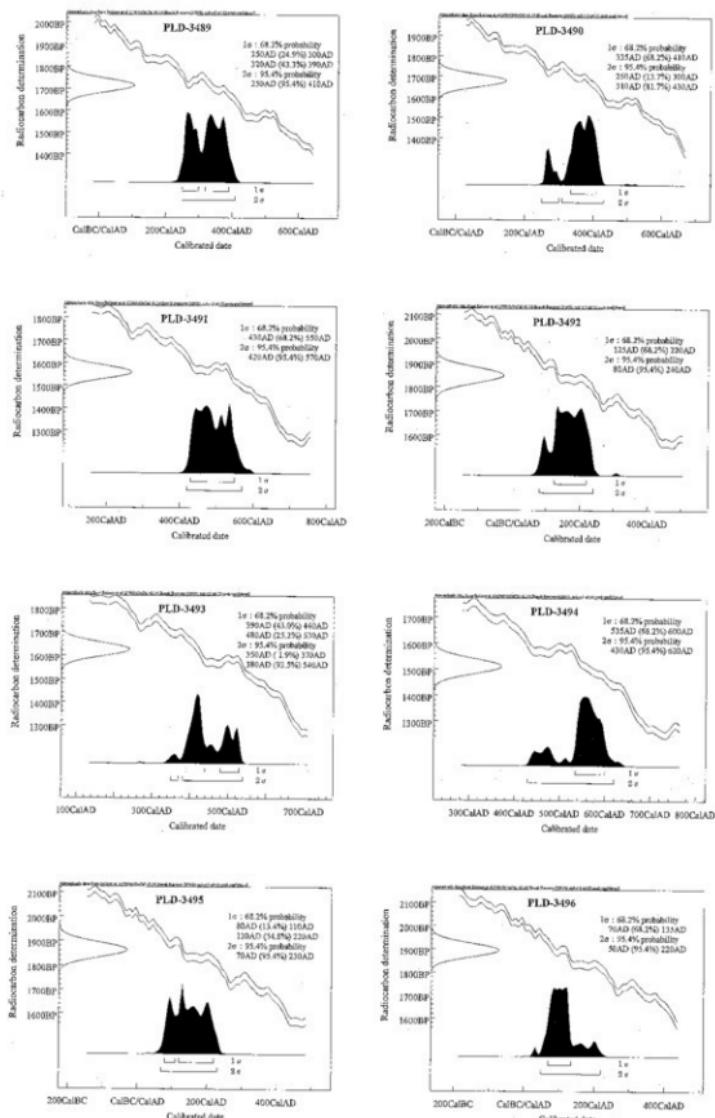
小林絢一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjiani

## 参考文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代、p.3-20  
 Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40 (3), p.1041-1083  
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program Radiocarbon, 37 (2), p.425-430  
 Bronk Ramsey C. 2001. Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), p.355-363

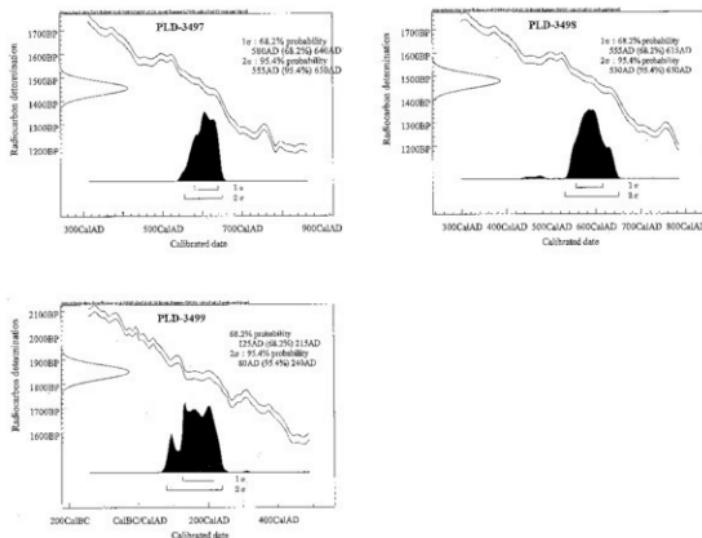
表1. 放射性炭素年代測定および曆年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を曆年代に較正した年代	
				$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
PLD-3489 (AMS)	炭化材 A地区 A-SH105 埋土	-25.1	1,715 $\pm$ 30	cal AD 250 - 300 (24.9%) cal AD 320 - 390 (43.3%)	cal AD 250 - 410 (95.4%)
PLD-3490 (AMS)	炭化材 C地区 C-SH2013南側 炭化物サンプル	-28.3	1,680 $\pm$ 30	cal AD 335 - 410 (68.2%)	cal AD 250 - 300 (13.7%) cal AD 310 - 430 (81.7%)
PLD-3491 (AMS)	炭化材 D地区 I SH2内カマド	-27.1	1,560 $\pm$ 30	cal AD 430 - 550 (68.2%)	cal AD 420 - 570 (95.4%)
PLD-3492 (AMS)	炭化材 D地区 I SH9	-29.5	1,850 $\pm$ 30	cal AD 125 - 220 (68.2%)	cal AD 80 - 240 (95.4%)
PLD-3493 (AMS)	炭化材 D地区 II SH13 埋土 (上層)	-27.1	1,625 $\pm$ 30	cal AD 390 - 440 (43.0%) cal AD 480 - 530 (25.2%)	cal AD 350 - 370 (1.9%) cal AD 380 - 540 (93.5%)
PLD-3494 (AMS)	炭化材 D地区 II SH15 埋土 (下層)	-27.6	1,510 $\pm$ 30	cal AD 535 - 600 (68.2%)	cal AD 430 - 620 (95.4%)
PLD-3495 (AMS)	炭化材 D地区 II SH17 東邊	-27.4	1,865 $\pm$ 30	cal AD 80 - 110 (13.4%) cal AD 120 - 220 (54.8%)	cal AD 70 - 230 (95.4%)
PLD-3496 (AMS)	炭化材 D地区 II SH18	-25.9	1,895 $\pm$ 30	cal AD 70 - 135 (68.2%)	cal AD 50 - 220 (95.4%)
PLD-3497 (AMS)	炭化材 D地区 III SH21西半 埋土	-27.2	1,455 $\pm$ 30	cal AD 580 - 640 (68.2%)	cal AD 555 - 650 (95.4%)
PLD-3498 (AMS)	炭化材 D地区 IV SK46 (SH26内)	-26.6	1,480 $\pm$ 30	cal AD 555 - 615 (68.2%)	cal AD 530 - 650 (95.4%)
PLD-3499 (AMS)	炭化種子 D地区 SH20	-27.8	1,850 $\pm$ 30	cal AD 125 - 215 (68.2%)	cal AD 80 - 240 (95.4%)



第464図 年代較正結果(1)

第4節 A・C・D地区炭化材等の放射性炭素年代測定



第465図 暦年代校正結果(2)

## 第5節 A3・E・F地区土壤の放射性炭素年代測定

(株)加速器分析研究所

### 1. 遺跡の所在

栗鹿遺跡は、兵庫県朝来市山東町栗鹿字大門ほか（北緯  $35^{\circ} 18' 10''$ 、東経  $134^{\circ} 54' 17''$ ）に所在する。

### 2. 遺跡の立地

栗鹿遺跡は南方の栗鹿山から北下し、西に流れを変える栗鹿川と、遠阪峠から西に流れる柴川によって形成された低位段丘および田沢原に立地する。地形は南東から北東方向へと緩やかに傾斜し、圃場整備のため削平や土取り等による擾乱も多い。弥生時代から奈良時代の遺構が検出された。

### 3. 測定の意義

各地区的土層の年代と遺構の年代を推定することを目的とする。

### 4. 測定対象試料

測定対象となる試料は、F地区断面サンプル No.1 暗褐色シルト (awaga001 : IAAA-61866)、同 No.2 暗灰色シルト (awaga002 : IAAA-61867)、A3地区南壁断面サンプル 1 黒灰色シルト最上部 (awaga003 : IAAA-61868)、同サンプル 2 黒灰色シルト最下部 (awaga004 : IAAA-61869)、同サンプル 3 暗灰色シルト (awaga005 : IAAA-61870)、同サンプル 4 暗灰色シルト (awaga006 : IAAA-61871)、E地区方形貼石墓最下層の暗灰色シルト質極細砂層炭化物混じり (awaga013 : IAAA-61872)、E地区南壁断面クロボク上サンプル (awaga009 : IAAA-61873)、同クロボク下サンプル (awaga010 : IAAA-61874)、E地区 No.3-1 灰色シルト (awaga011 : IAAA-61875)、同 No.3-2 灰色シルト (awaga012 : IAAA-61876)、合計 11 点である。E地区の方形貼石墓は、出土遺物から弥生時代中期末～後期初頭の遺構と推定されている。すべて炭化物や腐植土を含む土壤である。これらの試料は、ビニール袋に入れ保管された。

### 5. 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) 酸処理により内面的な不純物を取り除く。1N の塩酸 ( $80^{\circ}\text{C}$ ) を用いて数時間処理する。  
その後、超純水で中性になるまで希釈し、 $90^{\circ}\text{C}$ で乾燥する。
- 3) 試料を酸化錫 1 g と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、 $500^{\circ}\text{C}$ で 30 分、 $850^{\circ}\text{C}$ で 2 時間加熱する。
- 4) 液体炭素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

## 6. 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134 個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシエウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定も同時に行う。

## 7. 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。
- 2) BP 年代値は、過去において大気中の炭素 14 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950 年を基準年として選ぶ放射性炭素年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。  
複数回の測定値について、 $\chi^2$  検定を行い測定値が 1 つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4)  $\delta^{13}\text{C}$  の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される  $\delta^{13}\text{C}$  の値を用いることもある。  
 $\delta^{13}\text{C}$  補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パー ミル）で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_S - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_S - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_S$ ：試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_S$  または  $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{S}}$

$^{14}\text{A}_R$ ：標準現代炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$  または  $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{R}}$

$\delta^{13}\text{C}$  は、質量分析計を用いて試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{A}_S = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、PDB（白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した  $\delta^{13}\text{C}$  を用いることもある。この場合には表中に「加速器」と記述する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$  は、試料炭素が  $\delta^{13}\text{C} = -25.0$  (‰) であるとしたときの  $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{A}_N$ ) に換算した上で計算した値である。(1) 式の  $^{14}\text{C}$  濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$  の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_S \text{ として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_S \text{ として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_N - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、

同位体補正をしない  $\delta^{13}\text{C}$  に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

$^{14}\text{C}$  濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$  との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (%)}$$

国際的な取り決めにより、この  $\Delta^{14}\text{C}$  あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age : yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5)  $^{14}\text{C}$  年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示する。

6) 軟正暦年代の計算では、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.2 (Copyright 1986-2002 M. Stuiver and P. J. Reimer) を使用した。

## 8. 測定結果

F 地区断面サンプル No.1 暗褐色シルト (awaga001 : IAAA-61866) が  $14220 \pm 40$  yrBP、同 No.2 暗灰色シルト (awaga002 : IAAA-61867) が  $14230 \pm 60$  yrBP の  $^{14}\text{C}$  である。ともに旧石器時代終末頃の年代である。A3 地区南壁断面サンプル 1 黒灰色シルト最上部 (awaga003 : IAAA-61868) が  $5450 \pm 40$  yrBP、同サンプル 2 黒灰色シルト最下部 (awaga004 : IAAA-61869) が  $8480 \pm 40$  yrBP、同サンプル 3 暗灰色シルト (awaga005 : IAAA-61870) が  $9480 \pm 40$  yrBP、同サンプル 4 暗灰色シルト (awaga006 : IAAA-61871) が  $13140 \pm 50$  yrBP の  $^{14}\text{C}$  である。層位の上下関係に整合的である。E 地区方形貼石墓最下層の暗灰色シルト質極細砂層炭化物混じり (awaga013 : IAAA-61872) が  $3380 \pm 30$  yrBP、E 地区南壁断面クロボク上サンプル (awaga009 : IAAA-61873) が  $3020 \pm 40$  yrBP、同クロボク下サンプル (awaga010 : IAAA-61874) が  $3840 \pm 30$  yrBP の  $^{14}\text{C}$  である。E 地区 No.3-1 灰色シルト (awaga011 : IAAA-61875) が  $12160 \pm 50$  yrBP、同 No.3-2 灰色シルト (awaga012 : IAAA-61876) が  $11520 \pm 50$  yrBP となり、近接した  $^{14}\text{C}$  である。処理・炭素含有量・測定内容に問題は無く、妥当な年代であると考えられる。

## 参考文献

- Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data. *Radiocarbon*, 19:355-363  
 Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058  
 Stuiver, M., and Reimer, P. J., 1993, Extended  $^{14}\text{C}$  database and revised CALIB radiocarbon calibration program, *Radiocarbon* 35:215-230

## 第5節 A3・E・F地区土壤の放射性炭素年代測定

IAACodeNo.	試 料	BP 年代および炭素の同位体比		
IAAA-61866 # 1472-1	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 F 地区 試料形態：土壤 試料名(番号)：awaga001	LibbyAge (yrBP)	:	14,220 ± 60
	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	-24.13 ± 0.86	
	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	-829.6 ± 1.2	
	pMC (%)	=	17.04 ± 0.12	
	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	-829.3 ± 1.1	
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC (%)	=	17.07 ± 0.11	
IAAA-61867 # 1472-2	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 F 地区 試料形態：土壤 試料名(番号)：awaga002	Age (yrBP)	:	14,200 ± 50
	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	-22.77 ± 0.87	
	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	-829.8 ± 1.2	
	pMC (%)	=	17.02 ± 0.12	
	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	-829.1 ± 1.2	
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC (%)	=	17.09 ± 0.12	
IAAA-61868 # 1472-3	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 A3 地区 試料形態：腐食土壤 試料名(番号)：awaga003	Age (yrBP)	:	14,190 ± 60
	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	-16.05 ± 0.83	
	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	-492.4 ± 2.3	
	pMC (%)	=	50.76 ± 0.23	
	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	-483.0 ± 2.1	
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC (%)	=	51.70 ± 0.21	
IAAA-61869 # 1472-4	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 A3 地区 試料形態：腐食土壤 試料名(番号)：awaga004	Age (yrBP)	:	5,300 ± 30
	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	8,480 ± 40	
	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	-15.21 ± 0.77	
	pMC (%)	=	-651.9 ± 1.8	
	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	34.81 ± 0.18	
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC (%)	=	-644.9 ± 1.7	
IAAA-61870 # 1472-5	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 A3 地区 試料形態：腐食土壤 試料名(番号)：awaga005	Age (yrBP)	:	8,320 ± 40
	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	9,480 ± 40	
	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	-15.92 ± 0.85	
	pMC (%)	=	-692.8 ± 1.6	
	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	30.72 ± 0.16	
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC (%)	=	-687.1 ± 1.5	
IAAA-61871 # 1472-6	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 A3 地区 試料形態：土壤 試料名(番号)：awaga006	Age (yrBP)	:	9,330 ± 40
	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器)	=	13,140 ± 50	
	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	-23.38 ± 0.83	
	pMC (%)	=	-805.1 ± 1.2	
	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	=	19.49 ± 0.12	
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し pMC (%)	=	-801.5 ± 1.2	
	Age (yrBP)	:	19.55 ± 0.12	
				13,110 ± 50

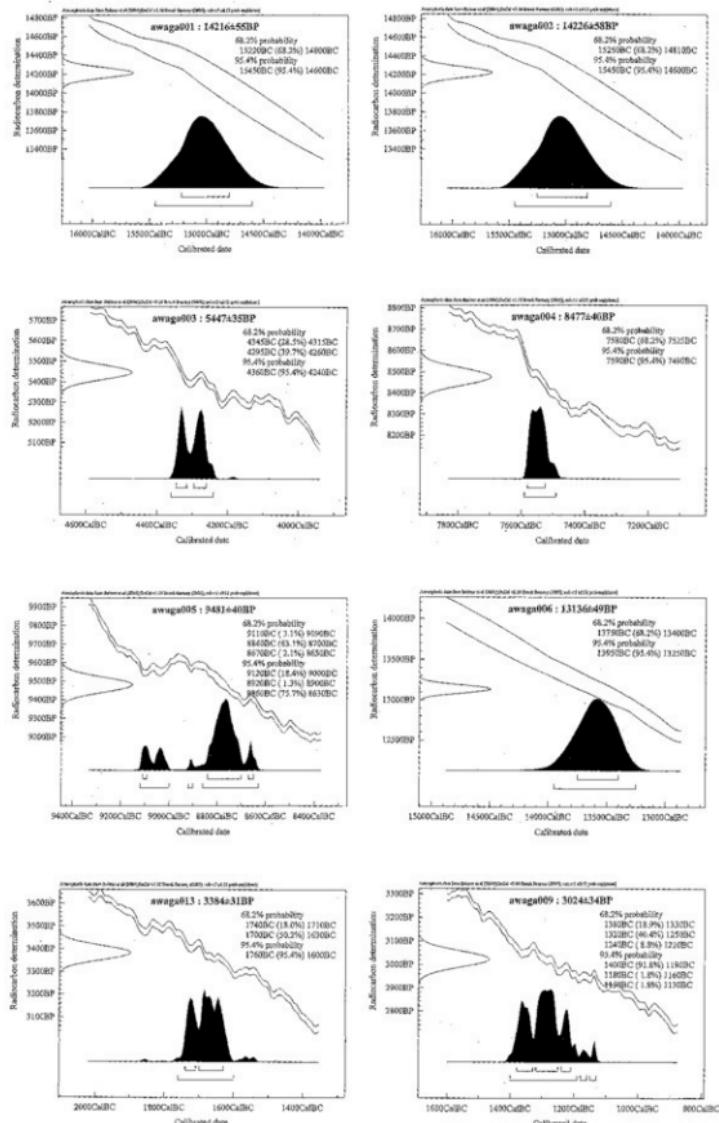
IAACodeNo.	試 料	BP 年代および炭素の同位体比		
IAAA-61872 # 1472-7	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 E 地区	LibbyAge (yrBP) :	3,380	± 30
	試料形態：炭化物混じり土層	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) =	-16.52	± 0.80
	試料名(番号)：awaga013	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) =	-343.8	± 2.6
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%) =	65.62	± 0.26
		$\delta^{14}\text{C}$ (‰) =	-332.4	± 2.4
		pMC (%) =	66.76	± 0.24
		Age (yrBP) :	3,250	± 30
	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 E 地区	LibbyAge (yrBP) :	3,020	± 40
	試料形態：腐食土壌	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) =	-17.28	± 0.81
	試料名(番号)：awaga009	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) =	-313.8	± 3.0
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%) =	68.62	± 0.30
IAAA-61873 # 1472-8	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) =	-302.9	± 2.8
		pMC (%) =	69.71	± 0.28
		Age (yrBP) :	2,900	± 30
	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 E 地区	LibbyAge (yrBP) :	3,840	± 30
	試料形態：腐食土壌	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) =	-18.48	± 0.83
	試料名(番号)：awaga010	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) =	-380.3	± 2.6
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%) =	61.97	± 0.26
		$\delta^{14}\text{C}$ (‰) =	-372.0	± 2.4
		pMC (%) =	62.80	± 0.24
		Age (yrBP) :	3,740	± 30
IAAA-61875 # 1472-9	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 E 地区	LibbyAge (yrBP) :	12,160	± 50
	試料形態：土壤	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) =	-22.92	± 0.89
	試料名(番号)：awaga011	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) =	-780.0	± 1.3
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%) =	22.00	± 0.13
		$\delta^{14}\text{C}$ (‰) =	-779.1	± 1.2
		pMC (%) =	22.09	± 0.12
		Age (yrBP) :	12,130	± 50
	試料採取場所：兵庫県朝来市山東町 栗鹿・栗鹿遺跡 E 地区	LibbyAge (yrBP) :	11,520	± 50
	試料形態：土壤	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) =	-24.64	± 0.87
	試料名(番号)：awaga012	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) =	-761.8	± 1.5
# 1472-11	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%) =	23.82	± 0.15
		$\delta^{14}\text{C}$ (‰) =	-761.6	± 1.4
		pMC (%) =	23.84	± 0.14
		Age (yrBP) :	11,520	± 50

## 第5節 A3・E・F地区土壤の放射性炭素年代測定

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-61866	awaga001	14216 ± 55
IAAA-61867	awaga002	14226 ± 58
IAAA-61868	awaga003	5447 ± 35
IAAA-61869	awaga004	8477 ± 40
IAAA-61870	awaga005	9481 ± 40
IAAA-61871	awaga006	13136 ± 49
IAAA-61872	awaga013	3384 ± 31
IAAA-61873	awaga009	3024 ± 34
IAAA-61874	awaga010	3843 ± 33
IAAA-61875	awaga011	12163 ± 46
IAAA-61876	awaga012	11523 ± 49

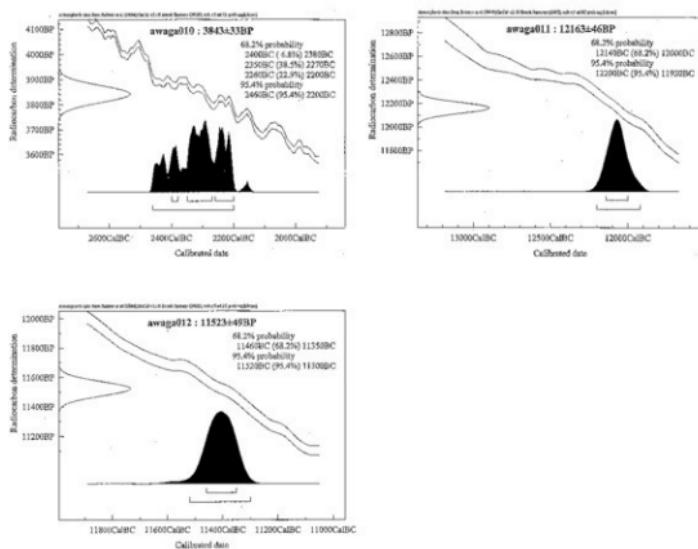
ここに記載する Libby Age (年代値) と誤差は下1桁を丸めない値です。

IAACodeNo.	試料番号	LibbyAge (yrBP)	補正なし (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰) (気選器)	層年較正 1 σ (yrcaBP)	層年較正 2 σ (yrcaBP)
IAAA-61866	1	14220±60	14200±50	-25.413±0.86	15336BC-14842BC	15602BC-14610BC
IAAA-61867	2	14230±60	14190±60	-22.77±0.87	15349BC-14852BC	15616BC-14620BC
IAAA-61868	3	5450±40	5300±30	-16.05±0.83	4339BC-4329BC 4294BC-4252BC	4352BC-4228BC 4176BC-4174BC
IAAA-61869	4	8480±40	8320±40	-15.21±0.77	7578BC-7536BC 7531BC-7524BC	7587BC-7516BC 7385BC-7384BC
IAAA-61870	5	9480±40	9330±40	-15.92±0.85	9106BC-9103BC 9093BC-9072BC 9048BC-9015BC 8806BC-8721BC 8708BC-8691BC 8659BC-8651BC	9118BC-8992BC 8895BC-8878BC 8858BC-8851BC
IAAA-61871	6	13140±40	13110±50	-23.38±0.83	14130BC-13561BC	14333BC-12906BC
IAAA-61872	13	3380±30	3250±30	-16.52±0.80	1737BC-1711BC 1693BC-1679BC 1671BC-1656BC 1654BC-1623BC	1745BC-1602BC 1568BC-1533BC
IAAA-61873	9	3020±40	2900±30	-17.28±0.81	1372BC-1340BC 1318BC-1257BC 1237BC-1214BC	1390BC-1329BC 1323BC-1208BC 1202BC-1190BC 1178BC-1158BC 1141BC-1131BC
IAAA-61874	10	3840±30	3740±30	-18.48±0.83	2398BC-2383BC 2346BC-2275BC 2254BC-2228BC 2222BC-2205BC	2457BC-2419BC 2405BC-2200BC
IAAA-61875	11	12160±50	12130±50	-22.92±0.89	13024BC-12810BC 12391BC-12115BC 11977BC-11898BC	13403BC-12672BC 12418BC-12106BC
IAAA-61876	12	11520±50	11520±50	-24.64±0.87	11848BC-11718BC 11568BC-11445BC 11417BC-11379BC	11886BC-11669BC 11598BC-11213BC



第466図 年代校正結果(1)

## 第5節 A3・E・F地区土壤の放射性炭素年代測定



第467図 历年代較正結果(2)

## 第6章 まとめと考察

### 第1節 粟鹿遺跡の変遷

今回の粟鹿遺跡の総調査面積は 50,265 m<sup>2</sup> および、縄紋時代から近世までの非常に多くの遺構と遺物が検出された。

これらの遺構・遺物が構築・使用されていた時代は長きにおよび、今回の報告では調査区ごとに分けで記述しているため、全体を通してその様相を探ることにする。

#### 1. 縄紋時代

縄紋時代の遺構は検出されなかったが、土器・石器が出土している。A地区では突帯文土器、B地区では縁帶文系、D・E地区では磨消縄紋の土器と突帯文土器、石礫・石斧といった石器も出土している。また、G地区では突帯文土器が目立つ。いずれも後期中頃～晩期の土器であるが、少量であることから、弥生前期～中期中葉の土器と同じように流入してきたものの可能性が高い。ただし、石器が多く出土したD地区では遺構が存在していたかもしれない。

#### 2. 弥生時代

弥生時代の遺構には竪穴住居跡・墓・溝・土壙などがあり、竪穴住居跡には矩形・円形のほか、張り出し部を有するものも存在する。墓には方形貼石墓をはじめ、木棺墓・土塼墓・土器棺墓がある。

##### 弥生時代中期末～後期前半

弥生時代～古墳時代初頭の竪穴住居跡は総数 30 棟あまり存在する。調査区南東部を除くほぼ全域に散在状態で分布しており、特に粗密は認められない。

弥生時代中期末～後期前半の住居跡は約 15 棟存在し、北部～東端では未検出で、中央部ではやや少ない。住居跡平面形は矩形（方形・長方形）系と円形系があり、矩形系は 8 棟、円形系は 7 棟で、数のうえでは拮抗する。

墓は方形貼石墓が中央部の E 地区で検出されているが、東部では木棺墓・土塼墓、西部では土器棺墓と所在地を分けているようにも見受けられる。溝は A・B 地区で検出された溝が一連のものとしてとらえられ、東西幅 70 m、南北長さ 60 m 以上の範囲を取り巻くように馬蹄形にめぐるが、その範囲内からは特に重要な遺構や住居跡等が検出されているわけではなく、溝の機能は不明である。

なお、木棺墓からはガラス製玉類などが出土し、住居跡 D-SH20 からは碧玉や緑色凝灰岩製の玉未製品が多く出土している。

##### 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭

この時期の竪穴住居跡は B3 地区で特に集中して数多く認められる以外は、前代と分布状況に変化はない。平面形では矩形系と円形系の両者が認められ、数の上でもほぼ同じである。また、規模の点でも前代と変化はないが、F 地区で突出部を有する円形住居跡が存在し、周囲に細い溝をめぐらせている。

### 3. 古墳時代

栗鹿遺跡検出遺構のうち、最も多いのが古墳時代と中世のものである。

古墳時代の遺構には竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・土壙・柱穴などがある。竪穴住居跡は時期的にも古墳時代初頭から飛鳥時代（TK-217 型式期新段階）におよぶが、中央のE地区をはさんで東西に分布が分かれるが、数の上からの中心は東側である。A～D地区内では総数113棟程度の古墳時代竪穴住居跡が検出され、ほとんどが矩形系である。また、造り付けの竈を有するものが多い。

一方、西側のF～G地区では古墳時代竪穴住居跡は9棟程度検出した。平面矩形系で竈を有するものも認められる。

栗鹿遺跡では竈を有する住居跡が30棟弱検出された。その方向は北側から西および南側の180°の範囲におさまるものが大半であるが、あまりに方向のばらつきが多い。時期差による方向変化が認められることを丹波市柏原町三原遺跡では指摘したが、本遺跡についてはあまり当てはまらないようである。

本遺跡における竈の導入は、須恵器導入とほぼ同時に行われた可能性がある。B-SH2012のように、初期の竈は壁そのものが遺存せず壁際の2本の溝状造構が残されている。この住居跡では須恵器は出土していない。また、やや時期が遅ると思われるC-SH2023では竈は住居跡コーナー部に造り付けられ、ここでも須恵器は出土していない。一方、A-SHI104ではTK-23型式期の須恵器を伴う住居跡に竈が敷設され、D-SH03においてもTK-23型式期の須恵器を伴い、竈が造りつけられている。一方、本遺跡出土須恵器の中では、最も古いと判断できるものにTK-208型式期に遡るものがある。この時期の須恵器を伴う竈付き住居跡は認められなかったものの、竈を造り付ける住居跡で最も古いのがこの時期と考えられよう。

なお、A地区では古墳時代と思われる掘立柱建物跡が存在するが、規模は小さい。

### 4. 古代

TK-217型式期には竪穴住居跡は消失してゆき、掘立柱建物跡が出現する。特に、F地区では規模がやや大きいものも含め掘立柱建物跡が4～6棟検出され、周囲に溝や堀を伴い、墨書き土器も出土していることから着到殿といった公的な施設と考えられている。また、G地区北部で検出されている、横方向を揃えた2棟や丸瓦が入った土壙の存在は、関連施設が西方にもひろがっていたことを示すものであろう。また、栗鹿神社参道の初現はこの時期にさかのほる可能性がある。

一方、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物跡が検出されているのはC地区に限られるようであり、居住の痕跡はきわめて少なくなる。

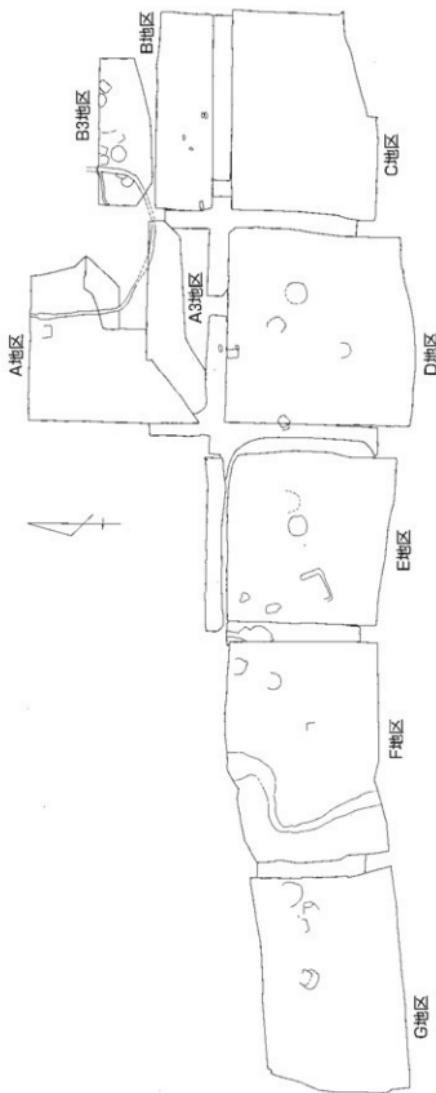
### 5. 中世

中世の遺構には掘立柱建物跡多数と土壙・井戸のほか多数の柱穴や存続する栗鹿神社参道がある。

特に多いのは調査区東部で、C地区では奈良時代も含め掘立柱建物跡が約30棟、B地区では19棟が検出されており、また、その地区では検出された柱穴の数が非常に多いことからもうなづける。また、A・D区など5棟検出された地区では柱穴の数も多い。また、少なくとも4棟が中世と判断されるG地区においても柱穴は数多く検出されている。

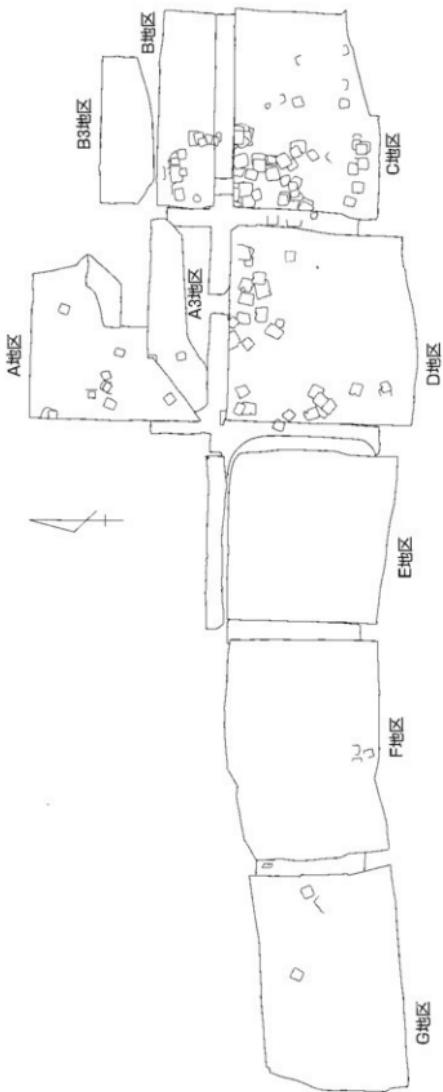
なお、C地区では縄が入った土壙について墓の可能性が考えられている。

C地区ではその後、畠にその姿を大きく変えてゆく。検出された畠状造構はすべて南北方向であり、この畠の姿が圃場整備によって改変されるまで保たれていたものと思われる。

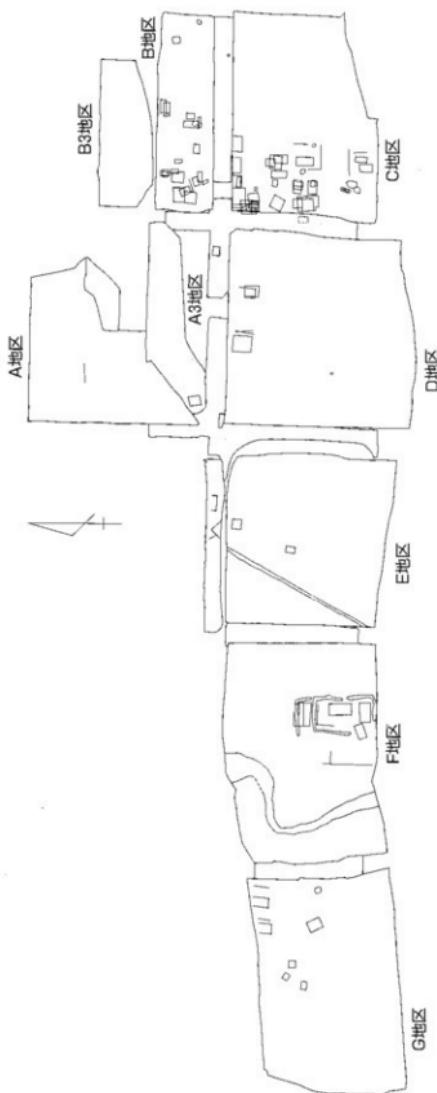


第468図 粟鹿遺跡の変遷図(1)弥生時代 (1/2,400)

第1節 粟鹿遺跡の変遷



第469図 粟鹿遺跡の変遷図(2)古墳時代 (1/2,400)



第470図 薩鹿遺跡の変遷図(3)古代・中世 (1/2,400)

## 第2節 E地区検出の方形貼石墓について

近畿地方の弥生時代の墓制は方形周溝墓、円形周溝墓、土器棺、上壇墓、木棺墓が一般的であるが、山陰地方及び近畿地方北部を中心に発見されているのが「方形貼石墓」である。この墓は周溝ぎわから扁平な巨礫を墳墓内側に貼り付けるもので、塗かれた時代は弥生時代中期後半から後期ごろである。

栗鹿遺跡E地区で検出されたSX01（方形貼石墓）は大きく削平されて主体部こそ検出されなかつたものの、方形の溝や貼石の状況、出土遺物の時期から方形貼石墓であることは明らかである。このE-SX01は但馬地方および兵庫県内で初めて発掘された方形貼石墓である。栗鹿遺跡で発掘された方形貼石墓の規模を想定し、今後の調査視点について記したい。

栗鹿山の北麓には裁頭段丘が北西方向にのび、遺跡は南東から北西に下がる緩斜面に位置している。E地区はこの緩斜面の末端付近にあり、この地区的南西部で方形貼石墓が検出された。

E-SX01（方形貼石墓）の規模等を再度記すと、南北9.3m以上、東西13.2mの方形を呈するものの、全体の削平が著しく、特に北側に続く東西の溝はいずれも削平されているため、1辺が判明するのは南北の13.2mのみである。今までの発掘例をみると規模が判明しているものはほとんど長方形を呈している。この形態を参考にして栗鹿遺跡例をみると、東西方向の規模は判るもの、これが短辺になるのか長辺になるのかで大きくその規模が変わる。東西方向を長辺にすると、南北方向が現状で検出された最長端が9.0mであることから、概ね9m×13.2mとなる。東西方向が短辺となると、南北方向は途中で削平されているが15m以上となる。

検出された溝幅は1.0m～2.3mと大きく差がある。これは造構の幅は下部が残存するため削平の度合いにより差がある。栗鹿遺跡E-SX01が長方形と考える場合、長辺が東西辺になるのか、南北辺になるのかは溝幅や貼石の規模、地形等を分析することで推定可能になるかも知れない。

主要な貼石は約20個が残存している程度であるが、その規模は30cm～50cmで縦長の石材が多く見られる。最も大きい石材は50cm×48cmの長方形で角が丸みを帯びた川原石である。溝中央で検出された石材は貼石の材質とは異なり隙間を埋める石材等と考えられる。



写真12 栗鹿遺跡E地区方形貼石墓 (E-SX01)

墳丘はそのすべてが削平されており、全容を知ることはできないが、少なくとも周溝部の掘削は地山層まで達していることから、この間に掘削された土砂は墳丘として盛土されたことが想像できる。また、主体部は墳丘が失われたと同時に消滅したと考えられ、その痕跡は全く知ることはできなかった。

遺物は周溝内から弥生中期末から後期初頭の壺など7点、前述の三角形を呈した台石が出土した。これらの遺物は最も残りの良い場所であり、残りの悪い箇所でも僅かながら土器が出土していることから相当量埋没していたと考えられる。なお墓域内で出土したE-S5の勾玉は形態や材質等からすると当該墳墓には伴わないものと考えられる。

2001年の発掘当時の検出箇所は一覧表のように日本海側の東は京都府から西は島根県にかけて37箇所みられる<sup>(註1)</sup>。その後、日吉ヶ丘遺跡報告書において方形貼石墓の集成がされている<sup>(註2)</sup>。

栗鹿遺跡で発掘されたE-SX01はこれまで但馬地方では未発見であった方形貼石墓であり、兵庫県内でも初見資料となる。但馬においては丘陵部をはじめ平野部の遺跡を発掘しており、いずれの調査においても方形貼石墓は検出されていなかった。今回、但馬と丹波国境である栗鹿の地で検出されたと意味はいかなることであろうか。但馬地方では円山川をのぞむ丘陵上にはほとんどといっていいほど墳墓が密集している。またすべてが弥生墳墓ではないにしても少なからず当該時期の墳墓も存在すると考えられることか、今一度検証することも必要だろう。また平地に位置する弥生集落を広範囲に本発掘調査した例もごく僅かであり、今後、当該資料が増加する可能性が高いと考えられる。

註1 旧京都府与謝郡加悦町教育委員会加藤靖彦氏のご教示による。

註2 加藤靖彦氏「日吉ヶ丘遺跡」加悦町教育委員会 2005

#### 方形貼石墓一覧表

No.	遺跡名	所在地	時期	墳丘規模	埋葬施設	副葬品等
1	日吉ヶ丘遺跡方形貼石墓	京都府加悦町	中堅後半	33m×17~22m	木棺直葬1基	管玉400個以上
2	奈良県御陵1号方形貼石墓	京都府御陵町	中期後半	27m以上×6.2m以上	不明	不明
3	奈良県道2号方形貼石墓	京都府御陵町	中期後半	6.2m以上×2m以上	不明	不明
4	千原森林公園グリッド	京都府岩滝町	不明	不明	不明	不明
5	千原森林公園グリッド	京都府岩滝町	中後半	不明	不明	不明
6	小池遺跡1号墳	京都府大宮町	不明	13号墓と同人?	不明	不明
7	小池遺跡13号方形貼石墓	京都府大宮町	中期末	6.6m×3.5m	木棺直葬2基	なし
8	志高遺跡1号方形貼石墓	京都府舞鶴市	中期後半	7.2m×9.0m	木棺直葬ほか4基	なし
9	志高遺跡2号方形貼石墓	京都府舞鶴市	中期後半	15m×?	不明	不明
10	志高遺跡6号方形貼石墓	京都府舞鶴市	中期後半	6.5m×7.7m以上	木棺直葬? 3基	なし
11	寺岡遺跡SX56方形貼石墓	京都府舞鶴市	中期末	32.5m×17.6m	木棺直葬3基	なし
12	布勢鶴見東方形貼石墓	京都市伏見区	後期中葉	17.8m×10.2m	木棺直葬2基	なし・捨内に水銀朱
13	布勢鶴見2号墓	京都市伏見区	後期中葉	5m以上	木棺直葬2基	なし
14	見見見	京都市伏見区	後期中葉	12m×11m	木棺直葬5基以上	ガラス勾玉・織錦菅冠
15	二尾谷墓	京都市伏見区	後期前葉	23m×17m	小車	不明
16	河ノ瀬6号墓	京都市伏見区	後期初頭	8.8m×7.7m	1基以上	不明
17	河ノ瀬6号墓	京都市伏見区	後期前葉	1.0m×1.6m	不明	不明
18	河ノ瀬14号墓	京都市伏見区	不明	1.4m×1.3m	不明	不明
19	河ノ瀬15号墓	京都市伏見区	不明	1.6m×?	不明	不明
20	波奈浜A2号墓	鳥取県江津市	中堅後葉	4.0m×5.0m	土壙窓3基	なし
21	波奈浜A3号墓	鳥取県江津市	不明	2.2m×3.5m	不明	不明
22	波奈浜A11号墓	鳥取県江津市	不明	1.5m×2.2m以下	土壙窓	不明
23	波奈浜A4号墓	鳥取県江津市	不明	1.5m×2.2m以下	不明	不明
24	波奈浜A5号墓	鳥取県江津市	不明	1.5m×2.2m以下	不明	不明
25	波奈浜B11号墓	鳥取県江津市	後期前葉以降	1.5m×2.2m以下	あり	なし
26	波奈浜B2号墓	鳥取県江津市	後期前葉以降	1.5m×2.2m以下	あり	なし
27	波奈浜B3号墓	鳥取県江津市	後期前葉以降	1.5m×2.2m以下	あり	なし
28	波奈浜B4号墓	鳥取県江津市	後期前葉以降	1.5m×2.2m以下	あり	なし
29	波奈浜B5号墓	鳥取県江津市	後期前葉以降	1.5m×2.2m以下	あり	なし
30	波奈浜B6号墓	鳥取県江津市	後期前葉以降	1.5m×2.2m以下	あり	なし
31	波奈浜B7号墓	鳥取県江津市	後期前葉以降	1.5m×2.2m以下	あり	なし
32	友田山跡方形貼石墓	島根県宍道市	後期前葉	10.5m×5m以上	不明	不明
33	花園1号墓	島根県三次市	中堅中葉～後期後葉	31.3m×14.8m	輪式石棺・土壙215基	分室式石棺ガラス管玉13
34	花園2号墓	島根県三次市	後期中葉	14.1m×9m	輪式石棺4基・土壙17	なし
35	四治山小原遺跡	島根県三次市	小口後葉	8m×5m	不明	不明
36	門の山遺跡	岡山県	—	—	—	—
37	栗鹿遺跡E-北巡回区SX01	兵庫県丹波市	中期末～後期初頭	13.2m×9.3m以上	不明	不明

### 第3節 粟鹿遺跡出土の古墳時代土師器について

粟鹿遺跡の古墳時代では、初頭～終末までの長期間集落跡として存続しており、検出した古墳時代の住居跡が120棟を超える。各住居跡から出土した土器も多量にのぼる。以下では、粟鹿遺跡から出土した古墳時代の土師器について編年を行う。特に、少ない出土量でも普遍的に存在する土師器壺に注目し、須恵器編年に依拠しながらその変遷を追うこととする。なお、この作業が但馬の古墳時代研究の一助となれば幸いである。

#### 1. 粟鹿遺跡古墳時代土師器の変遷

粟鹿遺跡の堅穴住居跡は弥生時代から継続して営まれており、古墳時代の始まりをどこにおくかという問題が生じる。ここでは、基本的に庄内期の新しい段階から古墳時代とし、最も古い一群を粟鹿遺跡古墳時代1期とする。ところで、当地域の庄内期の編年は谷本進氏によって行われており、それに従うべきところもある。しかし、但馬地域全体に照準をあわせているためか、本遺跡の様相とは少し異なるところもあり、本遺跡出土資料のみで土器の変遷を追うこととする。

##### 粟鹿遺跡古墳時代1期

1期としたものはC地区のC-SH2026出土土器である。この土器以前にはG地区のG-SH10・11があり、大半が山陰系の複合口縁で占められていると同時に、丹波・丹後系の土器が少なくなっている。この段階から古墳時代であるかもしれないが、粟鹿遺跡古墳時代0期も視野に入れながら、ここでは1期を古墳時代のはじめとしておく。

尖底風のやや長い腹部の壺や口縁端部をねねあげ状にするもの、端部を内側に少し折り曲げたものがあり、布留式の最古型式に近い一群である。まだ一部の肩部にタタキを残す。

##### 粟鹿遺跡古墳時代2期

2期はB3地区のSH06出土土器に典型をみることができる。布留1～2式頃の特徴を示す口縁部や丹波・丹後系の複合口縁を伴い、単純に外反する口縁部が主流を占める。口縁端部はいずれも尖り気味であり、V様式系壺の伝統である可能性を示唆する。B3-80の体部はやや長く、最大径は上部にある。

なお、2期でもやや新しいと考えられるものの、出土資料が限られることにより、位置づけを明確にできないものにA-SH108およびC-SH2023出土土器がある。体部はかなり丸いが、やや長めで、最大径はほぼ中央にある。

##### 粟鹿遺跡古墳時代3期

D-SH29およびC-SH2018出土土器を3期とする。布留型に近い口縁部のD-219は体部が少し長めの球形に近く、最大径は中央やや下にある。C-98の口縁部は複合口縁から変化したと考えられるもので、当地域では特徴的な形態であり、「屈曲口縁」と呼びたい。壺の口縁部では他に単純に外反するものがあり、中型・小型がある。小型の壺体部は丸い。なお、壺体部の内面ヘラ削り方向はこの時期から、横方向が主流となる。

##### 粟鹿遺跡古墳時代4期

A地区的A-SH105出土土器を指標とする。壺体部はほぼ球形となり、最大径は中央部や中央やや下にある。屈曲口縁は屈曲部の幅が増すようになり、端部も水平に引き伸ばすかっこうのものが多い。布留型の伝統をひくと思われるA-72・73の口縁端部も外方に引き伸ばされる。口縁部の屈曲が最も顕著

な時期である。須恵器は伴っていないが、TK-208型式期頃と推定される。3~4期の間にはD-SH12出土土器やA-SH105出土土器の古相を示す一群がある。

#### 粟鹿遺跡古墳時代5期

A地区のA-SH103から出土した土器群がこの時期にあたる。本住居跡では須恵器杯が出土しており、TK-23型式期または若干遅る時期と思われる。壺は屈曲口縁部の屈曲部分がさらに開びするようであるが、良好な資料に恵まれない。布留伝統型と思われる内済口縁の壺は、口縁端部の外方への引き延ばしが弱くなり、外反口縁の壺では、頭部径が小さくすぼまる格好となり、体部はなで肩に近くなる。

#### 粟鹿遺跡古墳時代6期

D地区的住居跡D-SH01出土土器のうち、古相を示す一群を標準とする。同じくD-SH01出土土器の新相を示すものは次の7期として分離した。6期は須恵器型式ではMT-15型式期を中心とする。屈曲口縁壺は屈曲部がなだらかになり、内済口縁も屈曲口縁に近い形態で、上端の平坦面は丸くなる。この時期の頭部がすぼまる口縁部は認められなかったが、次の7期と前の5期の中間形態になると思われる。ほかにD-SH05出土土器が本期にあたり、A-SH104出土土器は5期~6期の過渡期と思われる。

#### 粟鹿遺跡古墳時代7期

D-SH01出土土器の新相群である。須恵器ではTK-10型式期にあたり、屈曲口縁は認められなくなる。また、内済口縁部も消失し、外反口縁のみに変わってゆくが、直線的なものも残存する。頭部が細くすぼまる壺の口縁部は短くなる。

#### 粟鹿遺跡古墳時代8期

8期はD-SH21出土土器を標識とするが、D-SH15の古相群も本期にあたると思われる。須恵器型式ではTK-209型式の時期であり、外反口縁の壺がほとんどを占める。体部の刷毛は縱方向に齊一化され、外反する口縁部の下部の器壁がやや厚い。なお、前期と本期の間にはD地区の住居跡D-27出土土器やG地区のG-SH09出土土器が当てはめられるものと考えている。

#### 粟鹿遺跡古墳時代9期

須恵器ではTK-217型式期である。須恵器では古段階と新段階に分けられるが、土師器壺ではあまり明瞭な変化は認められない。壺の口縁部下端はさらに厚みを増し、内面に明瞭な稜を持つようになると同時に、口縁端部が尖り気味となる。新段階では体部と口縁部の厚みの差は顕著になり、体部側面は長方形に近い。古段階ではD-SH15出土土器、新段階ではC-SH2020出土土器を掲げた。

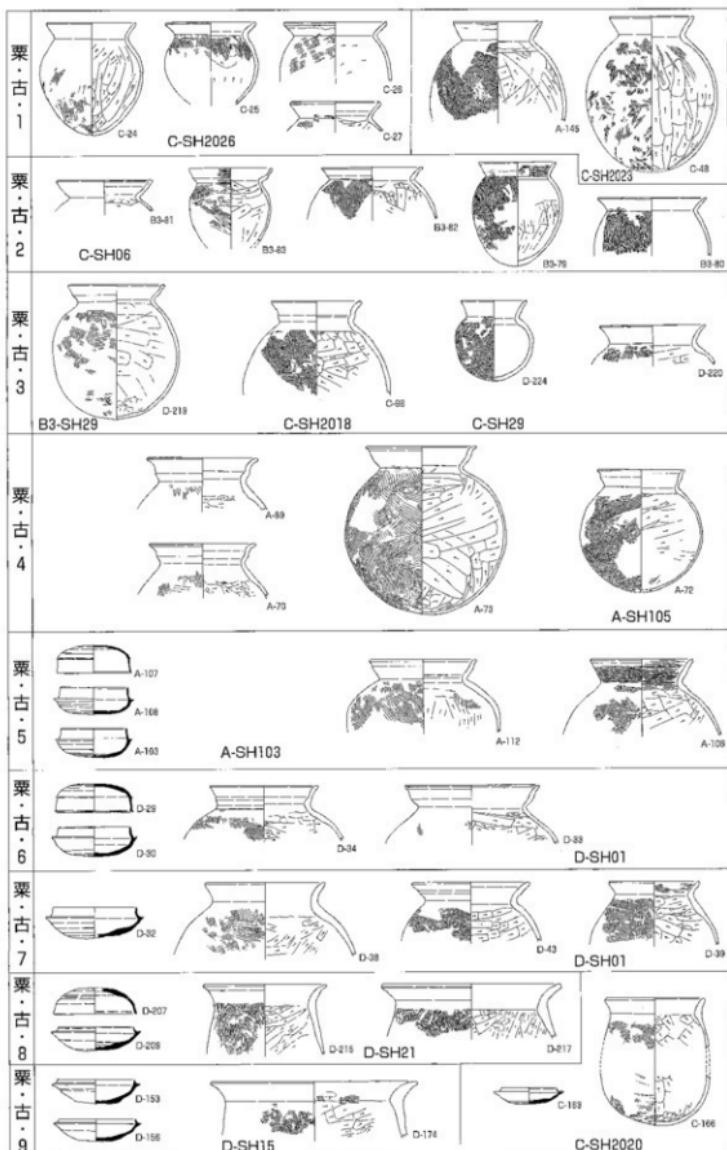
## 2. 他遺跡出土土師器との併行関係

以上、粟鹿遺跡出土土器のうち、土師器壺について須恵器編年を援用しながらその変化を追い、9期に分けた。次に、粟鹿遺跡の時期編年と他の編年との整合性についてみてゆく。

まず、谷本氏の編年では、複合口縁以外の壺については資料的に極めて限られ、また、布留初期までに限られるため、併行関係を探るには困難を伴う。

一方、本報告と同時に刊行される朝来市和田山町加都遺跡の報告の中で、池田征弘氏が編年案を出されている。加都遺跡では古墳時代を8期に分けられているが、加都古墳時代1・2期は粟鹿古墳時代2・3期に相当すると思われる。加都3・4期は本遺跡では不明であるが、加都5期~8期は粟鹿4期~7期に併行する。本遺跡において空白の時期については、今後さらなる検討を加えてゆきたい。

第3節 栗鹿遺跡出土の古墳時代土師器について



第471図 栗鹿遺跡出土古墳時代土師器変遷図

## 第4節 古代・中世の粟鹿遺跡と粟鹿神社について

### 1. 古代の遺構と遺物

#### (1) 遺構の性格（遺構の配置と神社施設）

粟鹿遺跡西方に位置するE～G地区にかけて検出された古代の遺構は一定のまとまりがあり、これらの遺構の性格について考察する。

F地区では南北方向に長い長方形区画溝内（南北30m、東西15～19m、幅1.5m、深さ0.6m）から大形の掘方をもつ掘立柱建物跡2棟がL字形状に配置されている。またその北側の掘立柱建物跡群は、東西方向に長く1間×6間が2棟建つ。区画溝北辺や北西隅から南にのびる柱列は、柵列と考えられる。

この時期の区画された溝に伴う掘立柱建物跡群の類例としては宮跡、国衙、郡衙、寺、神社など官衙的な施設に多い。しかし粟鹿遺跡例のような小規模なものはひじょうに少ない。ただし、やや小形で長方形を呈するものは千葉市の荻生道遺跡<sup>(註1)</sup>や新潟県佐渡郡の下国府遺跡<sup>(註2)</sup>にある。兵庫県内では丹波市山垣遺跡<sup>(註3)</sup>、豊岡市上石垣遺跡<sup>(註4)</sup>、赤穂郡上郡町落地遺跡<sup>(註5)</sup>、たつの市小犬丸遺跡<sup>(註6)</sup>が知られているが、いずれも官衙遺跡や駅家などであり一般集落は少ないと考えられる。

また粟鹿遺跡の南方150mには式内社である粟鹿神社が鎮座する。この神社の縁起は和銅元年（708）年紀とされる『粟鹿大〔明〕神元記』<sup>(註7)</sup>が宮内庁等に所蔵されており、粟鹿神社の起源や祭事の記述がある。また天平9年（737）『但馬國正税帳』（但馬国の収支報告書）正倉院文書でもその存在が記録されている。粟鹿神社の特殊神事とされる「瓶子渡し」に深く関連する御陵の柿は調査区のすぐ南に接し、今回発掘調査で明らかになった建物群と神社や御陵柿は近接することなどから、神社の関連施設と考えている。

また粟鹿の地は平安時代の『延喜式』に記載される山陰道の粟鹿駅があったと推定される場所である。当地は粟鹿駅推定地の一つであるが、近年の調査で駅の文字資料が出上した柴遺跡周辺が古代粟鹿駅家の可能性が極めて高いと言える。その他、粟鹿の地名は奈良時代では但馬国朝来郡粟鹿郷とされ、近代に至っても粟鹿村として行政区域に残っていることから、古代の粟鹿村役場とも言うべき「粟鹿郷家」の可能性も考えられた。

今回の出土遺物に「神マ」カの墨書き器がある。「マ」は部のつくりの略であることから「神部」と書かれていると考えられる。これは宮内庁に所蔵されている『粟鹿大〔明〕神元記』は歴代の粟鹿神社の神主であった神部直氏の記述であり、当然この氏族が居住していたことが考えられることから、神社関連遺構の可能性が高い。なお、区画溝を伴う遺構群配置は特殊な形態ではなく、社殿的な遺構とは考えておらず、神社の関連施設と考えられる。

この中にあってF-SB02は中心的な建物で1間分の庇が西側にある。中间にある柱穴はそのためのもの。北に位置する1間×6間の建物は馬小屋のような細長い建物である。ただし初期溝の馬小屋と考えられる掘立柱建物は北に寄るものと考えられる。溝により区画が拡張される時に初期溝の北と西側は埋められた可能性がある。その後、初期溝跡に近づいて馬小屋が造られ、SB02の日隠しとして初期溝の北と西に近接して柵が建てられる。居館とは違い、出土品からすると生活臭が少なく、しかも当時の条里地割と考えられる南北方向通り（県道一品粟鹿線）から東に少し離れていることは、要人の準備には適当な位置関係であると考えられる。

ちなみに神社関連遺構の発掘例として千葉市荻生道遺跡や新潟県佐渡郡下国府遺跡、東広島市西本6

#### 第4節 古代・中世の栗鹿遺跡と栗鹿神社について

号遺跡<sup>(註8)</sup>が挙げられる。特に神社関連の建物としては西本6号遺跡のほか明確なものは見あたらない。栗鹿遺跡F地区の方形区画を伴う大型掘立柱建物跡の性格は位置や出土遺物などから施設の中でも国司や都司等の客を迎へ、祭式の準備を行なう「着到殿」の可能性がある。そのほか食事を準備するための御饌殿や神戸の管理などを行なう施設かもしれない。

G地区の遺構については奈良時代の遺構も各所にみられる。南北方向に長く、大形掘方をもつ掘立柱建物跡や井戸状のG-SX01がある。G-SX01は大形の土坑状の凹みで、この中から当時の丸瓦を凹状にして並んで出土していることから橈状の用途が想像できる。この遺構からは性格を判断できるものはないが、神社の手水などが設置され、同所からの排水施設として丸瓦を凹状に並べるなどの可能性が考えられる。またG地区からも円面鏡や大型精製須恵器なども出土しており、一般集落とは考えにくく、F地区的神社関連遺構とのつながりを考えたい。

(註1) 「荻生道遺跡」「千葉市昭和の森遺跡群Ⅰ」千葉市埋蔵文化財センター 2004

(註2) 「史跡下国府遺跡－昭和52～54年度調査整備事業報告書－1980」真野町教育委員会 1980

(註3) 加古千恵子他『山城遺跡』兵庫県教育委員会 1990

(註4) 渡辺 畏他『上石遺跡』兵庫県教育委員会 2000

(註5) 島田 拓也『落成遺跡（八反坪遺跡）』上郡町教育委員会 2005

(註6) 岸本道昭他『布勢駅家－小丸久遺跡 1990・1991年度発掘調査概報－』龍野市教育委員会 1992

岸本道昭他『布勢駅家Ⅱ－小丸久遺跡 1992・1993年度発掘調査概報－』龍野市教育委員会 1994

(註7) 「栗鹿人【明】神元記」は和銅元年（708）年紀とされ、祭神（阿米美佐利命・アメノミサリノミコト）と歴代祭主の神部直（ミワノアタイ）の関係や神部直家の系譜を充実に記した希代の古記録であり、史料価値は高い。

現存する写本は2種類あり、その一つ「栗鹿大明神元記」は京都九条家に秘藏されていたもので系譜を整系図として表わされている。この整系図はわが国でも3巻（和氣系図、海部系図（いずれも国宝）と栗鹿大明神元記）しか存在しておらず、非常に珍しい形式の系図である。もう一方の写本、「栗鹿大明神元記」は谷糸善臣氏が田中教忠氏所蔵品を明治40年に写本した文章形のものである。いずれの文書も現在は宮内庁書陵部にて所蔵されている。

またこの文書は平安時代中期に創立の大領の任につき、また栗鹿神社への影響に由来してきた口下部氏に対しても、危機感をおぼえた神部直氏が和銅年間の文書をもとに祭神の阿米美佐利命の関係と神部直家の祭主としての系譜を記し、長保4年（1002）に神祇官へ上申し、承認された文書を写し写されたものである。なお書写年代は鎌倉時代末ごろと考えられている。

(註8) 「発掘された古代の「神殿」を検討する 西本6号遺跡をめぐって」東広島市教育委員会 1998

## (2) 文字資料（墨書き土器等と文字解釈）

栗鹿遺跡 F・G 地区遺物については発掘調査当時に判読頗った<sup>(註1)</sup>。

文字資料は墨書き土器 5 点、ヘラ書き文字資料 1 点があるにすぎない。しかし文字の内容は遺跡の性格や古代から連続と栗鹿の伝統が息づいていることが判る。

F-99 須恵器杯 B 底部の資料は「神マ」か。読みは（ミワベ？）。マは部の略字であるが斜めの線「マ」の存在は不明。おそらく使用者の入名と考えられる。なお二文字目が不鮮明なため「神□」との見解もある。なお、「神」は奈文研木簡データベースで 20 件。多くは紀年をさし、人名もある。この資料は「神部」と考えられることから「栗鹿大〔明〕神元記」にみる「神部直」と考えられる。つまり栗鹿神社の祭司の系譜が記された古稀の史料にみえる氏族名が遺物として発掘されたことになり、古代文書内容と発掘調査成果が一致した例としては貴重な資料となろう。

F-101 須恵器杯 B 底部の墨書きは 1 文字或いは 3 文字が欠損しており「刀自□」〔女々〕で読みは（トジメ？）人名。この名前は栗鹿神社に関連する女性の戒名に使われている。また「允」食偏を表す文字では御饌殿など神様への食事を支度する施設「饌」が考えられる。

F-85 須恵器杯蓋外側の墨書き「満呂カ」使用者の人名。読みは（マロ？）。

G-252 須恵器蓋底部のヘラ書き「米万呂□」で、読みは（ヨネマロ□）制作依頼者の人名と考えられ、その下の不明文字は依頼者の器の種類等の名称を記入したものと考えられる。文字史料として 20 件の出土例がある<sup>(註2)</sup>。

G-96 須恵器杯 B 底部で墨書き上器。「方□」下の文字は一に見えるが意味は不明である。

また文字史料以外の土器については概ね 8 世紀から 9 世紀で 10 世紀も含まれ、精製された杯や皿 B があり、官能的な様相がみえる。銅製品を真似た後模や東播磨地方で生産され都に運ばれた精製された「東播系須恵器」が出土していることから、一般集落でないことを裏付けているものと考えられる。また暗文のある土師器は平城宮跡でも 8 世紀中頃まで製作されるが、同様の時期と考えられる。

(註1) 立命館大学名誉教授山尾幸久氏、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室室長館野和己氏、主任研究官 渡邊晃宏氏、文部省官：吉川 駿氏、埋蔵文化財センター集落遺跡調査室室長：中山敏史氏、考古計画研究室 室長：巽 淳一郎氏、国立歴史民俗博物館館長：平川 南氏（いずれも 2001 年当時）にご指導いただいた。

(註2) 木簡研究会『木簡研究 25』25P 下段米麻呂に掲載。

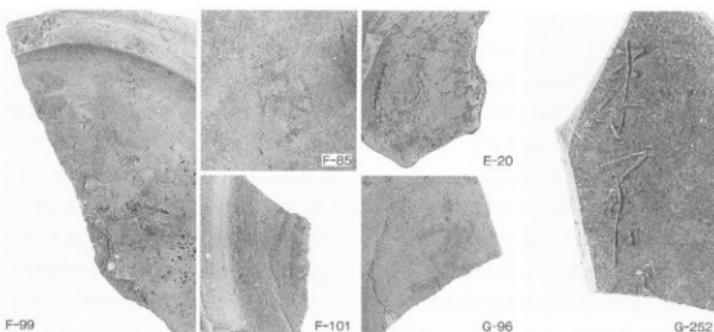


写真 13 土器に記された文字

(3)粟鹿大明神元記と古代粟鹿（元記の解釈と粟鹿）

粟鹿遺跡の位置する兵庫県朝来市山東町粟鹿は古代から続く但馬尊崇の社、「粟鹿神社」が存在し、遺跡で発掘された遺構は古代粟鹿神社の関連遺構と考えている。粟鹿神社に関する系譜は京都九条家からの秘蔵文書『粟鹿大明神元記』の存在が明らかになり、その内容については昭和30年には澤恭三氏により発表され、それ以降、研究者により論じられ、村山美生氏により口語訳されている。また平成16年には和田山町史にて宿南保氏が「但馬の古代氏族」として粟鹿大神元記や粟鹿社日下部系図、天日槍について詳論されている。なお粟鹿大明神元記に記載の祭主の歴代である「神部直」氏を示したと考えられる墨書土器が今回出土したことから、粟鹿大明神元記の内容と各氏の論考を紹介する。なお現地指導いただいた立命館大学名誉教授山尾幸久先生には「古代の粟鹿神社と奉斎氏族について」の玉稿を賜った。

(粟鹿大明神元記に関する各氏の論功)

是澤恭三氏の論考

粟鹿大〔明〕神元記について京都九条家秘蔵書を発掘し紹介した。この中で、堅系図であること、鎌倉時代末期と思われる写しであること、堅一尺一分五厘、横一尺六寸六分五厘、全長約二十六尺五寸・和銅元年（708）の年号があり、祭神（阿米美佐利命・アメノミサリノミコト）と歴代祭主の神部直（ミワベノアタイ）の関係や神部直家の系譜を克明に記録された古記録であること、『粟鹿大〔明〕神元記』は系譜を堅系図として表わされていることを指摘している。

堅系図はわが国で3巻あり和氣系図（円珍系図として大津市三井寺で圓城寺とも云う）、海部系図（アマペ系図として宮津市龍神社）（いずれも国宝）と粟鹿大明神元記しか存在せず、非常に珍しい型式の系図である。また『粟鹿大神元記』は谷森善臣氏が田中教忠氏所蔵品を明治四十年に写本した文章形のもので、いずれの文書も現在は宮内庁書陵部にて所蔵され、神部直根閉の解文を加えて八嶋が執筆し根閉が署名して言上したものとしている。長保年間に事件があり、第一文書を写して官に提出し、認めてもらう必要があった。申請に対して神祇官が公駿と認める由の符を下して、官印を捺して國守に送致し高階道順が乃ち奉行した事を書き添えた証判である中世の緒社根元記は大成される途上、少なくとも室町時代から江戸時代初期の間において『元記』の存在したことを証拠立てている。しかし阿米美佐利命を祀ることは忘れ去られていたと言える。谷森氏は『粟鹿大〔明〕神元記』の記述型式が文章形から堅系図へ移行したとしており、是澤氏と見解が異なる。

国名に和泉国や美作国があるが、和銅元年以降に名付けられた国名であり、和銅勅注以降の追記かもしれない。系図のはじめは大和国大三輪氏系図で、後ろ部分は粟鹿神部直家系図である。また粟鹿神部直は大和大三輪氏の分かれであることは明瞭で、大三輪氏の系図が写されているのも当然のこと。堅系図の太々袴古命とその四人の兒等の系図の前後に横に長い矩形の記号があり、特別な表現である。他二点の堅系図より一層堅系図形式の特徴を明らかにしている。また元記が特別に『粟鹿大明神元記』と、大神朝臣（大三輪）の祖と大和朝廷と直接関係の深い人々のみを記載しているところに意味がある。神社は二度（応仁・慶応）にわたる社殿の炎上により記録を焼失している。また粟鹿神社は鎌倉時代でも地方の大社で、弘安四年蒙古襲来にはその無事を当社に祈られ、退散後は卜部兼直を勅使として遣わされ、勅額と祭田を賜ったと伝えられ、その勅額は白川楽翁（松平定信）の集古十種（鍾銘、碑銘、兵器、銅器、楽器、文房、扁額、印章、法帖、古画の10種の占物を模写して編纂した図録、松平定信編、85

巻、寛政12年1800年の序を付し刊行)に掲載されているもので、正一位勲十二等栗鹿大明神と二行に書かれている。応仁3年3月山名細川の争いで丹波の内藤氏と竹田太田垣氏が夜久野に戦い、本殿、幣殿、拝殿等を焼き、その後文明17年より18年に渡って仮造営したが旧觀に復することができなかった。

赤瀬神社の祭神は栗鹿神社の祭神。日下部氏の祖神。九穴の鮑の信仰は出雲人社や赤瀬神社、越前に移ったもの。・・・乘谷の朝倉氏の赤瀬神社も鮑を祭る。後世に日下部氏がこの地方に勢力を扶植した頃、その祖神の彦生王をこの社に祀った。軍舟や荒魂を船首に取り付け出征する話は大三輪系で、古事記や日本書紀は傍系の史料が整理され、記述されており、「元記」は日本書紀の編纂者の目に触れたかわからないが、日本書紀の文を考える上に役立つ重要なものを持っているといえる。神祇官の公駿の輔義の名があり、平安時代の歌人として有名で、六条鳥丸に住み、邸内の庭に天橋立の景を造ったと知られている。

### 田中 卓氏の論考

田中氏は堅系図の『栗鹿大明神元記』より文章形の書陵部本『栗鹿大神元記』のほうが、より古体であるとの考え方である。また『元記』本文の巻首と末尾は平安時代の書き足しによるものと考えられるものの、系譜部分の記載様式・神名語尾・仮名遣いは『古事記』より古いとの考えがある。神部直根閉は天智天皇二年三月条に登場する、「中将軍・・・三輪君根麻呂・・・率二万七千人打新羅」の三輪君根麻呂と恐らくは同一人物と推定する。和泉国は和銅元年記としてはおかしく、全文を和銅元年まで遡ることは難しい。高階道順は長保4年3月10日条の「但馬守道順」が高階道順に相違ない。原形、系譜部分の成立はいつ頃か。やや時代的に齟齬を有する箇所があるが、和銅の年紀を簡単に否定できない。系譜原形の成立年代は和銅元年の年紀を疑う勇気をもてず、希代の古記と云うべきである。阿米美佐利命は栗鹿の地主神である。但馬国造は從来から日下部氏と考えられていたが、朝來は神部直義父は日下部だったか。日下部氏系譜から考えれば、その後、朝來の郡司職までも一族で占有したか。荒島の朝來郡大領在任期間は文武天皇2年から15年間ということで、神部直根閉の晩年に当たり、根閉の死と共にいよいよ没落の運命をたどったか。郡の要職とともに神部直氏が直ちに栗鹿大神奉祭の任までも日下部氏に譲ったかどうかは不明である。伊勢神宮の内宮と外宮の二所大神主の度会氏でさえ、天武天皇朝の対國造政策の下に内宮の祿宜職を奪われ之を荒木田氏に譲るとなった例がある。神部直氏の祭祀と政治の分離策を講じたか。書陵部本の『元記』のほうが九条家本より粗型であろう。系譜原形の成立年代は和銅元年の奥書年紀にふさわしい。神部氏が崇神天皇の時代に但馬国へ移住し、栗鹿大神を奉祭して発展するが、日下部氏興隆の前に旧豪族としての地位を失った。

### 前之園亮一氏の論考

鎌倉なし室町初期の写しである。中世以来混乱していた栗鹿神社の祭神は阿米美佐利命であり、元記遷録の和銅元年8月13日の日付は日本書紀、持統5年8月13日に大三輪氏以下18人に纂記を上進せしめたことと無関係ではない。三輪君根麻呂と神部直根閉は同一人物である。「栗鹿大(明)神元記」は国宝指定の2点の堅系図より古く、和銅の堅系図として非常に貴重な史料で原本は相当に古い。漢字や国名など時代と矛盾する点があるが、原本は相当に古く、神話や古代史、神道史や国語学の研究にとってすこぶる貴重な古記録である。田中氏同様、どちらかというと谷森本『栗鹿大神元記』のほうが原本に近いのではないか。元記の仮名の多くが古事記のそれとよく一致し、推古朝遺文や藤原宮本簡にし

#### 第4節 古代・中世の栗鹿遺跡と栗鹿神社について

かみえない仮名とも一致する仮名が含まれる。『栗鹿大〔明〕神元記』と日本書紀第一の一書と書き出しが非常に似ている。

##### 飯田瑞穂氏の論考

書陵部本『栗鹿大神元記』の文章形の方が元であるという田中卓氏や前之園亮一氏の見解に賛成する。文章形をもとに系線を用いて見やすい形に改めたのが九条家本である。古書展目録で見つけて購入した。

##### 溝口睦子氏の論考

(文献的性格)新撰姓氏録は8世紀末から9世紀初頭にかけて京畿1182の家々の系譜を朝廷に提出し、集大成されたものである。「栗鹿大神元記」は君系大三輪氏の傍系支族(分家)である。『栗鹿大〔明〕神元記』を個別系譜に選定したのはなによりもその内容がすぐれた資料的価値をもっているからである。典型的な「本系」特徴をそなえている。『栗鹿大〔明〕神元記』は「縁起書」として伝えられた。書陵部本の元記が原形に近いという、田中卓氏と同意見。『栗鹿大〔明〕神元記』の原形成立は和銅年間であるが、巻首三行と末尾二頁半の言葉書き部分は後の書き加え。本文部分が神部直氏の八世紀に作成された本系である。前後の後世の書き加えは同一人物で根閉を「新羅將軍」とよび、この書を『栗鹿大神元記』と称している。これは本文部分と矛盾するし、事実にも反する。是澤氏、田中氏のいう「神部直根閉」と「三輪君根麻呂」が同一人物との見解は肯定できない。これは「直」と「君」のカバネの差は家柄の差であり、当時はきわめて重要視しており、簡単には無視できない。神部直根閉が「新羅將軍」とあるが、事実と大きく異なり、和銅元年に記述されたものであれば40年を経て書かれたことになるが、根閉が從軍したことは事実かもしれないが、現実離れしている。

起源伝承に阿米美佐利命の荒ブル神の伝承があるが、典型的なアラブルカミの類型である。これは二つの異なる観念の習合で、本来的には神部氏が中央の三輪氏との間に関係を持ち先祖を同じくする。その二に三輪氏の先祖神である大国主との間の系譜的な関係をついた。アラブルカミには摺磨國風土記、神前郡条の生野にアラブルカミありて往来する人を半数殺した。このことで死野となづけた。こののち名称が悪いので牛野に改めたという。この伝承は距離的にもさほど変わらず、同一伝承と考えられる。

阿米美佐利命から根閉までの代数が本文では24代目とあり（阿米美佐利命に子はなく、後から挿入された証拠）垂仁朝はじめて大神を祭った先祖から數えても13代であるにもかかわらず、本文では11代と書かれている。巻末部分の作者は古記録をいいかげんにしか読んでいない。しかも巻末起源伝承には天降神話、国作り神話、洪水神話が混同され、朝廷が天文陰陽家に勅宣を下すなどちくはぐな叙述。神部氏の子孫は奈良朝以来神部家に伝わってきた古文書(本系)に巻首と巻末を新たに加え、それを『栗鹿大神元記』と名付け、その全体が和銅元年に根閉によって書かれた古卷であるように裝って、栗鹿明神の起源を語る書として神祇官に差し出したものである。栗鹿神社の神主は古くは神部氏であったが、奈良朝以降、いつの頃か日下部氏に移っている。日下部氏は平安以降も栄えた大族である。

『栗鹿大〔明〕神元記』は栗鹿神社の神主の職をまさに奪われようとする時点、或いは奪われて間もない時点で、必死の抗議の書としてかかれたものである。巻末文の中の、「夫海底之石非鉄不釣、……錄之耳也」は神部氏の氏神である栗鹿神社との関係が人為によって左右できない絶対的なものというための枕である。日下部氏も『栗鹿大〔明〕神元記』を無視できず、『田道間国造日下部足尼家譜大綱』に根閉を習合している。

(系譜部分の考察) (1) イザナギ・イザナミ～スサノヲ 人類共通の始祖神 (2) スナノヲ～大国主  
神代 大国主を遡る神系譜 (3) 大国主～大タダネコ 神武～崇神 大国主系統の氏々の共通系譜部  
分 (4) 大タダネコ～ハヤヒ 崇神～応神 ミワ人部系統の氏々との共通系譜部分 (5) ハヤヒ～ネマ  
ロ 応神～大智 ミワ部直一氏のみの単独の個人系譜部分他の文献として古事記や日本書紀、旧事本紀、  
三輪高官家系等があり、1～3はそれぞれ文献に登場する。4と5は文献には登場しない。(3) 以前  
の部分は神部直が大三輪氏の系譜から写した。(冒頭から 太田々祐古命まで) (2) の分析 (2) の部分  
は元記の系譜中資料価値の上で、最も注目に値する。また古事記上巻の八岐大蛇退治のあとにスサノヲ  
後裔系譜として載っている。この古事記系譜と元記を比較してみると元記の系譜の方が古事記より古態  
であることが確実である。

(記載様式、神名語尾、仮名遣い) 元記系譜の記載法が記紀以前の古い様式と同じであり古事記より  
明らかに古い。理由の一つに神名語尾の「神」の語の有無で元記は一切記していない。また仮名遣いも古  
い。繼体天皇の母君「振媛」日本書紀では「ふるひめ」は元記で「布利比弥」「ふりひめ」と読み、これ  
らの読みの古態からも、元記系譜の成立時期の考察は、天皇系譜の成立やひいては系譜体系全体の成  
立の問題とも深くかかわってくる。この部分(2)の神名は4世紀或いは3世紀以前、弥生から前期古  
墳時代にかけての古い時期に重要な働きをした神名である。『栗鹿大〔明〕神元記』と日本書紀第一  
の一書と書き出しが非常にしている。

#### (『元記』と『古事記』や『日本書紀』との比較まとめ)

1. 元記の系譜は仮名および記載様式その他の特徴から明らかに古事記より古く、成立時期は記紀以前、  
推古にいたるまでの時期
2. 『日本書紀』第八段第一の一書は『元記』の系譜と酷似し、同一系統の書。
3. 『古事記』は『元記』より新しいが、同一系譜。
4. (3) 部分の系譜は大三輪氏の系譜にあったもの。持統天皇五年に有力氏十八氏に「墓記」の提出  
が命じられ、筆頭に大三輪氏があった。これは日本書紀編纂の資料として提出が命じられたもの。  
したがい、日本書紀第一の一書が大三輪氏の本系からとられたものであることは間違いない。(3  
の分析)・三輪高官家系は大三輪神社の神主であった高官家・伊和大神は出雲系の伊和氏族の奉じ  
た神。大和の三輪の神と同系神である。『栗鹿大〔明〕神元記』は大三輪君系統、地神本紀と高官  
家系を賀茂君系統の本系と推定する。文章の一部「素差能雄命六世孫大國主命之後也、・・」は姓  
氏錄大神朝臣条の伝説が同一の所伝から出ていることは疑う余地もなく、『元記』は大三輪氏の古  
い本系を受けて書かれている。

(4の分析) 大ヒコハヤ以後は但馬国の大神直氏のみの系譜部分である。この部分は神部直氏の氏の  
存立をかけた実質的な意味を担っている。ここで云いたいことは栗鹿大神の祭祀と但馬国造拝命である。  
社会体制の激変した八世紀は中小氏族にとって試練の時期で神部直氏も栗鹿神社の神主と郡領の地位の  
確保に苦慮した。根闊が朝来郡の大領だったことは日下部氏系譜でもあるので史実だろう。神部直氏が  
古くは但馬国造であったかどうかは国造本紀や播磨国風土記等からすると疑問視されており、神部氏の  
国造は文献的に全く証されてない。

(5の分析) 4と5の諸文が書かれたのは内容的に一つながらのもので、全て8世紀以降に書かれた  
ものである。系譜を各段階で比較すると5が8世紀の戸籍帳にみられる同じタイプの個人名である。通  
婚範囲が同族氏族内であり、女性人名のタイプやその出自また男性人名などまさに但馬国の一豪族の



写真 14 栗鹿神社社殿

神部氏らしい。

(系譜の構造と特色)

1. 「元記」系譜にはいくつかの切り目をもつ。
2. 切り目に区切られた部分はそれぞれの成立時期や事情、成立母胎を異にする。
3. 崇神以前の神話や伝説部分は大三輪君の本系を引いたもの。
4. 神話伝説部分の系譜は国家的規模の系譜体系の一環で、記紀などの国史の一部を構成する。
5. 神話伝説部分の共同系譜は記紀以前の推古朝の頃には成立。
6. 応神仁德以降の系譜部分はそれ以前と比べて断層があり、この部分は個人系譜。元記は一地方小豪族の氏族系譜にすぎないが、日本古代史の中核にふれる第一級の資料を有する。宗家大三輪君の本系が失われた現在でも『元記』の存在により、『日本書紀』、神代上、第八段一書の一つの原資料は大三輪氏の体系と確定できる。またイザナギ、イザナミ神話の原資料の見当がついてくるなど、『記紀』の原資料を解明する上にも『元記』は大きな役割を果たすもの。最終本系作者（根閉？）やそれを活用した長保の頃の神部直氏の子孫の意図を越えて実に貴重な文化遺産を我々に残してくれている。

## 【参考文献】

- 是澤恭三「栗鹿神社祭神の新発見」(神道宗教十号、昭和 30 年 10 月)
- 是澤恭三「栗鹿大明神元記の研究（一）（二）」(日本学土院紀要第一四卷第三号・第一五卷第一号、昭和 31 年 11 月・昭和 32 年 3 月)
- 田中 卓「古代氏族の系譜－ミワ支族の移住と隆盛」田中 卓著作集二「日本国家の成立と諸氏族」昭和 61 年 10 月)
- 前之國亮一「神話研究における『栗鹿大明神・大神元記』の史料的価値－「神」概念の形成と出雲神話を中心に－」(『学習院大学文学部研究年報』第二三輯、昭和 52 年 3 月)
- 飯田瑞穂「『栗鹿大明神元記』の一写本」(『中央大学文学部紀要』史学科第三一号(通巻一二〇号)、昭和 61 年 3 月)
- 溝口勝子「日本古代氏族系譜の成立」第 3 集「觀測系譜の研究」昭和 57 年、学校法人学習院
- 兵庫県史 史料編 古代一(兵庫縣) 1984 年
- 義江朋子「出自系譜の形成と王統譜」(『日本歴史』五二八、1992 年)
- 村山美生「栗鹿大明神元記」について『柏原紀要第 4 号』平成 7 年、兵庫県立柏原高等学校
- 山尾幸久「大化年間の国司・郡司－改新詔の検討 その 2 －」『立命館大学文学部紀要』1993 年
- 宿南 保「但馬の古代氏族」『和田山町史』上巻 和田山町 平成 16 年

「古代の栗鹿神社と奉斎氏族について」山尾幸久氏のコメント（2000.11.20）より

- (1)栗鹿神社の古い祭祀形態は不明。一般的に推測すれば、さんねいぢ（神がいますところ）は「栗鹿の嶺」だろう。祭りの時、麓の聖地いわき（磐境）に臨時の施設（屋）を造り、注連縄で聖域を区画したのだろう。社＝ヤシロとは屋（ヤ）のための土地のこと。その出入口には門が造られたと推測される。「鳥居」の語の初見は922年の文書で、804年の皇太神宮儀式帳は「うえふかぬ（上葺かぬ）御内」としており、俗界と聖域との門だろう。
- (2)「栗鹿大（明）神元記」によると「栗鹿大神」は「栗鹿の嶺に荒振り坐す」神で板（遠阪岬のことか）を往還する人を半ば殺してしまったという。神奈備はやはり栗鹿山だと思う。聖域が現社地かどうかはわからない。少し広い範囲で考えた方が良いのではないかと思う。
- (3)神社は神の屋代（シロはそのための土地）のこと、常設の建造物などがあったわけではない。7世紀後半に伊勢・出雲・大和・大倭・鹿島などの常設神殿があったことが判るが、8世紀に入ると各地に造られ始めたらしい。栗鹿の場合、737年の正税帳も806年の神祇官牒も「栗鹿の神」なので、社殿まであったことが確実に判るのは『延喜式』の臨時祭式と神名帳まで降る。『延喜式』は10世紀初めの編纂だが、これは9世紀100年間（中には8世紀後半まで遡る）の制定規則の集大成だから、大づかみにはほぼ9世紀のことと見て良いと思う。
- (4)神社の成立にはいくつかの条件があるようだが、[1] 祭祀対象の人格化（単にあらぶる靈ではなくアメノミサリのミコトの名をもつ神格）とその神の常住施設の必要が高まる。[2] 仏教建築の隆盛の影響。[3] 国家による地方神の尊崇、などがあるであろう。このうち[3]については神祇官が執行する臨時の神事において奉幣の対象になる各地の「名神」は8世紀初めから次第にひろがる。[1]は『元記』の原形が和銅ごろまとめられたとすると（私にはわからない）アメノミサリという神名も8世紀初めにはあったことになる。[2]は天平期の寺院建築は但馬でも盛んだったかもしれない。
- (5)栗鹿神社の原形となる施設が8世紀半ば前後にすることはさほど自然ではない。土器が「神」「鉢」（これは「鉢」または「神體」の可能性がある）の墨書きをもつことからもそう推理できる。『元記』に栗鹿大神の神宝を納める「宝藏」を建て、始めて「祭主」として「忌み始む」（忌むは肅む。潔意し慎む）とある。神宝を神として本殿に祀ったのか（「ホクラ」という言葉は「秀・單」で神を表象する宝物を置く場所で神殿の意味）、宝物藏を造ったのか判らないが、普通平安時代以後の神社には本殿、神事を行なう幣殿・拝殿・宝物や祭具などを保管する宝殿、神にささげる供物を調理したり神酒をかわす神饌殿、祭りの準備をしたり直会をする建物などがあった。鳥居もあった。
- (6)栗鹿神社の原形になる施設がどんなものだったのかは全く不明だが、相当広い範囲にわたって多くの建物があったかも知れない。寺院は殆ど礎石を使うが掘立柱は神社に多いこと、また官衙にせよ集落にせよ井戸が不可欠なのにそれが少ないとから、一つの可能性としては初期の栗鹿神社に開運する施設の一部ということは言えるかも知れない。墨書き土器はその推測と矛盾しない。
- (7)栗鹿神社は神祇官で行なう祈年祭で幣帛を受ける官社である。その中でも名神祭（臨時の祈雨・祈秋稼など）にも奉幣に与る名神社だった。名神への奉幣は8世紀末頃からしばしば行なわれ、平安時代の国家的祭祀制度では重要だった。（全国に200あまりの名神社）。社格は人社だから、9世紀代の但馬国では、栗鹿・出石・養父の三社は地元の尊崇が顕著で国家的にも崇敬された靈験著しい神を祀っていた。三社の中でも栗鹿神社の神威は最も畏敬され最も崇拜されていたと思われる。『延喜式』臨時祭式の名神祭条では但馬国の人社（十六座）の筆頭に「栗鹿神社一座」とある。この条の順序は無

意味ではない。「大日本国一宮記」(原形は南北朝ごろの成立らしい)『延喜式神名帳頭註』(室町時代)(共に『群書類從』神祇部)は、共に但馬國の一宮を栗鹿とする。一宮は変わることもあり二つの神社が一宮であったこともあるが、栗鹿神社が、古くは但馬で最も尊崇され、国司も最も敬意を表わしていたことはまちがいない。社地は現状よりもはるかに広大で付属施設も多かったと見て良いと思う。

(8)中世祭神の上社は彦火火出見、中社は龍神(コモリノカミ?)、下社は玉依媛(「一宮記」。『頭註』は豊玉姫)。しかし『延喜式』は「一座」とする。9世紀前後に「栗鹿神」といえば『元記』がいう「阿米美佐利命」だった。「栗鹿の嶽」の神を表象する桶・大刀・鏡・玉を藁の神殿で祭る。祭主は神部直の族長。これが8世紀後半~9世紀の祭祀形態ではないかと推測される。

(9)彦坐王を祀るようになったのはいつごろからかは判らない。彦坐王を系譜上の祖とするのは8世紀の養父郡・朝来郡に栄えた但馬國造家の日下部君(宿禰)の一族だった。後の朝来郡地方では7世紀末か8世紀初めまで神部直の一族が地元豪族としては最も力があったらしい。しかし8世紀初め頃から(日下部氏の系図でいう「表米」~「都卒自」「荒嶋」の時代)朝来郡大領・少領(長官・次官)の地位は日下部氏が世襲するようになったのではないかと思う。そしてそのころから神部直は「栗鹿大神の神主部」(部はその職を行なう集団)となっていたのであるまい。

(10)遺構が8世紀半ばの栗鹿神社の関連施設だとすると、造営に日下部宿禰一族の関与も推測せねばならないが、神戦集団は神部直だったことはまちがいない。祭神はアメノミサリで、ヒコイマスが祭神になったのは10・11世紀にまで降る可能性もある。

(11)『元記』については知識がないが、大神朝臣同族共有系譜に但馬の神部直の固有系譜を接合したものと見られる。神部直氏は中央の神君氏の系譜によって系列下に入った地元有力者である。系図は普通は文章系図→堅系図→横系図の順で新しくなるが、『元記』の場合、二種類ある文章系図・堅系図のどちらが古いかはわからない。

(12)堅系図は宮津市龍神社(名神大社、丹後國一宮)蔵の「海部氏系図」と大津市園城寺(三井寺)蔵の「和氣氏系図」(「円珍系図」ともいう)とが共に9世紀前半に成立したと見られており共に国宝指定。一度に成立したものではなく何回も書き加えまとめて直しているという。『元記』も何回かまとめて直され1002年頃に完成したらしい。系図の部分を和銅年間に成立したと見る説もあるが、そうとも断定しにくく、この部分にも後の手が加えられている可能性はある。しかし神部直に独自の固有系譜部分(大彦速命からあと)は古代の地方氏族の祭神・祭主・系譜と伝承を知る上できわめて貴重。特に最後の二代(マロ・ネマロ)は7世紀後半の律令国家建設期の地方の現状を知る上なく大事な史料。『元記』は堅系図の書写年代が鎌倉時代末と考定されているように1002年頃の完成はほぼ信用できる。

## 第4節 古代・中世の栗鹿遺跡と栗鹿神社について

位祭仕事、

忌部祝君人、

忌酒生祝卅人、

官戸唐五人、奇。

雜役等、

禹臣兒神部直根附、

右人後岡本朝應御宇天豐財實日足國天豐御世時、但

馬國民率、新羅詔仕奉、即涼若來、同朝應御宇天金開

別天皇御世、庚午籍勤造日依書算如、而國政取持、

國造願領并願民源之委非勘定新羅詔、即庚午年籍

栗鹿鄉上<sup>ノ</sup>主神部直根斯年升井<sup>ノ</sup>、神戸里切分奉、九

多三里田、四里田<sup>ノ</sup>、十采四里田五里田六里田、十

一条二里田<sup>ノ</sup>、野山林<sup>ノ</sup>、

忌酒生卅人、

忌酒生祝卅人、

官戸唐五人、奇。

雜役等、

禹臣兒神部直根附、

右人後岡本朝應御宇天豐財實日足國天豐御世時、但

馬國民率、新羅詔仕奉、即涼若來、同朝應御宇天金開

別天皇御世、庚午籍勤造日依書算如、而國政取持、

國造願領并願民源之委非勘定新羅詔、即庚午年籍

栗鹿鄉上<sup>ノ</sup>主神部直根斯年升井<sup>ノ</sup>、神戸里切分奉、九

多三里田、四里田<sup>ノ</sup>、十采四里田五里田六里田、十

一条二里田<sup>ノ</sup>、野山林<sup>ノ</sup>、

忌酒生卅人、

忌酒生祝卅人、

官戸唐五人、奇。

雜役等、

禹臣兒神部直根附、

右人後岡本朝應御宇天豐財實日足國天豐御世時、但

馬國民率、新羅詔仕奉、即涼若來、同朝應御宇天金開

別天皇御世、庚午籍勤造日依書算如、而國政取持、

國造願領并願民源之委非勘定新羅詔、即庚午年籍

栗鹿鄉上<sup>ノ</sup>主神部直根斯年升井<sup>ノ</sup>、神戸里切分奉、九

多三里田、四里田<sup>ノ</sup>、十采四里田五里田六里田、十

一条二里田<sup>ノ</sup>、野山林<sup>ノ</sup>、

忌酒生卅人、

忌酒生祝卅人、

官戸唐五人、奇。

雜役等、

禹臣兒神部直根附、

（高麗文）和同元年歲次戊午八月十三日 神取 神部八島

和同元年歲次戊午八月十三日 神取 神部八島

勅付書上正六位上新羅將軍神部直根附

正六位上行大在者直根附

正六位上行大在者直根附

所居社、神戸一壇、神田七十五町五穀百八十步、屬定、  
神立兵共者若望氏、請<sup>ノ</sup>下大和臣伊豆守神氏人等、也、隨  
照四事<sup>ノ</sup>嗣之祭、忌月供日之定、雜々神祭、一々礼祭、  
自<sup>ノ</sup>尔天下盡齋、人民安平、是則一天之乃至、百王之  
美拂<sup>ノ</sup>、我大明神天德之尊十一代後聖明今生氏中、已  
勤<sup>ノ</sup>神事、為樂者其始也、抑勤雖繼事、為我朝志有、  
別天皇御世、庚午籍勤造日依書算如、而國政取持、  
國造願領并願民源之委非勘定新羅詔、即庚午年籍

世更<sup>ノ</sup>、何異于時、于時與聞生三十也、親被<sup>ノ</sup>本朝之勅、  
速對<sup>ノ</sup>靈城之符、生命不廟、喪勝無歸、遂而伏<sup>ノ</sup>、獲彼  
神代<sup>ノ</sup>当初人與次皆曰此在世更<sup>ノ</sup>不、絕聞者、亦起<sup>ノ</sup>  
世更<sup>ノ</sup>、何異于時、于時與聞生三十也、親被<sup>ノ</sup>本朝之勅、  
速對<sup>ノ</sup>靈城之符、生命不廟、喪勝無歸、遂而伏<sup>ノ</sup>、獲彼  
王東<sup>ノ</sup>也、靈鑿万里、自得<sup>ノ</sup>鬼靈之疾、弓矢手<sup>ノ</sup>、病使<sup>ノ</sup>  
瘡厥而泣、渡<sup>ノ</sup>海登<sup>ノ</sup>、忍寒忍苦、彼舟帆飄雨而乘者、  
則是大王雄風之德也、故寧招而中看、豈非<sup>ノ</sup>明神靈論  
之感乎、勤王之忠義顯、胥草之等因襲、悉忠靈論之  
長、今濟濟<sup>ノ</sup>烈功之靈、古歷<sup>ノ</sup>固孚<sup>ノ</sup>世義、繼除<sup>ノ</sup>尤、凡  
以我大明神難化威嚴<sup>ノ</sup>、粗陋<sup>ノ</sup>社日云雲、老命試  
尸、今茲七十<sup>ノ</sup>、舊禮如<sup>ノ</sup>此、後代可<sup>ノ</sup>惡歎功勞為<sup>ノ</sup>名  
也、其靈著焉、神矣、為<sup>ノ</sup>祖<sup>ノ</sup>氏於万代<sup>ノ</sup>、令<sup>ノ</sup>我神部<sup>ノ</sup>、而  
嘗<sup>ノ</sup>也、夫海石之石非<sup>ノ</sup>鑿<sup>ノ</sup>不<sup>ノ</sup>銷、日中之火非<sup>ノ</sup>燃<sup>ノ</sup>不<sup>ノ</sup>滅、  
越鳥<sup>ノ</sup>爲<sup>ノ</sup>南枝、胡馬<sup>ノ</sup>定<sup>ノ</sup>北風、人之相應、人之回<sup>ノ</sup>、妙  
峰山<sup>ノ</sup>霧潤、煙霞闊<sup>ノ</sup>、底<sup>ノ</sup>漢<sup>ノ</sup>事、人王<sup>ノ</sup>、神靈<sup>ノ</sup>人、  
皇靈<sup>ノ</sup>、吾親鬼命據<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>、天下御名<sup>ノ</sup>曰<sup>ノ</sup>栗鹿<sup>ノ</sup>大明神<sup>ノ</sup>也、  
花夷未<sup>ノ</sup>頭<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>時、肅廟<sup>ノ</sup>立<sup>ノ</sup>增<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>處、天下我陰<sup>ノ</sup>霖雨久、洪  
水饑餓疫<sup>ノ</sup>、生者流亡<sup>ノ</sup>時、朝<sup>ノ</sup>露<sup>ノ</sup>霧<sup>ノ</sup>便<sup>ノ</sup>下、勤宣<sup>ノ</sup>天文  
除<sup>ノ</sup>陽家勤<sup>ノ</sup>棄<sup>ノ</sup>產、大國主<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>養<sup>ノ</sup>佐利<sup>ノ</sup>依、未受<sup>ノ</sup>公榮、  
私致<sup>ノ</sup>此極災<sup>ノ</sup>也、云々、仍下<sup>ノ</sup>勤真<sup>ノ</sup>起建<sup>ノ</sup>寶殿、十二箇

神祇宮

但馬國栗米郡栗鹿神元記勘錄錄實文、檢官印、為

「令<sup>ノ</sup>公驗、下<sup>ノ</sup>預於社<sup>ノ</sup>如<sup>ノ</sup>件、

庚午年八月廿一日

王立上行大在者直根附

正六位上行大在者直根附

第472図 「栗鹿大神元記」3



## 栗鹿大神元記

宮内庁御覽室蔵

「栗鹿大神元記」和同元年  
「延喜式神名下但馬國栗鹿神社名神」  
但馬國栗鹿神社名神

新羅君草正六位上神源惠親間筆書

伏、勤宣官勅往言上、但馬國護守阿木美佐利命、栗  
鹿大神元記。

神祖伊佐那伎命子妹伊佐那美命二神共生之兒、栗  
鹿大神元記。

合參書

大日神

次月神

次參佐乃平命

此栗佐乃平命、登天從天譲來於出雲縣川上鳥上山、  
娶伊那郡多美夜斯名須佐能復都美英之女久斯伊那多  
比斎生男、蘇我能由復麻奴斯那佐卑留比古夜斯麻

斯奴、娶大山都美之女木花知利比賣生兒、布波能母  
知汗郡須飼、娶瀧瀧美之女日河比賣生兒、深瀬之水

改札花、娶阿麻乃郡刀削乃知尼生兒、愛赤葛武、娶  
布努都美之女布引野美生兒、天石由伎奴、娶佐志  
久斯布刀比賣之女佐志久斯和可比賣、生男、大國主  
命、一名大物主命、亦名栗鹿母母命、亦名栗鹿毛色

真命、亦名八十神命、亦名栗鹿玉命、亦名栗鹿御魂  
命、亦名栗鹿御靈命、亦名武祖命、亦名武祖御魂命、  
公等祖、

又大和氏文在名太祁勞務乃保命、

都過戶忍勝連日命、多招伊比賣命、本名武祖曾今  
利命、母曰吉向貴家美美美命、

又大和氏文在名房太賀多須命、此者和尔公并石邊

命、亦名栗鹿母母命、亦名栗鹿毛色

米亦佐利命、多招伊比賣命、又娶三瀬湯枕耳之女玉穗原、

多招伊比賣命、多招伊比賣命、本名武祖御命、

生兒、瀧杭矢瀧船五十九齡集命、錄、神武伊波礼闈

古天皇、生、神沼河耳天皇并皇子、次五十鈴依集命、族

之孫活玉使源、生貢、久斯比賣多命、大神御臣祖也、

自、神様伊波礼昆古天御御世、始而至、神沼河耳天皇御

世、為、內臣、因傳曰、是墓地、在京畿、宇摩乎曾村、

右、大國主神、栗鹿、生、兩兒、猶未、明、其說、夜之確

乃去、曾舉不、往來、於、是王權、心中懷疑、然、

無殊衣、至、明斷事、固、驗追見之時、其猶經、於茅

茅陶村、從、彼处、直指、大委御諸獄、玉德乃知、大

神、然、其猶遺、留本所、唯有、三週、因、斯号、冤富美

和、君姓、也、

此久斯比賣多命、娶宇治須須命、生兒、阿麻配比賣

太命、妹底中庭佐命、嫁、片春空御宇壁城津志

玉手看天皇生、息石耳命、次大日本主須須夜叉夜天皇、次

常根津參某兄命、次根城津御命、

又大和氏文在一名太祁知妻若命、

阿麻配比賣太命、娶、意富多佛良命命、尼御石口忍速柄浦

浦稚日命、兄御石口忍速柄日命、

大國主神、當今以、若兒大田々御古寺祭、我者、則立

平矣、天皇便以、夢教之御有、告天下、遷。大田々

裕吉、乃傳、茅渟御邑、黃、天御謂御曰、汝證子善乎、

對貢、大國主神兒久斯比方令九歲之御、己患瘧大、称

古是矣、天皇大怒、卿以、大田々裕吉、初令拜、奉大國

主神、仍立三天社境社等、定、神地神曰、于時疾病始愈、

天下衡衡、五穀豐登、百姓不饑、又地社奉、祭、八百萬

母曰、出雲國上田少翁家藏、

耶美實乃許理命、宇摩志毛呂尾命、亦名御藏漢命、

宇摩志毛呂尼命、刀余美氣主命、亦名云、薦片隅命、

母曰、伊勢補主命玄、寶具佐命、

刀余美氣主命、意保美氣主命、亦名云、神田々根子、

右大田々古命、號、瑞應宮御宇、大日本根古應國奉天皇第一、皇女像

五十瓊杵天皇御世所、求出來、乃鑿、祭大物主大神之

## 2. 中世以降の遺構

### (1) 道路遺構の時期と性格

栗鹿遺跡E地区の道路遺構は栗鹿神社から一品集落方向に一直線にのびており、その延長は約500mに達することは昭和20年代の米軍撮影の空中写真や明治時代に測量された陸地測量部の地図などから判明している。

今回発掘された遺構は長さ70m、幅約2m以上で中世前半の土層を基盤に石材を積み上げている。東側には人頭大の石材を道路延長方向に配置し、平面の西側には拳大の礫を配置する。西側は段差となり石積みされたと考えられるが、近世や現代の石積み補修によりその形は失われている。またこの道路遺構に伴う遺構としては北端部東側に長さ5m、幅0.5m、深さ0.15mの飼溝がある。

この道路遺構は石敷道であり、栗鹿神社の鳥居（北東方向）の方向に一直線にのびている。昭和53年のは場整備施工前まで地割りとして、この道が存在していたことや祭りに使用されていたことから、栗鹿神社参道と考えられる。

これらから石敷の道路遺構は土層観察及び出土遺物検討の結果、12～13世紀の遺物包含層を基盤として石材が積み上げられており、14～15世紀の遺物包含層に覆われていることから、13世紀以降15世紀ごろの間に築かれたことが判る。その後、近世・現代（昭和52年ごろ）までの約700年間、栗鹿神社の参道として形態をとどめていたことになる。またこの旧参道は従来の条里を斜め方向に断ち割り、築かれている。この参道造成の背景には古代末～中世頃に神主の座についた日下部氏が自らの強大な力を表した結果であると思われる。

石敷道路一覧表（2001年当時のデータによる）

No.	遺跡名	所在地	時期	種類	遺構の状況等	文献等
1	草戸千軒	広島県福山市	室町	石敷道	常福寺の参道でなく、町中流、長さ20m、幅2~3m、平右一部一段、道の一部に敷石、崩、側溝あり	年報1977、22次調査
2	市遺跡	滋賀県愛知川町	鎌倉	石敷道	扁平川原石使用の石敷き道、現説資料送付あり	
3	上平寺南館	滋賀県伊吹町	室町	鎌新石敷道（砂利道）	中世山岳城館	
4	若宮大路	神奈川県鎌倉市	鎌倉	鶴岡八幡宮参道	表面石敷は現代もの市教委県教委見解	
5	平泉寺	石川県勝山市	中世	山岳寺院石敷道	巾目寺院境内道、発掘延長230m、幅2.1~3m、資料送付あり	
6	王ノ塙	宮城県仙台市	中世	砂敷き・石敷き	幅5m一部に石敷き道路	
7	八王子城	東京都八王子市	中世			
8	楼南田	長崎県松浦市	中世	石敷き道路状遺構	砂礫が多い場所での川原石石敷き道	長野県教委1985 長野県文化財報告書第78集
9	諿田	福岡県福岡市	中世	敷石遺構	幅6mの中に配石状の敷石48m	福岡市教委1975 九州横断自動車道 岡係理歴文化財調査報告書 福岡市文化財調査報告書 第53集
10	蓮花寺跡	熊本県	中世	石敷溝	幅1.1~1.8m長さ16m石敷きは溝の中に配石された状態で石敷き溝との認識	熊本県教委 1977 「蓮花寺跡・相良朝景塚跡」熊本県文化財調査報告書第22集
11	栗鹿遺跡	兵庫県山東町	中世	石敷道路	栗鹿神社参道	

#### 第4節 古代・中世の栗鹿遺跡と栗鹿神社について

中世の石敷き或いは礫敷きの道路遺構として全国的に10例程度しか無く、中世交通史研究や当時の勢力関係を解明する上で重要な発見と言える。

この石敷道の性格はどうなのか、いつまで機能されていたのかを考察し、その後の石敷道がどうなったのかを考える。

中世の道については近年中世のみち研究会が発足し、その類例などが調査されている<sup>(注1)</sup>。全国的には中世の道は東日本を中心に30~40例ほどあるが、いずれもその構造的なものはまったく不明である。

兵庫県下の例としては小野市淨谷遺跡で発掘された道路状遺構は両側に側溝をもつもので、淨土寺へ

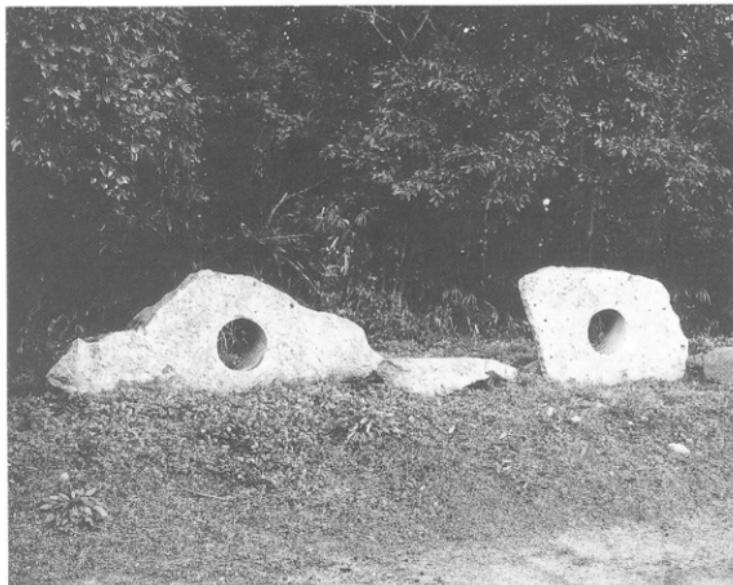
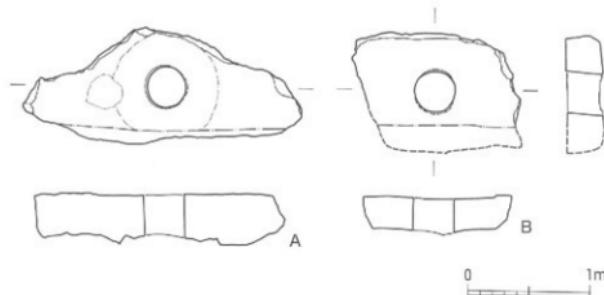


写真15 栗鹿神社鳥居礎石写真



第475図 栗鹿神社木製鳥居礎石実測図

の参道と考えられる。また太子町の福田片岡遺跡では筑紫大道、太子町の平方遺跡でも筑紫大道が検出され、道路の肩にあたる部分に礫が見られる。以上の3例にすぎない。

全国的な例としては現存する石敷道路は鎌倉の若宮大路がある。この道は朱雀大路的なものであるが現在も道路として機能しており、現在の石敷きは現代のものと考えられている。石川県白山平泉寺では境内をめぐる石敷道がある。その他、長崎県松浦市樓階田遺跡では敷石道路状の石列が海へ延びる形で検出されている。栗鹿遺跡で検出されたものは明らかに栗鹿神社の参道であり、このような明確な石敷道の発掘例は未無に等しい。

この他、中世に鳥居が存在していたという根拠が栗鹿神社の鳥居改築時に掘り出された石造品から想定できる。圃場整備以前に神社大鳥居から北東方向に延びていた参道があり、柴川の近くまであり、早田の東方に位置する守山神社まで御神輿をかついだ神事が存在したと言う。

栗鹿神社の鳥居は代々木製で40年程度の寿命であった。この鳥居は現在の石造りの鳥居より少しきく、社叢林のヒノキを使用して山東町柴の大工が建築した。下部はヒューム管を使用したため、根本部分が腐ったものである。先代の木製鳥居は1999（平成11）年9月24日午後3時ごろ台風18号により南側に倒壊した。倒壊後上部は本殿と拜殿を結ぶ廊下材として転用された。再建は石造りとなり、基礎掘削 GL-180～200cm にてばぞ孔のある巨大石材（礎石）が出土した。そこで栗鹿神社と鳥居建築工事を担当していた桂野工務店担当者は協議して先代鳥居の脊石の南側に設置した。なお現在栗鹿神社の参道入り口の石碑の根柢にある脊石の破片は2年前の石造鳥居建築時に現在の記念碑裏の社叢林に頭を出していたものを数点動かし、明治21年の石碑の廻りに設置したもの。ただし付近に元から存在したものも1～2点あったとの事である<sup>(注2)</sup>。

栗鹿神社の鳥居改築時に掘り出された石造物は出土状況や形態から木製鳥居の礎石と考えられるものである<sup>(注3)</sup>。Aの規模は230cm×96cm×40cm、Bの規模は126cm×98cm×28cm であり、詳細観察においても木質部の当たりが観察できる。現段階ではこのような石造物の発掘例はないが、大阪市中央区の坐摩神社境内に同種の石造物が存在する。出自は定かでないが形状から同程度の木製鳥居の基礎の可能性が高いと考えられる。



写真16 坐摩神社境内の石造品

考古学的には出土遺物がなく検証はできなかつたが総合的に判断して概ねこの考えに達した。というのも、古代に日下部氏が台頭してきたことにより神部直氏の力が減少したため、最終的には中世初頭に祭主交代したと考えられ、この時期に独白色を出すべく従来の条里を無視して斜め方向の神社参道を建造したものと考えられる。その後、中世末には石敷は土で覆われ、その役目は祭礼時ののみ継承されるに及んだと考えられる。

(注1) 村井草介、藤原良章編『中世のみちと物流』山川出版 1999

(注2) 足立 鶴・大杉和子・木村康正・佐吉広志・福島萬之助・福島賛治氏のご教示による。

(注3) 兵庫県教育委員会文化財室村上祐道氏のご教示による。

(2)中世以降の栗鹿（伊能忠敬と栗鹿）

E地区で検出された栗鹿神社参道は祭主の交代に併せて権力を示し、祭祀の上でも必要だっただろうこの方向に石敷道が設置されたものと考えており、考古学的には13世紀ごろの中世に造られ、中世末には土で覆われていることが判明した。しかしこの条里を断ち切る参道は昭和53年のは場整備事業で埋められるまで区画として生きており、栗鹿地区の方々においても近代においても使用されていたと聞く。

そこでこの旧参道が地図が示されるのがいつごろなのか、その結果、下記地図学史上的栗鹿周辺掲載一覧は栗鹿地区や神社を示したものである。この中で神社参道あるいは神社への道が示された例は伊能測量後45年後の但馬國新図や明治35年陸地測量部地図にも参道と考えられる北東方向の道が描かれている。

古代から栗鹿神社は尊崇を受け、中央から派遣された国司が着任の儀礼等、主要な人物は訪れたと考えられる。中世以降についても但馬一宮や二宮の記述を示すように歴代の当主が訪れ、歴史上の人物も訪問している。その中で江戸時代に幕府の命として日本全国の測量を実施し初めて地図を作成した伊能忠敬がいる。

伊能忠敬測量隊は1800年から16年かけ測量した10次におよぶ測量調査を実施し、その記録が残る。第5次調査において1805年但馬海岸部を調査し、また1814年の第8次調査では九州地方や最南端の鹿児島、種子島など、最も長期で困難な調査の帰路、但馬地方測量のため、文化11年（1814）丹波側から遠阪峠を越えて但馬に入り、柴、一品を経て栗鹿神社まで測量し参拝している。その記録である伊能忠敬測量日記（重要文化財）は、伊能忠敬記念館にて保存されている。その記録を抜粋する。

伊能忠敬測量日記 但馬地方測量の測量日記 文化十一年（一八一四）正月

（重要文化財 伊能忠敬記念館所蔵から）

同十二日 曇、五ツ半時頃より雪、昼後迄降る。六ツ半時丹波国水上郡佐治町出立。同所上印より初上町佐治川、神楽川とも仮橋三十三間、能勢市十郎、市岡丹後守知行市原村、市岡丹後守平岩七之助知行杉谷村中佐次村入会、織田出雲守領永見伊予守知行山垣村、枝平地、立場、織田領遠坂村枝徳堀、枝和田、遠坂、本村駅場止宿前坂印に打止、街道一里二十五町三十間、四ツ半時遠坂村へ着。止宿本陣足立新右衛門、喜兵衛、織田出雲守内須佐見庄九郎、同大庄屋芦田太郎兵衛、恩田御代官所但州朝来郡欠名瀬町町村兼帶、年寄三右衛門、同町本陣年寄安右衛門来る。恩田新八郎御代官所朝来郡柴村、一品村、早田村、和賀村、末歳村役人共来る。夜星渦る。出石町郡役浮田与三兵衛。

同十三日 晴天。朝六ツ時後丹波国水上郡織田領遠坂村出立。同所坂印より初、遠坂峠国境迄三十二町三十間、而但馬国朝来郡恩田新八郎御代官所柴村字王子本村立場、昼夜間屋五兵衛、柴川土橋三間、同一品村枝追田、同栗鹿村ア印迄三十町六間。此より栗鹿大明神へ打上、栗鹿川小流外五町三間、式内栗鹿神社、栗鹿大明神という。祭神彦火々出見尊、御朱印三十三石一斗、祭礼二月四日祈年祭、九月九日新嘗祭、崇神天皇御宇鎮座、神主大杉能登、額正一位熟十二等栗鹿大明神。右は古勅額宇多天皇御靈筆といい伝う。奉納の古画、即画馬三十六歌仙の内画馬三枚残れり。歌仙の内六番小野小町は分明外二枚は磨滅、裏に奉寄進栗鹿大社、願主太田垣長門修理亮、手跡太田垣帯刀、長禄二戊寅六月六日、当申戊年まで三百五十七年になる。又番不知、願主太田垣長門守子息〇〇、年号は同じ。歌之手跡、太田垣帯刀、左衛門尉時社家奉行、西利貞、右志心天下太平、心中所願皆令満足、又十一番、前文にて側に山名金吾

入道殿京都へ御上絡〇〇八月、余は廢滅、宝剣一振正宗作といい伝う。古陵王面一、年号不知、同塗直一、和銅年中、又ア印初恩田新八郎御代官所早田村、同和賀村、同末歳村、同矢名瀬村、矢名瀬町在入会、駅馬、河原町、大橋六間、中町止宿前矢印に打止二十四町五十一間、街道二里十五町二十七間、打上五町三間、惣瀬二里二十町三十間、ハツ時後矢名瀬町中町着、止宿本陣安右衛門、脇三郎右衛門。

同十四日 晴天 六ツ時後但馬國朝来郡恩田新八郎御代官所矢名瀬町出立。同所矢印初中町下町、同御代官所大垣村枝下町、同上澁田村、同断桑原村、同断玉木材、丸山川舟渡五十四間、即豊岡川の上なり。同和田山村、右ハリマ、左イセ街道追分十二日別手の残和印に繋、街道三十二町五間三尺五寸、和田山村中田屋多右衛門小休、前日永井手の止宿、それより無測、四町斗行て同国養父郡小出采女知行所東谷村枝中市場、正月十二日別手和田山村より仕越打止中印より初豊岡道を測る。小出知行土田村立場恩田新八郎御代官宮田村、同高田村、星休庄屋太郎兵衛、同堀畠村、十三日別手初豊岡大道街道追分ホ印に繋一里十三町三十八間三尺、仙台領養父市場村、右出石道追分市印残迄十七町十八間、止宿前ハ印に打止三町十五間、街道ホ市八印合一里三十四町八間三尺、二口街道合二里三十町十四間五寸、九ツ半時養父市場村着。止宿本陣酒屋又右衛門、脇酒屋久兵衛。此夜星測。小出采女内金井又兵衛、仙石越前守内土肥少兵衛、大庄屋大橋又右衛門、伴勘藏、当村役人不残出る。轟崎村、宿南庄村屋、恩田新八郎御代官所養父郡網場村気多郡伊福村、朝来郡玉木材役人共出る。出石町惣代与三兵衛、郷惣代源左衛門、恩田御代官、養父郡氣多郡惣代八鹿村、荒川庄村屋共出る。

なお伊能忠敬の日記に記載されている地名・人名等について栗鹿での聞き取り調査で次のようなことが判明した。

**王子休場**：明治時代の字限図には王子はないが、柴の方に聞くと、王子は現在のトンネルの料金所付近の通称とのこと。しかし人家はない。

**間屋五兵衛**：柴の木村康正氏宅は二代前までは五良兵衛を世襲していた。また家の伝承では伊能忠敬測量隊が当家に来たことが伝えられている。

**柴川土橋三間**：たしかに土橋があった。（足立）集落の西側。東側で柴川を渡る部分があるが、新しく拡張されたもので、日記に出てくるものかどうかは不明。（深井）

**枝追田**：一品には佐古田は一カ所のみ（字限図による）。字は違うが、音は同じ。発掘当時の柴川左岸側の発掘調査監督員詰所付近。

**祭神**：『栗鹿大〔明〕神元記』には阿米美佐利命が祭神とされ、中世以降は彦坐王や彦火々出見尊など多数の祭神がみられる。現在の由緒は先々代の大杉司氏が作成したものではないか。

祭礼について

神社宝物（蘭陵王面・太刀・三十六歌仙絵馬・扁額など）は所在等不明。

その他地名人名等について

本陣安右衛門、脇本陣三郎右衛門

- ・田治米さんは代々吉郎右衛門を継いでいるが、現在は竹泉酒造を経営。昔から村役を歴任。屋号は和泉屋のこと。

- ・藤井さんは代々藤井三郎右衛門を継いでいた。先代は亡くなったが県会議員をされていた。同じく昔から村役をしてきた。日記に登場する三郎右衛門は先祖。

- ・三郎右衛門は聞いたことがある。（木村）

#### 第4節 古代・中世の栗鹿遺跡と栗鹿神社について

- ・年寄りだったことが山東町史にある（深井）
- ・当方は閉鎖的なところで庄屋・年寄り・百姓代の三役は藤井氏、田治米氏等が世襲している。（木村）
- ・京極加賀守が籠屋で休憩していることが古文書にある。（木村）
- 中町大橋六間について
- ・現在の橋は斜めにかかっているが、以前は流れに対して直角方向だった。（木村）

測量日記の地名の記述などから測量ルートが判明すると共に、栗鹿神社の宝物の寄進者には太田垣氏の名が見えることから、中世の太田垣氏勢力が及んでいたことが想像できる。

伊能忠敬測量日記で文化11年（1814）正月13日に但馬測量の際に柴村で昼食をとり、柴川にかかる土橋を渡り、一品村字追田（佐古田）を越え、栗鹿村に印を作り栗鹿神社に打ち上げている。

そこでは栗鹿神社の立地、神社名、祭神、格式、祭り、神主、額のいわれ、古画の寄進者（太田垣長門修理亮など）、宝物（正宗作の剣や陵王の面）を記している。

以上のように伊能忠敬は栗鹿神社を訪れて詳細な記述し、その資料内容は近世後期の栗鹿神社のみならず古代から続く神社系譜や古代氏族との関係について少なからず示唆している。

この時期の地図は前述のとおり、天明の但馬大絵図の記載は参考にならないが、伊能測量後45年後の但馬國新図や明治35年陸測地図にも参道と考えられる北北東方向の道が描かれている。それ以外の地図には栗鹿神社へ通じる北側からの道は他には存在しない。このことから、伊能忠敬が測量しながら栗鹿神社へ行った道は発掘されてた旧参道であろうと考えた。

そのことを前提条件に現地説明会において江戸時代後期ごろの土に覆われた旧参道の状態で伊能忠敬測量隊の測量復元を装い説明会を開催し地元の方々をはじめ、伊能忠敬に関心のある研究者等にご覧いただいた。



写真17 伊能忠敬測量隊再現（現地説明会にて）

平成13年、E地区の調査が終了する頃、渡辺一郎氏が米国ワシントンの連邦図書館にて伊能忠敬が測量した大図の写しを200枚以上を発見し、その後公開された。この図には3600分の1として詳細に測量した経路も朱線にて記入されている。照合の結果、当初考えていた旧参道より西側の条里方向と考えられる道を測量していると判別できた。つまり枝左古田の東西ルートは予想通りであったが、現在の栗鹿神社小学校まで直進し、そこで⑦印を打設の後、南に下り、栗鹿神社に打ち上げたものと読みとれる。

この意味は江戸時代後期においては今回発掘された旧参道は通常の参拝などでは使用されなくなっていた可能性が高いことを示している。伊能忠敬は事前に測量予定地の名所旧跡や寺社仏閣などの情報を入手し、メインルートを測量している。したがって東側からきた測量隊は旧参道がメイン道路としてあれば早道であるのに、わざわざ西まで通り過ごして南下することは考えにくい。したがってこの時期には旧参道は機能停止状態であったと考えられる。つまり、E地区を斜めに通過したのではなく、F2地区を南北方向の条里に沿った道を通行したことになろう。

・地図学史上の栗鹿周辺掲載一覧

但馬國の朝来郡栗鹿付近を図示されたものは次のものが知られている。

「但馬國大絵図」天明7年之古図（1787）発行

「伊能小図」・「伊能中図」文化11年（1814）測量

「但馬國新図」安政6年8月（1859）発行

「朝来郡全図」明治35年（1902）発行

「陸地測量部発行 5万分1地形図」明治44年（1911）測量

「国土地理院発行 2万5千分1地形図」現代

「栗鹿地区黒営は場整備事業地図 1千分1」昭和54年（1979）

・栗鹿遺跡 E地区発見の道路遺構（栗鹿神社旧参道）の掲載

「但馬國大絵図」天明7年之古図（1787）では集落の位置関係などが参考にできる程度の概略的な絵図であり、細かな道の記載はない。

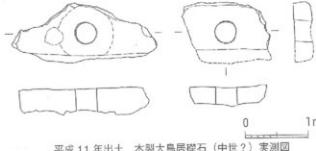
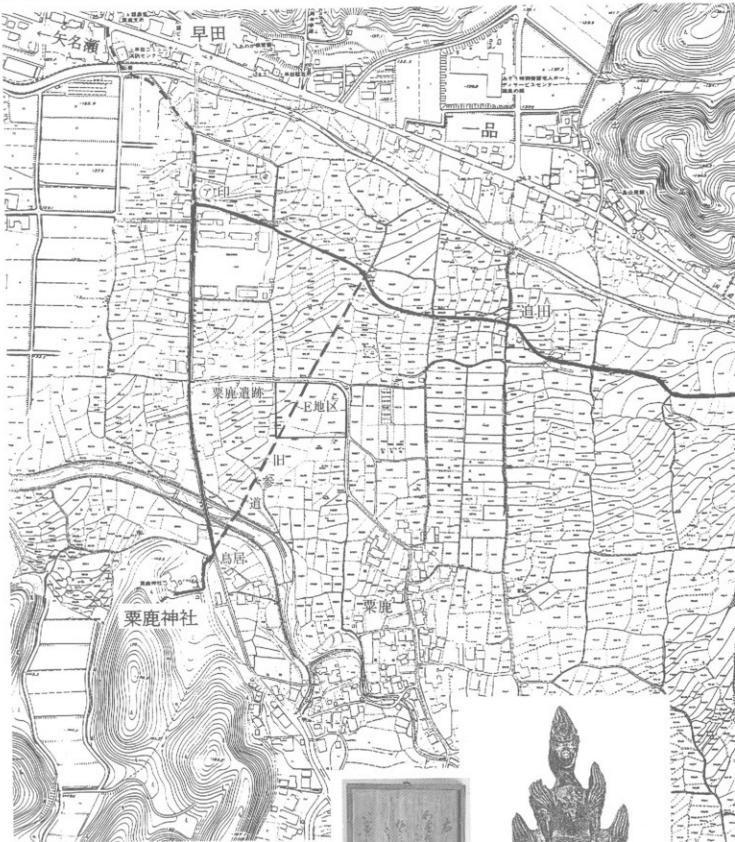
「伊能中図」には山陰道の本道から朱線が描かれており、その先に栗鹿神社を指す神社印がある。神社へ通じる参道であろうが、あまりにも縮尺が小さく、神社の存在と参道の存在がわかる程度であるが、参道が示された最古の地図である。なお、この地図は測量による初めての地図であり、伊能忠敬測量日記には栗鹿神社を訪れていることなど、日記とともに重要な地図である。

「但馬國新図」では柴付近で山陰道本道と柴川の左岸を通る枝道があり、一品あるいは栗鹿付近で栗鹿神社方向に向かう道（参道）が南方向に伸びるのが伺える。伊能忠敬測量後45年後においても道の変化のない様子が記された地図である。

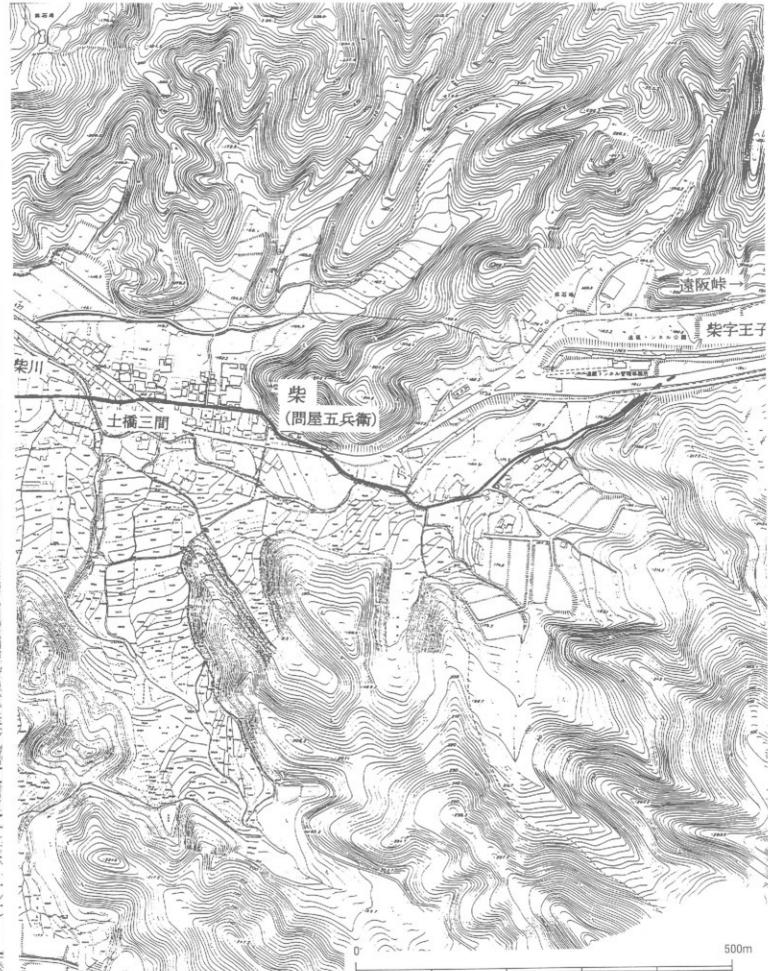
「朝来郡全図」明治35年では柴川左岸の枝道は描かれていないが北北東に延びる道路が柴川左岸の枝道を越えて柴川をわたり、山陰道本道に直交するように描かれている。

「陸地測量部発行 5万分1地形図」明治44年では柴川左岸の枝道や参道の記載はなく、地理院発行地図の原型ともいいくべきものである。この地図には正南北方向の条里に併行した道（車が通れるような少し太い道）が描かれている。

(註) 神戸市立博物館三好唯義氏に現地の調査指導をお願いした。



伊能忠敬測量日記の栗鹿神社宝物同類品 (絵馬・蘭陵王面)



第 476 図 伊能忠敬測量隊の栗鹿での行程復原 (S=1 : 5,000)

### 3. 古代・中世の栗鹿（出土遺構等を通して古代から中世～現代までの栗鹿の流れ）

これまでの栗鹿遺跡 E 地区から G 地区の発掘調査の成果をみると、縄文時代の遺物が各所に包含され、弥生時代中期後半特に E-SX01（方形貼石墓）は弥生時代中期末～後期初頭の山陰地方独自の墳墓で、兵庫県では初例である。埋葬主体は削平されていたが、但馬地方の権力者が葬られたと考えられる。さらに古墳時代の住居の検出数が増加し、さらに古代においては神部直氏に関連する神社関連建物と考えられる造構などが検出されるなど、成果があった。

その後、日下部氏の支配下においては、その力を誇示するかのごとく、全国的にも類例がない（12世紀～15世紀）頃に造られた栗鹿神社の石積みの旧参道が検出された。

栗鹿は縄文時代以来、人々の永住の地であり、弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と華々しい歴史が息づく種有な地である。



写真 18 栗鹿山

# 報告書抄録

ふりがな	あわがいせき							
書名	栗鹿遺跡							
副書名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	II							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第323冊							
編著者名	深井明比古・岸本一宏・西口主介・藤田淳・仁尾一人・渡辺昇・岡田章一・服部寛・尾野幸雄・高木芳史・菱田淳子							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号			TEL 078-531-7011				
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号			TEL 078-341-7711				
発行年月日	2007(平成19)年3月9日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
栗鹿	兵庫県朝来市 山東町栗鹿字 東長垣・西長 垣・大門・御 院柿・高橋 一品字花之木	28225	740501	35度 17分 59秒	134度 54分 39秒	1998.10.9～1998.12.18 1999.5.20～1999.9.24 1999.10.6～2000.3.24 2000.2.01～2000.3.24 2000.6.06～2001.1.07 2000.7.17～2000.12.27 2000.12.26～2001.3.09 2001.6.04～2001.9.21 2003.01.27～2003.3.25 2003.07.10～2003.7.31 2003.11.06～2004.3.19	確認調査 1,651m <sup>2</sup> 全面調査 50,265m <sup>2</sup>	一般国道483号 北近畿豊岡自動車道春日和 田山道路Ⅱ建 設工事業
一品野田	朝来市山東町 一品字野田		740720	35度 18分 09秒	134度 54分 45秒	1999.5.20～1999.9.24	全面調査 631m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
栗鹿	集落跡	縄紋				縄紋土器・石器・石斧		
		弥生中期～古墳	堅穴住居跡・掘立柱建物跡・方 形貼石墓・木棺墓・土塚墓・土 器棺墓・溝・土壤			弥生土器・土師器・須恵器・ 鉄器・銅滓・玉類・製塙土 器・砥石		方形貼石墓は兵 庫県初例
		古代	掘立柱建物跡・横列・塀・溝・ 流路・土壤			須恵器・土師器・瓦・墨書き 器・刻書き器・鉄器・砥石		公的施設か
		中世	掘立柱建物跡・土壤・井戸・ 墓・道路遺構・畠跡状遺構			須恵器・土師器・陶磁器・ 鉄器・銅錢・砥石		石敷きの神社参 道か
		近世	井戸・墓			陶磁器・木製品・銅錢		
一品野田	牛廐遺跡・ 集落跡	中世	掘立柱建物跡・水田・井戸・土 塚			須恵器・土師器・陶磁器		

兵庫県文化財調査報告 第323号

## 粟 鹿 遺 跡

一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ  
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-II

第2分冊 (E・F・G地区、一品野田遺跡)

2007(平成19)年3月9日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5  
TEL 078-531-7011

発行 兵 庫 県 教 育 委 員 会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1  
TEL 078-341-7711

印 刷 ウ ニ ス ガ 印 刷 株 式 会 社  
〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39  
TEL 0795-22-3226